

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第159集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成2年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成2年度分)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

平成2年度の発掘調査事業は、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、日本道路公団、建設省、岩手県からの委託を受けて、高速道路建設や道路改良工事、競馬場建設に関連する遺跡を中心に、あわせて39遺跡、200,244㎡の調査を実施してまいりました。

調査遺跡からは、縄文時代の集落や貯蔵穴群、奈良・平安時代の集落や墓地、中世の城館や集落など、各時代に及ぶ多数の遺構や遺物が発見されております。特に柳之御所跡から出土した墨書きされた建物の絵や文字、人面の描かれた土器等は、平泉文化を解明するうえで貴重な資料であります。また、岩崎台地遺跡群の古墳、上鬼柳Ⅲ遺跡の大型掘立柱建物群や土器焼場など注目されるところであります。

発掘調査略報は、調査報告書の刊行に先だち、39遺跡の調査結果の概要を収録したものであります。研究者のみならず、多くの方がたに活用され、埋蔵文化財への理解を一層深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業をすすめるにあたり、ご援助とご協力を賜りました委託者をはじめ、地元教育委員会等関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成2年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中 村 直

目 次

I. 日本道路公団関係

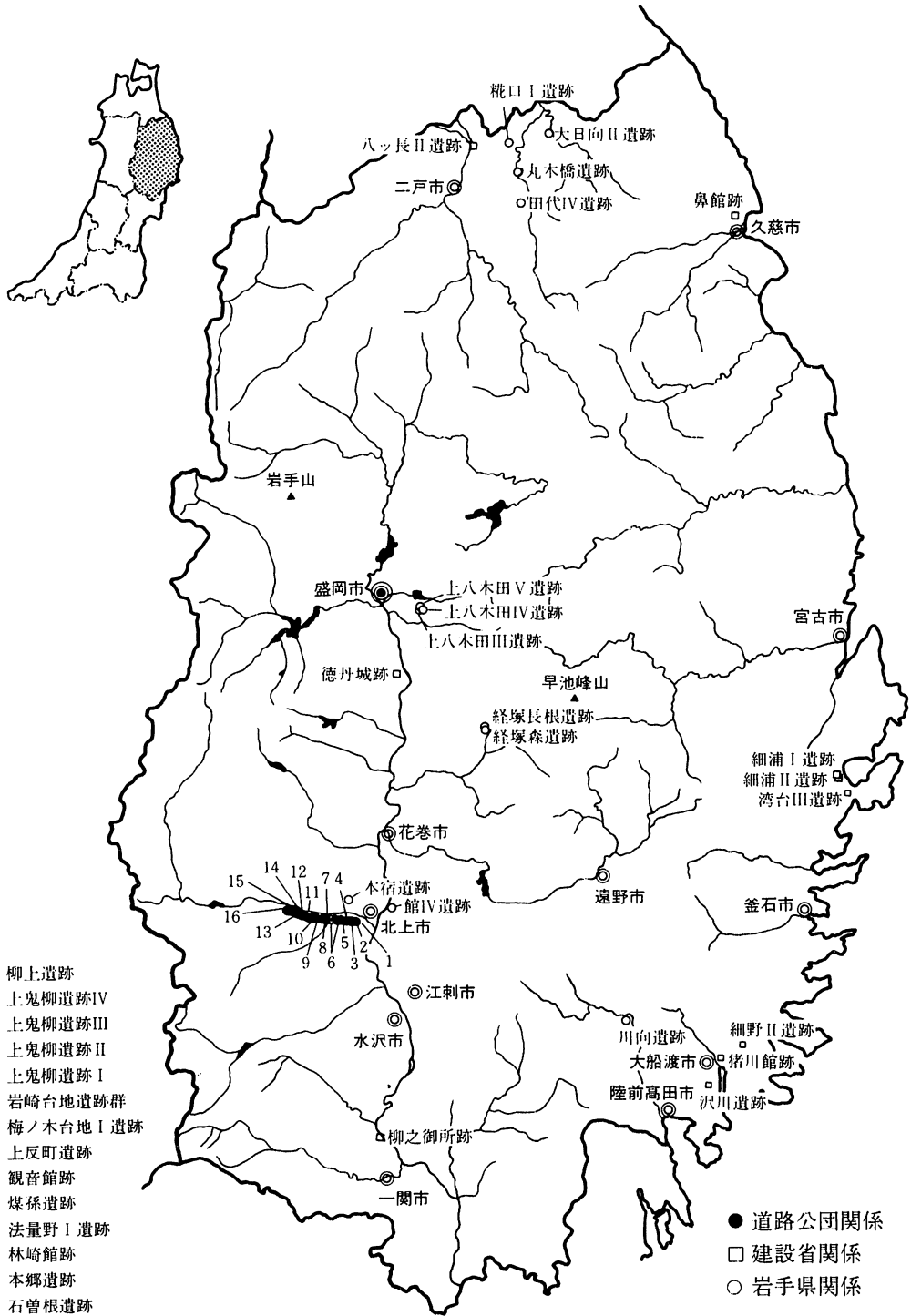
- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| (1) 柳 上 遺 跡 (北上市) …… 3 | (9) 観 音 館 跡 (和賀町) …… 51 |
| (2) 上鬼柳Ⅳ遺跡(北上市) …… 9 | (10) 煤 孫 遺 跡 (和賀町) …… 57 |
| (3) 上鬼柳Ⅲ遺跡(北上市) …… 15 | (11) 法量野Ⅰ遺跡(和賀町) …… 63 |
| (4) 上鬼柳Ⅱ遺跡(北上市) …… 23 | (12) 林 崎 館 跡 (和賀町) …… 67 |
| (5) 上鬼柳Ⅰ遺跡(北上市) …… 27 | (13) 本 郷 遺 跡 (和賀町) …… 73 |
| (6) 岩崎台地遺跡群(和賀町) …… 33 | (14) 石 曾 根 遺 跡 (和賀町) …… 79 |
| (7) 梅ノ木台地Ⅰ遺跡(和賀町) …… 43 | (15) 八幡野Ⅱ遺跡(和賀町) …… 85 |
| (8) 上反町遺跡(和賀町) …… 47 | (16) 田 中 館 跡 (和賀町) …… 91 |

II. 建設省関係

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| (1) 鼻 館 跡 (久慈市) …… 97 | (6) 湾 台 Ⅲ 遺 跡 (山田町) ……123 |
| (2) 八ッ長Ⅱ遺跡(二戸市) ……103 | (7) 細 野 Ⅱ 遺 跡 (大船渡市) ……127 |
| (3) 徳 丹 城 跡 (矢巾町) ……109 | (8) 猪 川 館 跡 (大船渡市) ……131 |
| (4) 細 浦 Ⅰ 遺 跡 (山田町) ……115 | (9) 沢 川 遺 跡 (大船渡市) ……137 |
| (5) 細 浦 Ⅱ 遺 跡 (山田町) ……119 | (10) 柳 之 御 所 跡 (平泉町) ……141 |

III. 岩手県関係

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| (1) 大日向Ⅱ遺跡(軽米町) ……157 | (8) 経塚長根遺跡(大迫町) ……197 |
| (2) 粧口Ⅰ遺跡(軽米町) ……163 | (9) 経塚森遺跡(大迫町) ……201 |
| (3) 丸木橋遺跡(九戸村) ……169 | (10) 館 Ⅳ 遺 跡 (北上市) ……207 |
| (4) 田代Ⅳ遺跡(九戸村) ……173 | (11) 本 宿 遺 跡 (江釣子村) ……213 |
| (5) 上八木田Ⅲ遺跡(盛岡市) ……179 | (12) 岩崎台地遺跡群(和賀町) ……217 |
| (6) 上八木田Ⅳ遺跡(盛岡市) ……185 | (13) 川 向 遺 跡 (住田町) ……223 |
| (7) 上八木田Ⅴ遺跡(盛岡市) ……191 | |



- 1 柳上遺跡
- 2 上鬼柳遺跡IV
- 3 上鬼柳遺跡III
- 4 上鬼柳遺跡II
- 5 上鬼柳遺跡I
- 6 岩崎台地遺跡群
- 7 梅ノ木台地I遺跡
- 8 上反町遺跡
- 9 観音館跡
- 10 煤係遺跡
- 11 法量野I遺跡
- 12 林崎館跡
- 13 本郷遺跡
- 14 石曾根遺跡
- 15 八幡野II遺跡
- 16 田中館跡

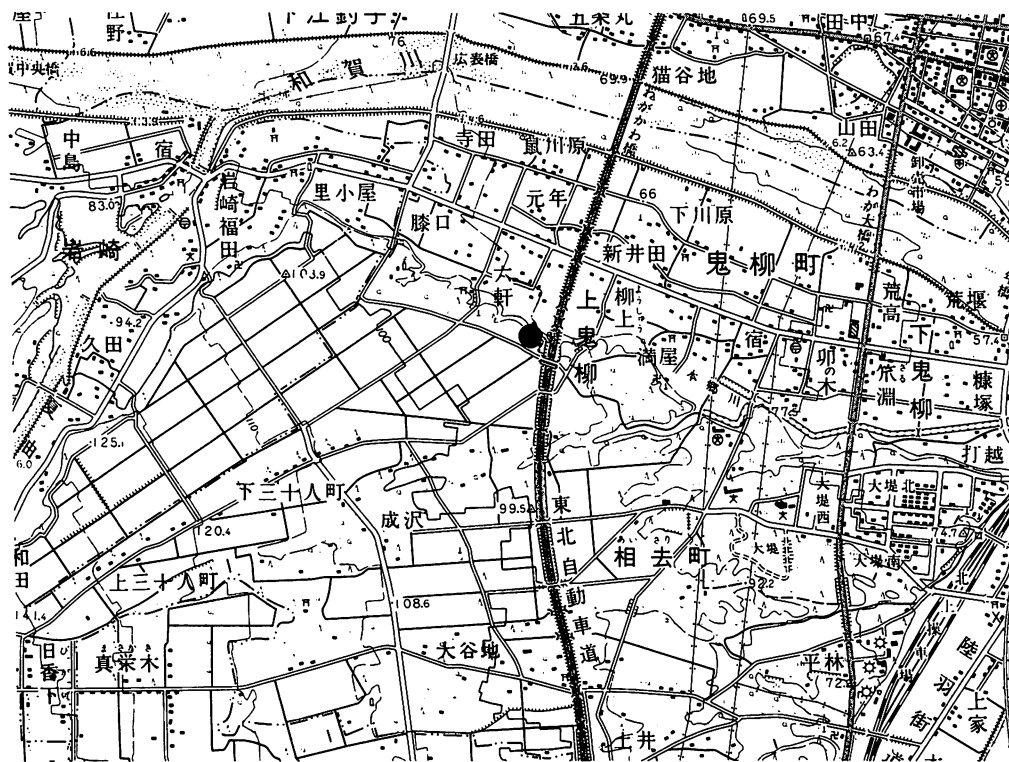
- 道路公団関係
- 建設省関係
- 岩手県関係

平成2年度調査遺跡位置図

I . 日本道路公団関係

(1) 柳上遺跡

所在地 北上市鬼柳町上鬼柳第2地割28-1ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
調査対象面積 4,840㎡
発掘調査面積 4,840㎡
遺跡番号・略号 ME65-2191・YS-90
調査担当者 小原真一・村上 修・佐々木弘・川村 均
酒井宗孝・星 雅之・及川靖世・及川 涉
阿部勝則
協力機関 北上市・花巻市・金ヶ崎町・和賀町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

柳上遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南西約4.2kmに位置する。和賀川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は89～90m、和賀川との比高は約20mである。

現況は山林である。遺跡の西側には沢を挟んで上鬼柳IV遺跡が隣接し、さらに上鬼柳III・II遺跡が続いている。

2. 調査の概要

本年度は調査区全体の粗掘を行い、西側440m²、東側1,000m²の精査を行った。精査された遺構は縄文時代の住居跡9棟、土坑2基、土器埋設遺構2カ所、平安時代の住居跡1棟と時期不明の土坑2基、焼土遺構4カ所、集石遺構1カ所である。出土した遺物は縄文土器を中心に、土師器、須恵器、石器、石製品、土製品などである。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡9棟のうち3棟は石囲炉、柱穴だけの検出である。確認できた6棟の形状は円形、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形である。このうち、隅丸長方形の住居跡が最大で長辺8m、短辺5mであり、他は直径が3.0～4.8mである。炉は土器埋設あるいは石囲炉で、石が抜き去られているものもある。

平安時代の住居跡は調査区東端の1棟である。東西3.7m、南北3.8mの北辺が長く、南辺が短い台形状であり、カマドは東壁のやや南に構築される。また南壁に旧カマドの煙道部が構築されていた。カマドの袖材、支脚には円礫が利用されていた。柱穴は検出されなかった。埋土の中に灰白色の火山灰が見られた。

〈土 坑〉

縄文時代2基、時期不明の2基である。縄文時代の土坑の平面形はいずれも直径1.5mの円形で、深さはそれぞれ1.1m、1.5mである。断面形はピーカー形とフラスコ形である。そのうち1基の埋土中から多量の土器片、壊れた石製品が出土している。時期不明の2基の平面形は径1.5×2.4m、1.0×1.4mの楕円形を示し、深さはそれぞれ35cm、24cmである。

〈集石遺構〉

平安時代の住居跡の西側に接して位置している。径20～30cm前後の円礫が約1mの範囲に集中している。時期や性格は不明である。

〈焼土遺構〉

西側調査区に1カ所、東側調査区に3カ所である。西側のものは、範囲が35×40cm、東側のものは1～1.5m×0.7～1mで、いずれも厚さ5cm未満である。時期は不明である。

〈土器埋設遺構〉

2カ所検出され、いずれも縄文時代の住居跡に近接している。東側のものは焼土、炭化物の散布が見られるので、土器埋設炉の可能性はある。土器は縄文土器である。

〈出土遺物〉

土器は、縄文土器、土師器、須恵器で、大半は縄文時代中期末葉のものが中心である。土器片は磨滅しているものが多い。土師器、須恵器は主に遺構内およびその周辺からのみ出土している。

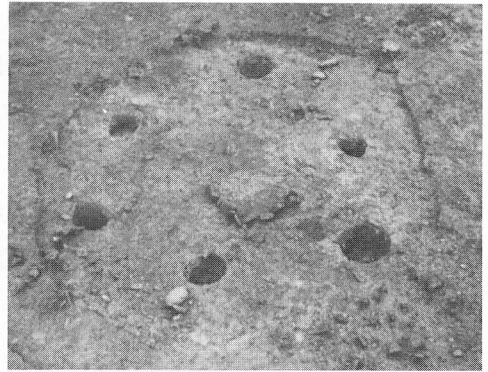
石器は、石鏃、石匙、石錐、磨石、凹石、石皿、石棒、石斧と多様である。石皿は完形ではないが高さ1～5cmの脚がついている。そのほかに耳栓、有孔石製品が出土している。

3. まとめ

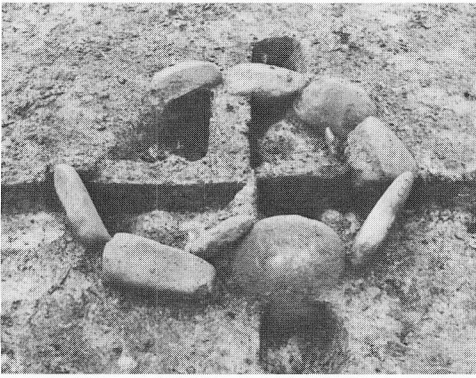
調査の結果本遺跡は縄文時代、平安時代の集落跡からなる複合遺跡であることが明らかになった。また縄文時代の住居跡は中期の属するものが多く、さらに西側にも広がることが予想され、同時期の多くの土坑群が発見された上鬼柳IV遺跡とも近接していることから、本遺跡と上鬼柳IV遺跡は同じ集落であった可能性が考えられる。



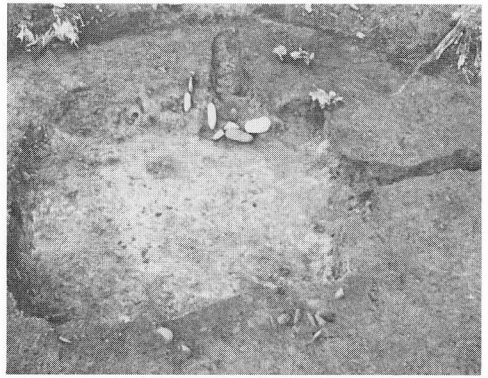
縄文時代の住居跡



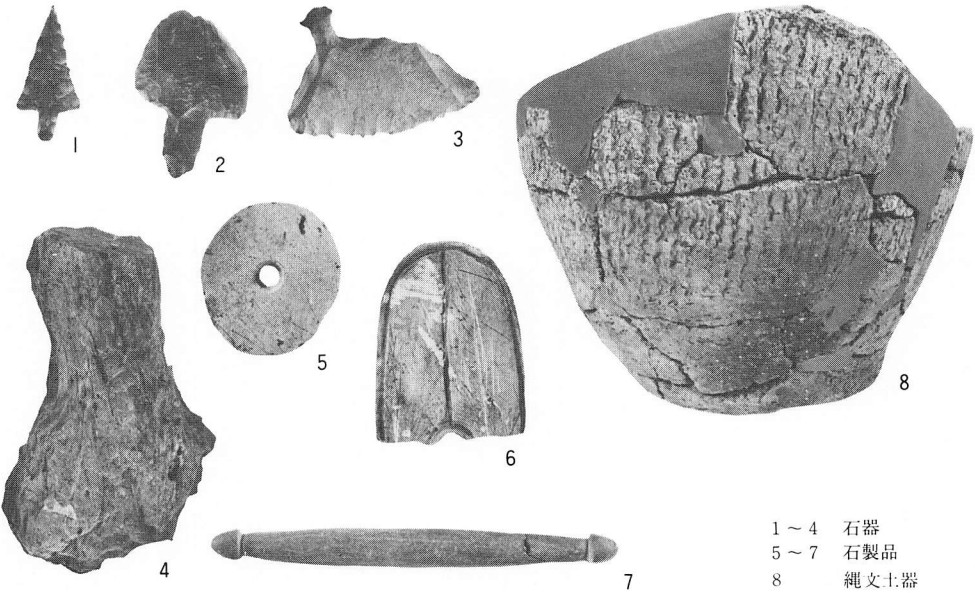
縄文時代の住居跡



石囲炉

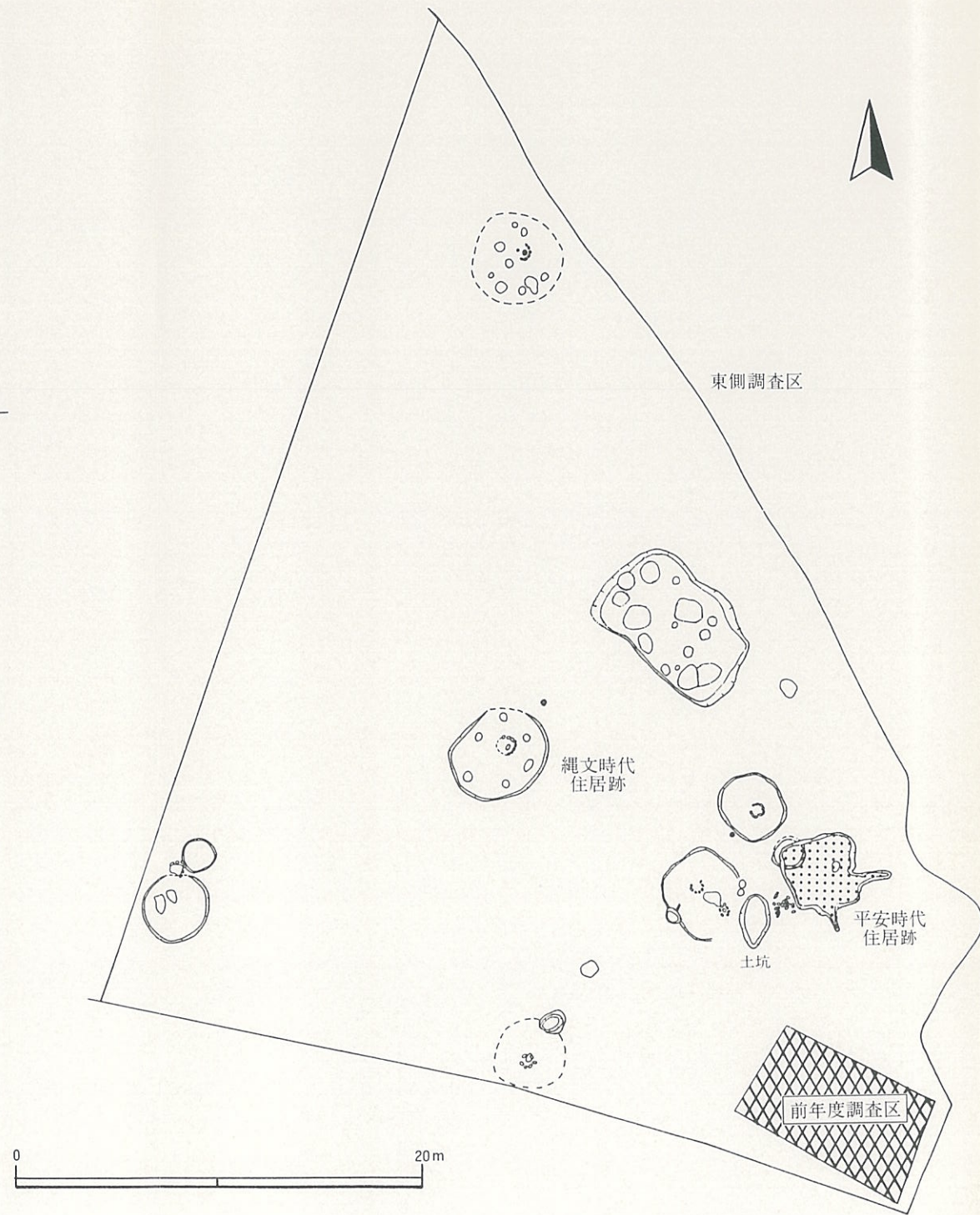
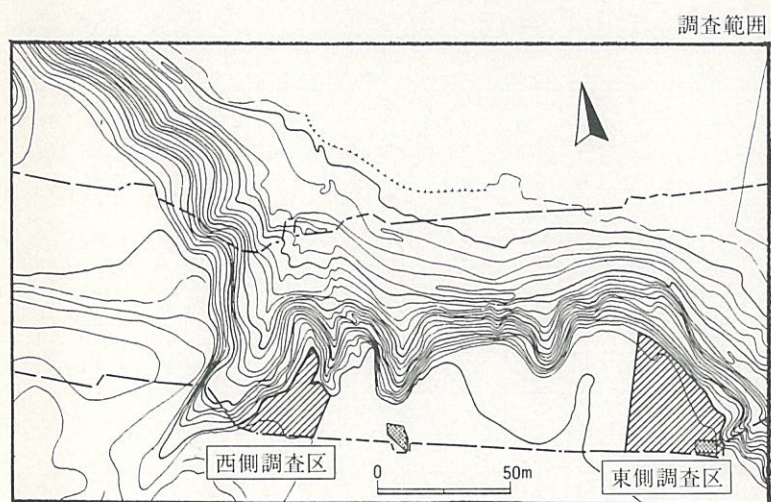


平安時代の住居跡



- 1 ~ 4 石器
- 5 ~ 7 石製品
- 8 縄文土器

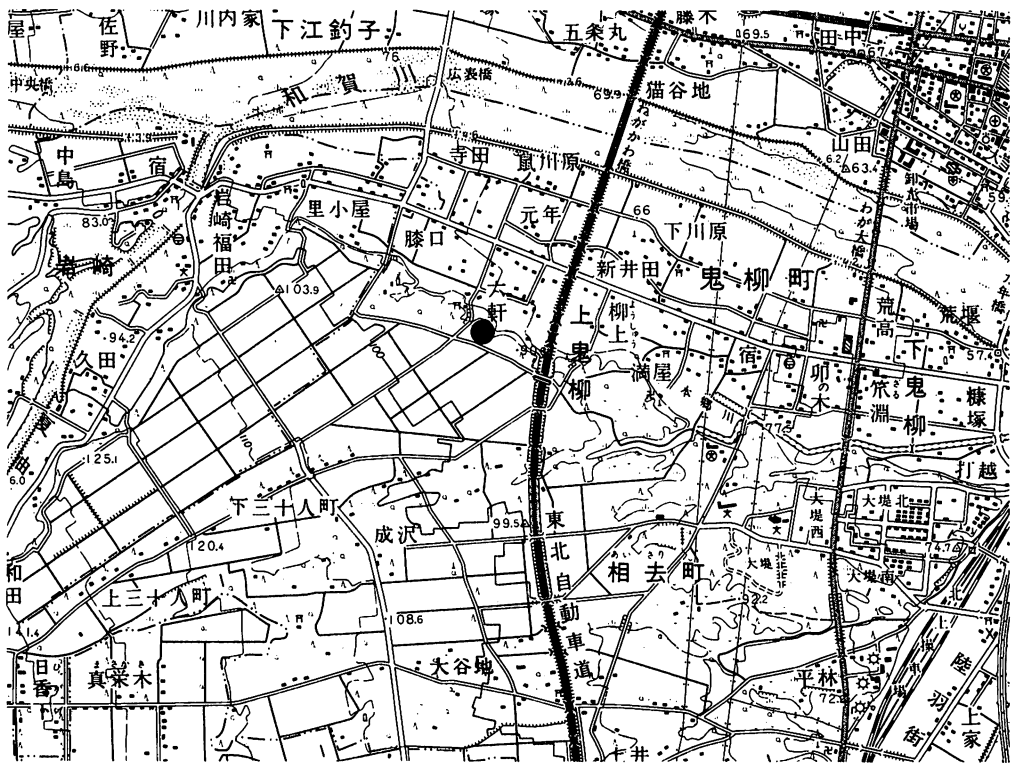
柳上遺跡 検出遺構・出土遺物



柳上遺跡遺構配置図

かみ おに やなぎ
(2) 上鬼柳 IV 遺跡

所在地 北上市鬼柳町上鬼柳第2地割15ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月16日～10月31日
調査対象面積 9,190㎡
発掘調査面積 9,190㎡
遺跡番号・略号 ME65-2078・KOIV-90
調査担当者 村上 修・小原眞一・星 雅之
協力機関 北上市・花巻市・金ヶ崎町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上鬼柳IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南西約4.3kmに位置し、和賀川右岸の河段丘上に立地している。遺跡の標高は89～93mであり、上位面は村崎野段丘、下位面は金ヶ崎段丘である。和賀川との比高は約20mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑146基、陥し穴状遺構26基、時期不明の溝跡15条、平安時代の畑地跡1カ所である。遺構は調査区南側の上位面から斜面にかけて集中しており、北側下位面ではほとんど検出されていない。

〈竪穴住居跡〉

平面形は3.2×3.7mの長方形で、壁高は8～16cmである。埋土中に灰白色火山灰を含んでいる。カマドは南東壁の北東隅に構築されており、同一場所で作り変えている。煙道部は検出されなかった。床面からは直径20～60cmの土坑が6基検出されているが、柱穴は不明である。

〈土 坑〉

土坑は、主に上位面から斜面上部にかけて集中して検出され、東側と西側は密度が高く、中央部では列状に分布している。特に東側は重複が多く、重複部分や地割れを石で補強しているものが10数基みられる。平面形は円形、断面形はフラスコ状のものがほとんどであるが、上部が崩落してピーカー状になっている例も多い。規模は、開口部径が100～250cm、底面径が80～200cm、深さが50～200cmのものが大半を占める。底部には、柱穴状の副穴や溝をもつものが多く検出されており、これらの底部施設と規模との関係を見ると、底部径と深さがそれぞれ180cm以上のものには柱穴状の副穴と溝を伴うものが多く、底部径150～180cm、深さ100～180cmのものには柱穴状の副穴だけのものが多い。遺物の出土例は少ないが、縄文中期後半～後期初頭と晩期前半の土器が底面から出土していることから、構築時期は大きく2時期に分かれるものと推定される。また、下位面で検出された土坑1基からは弥生時代の完形の甕が出土している。

〈陥し穴状遺構〉

検出された26基は形状によって、溝状9基、長方形16基、円形1基の3形態に分けられる。溝状のものは上位面の中央部に位置し、長軸方向をほぼ南北方向にもちながらやや弧状に分布している。長さは3.7～4.5m、深さ1～1.8mである。長方形のものは斜面を中心に1～3基単位で散在し、底部には1～3本の逆茂木跡がみられる。規模は長軸方向が1.1～1.5m、短軸方向が0.8～1.2m、深さは0.8～1.2mである。円形のもの上位面中央の南端に位置し、開口部径1.5m、深さ0.8mである。出土遺物はないが、いずれも縄文時代の遺構と考えられる。

〈溝 跡〉

調査区を東西方向に横切るものが3条、その枝分かれしたものが5条、下位面東端のコの字形のものが1条、調査区西側に北西～南東方向に走る短い溝が6条検出された。いずれも時期、性格は不明である。

〈畑 地 跡〉

調査区西端の取付道路部分から検出された。面積約150㎡の範囲に、畝間に堆積したと思われる灰白色火山灰の筋が9条検出された。長軸方向はほぼ南北方向であり、長さは2.7～5.6m、幅は17～30cm、深さは3～20cmである。西側の5条の間隔は1.1～1.2m、東側の4条の間隔は1.3～1.8mである。

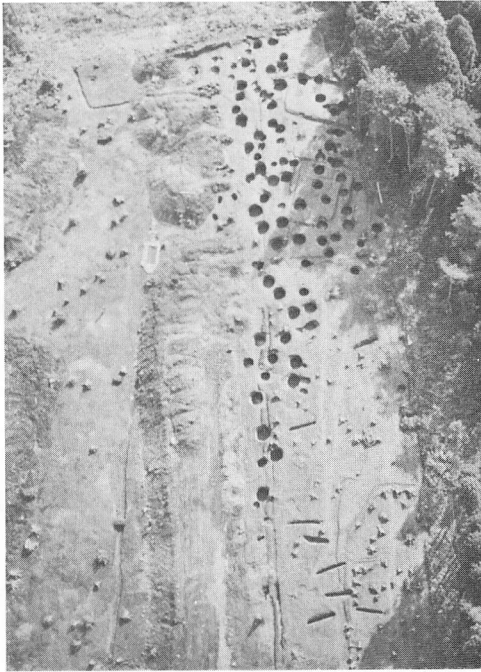
〈出土遺物〉

主なものは縄文土器で、土坑内や遺構外から中期後半から後期初頭にかけての深鉢やその破片が出土しているほか、晩期の鉢や弥生の甕も若干出土している。土器以外には、石器、剥片、石製品、土製品が少量出土している。住居跡からは、平安時代の土師器や須恵器の破片、刀子等の鉄器の破片が出土している。

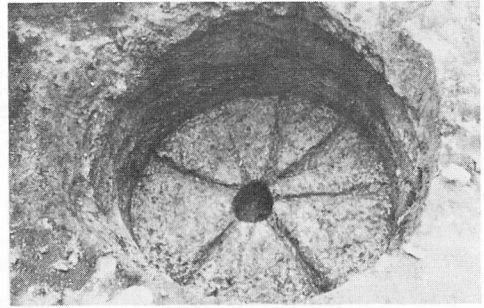
3. まとめ

今回の調査で、上鬼柳IV遺跡は縄文、弥生、平安時代の複合遺跡であることが明らかになった。また、縄文時代の集落は調査区東側に隣接する柳上遺跡に広がっているものと推定される。

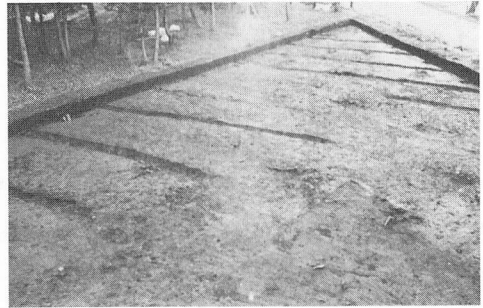
縄文時代のフラスコ状土坑は、村崎野浮石層の厚い部分を利用して構築されており、底面に柱穴状の副穴と溝をもつものが多い。これらの土坑は過去の発掘例から推察すると水抜き施設をもつ貯蔵穴と考えられる。また、平安時代の住居跡と畑地跡が近接して発見された例は、県内では軽米町自角子久保IV遺跡に次ぐものである。



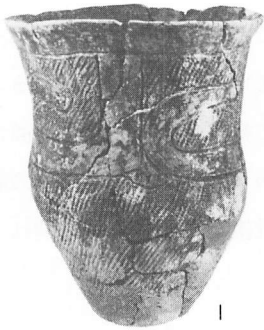
フラスコ状土坑群と陥し穴状遺構



フラスコ状土坑



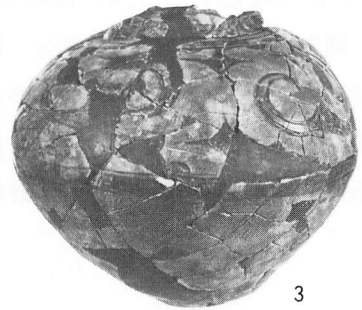
畑地跡



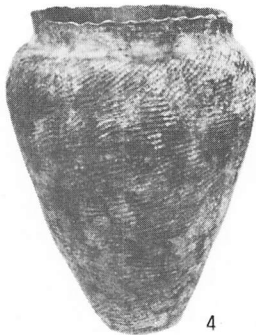
1



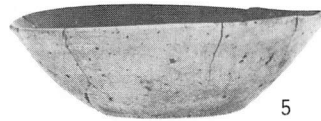
2



3



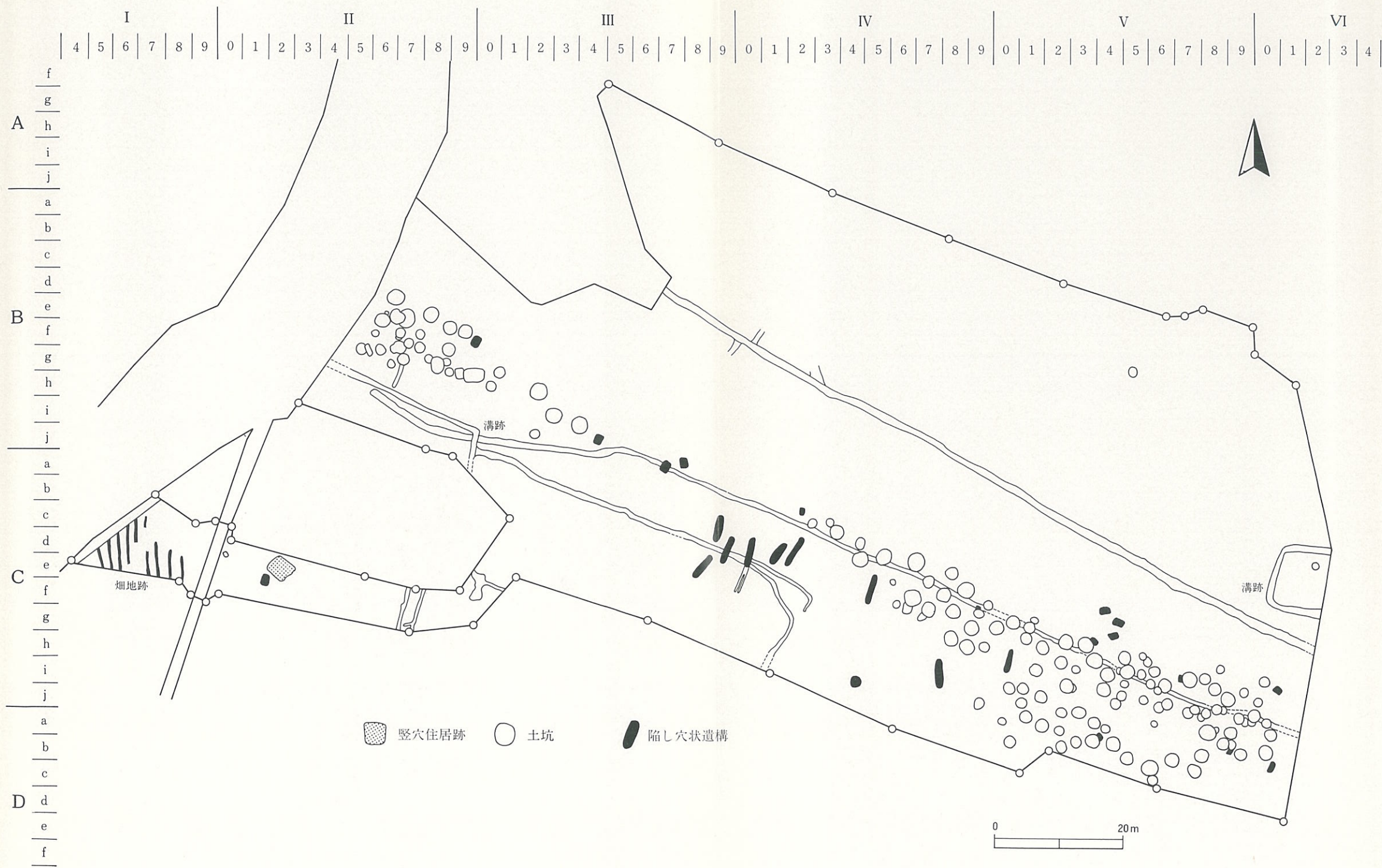
4



5

1 ~ 3 縄文土器
4 弥生土器
5 土師器(環)

上鬼柳VI遺跡 検出遺構・出土遺物



上鬼柳IV遺跡遺構配置図

かみ おに やなぎ
 (3) 上鬼柳 III 遺跡

所在地 北上市鬼柳町字上鬼柳第2地割90番地ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成2年4月16日～11月20日

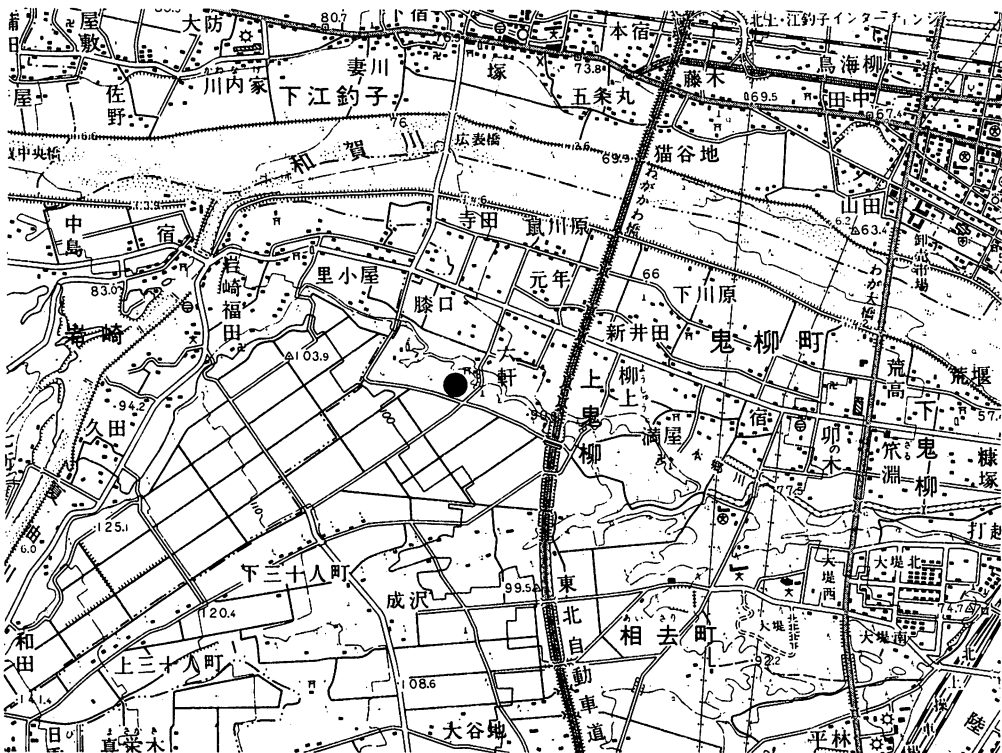
調査対象面積 8,370m²

発掘調査面積 8,370m²

遺跡番号・略号 ME65-2066・KOIII-90

調査担当者 伊東 格・佐々木弘・川村 均・及川 涉

協力機関 北上市・花巻市・江刺市・和賀町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上鬼柳Ⅲ遺跡は東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南約4.5km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地している。調査範囲は標高約86mの下位面と標高約97mの上位面に分かれ、和賀川の沖積面との比高は約20mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

縄文時代の竪穴住居跡2棟、平安時代の竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡12棟、窯跡3基、工房跡1棟、土坑66基、陥し穴状遺構2基、焼土遺構3カ所、周溝6条、溝21条が検出された。

〈縄文時代の竪穴住居跡〉

2棟とも上位面で検出された。うち、1棟は東端に位置し、平面形は直径2.5×2.9mでほぼ円形に近い。壁高は最大45cmであるが、斜面にあるため流出が著しい。東壁寄りに石囲炉がある。時期は出土した土器片から後期初頭と思われる。他の1棟は中央部に位置し、土器埋設炉をともなう。壁や床面の一部を残すのみで、平面形、規模とも明確でない。時期は土器の特徴から中期と推定される。

〈平安時代の竪穴住居跡〉

21棟のうち調査区域の下位面西端に11棟、下位面東端に2棟、上位面東端に7棟、上位面中央部に1棟が分散する。出土遺物がロクロ使用成形の土師器と須恵器であることや、埋土に火山灰を含む例が多いことから平安時代に位置づけられる。下位面西端の11棟の規模は一辺が最大5.9m、最小が3.0mと差があり、床面積が30㎡近い規模の大きなものが2棟、16～20㎡程度のものが7棟、12㎡以下のものが2棟である。これら11棟は残存状態が良くないうえに、重複が多い。3棟の重複が1例、2棟の重複が2例である。下位面東端は調査区域のなかでもっとも標高の低い地点である。検出された2棟は残存状態が悪く、うち1棟はカマドと床の一部のみであり、他の1棟も東壁と南壁が失われている。上位面東端の7棟は下位面の住居跡と比べ、最大のもので一辺が3.1mと小規模な傾向にあるが、壁高は30～100cmと深く、下位面の住居と比較すると残存状態は良い。7棟のうち5棟は東側斜面上に立地しており、そこから西へやや距離をおいて1棟、北西よりの斜面上方の平坦地に1棟がある。これらの住居跡は北西よりの平坦地の1棟を除いてカマドの方位や埋土の火山灰から、同時期と推定される。残る上位面中央部の1棟は、規模が一辺1.4mと遺跡の中で最小で、他の住居とは性格が異なっているものと推定される。

〈掘立柱建物跡〉

上位面中央部に12棟検出した。中央部の南東に1棟、北東に5棟、北西に6棟分布する。北東の5棟は4棟が重複しており、北西の6棟はすべてがいずれかと重複している。また、12棟

のうち周溝をともなうものが4棟である。中央部南東の掘立柱建物跡は桁行2間(4.3m)×梁行2間(2.3m)の南北棟である。柱穴の掘り方は円形で、規模は径50～75cm、深さ26～62cmである。中央部北東の5棟のうち、重複していない1棟は、桁行2間(4.3m)×梁行1間(2.2m)、柱穴の掘り方は円形、規模は径45～82cm、深さ35～46cmである。中央部北東の重複する掘立柱建物跡は、桁行3間(6.9m)×梁行2間(4.9m)の東西棟を同じ地点で立て替えた2棟、桁行2間(3.8m)×梁行2間(2.2m)の南北棟が1棟、桁行2間(3.6m)×梁行3間(3.5m)の東西棟1棟の計4棟で、規模が最大の3×2間の東西棟跡の西端で重複する。最大の3×2間の2棟の東西棟が周溝をともなう。最大の建物跡の掘り方は方形で、規模も145×120～90×80cmと大型である。これと重複する2棟の柱穴の掘り方は円形で、規模は共に径32～40cm、径42～50cmであり、周溝をともなう掘立柱建物跡に比べて小型である。中央部北西の6棟は、いずれも東西棟であり、規模は5棟が桁行3間(7.4～8.0m)×梁行2間(5.2～6.4m)、他の1棟は桁行3間(5.2m)×梁行2間(3.6m)である。このうち北寄りの2棟はそれぞれ周溝をともない、同じ地点で作り替えられた2条のうち、新しいものには埋土に火山灰の堆積が見られる。これらの5棟の柱穴の掘り方は、径約150cmで深さ50～80cmの大型で深いもの、径はほぼ同じで深さ30～50cm程度の大型で浅いもの、径40～60cmで深さ30～50cm程度の小型のもの3種類がある。

〈窯 跡〉

上位面中央部から3基を検出した。3基とも径160～230cm、深さ20～30cmの円形に地山を掘り込んだ浅いくぼみ状の遺構で、底面が焼けて6～10cm程度の焼土層が形成されている。2基からは多数のあかやき土器が出土している。

〈工 房 跡〉

上位面の中央部西寄りから検出された。平面形は楕円形で、規模は2.2×3.5m、深さ65cmである。ふいごの羽口や碗形鉄滓が出土している。

〈土 坑〉

66基検出された。大部分が上位面に集中しており、縄文時代、平安時代、時期不明のものに大別される。縄文時代の土坑は27基である。大部分が上位面の東半分および北側の縁辺部に分布する。断面形はフラスコ形およびピーカー形のものが多く、規模は直径60～145cm、深さは70～137cmである。平安時代の土坑は26基である。ほとんどが平安時代の竪穴住居跡および掘立柱建物跡に近接している。平面形は楕円形あるいは円形が多く、深さは最大のもので96cmであるが、大部分は20～70cmである。埋土に火山灰を含むものが多い。出土遺物がなく、時期不明の

土坑は全部で13基である。

〈陥し穴状遺構〉

上位面で2基検出された。東端で検出されたものは長さ2.1m、幅43cmの溝状である。西南端で検出されたものは調査範囲外へのびるため全体は不明であるが、断面形はV字形、深さは約70cmである。

〈焼土遺構〉

3カ所のうち、下位面の2カ所は規模が径46～260cm、上位面の1カ所は規模が径65cmで、平面形は不整形である。ともに焼土は薄く、遺物をとまわらない。

〈周溝〉

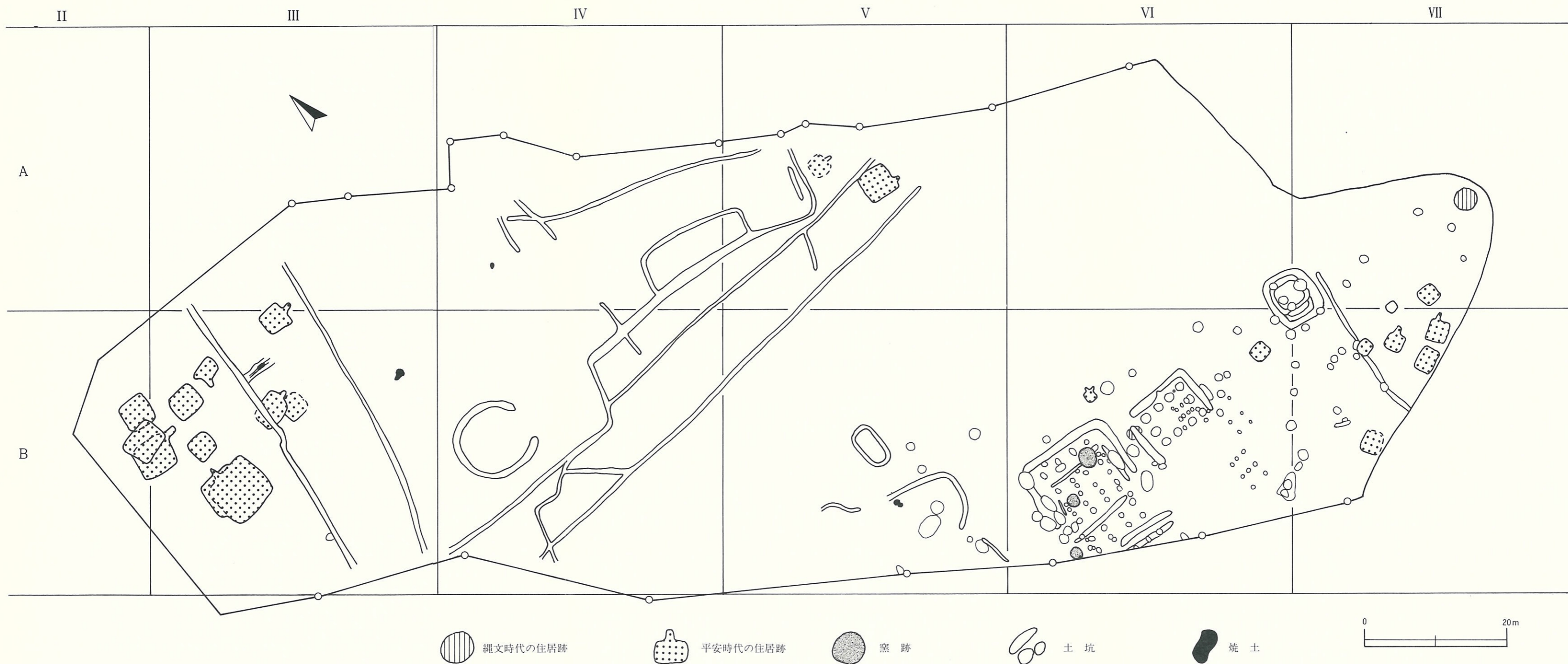
下位面の中央部で1基、上位面の東端で3基、西端で2基、計6基検出された。下位面の1基は中央部南側に位置する。直径は約13mで、東側に4.8mの開口部を持つと推定される。上位面東端の3基は同一地点で作りがえられたもので、平面形は3基とも隅丸方形である。規模は外側から7.0×8.8m、5.5×5.8m、5.0×5.0mである。上位面西端の2基のうち、1基は長径5.8m、短径3.6mの開口部がない楕円形の周溝である。他の1基は表土が削り取られ残存状態が悪いため、その全体の形状は不明である。

〈出土遺物〉

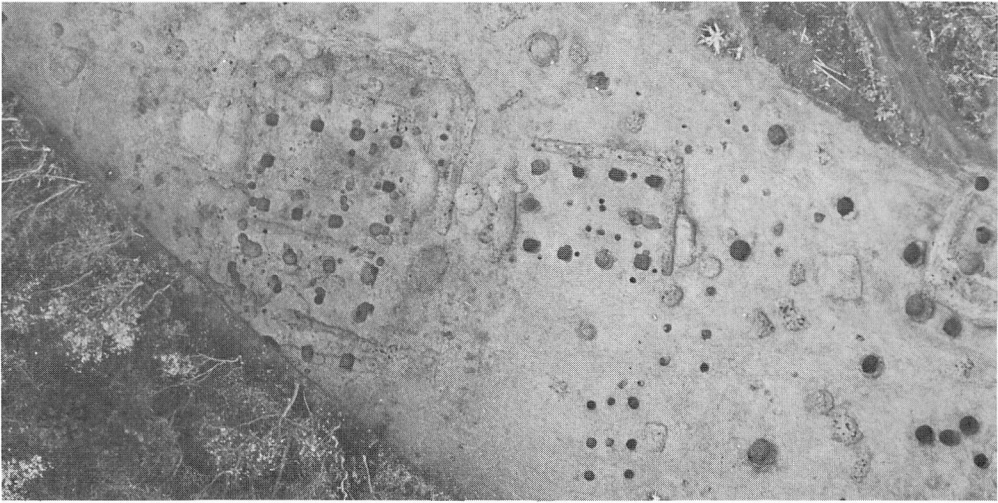
平安時代の土師器・須恵器・あかやき土器・鉄製品・鉄滓のほか縄文土器・石器・土製品が出土しているが、大多数は平安時代の土師器で占められる。そのほか、奈良二彩一点・灰釉陶器・緑釉陶器等がある。土師器は坏・高台付坏・甕・壺である。坏はロクロ使用成形され、内面ミガキ後、黒色処理をほどこしたものと無処理のものがある。また、刻書をともなうもの1点、墨書をともなうもの数点が見られる。須恵器は坏・壺の小破片、大甕の小破片などが主であるが、復元できるものは少ない。あかやき土器は高台付坏の高台部や体部中央に僅かな段を持つ高台付坏と蓋が、それぞれ同一の窯跡から多量に出土している。

3. まとめ

上鬼柳Ⅲ遺跡は縄文時代と平安時代の集落跡からなる複合遺跡である。縄文時代の集落は小規模であるが、土坑の数に比較して住居跡が少ないことから、調査範囲外にも住居跡が存在する可能性がある。平安時代の集落は住居跡や掘立柱建物跡、窯跡、土坑などで構成されており、数時期の変遷が想定される。特に、周溝を伴う掘立柱建物跡や窯跡は発見例が少なく、貴重な資料である。



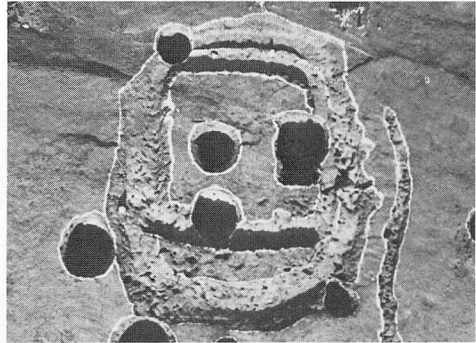
上鬼柳III遺跡遺構配置図



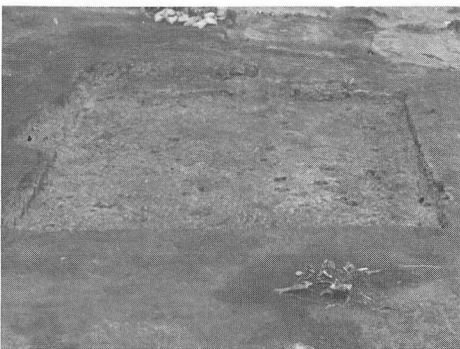
平安時代の堀立柱建物跡



縄文時代の住居跡



円形・方形周溝

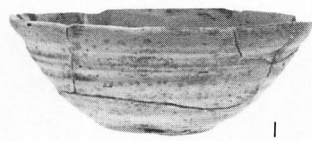


平安時代の住居跡

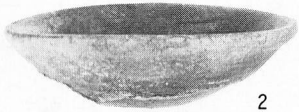


平安時代の窯跡・遺物出土状況

上鬼柳Ⅲ遺跡 検出遺構



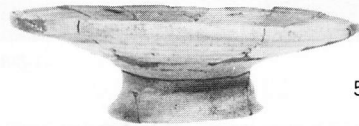
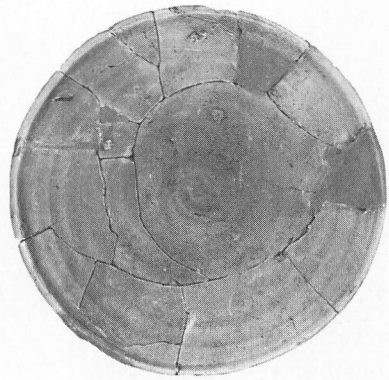
1



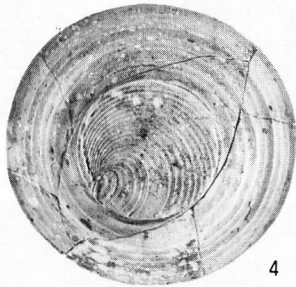
2



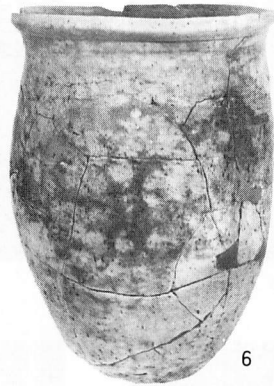
3



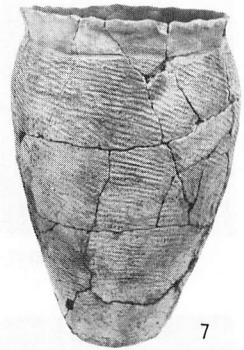
5



4



6



7



8



10



9

- | | | |
|-------|------|------|
| 1 ~ 4 | 土師器 | 坏 |
| 5 | " | 高台付皿 |
| 6 | " | 甕 |
| 7 | 縄文土器 | 深鉢 |
| 8 | 鉄製品 | 刀子 |
| 9 | " | 鋌 |
| 10 | " | 釘 |

上鬼柳Ⅲ遺跡 出土遺物

1. 遺跡の立地

上鬼柳II遺跡は東日本旅客鉄道東北本線北上駅の西南西約4.6km付近に位置し、上鬼柳III遺跡の西に隣接している。遺跡は和賀川右岸の河岸段丘上に立地し、標高は約96mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

弥生時代の竪穴住居跡1棟、平安時代の竪穴住居跡1棟、土坑5基、陥し穴状遺構2基、焼土遺構2カ所、溝1条が検出された。

〈竪穴住居跡〉

弥生時代の竪穴住居跡は東側の斜面上部にあり、平面形は隅丸方形、規模は2.7×2.9mである。床面のほぼ中央に地床炉を設けている。残存状態は良くない。平安時代の竪穴住居跡は遺跡の南側に検出された。平面形は長方形と推定されるが、遺構は調査範囲外に広がっており、調査したのは北半分である。確認できた規模は2.5m以上である。東壁の北寄りにカマドを設けており、煙道はくり抜き式である。

〈土 坑〉

断面形がフラスコ形のもの2基、ピーカー形のもの2基、長方形で底部がややすぼまる形のもものが1基である。フラスコ形ものは開口部の径が70～80cm、深さが1mである。ピーカー形ものは開口部の径が1.3～1.7mの不整円形で、深さ1.1～1.2mである。

〈陥し穴状遺構〉

遺跡の西北端に位置するものは、平面形は長さ約3.8m、幅0.8mの溝状を呈し、深さは約1.3mである。中央に位置するものは、平面形は径1.3×1.6mの楕円形を呈し、底部に深さ49cmの杭跡を伴う。

〈焼土遺構〉

2カ所とも層厚3～6cm、径は約20cmである。

〈溝 跡〉

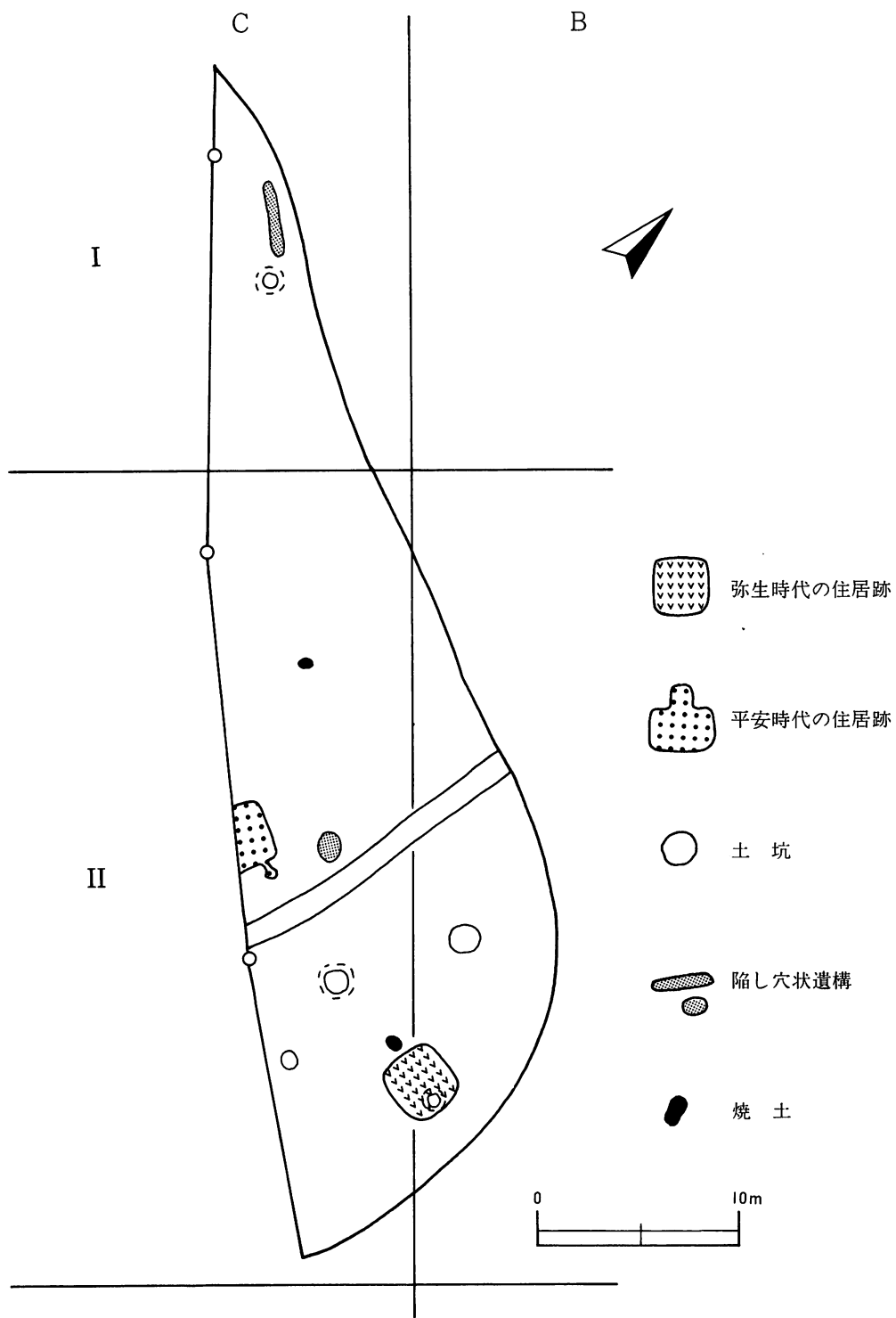
調査区を南北に横断し、調査区外に続く。確認された長さは約16.8m、幅1.2～1.3m、深さは30～40cmである。出土遺物がなく、時期は不明である。

〈出土遺物〉

縄文時代晩期の土器片、弥生時代の土器片、土師器の甕などコンテナ1箱が出土した。

3. まとめ

今回の調査により弥生時代、平安時代の竪穴住居跡が確認されたことから、集落は調査区域外の南側に広がるものと推定される。



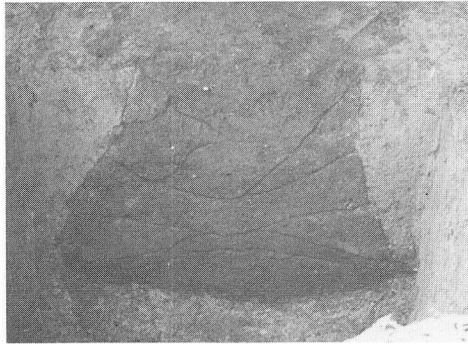
上鬼柳II遺跡遺構配置図



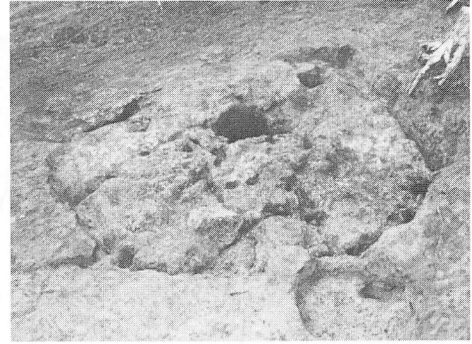
平安時代の住居跡



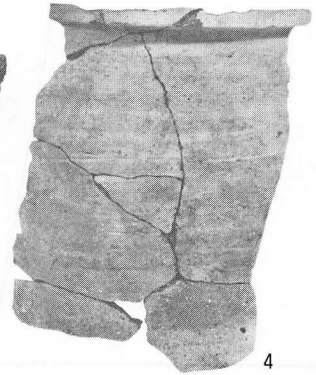
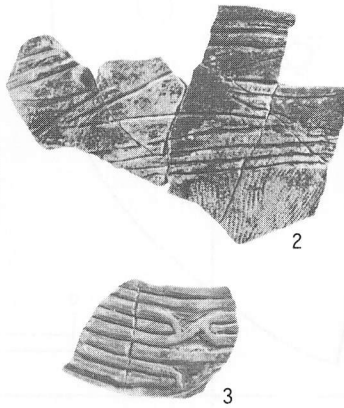
陥し穴状遺構



フラスコ状土坑



弥生時代の住居跡

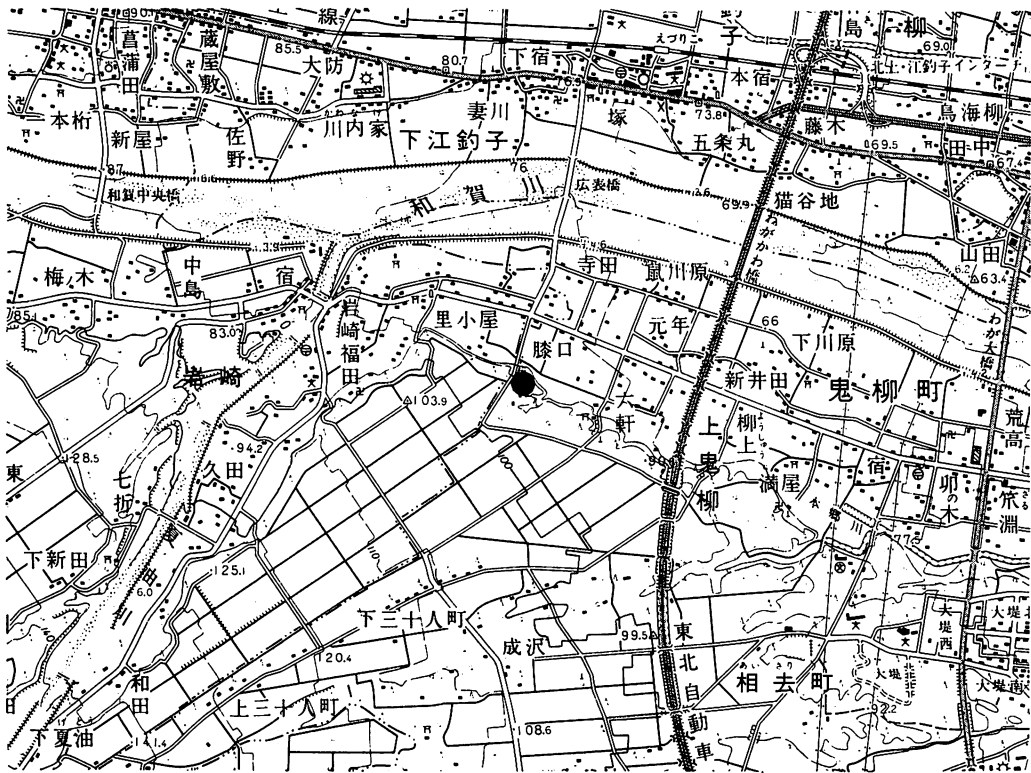


- 1・4 土師器・甕
2 弥生土器・甕
3 縄文土器・壺

上鬼柳II遺跡 検出遺構・出土遺物

かみ おに やなぎ
(5) 上鬼柳 I 遺跡

所在地 北上市鬼柳町字上鬼柳第2地割214ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局 北上工事事務所
発掘調査期間 平成2年4月13日～10月11日
調査対象面積 7,400㎡
発掘調査面積 7,400㎡
遺跡番号・略号 ME64-2042・KOI-90
調査担当者 佐々木信一・森下 宏
協力機関 北上市・金ヶ崎町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上鬼柳 I 遺跡は、東日本旅客鉄道江釣子駅の南南西約2.3km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。標高は91～93m、和賀川との比高差は21～23m である。遺跡の現況は、水田・畑地・山林である。

本遺跡の西側は市道を挟んで岩崎台地遺跡群、東側は深い沢を挟んで上鬼柳 II 遺跡に接する。

2. 調査の概要

検出された遺構は、弥生時代の住居跡 4 棟、掘立柱建物跡 2 棟、墓壇 2 基、土坑27基、陥し穴状遺構 6 基、焼土遺構 3 基、溝跡10条である。出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、石器、土師器、須恵器、あかやき土器である。

〈弥生時代の住居跡〉

4 棟とも調査区域中央から北側にかけて検出された。そのうち、平面形を確認できたのは 1 棟であり、直径約3.4m の円形である。中央部に炉が設けられ、北西壁に沿って幅10～20cm、深さ 7～11cm、長さ1.8m の周溝が巡っている。柱穴は炉の周辺と壁際に 8 個検出されている。炉と柱穴を検出した 3 棟のうち、2 棟は土器埋設炉である。時期は、出土遺物から 4 棟とも弥生時代初頭と思われる。

〈掘立柱建物跡〉

2 棟とも調査区域中央部から南側にかけて検出された。規模は北側の 1 棟が 1 × 1 間 (1 × 1.8m)、南側の 1 棟が 1 × 1 間 (1.1～1.2×1.8～1.9m) であり、両者とも 1 個の掘り方にそれぞれ 2 本の柱が据えられている。掘り方は、前者が径1.5×2.05m、0.75×2.05m の不整形で、深さは50cmである。後者は径0.9×2.1m、0.95×2 m の隅丸長方形で、深さは40cmである。掘り方の長軸方向は全て東西である。2 棟とも、埋土中から土師器の坏が出土し、また、火山灰も混入している。

〈墓 壇〉

墓壇は土坑墓と火葬墓各 1 基である。土坑墓は調査区域南西側から検出され、平面形は、径 0.55×1.8m の長楕円形をなし、深さは 4～16cmである。長軸方向は南北である。埋土中からあかやき土器の坏が出土している。

火葬墓は調査区域北側から検出されている。平面形は径38cmの円形で、深さは30cm、断面形はビーカー状である。墓壇から土師器の鉢が伏せた状態で出土している。鉢は口縁部径25cm、胴部最大径23cm、底部径9.5cm、高さ18cmである。鉢はロクロ使用で、内面は黒色処理されており、中には骨が納められている。鉢は形状から 9 世紀後半から10世紀初頭ののものと思われる。

〈土 坑〉

調査区域中央部付近に集中して検出された。27基のうち、円形のもの21基、楕円形のもの5基、隅丸長方形のもの1基である。円形の土坑のうち最大のもは、径2.1×2.3m、深さは最深部で40cmである。楕円形の土坑のうち、2基は長軸方向が南西―北東で対をなして並ぶ。大きさはそれぞれ0.35×1.05m、0.5×1 mであり、深さは共に23cmである。このうち1基は埋土中に火山灰が混入している。隅丸長方形の土坑は、径1×2.4mで、深さは15～22cmである。埋土中に火山灰が混入している。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は6基のうち、溝状のもの5基、円筒状のもの1基である。溝状のものは調査区域に散在しており、最大のもは開口部径0.6×3.9m、底部径0.14×4 mで、深さは最深部で1 mである。円筒状のものは調査区域南東部で検出されている。開口部の直径は65×75cm、深さは1 mである。

〈溝 跡〉

溝跡は10条検出されている。調査区域西側に平行する2条、南側に1条、東及び南東側に7条である。方向は南南西―北北東、北西―南東が多い。時期は不明である。

〈焼土遺構〉

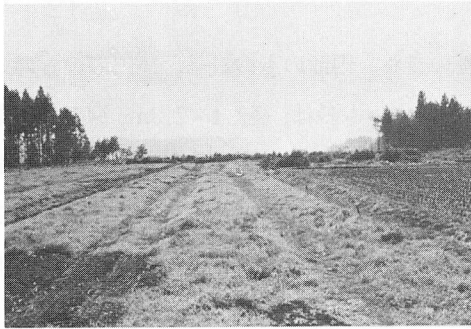
3基のうち、調査区域西端部に1基、北側に2基である。西端部の1基は、径10～30×55cmの不整形をなし、焼土の厚さは4 cmである。北側の2基は、それぞれ径60×80cm、50×70cmの不整形をなし、焼土の厚さは10～12cmである。

〈出土遺物〉

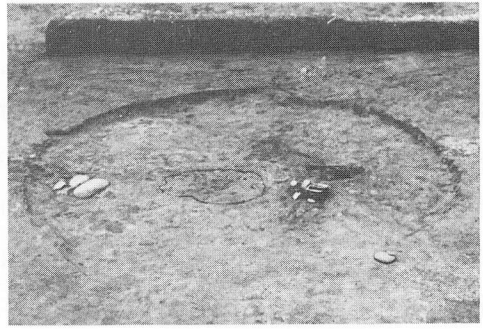
遺物は調査区域中央部から北及び北東側にかけての出土が多い。縄文土器は後・晩期のもので、晩期の甕や鉢が多い。弥生土器は高坏・鉢・甕・壺が出土しており、時期別に2分される。石器は石鏃・石鋏・石匙・石篋・凹石・磨石などである。古代の遺物として、土師器の坏や鉢、須恵器の坏や甕、あかやき土器の坏が出土しているが、いずれも少量である。

3. まとめ

本遺跡は、縄文時代の狩場跡と弥生時代の集落跡である。更に、古代の集落跡が存在しないものの、火葬墓が検出されたことから、墓域として利用されていた可能性も考えられる。



遺跡近景（西から）



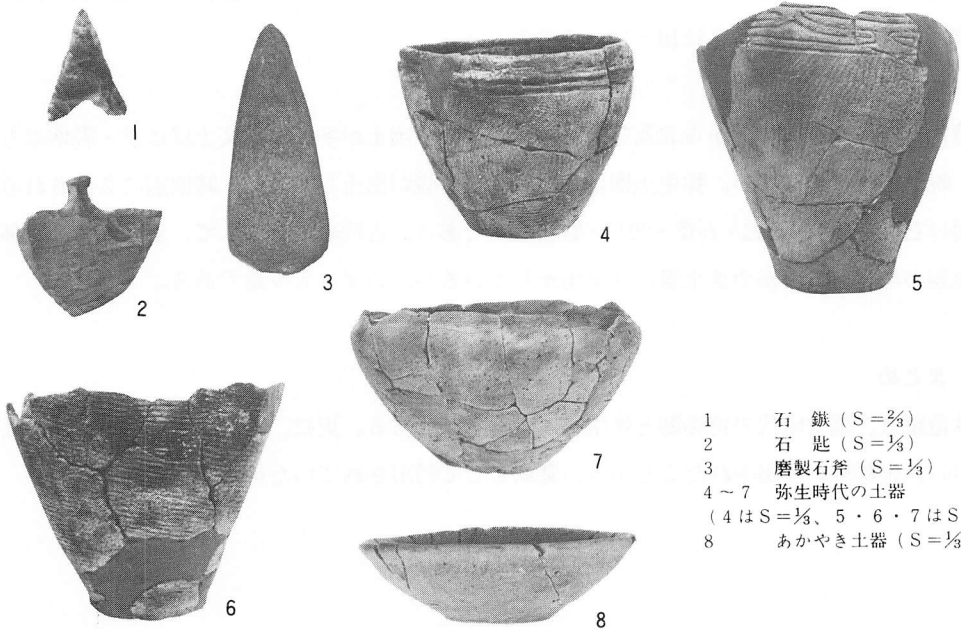
弥生時代の住居跡



平安時代の掘立柱建物跡検出状況

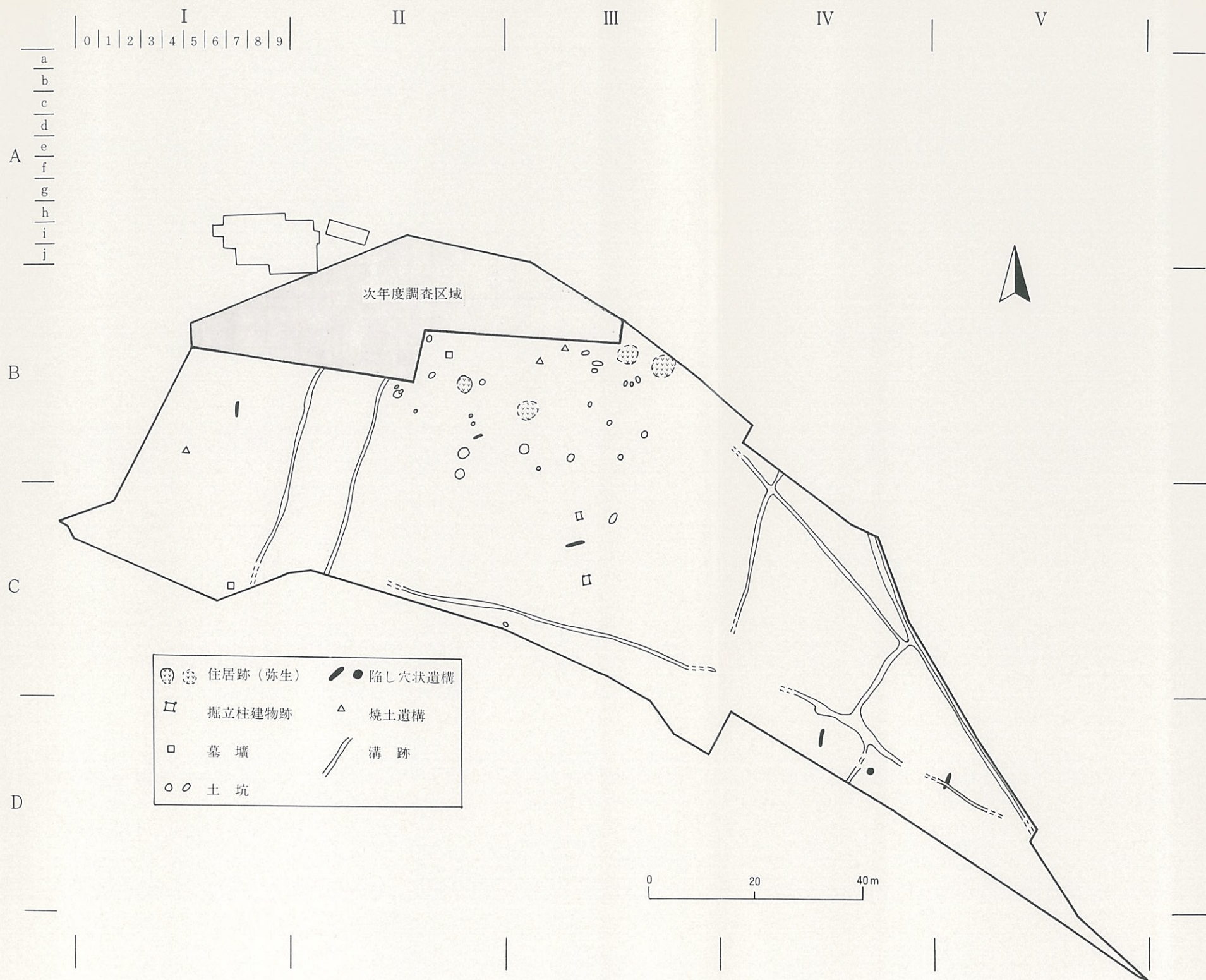


平安時代の火葬墓（鉢出土状況）



- 1 石 鏃 (S = 2/3)
- 2 石 匙 (S = 1/3)
- 3 磨製石斧 (S = 1/3)
- 4 ~ 7 弥生時代の土器
(4はS = 1/3、5・6・7はS = 2/3)
- 8 あかやき土器 (S = 1/3)

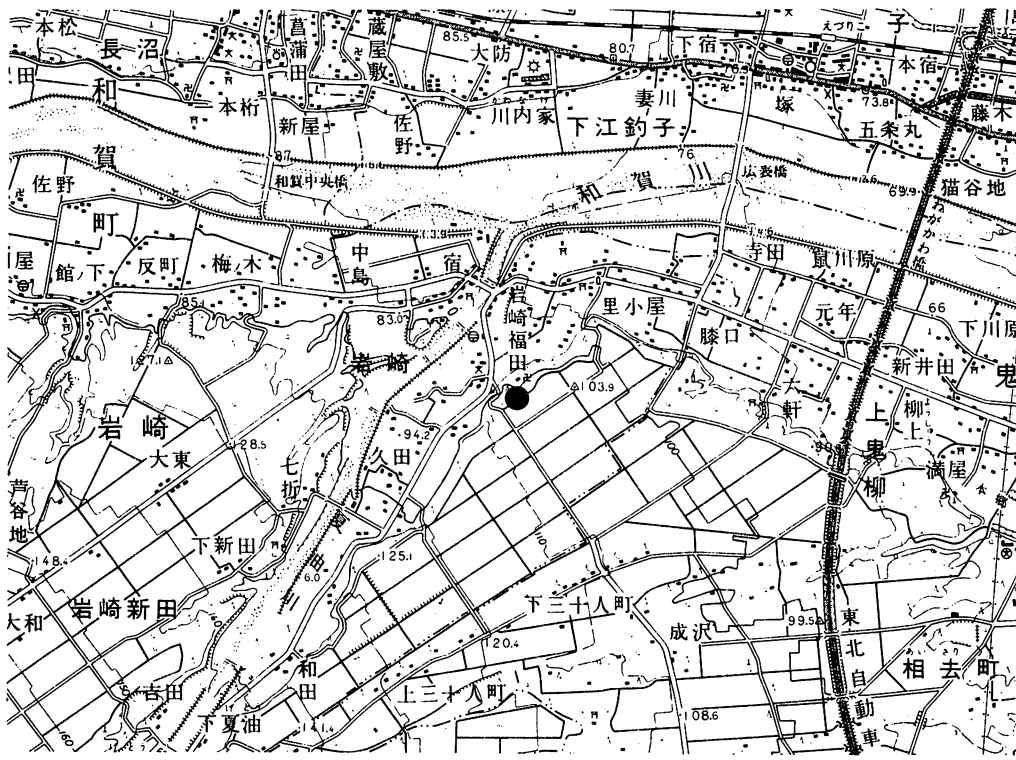
上鬼柳 I 遺跡 検出遺構・出土遺物



上鬼柳 I 遺跡遺構配置図

いわさきだい ち
(6) 岩崎台地遺跡群

所在地 和賀郡和賀町岩崎11地割4610-7ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月13日～11月28日
調査対象面積 13,317m²
発掘調査面積 13,317m²
遺跡番号・略号 ME65-2020・64-2318・64-2360・64-2288
ISD-90K
調査担当者 高橋與右衛門・中川重紀・遠藤 修
佐々木信一・酒井宗孝・菊地幸裕・菊池明芳
菅 常久・森下 宏・千葉 悟
協力機関 北上市・和賀町・金ヶ崎町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

当遺跡群は、和賀町役場の東南東8.5km、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南東3km付近に位置する。遺跡は和賀川の支流夏油川が形成した河岸段丘状をなす扇状地の扇端部に立地し、標高は95～108mである。奥羽山脈の焼石岳北麓を水源とする夏油川は、本遺跡の北西1.5kmで和賀川と合流し、遺跡の1.3km北方を東流する。和賀川右岸の沖積面とは比高20～25mの段丘崖で限られる。現状は畑地、水田等である。

2. 調査の概要

当遺跡群は東から欠の下台地、伍大坂II、伍大坂I、高田坂、久田IIの各地区が含まれ、昨年度は伍大坂I、同II、高田坂地区の調査を実施している。今年度は欠の下台地、伍大坂I、高田坂、久田II地区の一部が調査対象であり、次年度は久田II地区の残りを調査する予定である。

調査によって古代～中世を中心とする、竪穴住居跡42棟、掘立柱建物10棟、土坑75基、陥し穴状遺構33基、古墳5基、墓壇5基、甕棺1基、火葬墓2カ所、方形周溝1基、塚5基、炭焼き窯7基、溝34条、焼土2カ所、柱穴群2カ所の各種遺構が検出された。遺物は土師器、須恵器、鉄製品など平安時代に属すもののほか、古墳時代～奈良時代の土師器、鉄製品、円形搔器等が若干と縄文土器、弥生土器、石器などが出土している。

〈竪穴住居跡〉

43棟は東端部に15棟、中央部に2棟、西端部に26棟であり、地点によって分布が異なる。時期は縄文時代1棟、平安時代43棟である。

東端部の15棟は一部重複するが1～12mの間隔で分布し、中央部の2棟は18mの間隔である。西端部の26棟は東端に8棟、中央部に6棟、西端に12棟であり、東側では1～4m、中央では1.5～20m、西側では1～4mの間隔で単独ないし2～3棟が重複して分布する。

縄文時代の住居跡は東端部の調査区西側の1棟である。平面形は楕円形状を呈し、規模は2.7×3.4mで、中央部に地床炉がある。出土遺物は縄文土器の破片が出土している。

平安時代の住居跡42棟は出土遺物から9～10世紀と11世紀に分けられる。9～10世紀の住居跡の規模は最大7.06×7.25m、最小2.4×2.4mと大差があるものの、東端部は一辺3～5m、中央部は5m弱、西端部は2.4～6mの範囲にあり、地点によって若干違いがある。カマドは北西～東～南と西壁以外すべてに見られ、東端部では北壁3棟、東壁4棟、不明1棟、中央では北西壁2棟、西端部では北壁1棟、北東～南東壁7棟、南東～南壁14棟、不明3棟、カマドが無いもの1棟である。袖部の構築方法には、河原石を芯にシルトを貼り付けるもの、全てシルトの積上げによるものがあり、後者のものが多い。煙道部は割り貫き式と掘り込み式の2例があり、掘り込み式には河原石を組む例と土師器の甕を埋設する例がある。柱穴は対角線や一

方の壁に寄せて配置する例があるが少ない。出土遺物がロクロ使用の土師器、須恵器であることから、平安時代に位置づけられるが、分布状況や竈の方位の特徴から何時期かに細分される。

11世紀代の住居跡はすべて東端部に7～28mの間隔で検出され、調査区の南側に3棟、北側に2棟が南北2列に並ぶ位置にある。そのうちの北側列の西に位置する最大規模の1棟は溝と段丘崖によって四方が囲まれる様相を示し、意識的に区画された可能性が推定される。この溝は住居跡の東17mと西18m、南13mの位置にあり、幅1～60cm、深さ15～30cmで、断面形はV字状に近い箱葉研状である。住居跡の規模は最大6.7×9.2m、最小3.3×5.2mで最大規模の1棟を除くとほぼ近似した規模である。壁の掘り込みは非常に浅く、検出面から10cm前後、現地表面からでも35～40cmで、9～10世紀の住居跡に比較すると極端な違いがある。平面形は長方形で、全て床面の中央付近に炉と推定される焼土を持つほか、1棟は南壁際に煙道を持たないカマドを設置している。柱穴はいずれも壁際の床面に一辺4～8本の壁柱を配置し、更にその内側に2～4本の主柱を配している。最大規模の1棟では桁行3間×梁行2間の身舎に西・北・東の3面に庇の付く配置状況を示す。床面は平坦な例とやや起伏を持つ例がある。出土遺物は全く出土しない1棟を除いて土師器が出土しているものの、小破片が多く全体を知るようなものは少ない。そのうちで、1棟から関東地方で11世紀代の指標とされる柱状高台の皿が4点と木製品に塗られた漆膜、他の1棟からは漆紙と刀子・鎌の鉄製品が出土している。

〈掘立柱建物跡〉

10棟のうち、東端部に3棟、中央部に2棟、西端部の東側に2棟、西側に3棟が分布する。東端部の3棟は1×1間(2.1×1.8m)、1×1間(3.6×3.3m)、3×2間(5.2×3.7m)の東西棟である。中央部の2棟は1×1間(3.2×3.1m)、他の1棟は調査区外に延びて全体が捉えられないが、桁行3間(6.4m)である。西端部の5棟は西側から3×1間(5.6×2.6m)の南北棟、2×3間(4.6×6.4m)に西側に1間の張り出しが付く東西棟、1×2間(4×4m)の南北棟、2×3間(4×7.6m)の東西棟、4×2間(6×3.4m)の南北棟である。これらの建物跡は所属時期を示す遺物の出土がないため時期は不明であるが、東端部のものは11世紀代の集落に伴う可能性があり、その他の建物は平安時代以降と考えられる。

〈土 坑〉

71基は東端部に22基、中央部に13基、西端部の東側に13基、西側に23基が分布する。平面形は円形、楕円形などがあり、断面形は皿状、ピーカー状、フラスコ状等である。円形の土坑では開口部径0.6～2.6m、深さ0.12～1.46m、楕円形状の土坑では開口部の長径0.7～2.7m、短径0.6～2.4m、深さ5～64cmと大小の差が見られる。土坑の時期は東端部は平安時代、中央部、西端部は平安時代と縄文時代の2時期があると推察される。

〈陥し穴状遺構〉

33基は東端部の1基、中央部の6基、西端部の東側に3基、西側に23基と分布し、平面形から溝状型3基、長楕円形型9基、円形型21基に細分される。規模は、溝状型が長さ2.04～2.96m、幅32～79cm、深さ32～82cm、長楕円形型が長径0.86～1.86m、短径6～78cm、深さ0.67～1.33m、円形型が長径0.7～2m、深さ0.71～1.40mであり、円形型の底面には副穴を持つものが多い。西端部の円形型、長楕円形型の一部には2ないし3基の規則的な配列が認められる。出土遺物が認められないことから時期の特定は困難であるが、重複関係から西端部の円形型の一部に平安時代に属するものがあり、その他は平安時代より古いものと考えられる。

〈古墳〉

5基は西端部のほぼ中央に5～10mの間隔で分布する。何れも主体部が検出され、周溝は一部不明の部分もあるが、平面形が一部途切れる馬蹄形状を呈する。主体部の形状は長方形の箱形に掘り込まれた土壌である。主体部には幅8～15cmの溝が巡るものと、短辺の両端に幅11cmの溝があるものと何もないものの3タイプがある。主体部の方向は北西～南東が2基、南～北が2基、東～西が1基である。主体部の埋土は黒褐色土が主体であり、1基の主体部では黄褐色土のシルトが粘土郭状に土壌内部の周囲に巡り、中央部に黒褐色土が見られるものである。周溝は黒褐色土に黄褐色土のシルトが極僅かに混入しているものが多い。規模は周溝の外壁の最大径が5.2～6.2m、深さ10～72cm、幅40～70cmで、深さ、幅とも一定しない。主体部は長辺1.70～2.22m、短辺70～87cm、深さ10～72cmと一定していない。主体部からの出土遺物は、土器では古墳時代から奈良時代の土師器や須恵器の甕・壺の完形品や破片、鉄製品では刀子、鍬子状、小刀、石製品では黒燧石の円形搔器、搔器、剝片等があり、周溝からは土師器の甕、坏の破片、石製品では黒燧石の剝片等が出土している。時期は出土遺物から古墳時代末期に位置づけられ、所謂終末期古墳の範疇で理解される。

〈墓墳〉

5基は中央部に1基、西端部に4基である。何れも単独に検出され、平面形は長方形ないし長楕円形で箱形に掘り込まれた土壌である。規模は長辺が0.8～2m、短辺が0.46～1.30m、深さ0.15～0.60mである。これらのうち、西端部の1基は馬の墓である。時期は馬の墓が近世以降であり、他のものは出土遺物から平安時代を中心とした頃と見られる。

〈甕棺〉

1基は中央部に検出され、平面形が長形状で箱型に掘り込まれた土壌である。土壌の内部には土器が2个体分、一方の体下部に一方の口縁部が接するように埋設されている。規模は長辺0.82m、短辺0.44m、深さ0.33mである。長軸方向は北西～南東である。

〈方形周溝〉

1条は東端部の西側に検出した。規模は溝幅30～70cm、深さ30cmで、長辺7.6m、短辺7.4mである。区画の内部には土坑等の関連施設は検出されていない。性格としては不明であるが、昨年度の調査例から墓を区画した溝の可能性がある。時期は平安時代以降と考えられる。

〈塚〉

5基は東端部の西側の崖際近くに位置する。墳丘はいずれも黒褐色土を積上げて構築したもので、2基には葺石がある。規模は直径4.9～8m、高さは60～70cmである。出土遺物がないが、時期は溝を埋めていること等から中世以降と考えられる。

〈炭焼き窯〉

7基は、東端部に5基、中央部に1基、西端部に1基である。いずれも長方形の箱形に掘り込んでいる土坑である。土坑の周囲の壁は焼けて赤変しているが、床は1基のみ焼けている。規模は長辺が1.20～1.78m、短辺が0.80～1.06m、深さ34～60cmである。出土遺物が少ないが埋土の状態などから時期は平安時代頃と考えられる。

〈溝〉

34条は東端部に13条、中央部に4条、西端部に17条と調査範囲全域に分布する。長さは最長90m、最短4mと差が大きく、方向は一定していない。幅は0.35～1m、深さ10～65cmと差がある。何れも重複関係から平安時代かそれ以降に属すると考えられる。

〈柱穴群〉

2カ所は西端部の東側に分散して検出され、建物跡の周辺に検出されたものである。規模は直径20～50cm、深さ15～40cmと差がある。時期の特定は困難であるが、古代から中世までと推定される。

以上のほかには焼土遺構や火葬墓等がある。

〈出土遺物〉

平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、漆紙等のほか、奈良時代の土師器、鉄製品、石器と縄文時代の土器、石器、弥生時代の土器等であるが、大多数は平安時代の遺物で占められ、その中でも土師器が主体である。

土師器には坏・高台付坏・甕・壺等の器種がある。平安時代の坏はロクロ使用成形のもので、内面黒色処理と無処理のものがある。底面の切り離し技法は回転糸切り、回転ヘラ切りと再調整がある。高台付坏はロクロ使用成形で内面黒色処理と無処理のものがある。高台は回転糸切り離し後の貼り付けである。甕は非ロクロ使用成形とロクロ使用成形がある。壺は非ロクロ使用成形で、体部中位に最大径を持つ球胴形である。古墳時代～奈良時代の坏は非ロクロ使用成形で、内面黒色処理のものである。底部近くに段を有し底部は丸底である。甕は口縁部が外反

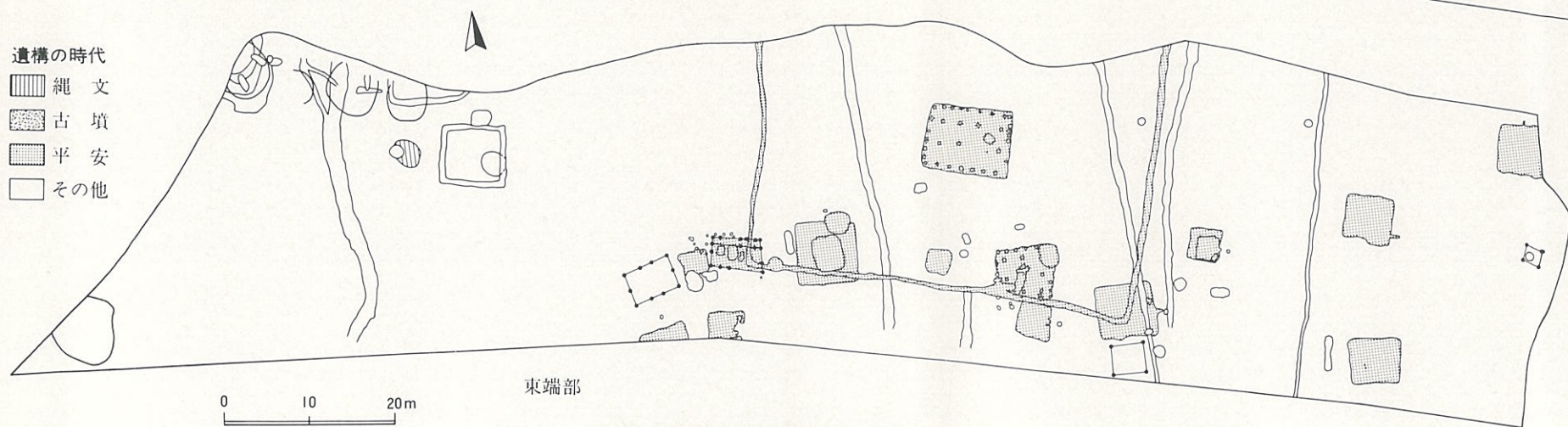
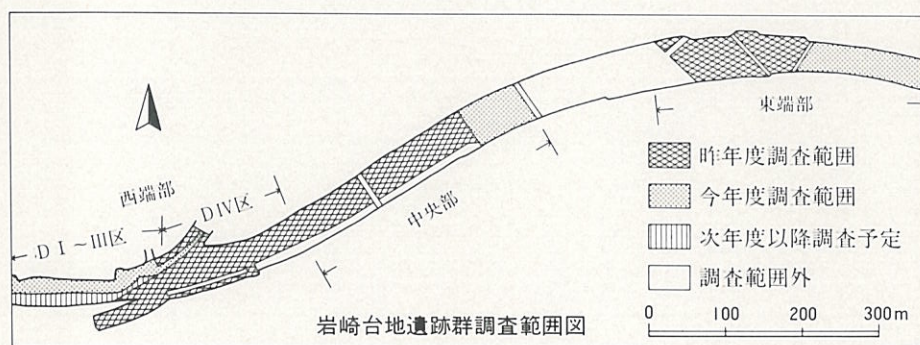
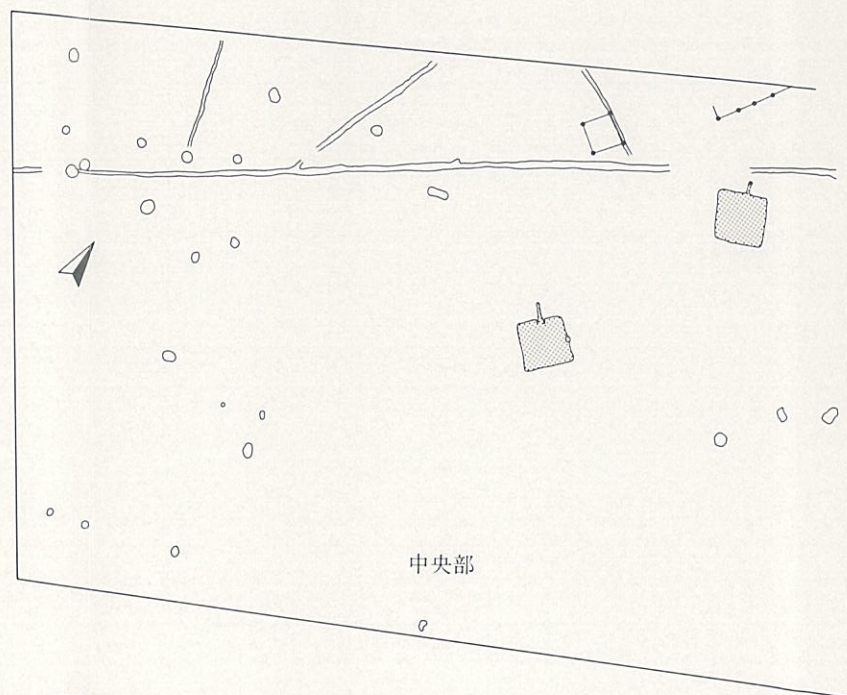
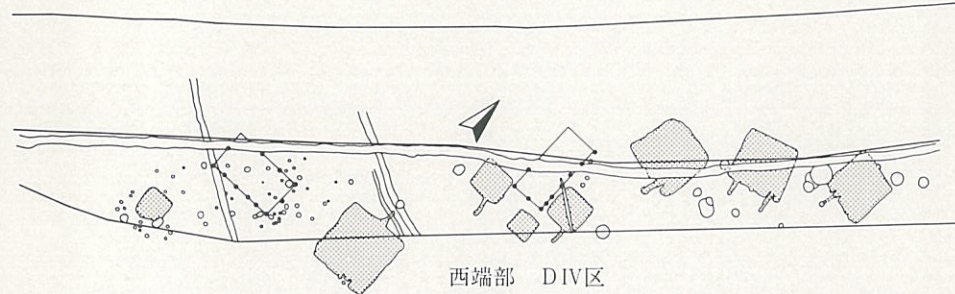
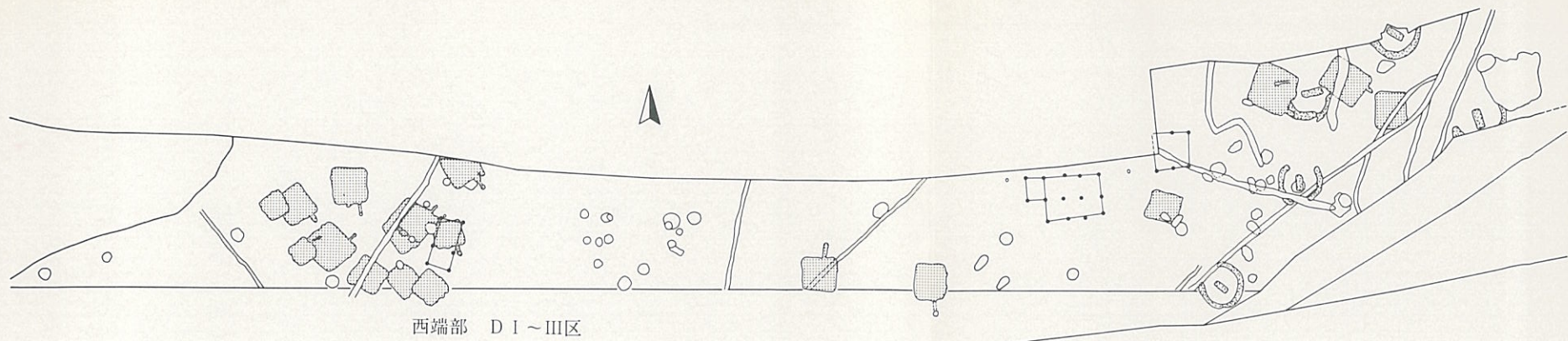
し、底部の周囲が突出するもので、頸部に軽い段を持つものと無いものがある。胴部は縦位のミガキやハケメ後に軽いミガキを施しているものである。

須恵器は坏、高台付坏、甕、瓶の器種がある。坏はロクロ使用成形で、底部の切り離しは若干の回転篋切りのほかは回転糸切り無調整である。甕には平底の小型と丸底の大型のものがある。

鉄製品は刀子、鑷子状、鎌、紡錘車、釘等であるが数は少ない。縄文土器や弥生土器は殆どが破片であり数も少ない。石器は石鎌、石篋等である。

3. まとめ

当遺跡群は昨年度からの継続調査で平安時代の集落を主とする非常に大規模な遺跡であることが判明した。特に今回の調査によって和賀川南岸で古墳が構築されていたことが判明し、古墳の立地を考えるうえで新たな視点を与えた。古墳の所属する時代は、出土した黒耀石製の円形搔器や土師器等から古墳時代末期に位置するものであり、当地方の古代を考える上で貴重な資料である。また、関東地方で11世紀代の指標とされる柱状高台皿は、12世紀代の紫波町比爪館や平泉町柳之御所跡からも出土しているが、11世紀代としては県内初の出土であり、これを伴う住居跡が検出されたことは、特徴が近似する5棟からなる集落を構成するものと推定され、住居の構造等県内でも初出の例として貴重な資料となろう。



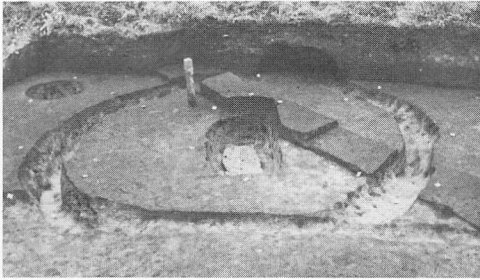
岩崎台地遺跡群遺構配置図



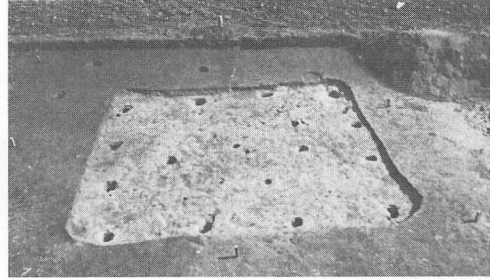
西端部調査区全景



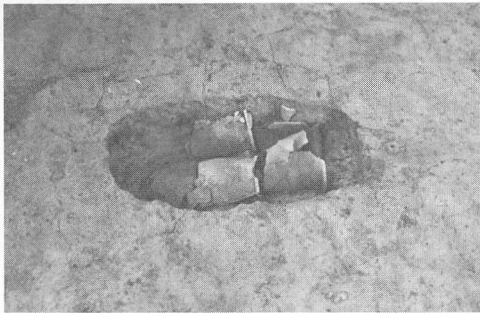
東端部調査区全景



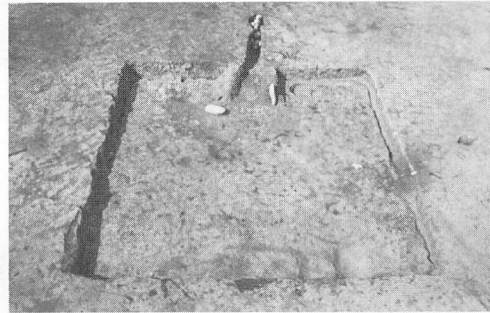
古墳 (西端部)



平安時代の住居跡 (東端部)



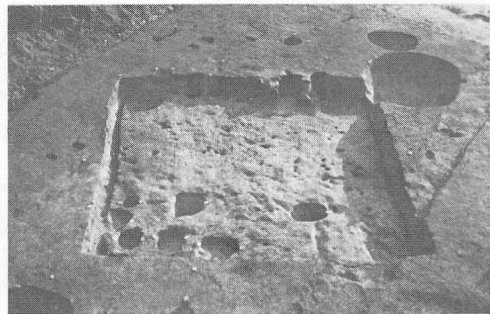
平安時代の甕棺 (中央部)



平安時代の住居跡 (中央部)



I号塚 (東端部)



平安時代の住居跡 (西端部)

岩崎台地遺跡群 検出遺構



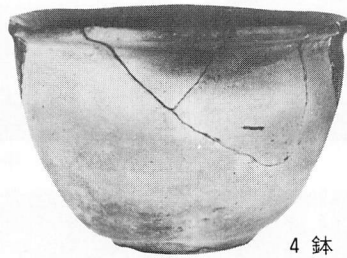
1 台付浅鉢



2 柱状高台皿



3 鉢



4 鉢



5 漆紙



7 甕



6 円形搔器



8 小型甕



9 壺

1 縄文時代晩期
2～5 平安時代
6～9 古墳時代～奈良時代

岩崎台地遺跡群 出土遺物

(7) ^{うめ きだいち}梅ノ木台地 I 遺跡

所在地 和賀郡和賀町岩崎19地割11-1

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成2年6月27日～8月28日

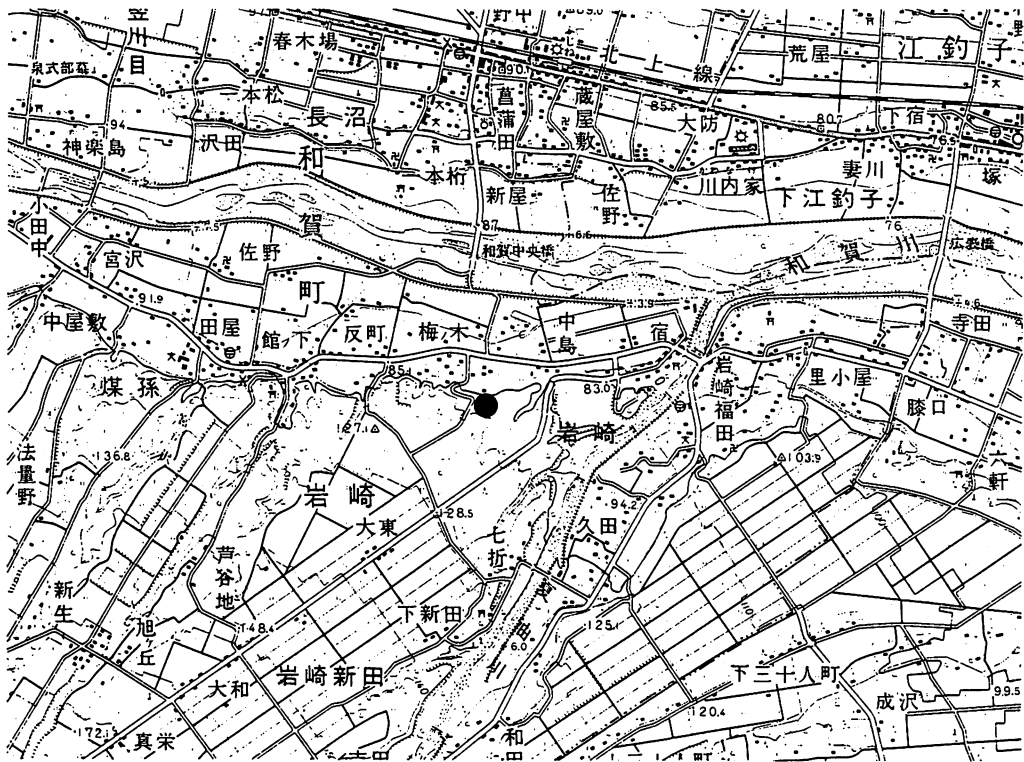
調査対象面積 3,000m²

発掘調査面積 3,000m²

遺跡番号・略号 ME64-2126・UMI-90

調査担当者 川村 均・星 雅之

協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

梅ノ木台地 I 遺跡は東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南約2.3km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘の縁辺部に立地する。標高は115～117mであり、河岸低地との比高約30mである。現況は山林である。本遺跡の東側は深い沢を挟んで岩崎城西遺跡、西側は梅ノ木台地II遺跡に接する。

2. 調査の概要

調査は昨年度からの継続調査である。調査の結果、検出された遺構は溝1条である。遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、石器が若干量出土している。

〈溝 跡〉

調査区西側で検出され、南東から北西の崖に向かって一直線にのびている。溝の長さ約24m、上幅70～90cm、深さ約40cmである。断面形はV字状でII層より地山まで掘り込まれている。時期性格については不明である。

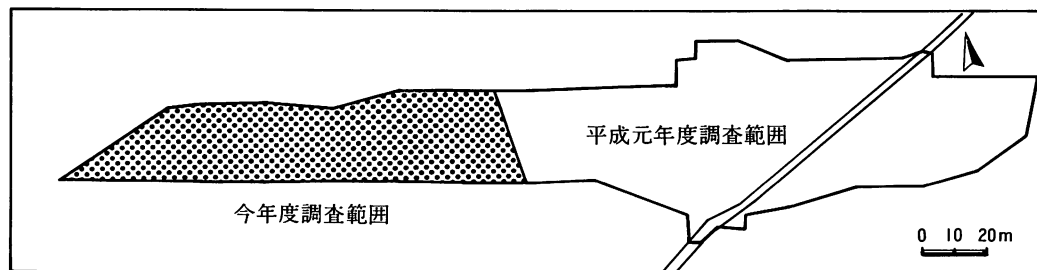
〈出土遺物〉

縄文土器、弥生土器、土師器が若干量、石器が約50点出土している。大部分はII層黒褐色土からの出土である。縄文土器は小破片がわずかで、時期を特定できるものは少ない。弥生土器は出土土器の大半を占めるが完形品はない。また、摩滅が激しく細片が多いため形状が推定できるまで復元できたものはない。撚糸文施文（天王山系）の土器片が目立つ。土師器は甕の底部が数点、坏の破片が若干出土している。石器は磨石と凹石が多く剝片石器、フレークは僅かである。そのほか、紡錘車とみられる有孔石製品が1点出土している。

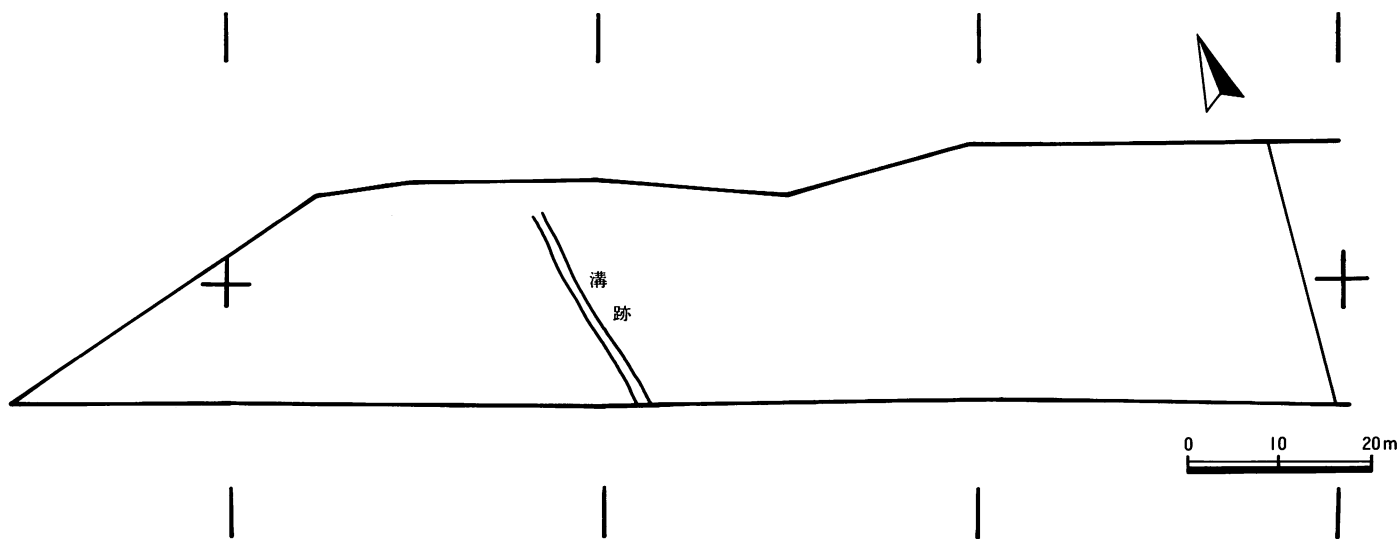
3. まとめ

今回の調査の結果、時代を特定できる遺構はなかったが、縄文時代、弥生時代、古代の遺物が出土しており、昨年度の調査結果と合せて考えると本遺跡の南側の沢沿いに集落跡のある可能性が強い。

縄文時代後・晩期の土器、弥生時代の土器、石器が少量出土した。土器は、いずれも小破片



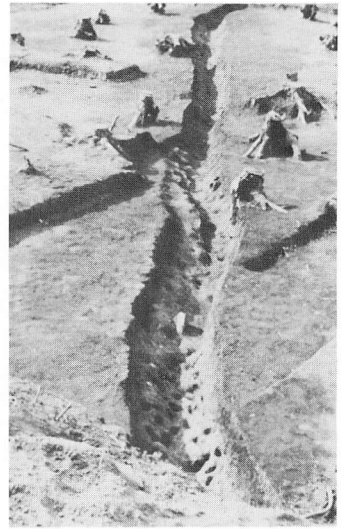
梅ノ木台地 I 遺跡調査区略図



梅ノ木台地 I 遺跡遺構配置図



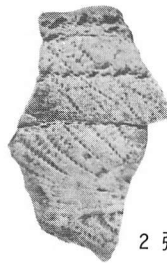
調査区空中写真



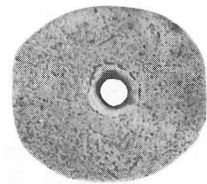
溝跡



1 縄文土器



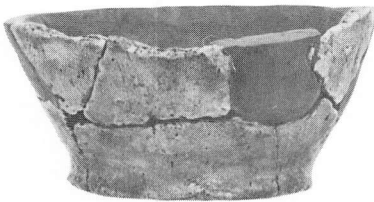
2 弥生土器



3 有孔石製品



4 弥生土器



5 土師器



6 石器



7 石器

梅ノ木台地 I 遺跡 検出遺構・出土遺物

1. 遺跡の立地

上反町遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西約2.7km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区域の標高は123～124mであり、和賀川沿いの沖積地との比高約39mである。南側を除いた三方は沖積地に向かって急峻な崖となっている。遺構の現状は山林である。

2. 調査の概要

遺構は、東側調査区から検出された時期不明の土坑1基、炭窯3基、焼土7カ所である。西側調査区からの遺構は認められなかった。

〈土 坑〉

土坑は直径70cm程の楕円形を呈しており、深さ約50cmである。上部の2層から弥生土器が出土しているが、時期、性格については不明である。

〈焼 土〉

焼土は7カ所のうち6カ所が現地性のものであり、平面形は円形3カ所、楕円形1カ所、不整形3カ所で大きさは最小が径30×40cm、最大が径70×80cm、厚さ2～15cmである。7カ所ともII層～III層で検出されそのうちの2カ所については付近から弥生土器片や剝片が出土し、住居跡に伴う可能性も考えられたが、柱穴、周溝などは認められなかった。

〈炭 窯〉

炭窯3基のうち、1基は直径3.15m、深さ1.15mの円筒形状を呈する。埋土は上部から黒褐色土、赤褐色土、オリーブ灰色土の3層に大別される。埋土の中位は厚さ40～80cmの焼土層であり、下部には炭の堆積が見られる。遺物は出土していない。他の2基は長さ5.5m、幅1.2m、深さ20cm程度である。浅皿状に掘り込んだものであり、埋土は主に黒色土と黒褐色土との互層で構成されている。構築時期は形態から前者が近現代と考えられるが、他は不明である。

〈出土遺物〉

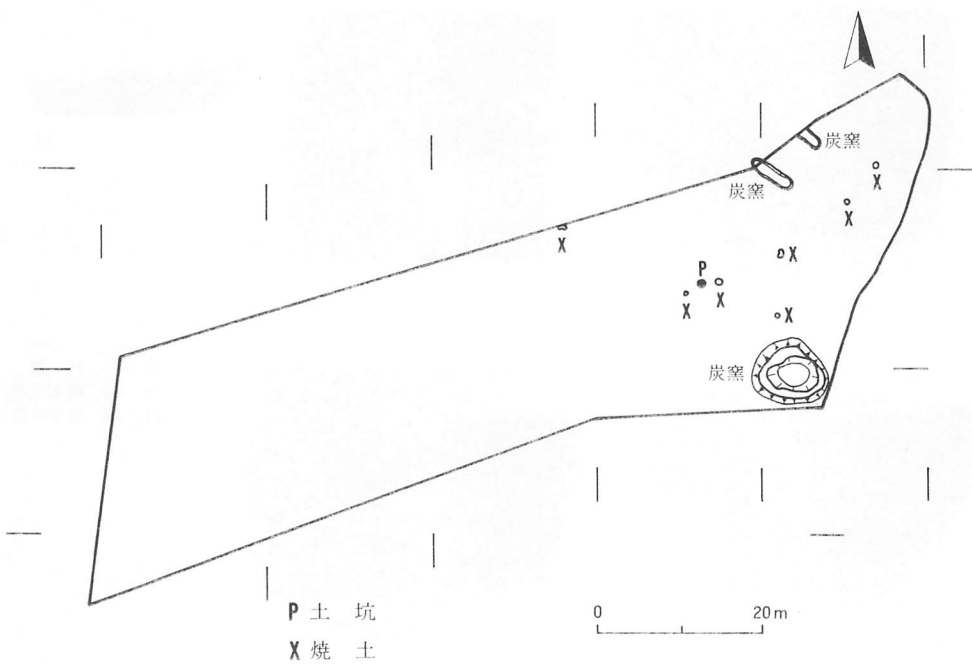
縄文時代後・晩期の土器、弥生時代の土器、石器が少量出土した。土器は、いずれも小破片であるが、量的には弥生土器が多い。石器は石鏃、石匙、石斧、石錘、磨石などのほか、2カ所で剝片がまとまって出土している。これらの遺物は東側調査区東端からのみ出土している。

3. まとめ

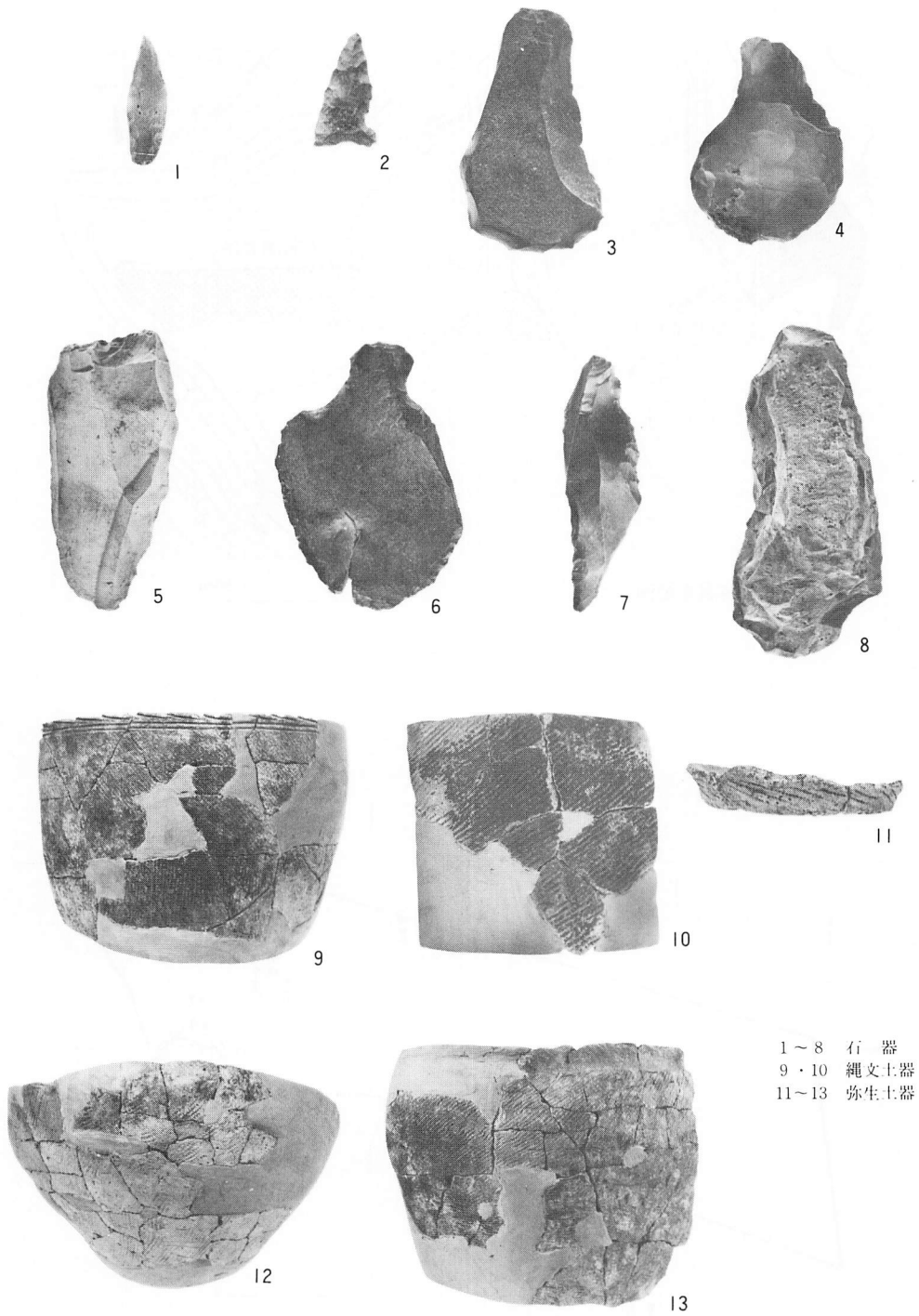
調査の結果、住居跡は検出されなかったが、縄文時代や弥生時代において生活の場として利用されていたものと考えられる。地形から見て集落は調査区域外の南側に存在する可能性がある。



上反町遺跡調査範囲



上反町遺跡遺構配置図

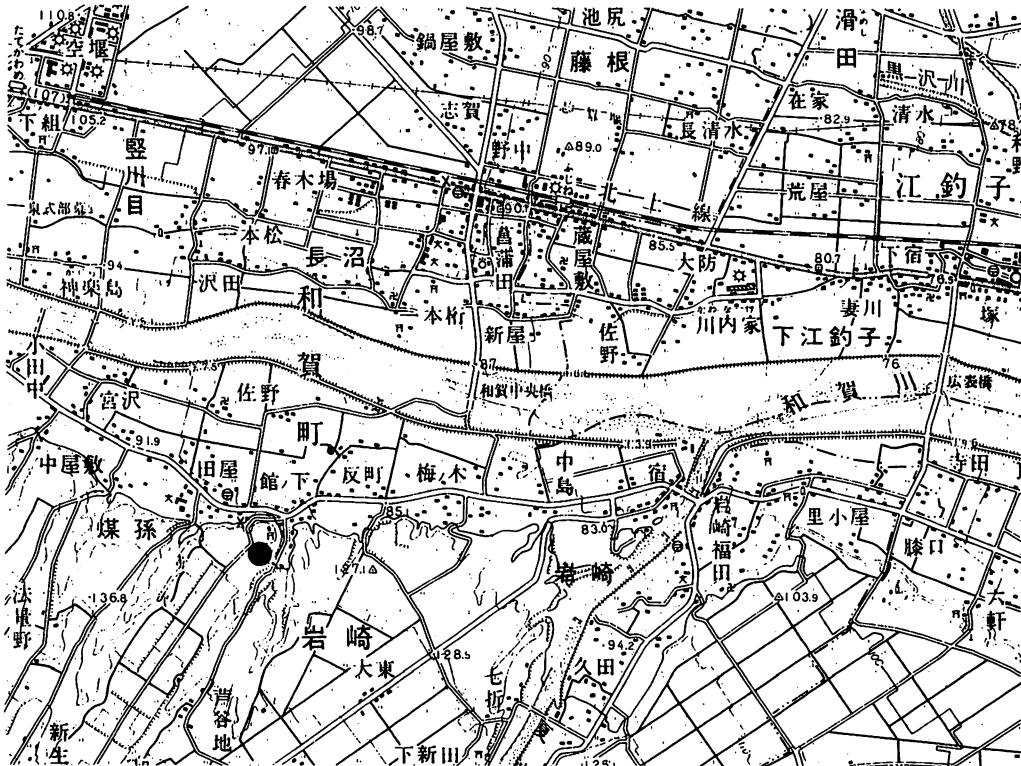


1~8 石器
 9・10 縄文土器
 11~13 弥生土器

上反町遺跡 出土遺物

(9) 観音館跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫5地割138-2ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月17日～6月30日
調査対象面積 4,300㎡
発掘調査面積 4,300㎡
遺跡番号・略号 ME64-2001・KD-90
調査担当者 玉川英喜・熊谷博由
協力機関 花巻市・和賀町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

観音館跡は東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西約3kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。館の東側は芦谷地沢に限られ、南側には堀が巡り、丘陵から区切られている。館は三郭からなり、主郭、後背郭とその南側の舌状部に郭が認められ、それぞれの郭は空堀と自然地形によって区切られている。

今回の調査区域は丘陵から段背郭を区切る空堀の南側に隣接し、館の外側にあたる部分である。標高は127m前後で、和賀川の沖積面とは約40mの比高がある。遺跡の現況は水田、牧草地、山林等である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、所属する時代が不明の掘立柱建物跡4棟、土坑2基、陥し穴状遺構1基、溝跡6条、それに柱穴状の小土坑数個である。遺物は、土器片や石器等が極く少量出土している。総量は中コンテナ1箱に満たない。

〈掘立柱建物跡〉

調査区の中央部付近に3棟、北西部に1棟検出されている。前者の桁行方向は、2棟が北東—南西で、他の1棟はそれに直交する北西—南東方向である。後者のそれは西北西—東南東方向である。

建物の規模は様々であり、2×3間(4.0×7.4m)で四面に廂または縁と思われる柱穴配列を持つもの、2×4間(3.6×7.2m)で、桁行の柱間が1.3m—2.15m—2.45m—1.3m、梁行のそれが2.4m・1.2mのもの、1×3間(4.3×7.3m)でやはり四面に廂か縁の柱穴配列を有するもの、1×2間(3.6×4.6m)のものがある。

各建物跡の柱穴の大きさは、母屋部分では掘り方の径が30～50cm、深さ30～50cmのものが多く、なかには径15cm位の柱痕跡の認められるものもある。廂部分では径30cm前後と母屋部分より小さめの柱穴が多い。

埋土は、掘り方部分では黒褐色土や暗褐色土とブロック状の黄褐色土との混土であり、柱痕跡では黒褐色土が主体である。

〈溝 跡〉

南西から北東方向に延びる溝跡、及び概ね南東—北西方向の溝跡が各3条検出されている。

前者の3条のうち2条はほぼ並行し、底部はさらに細かい2ないし3条に分かれている。検出部分の長さは一方が約58m、他方が約42m、上幅はどちらも0.5～1.3m、深さ20～30mである。他の1条は、断面形が幅広のU字形状を呈し、規模は長さ約48m、上幅0.5～1.3m、深さ20～40cmで、北側で空堀に続くと思われる。

後者には、西側で調査区域外に続くものが2条あり、検出部分の規模は一方が、長さ18.5m、上幅40～80cm、深さ10～20cm、他方は長さ2m、上幅約40cm、深さ約10cmである。

〈土坑・陥し穴状遺構〉

土坑は、平面形が楕円形及び不整形を呈し、規模は開口部の最大径がそれぞれ1.1mと1.7m、深さが26cmと30cmである。陥し穴状遺構は、平面形が楕円形状を呈し、規模は開口部0.76×2.2m、深さ94cmである。

〈出土遺物〉

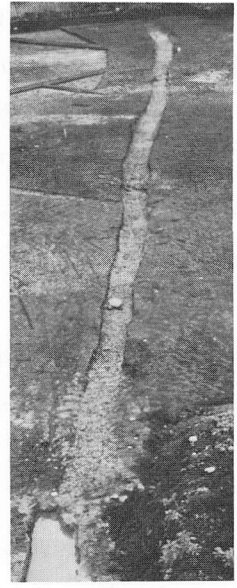
遺構内からの遺物は陶器の小破片1点のみで、遺構の時期を比定できる資料は出土していない。他に、表土下位の黒褐色土中から縄文土器片や石匙などの石器等が少量出土している。

3. まとめ

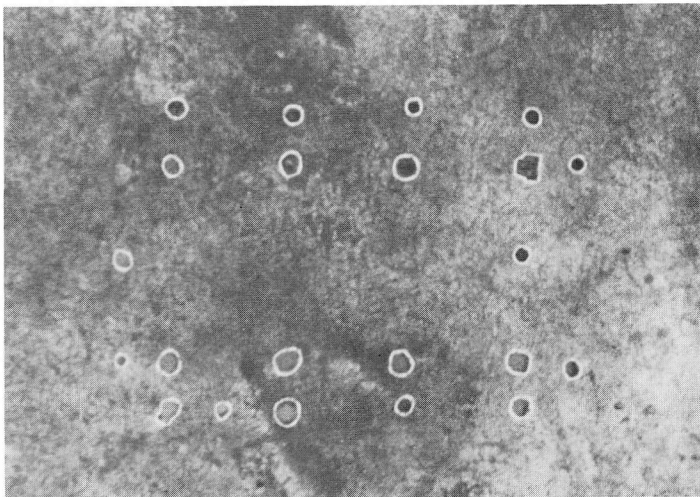
今回の調査は館跡の周辺部分であり、館跡に直接関わることを特定できる資料は得られていない。来年度は、空堀跡を含む郭の一部も調査対象区域となっており、今年度検出された掘立柱建物跡等の位置付けを含め、館跡の一端を解明する資料が得られる可能性も考えられる。



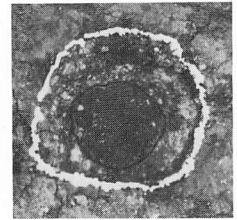
調査区域全景



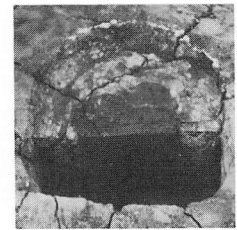
溝 跡



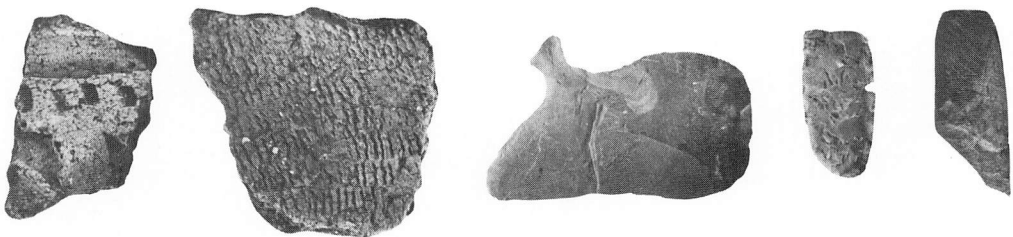
掘立柱建物跡



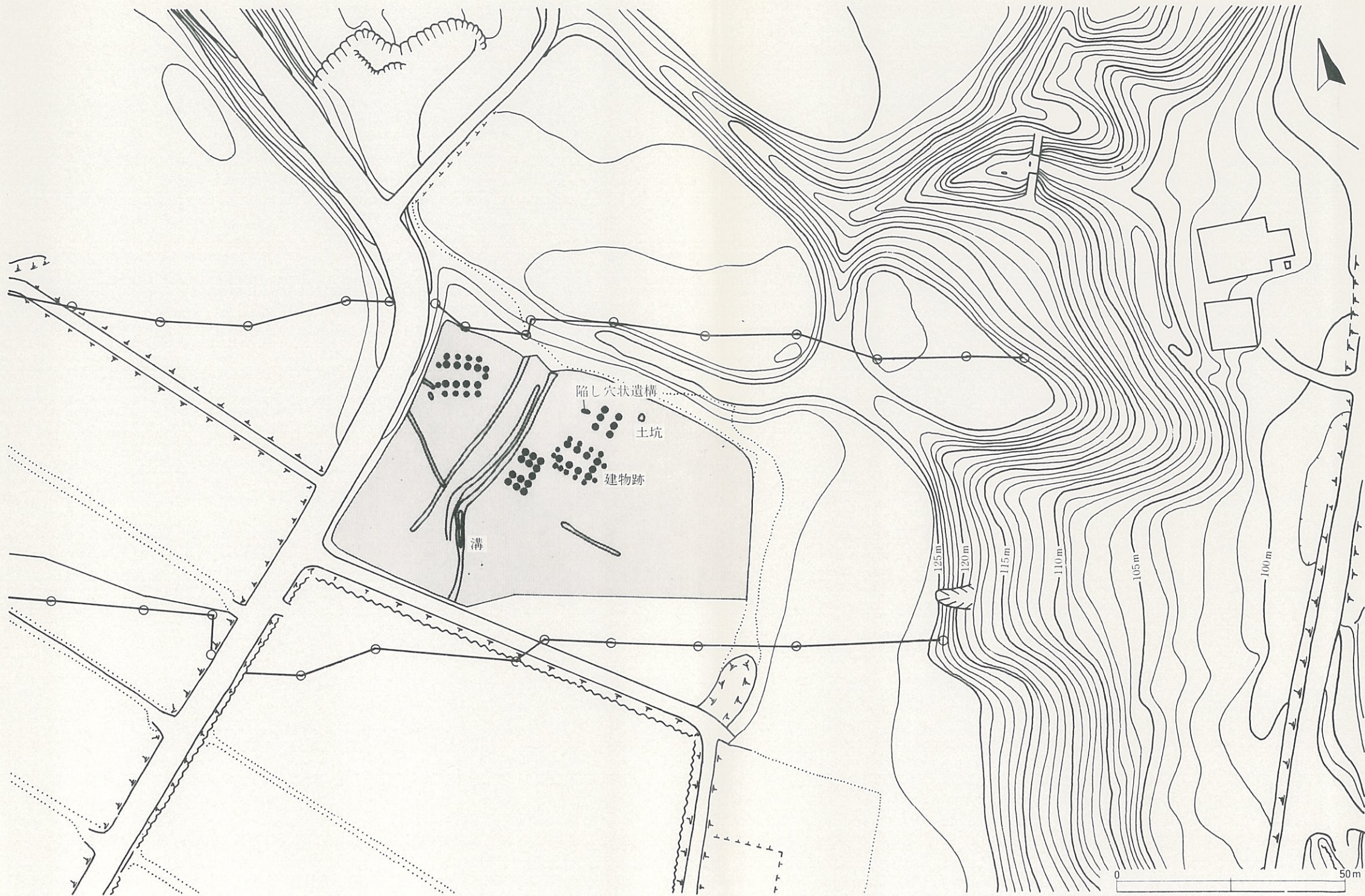
柱穴の検出状況



柱穴の断面



観音館跡 検出遺構・出土遺物



観音館跡遺構配置図

(10) すすまご 煤孫 遺 跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫5地割49-6ほか

委託者 日本道路公団仙台建設局

発掘調査期間 平成2年4月17日～11月29日

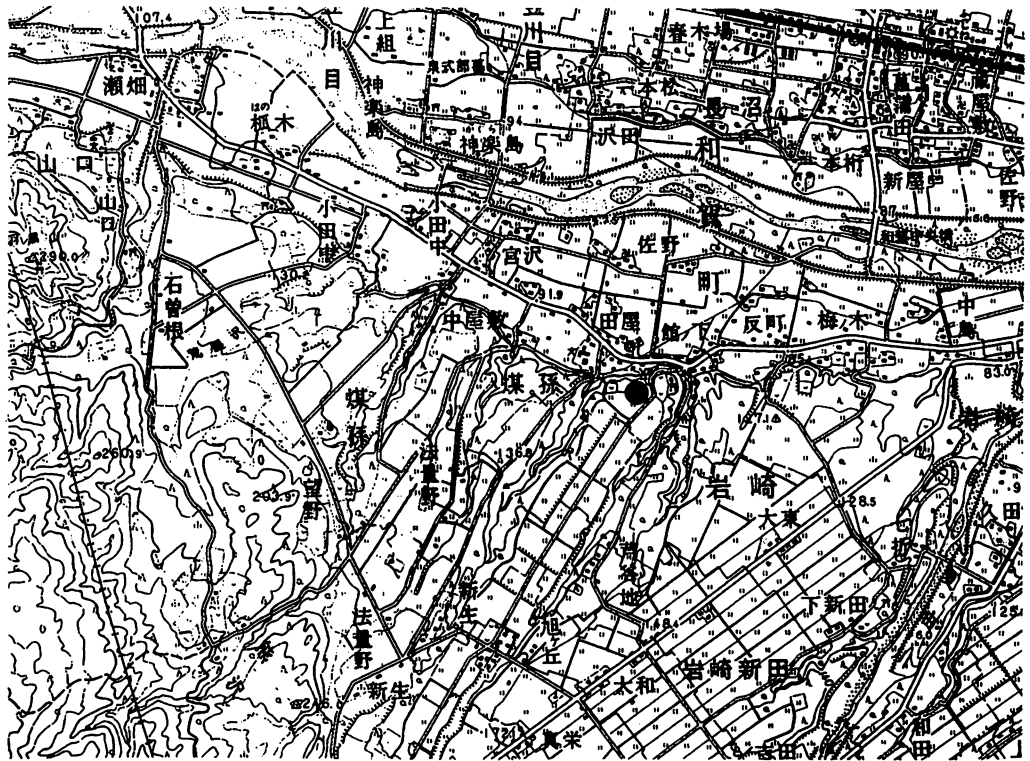
調査対象面積 15,560㎡

発掘調査面積 15,560㎡

遺跡番号・略号 ME63-2318・SM-90

調査担当者 東海林隆幹・小田野哲憲・工藤利幸・及川靖世
大久保茂・熊谷博由

協力機関 和賀町・花巻市・江釣子村教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

煤孫遺跡は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南西約3km付近に位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は123～127m、河岸低地との比高差は約30mである。現状は、南側が水田、北側が畑地や山林であり、東から西にかけて低位となる。道路をはさんで東側に観音館跡、深い沢をはさんで西側に法量野Ⅰ遺跡がある。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡6棟、平安時代の竪穴住居跡8棟、土坑58基、陥し穴状遺構11基、炉跡1基、溝跡7条である。出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、板状土偶、土製品、石器、石製品等である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は、東側の高位面と農道北側の低立面に集中している。平面形は円形を基調とするものが多く、最大のものは径6mである。焼土のみが広く残り、焼失家屋と考えられるもの、前期末葉の土器が廃棄された状態で多量に出土しているもの、周溝がめぐるもの等があるが、炉跡は不明のものが多い。

平安時代の住居跡は、8棟のうち6棟が農道南側の中位面に集中している。平面形は方形で最大は一辺が6.2mであるが、全体的にみると3～4mのものが多い。カマドの位置は、東向きが5棟、南向きが2棟、他は不明である。農道南側の1棟には、土器を製作するために使用したと思われるロクロピット3基があり、同じ住居跡内の床面からは粘土が、また住居跡の近くから焼土ピット4基が検出されていることから、土器製作の一連の工程が営まれていたことが考えられる。

〈土 坑〉

検出された58基のうち、前述の焼土ピットを除いて殆どが縄文時代のものと考えられる。開口部が2m以上のものは農道北側の低立面に集中しており、深さも1～1.6mのものが多い。中位面、高位面では浅皿状のものも多く、開口部は平均すれば1mほどで、深さは30cm内外である。前述の低立面の土坑には、フラスコ型と大型の楕円形のもの切り合っている例がいくつか見られ、中には副穴を持つものやほぼ完形に近い大型鉢形土器の出土したもの等がある。

〈陥し穴状遺構〉

検出された11基のうち、溝状のものは7基、円形のもの3基、そして楕円形で溝状のものに切られているものが1基である。溝状のものうち、最長のものは4.4m、深さ1m以上である。他は、長さ3～4m、深さ70～90cmのものが多い。

〈炉 跡〉

農道南側の中位面に石囲炉 1 基が検出された。垂円礫10個から構成される円形の炉で、径は60×70cmである。内部には最大3cmの厚さに焼土層が形成されている。炉跡に伴う柱穴や周溝等は確認されなかった。

〈溝 跡〉

7条検出された。このうち、最大のものは、調査区東端に位置し、幅2m、深さ0.9m、長さは70m以上である。他の6条は幅40～50cm、深さ2～17cm、長さ10～30mで、地境溝の可能性がある。いずれも明確に伴う遺物はなく、時期は不明である。

〈出土遺物〉

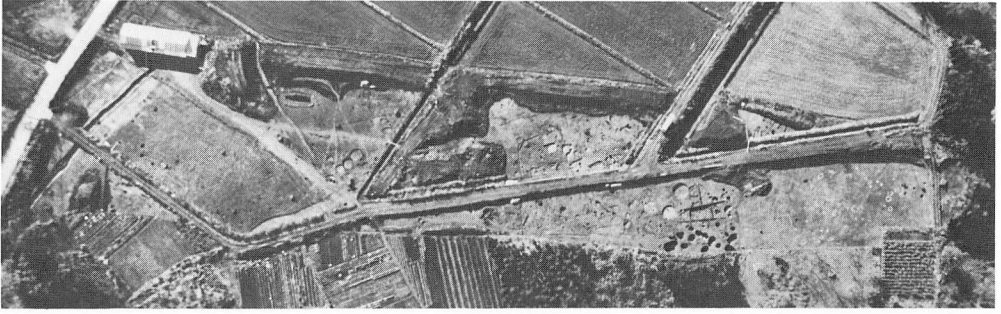
縄文土器は、殆どが前期末葉に位置づけられ、その量は大型コンテナで100箱以上である。また、土坑内を中心に前期末葉の板状土偶の破片数点が出土している。さらに、土製円盤、ミニチュア土器等が出土している。

土師器は、平安時代の竪穴住居跡を中心に坏、甕あわせて20数箱出土している。中には、竪穴住居内の土坑に、廃棄された状態で完形に近い土器が10数点出土している例もある。須恵器は、完形に近い壺1点と坏の破片が、住居跡を中心に若干出土している程度である。

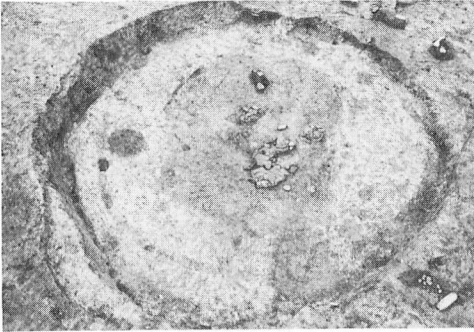
石器は、総数で4,300点ほどである。器種別では礫石器が多く、石錘が2,400点、磨石、凹石等が900点ほどである。剥片石器では、スクレーパー類200点、石鏃180点、石匙140点等である。そのほか石製品では塊状耳飾の破片やその未製品と思われるもの、垂飾り、男根状石製品等が出土している。

3. まとめ

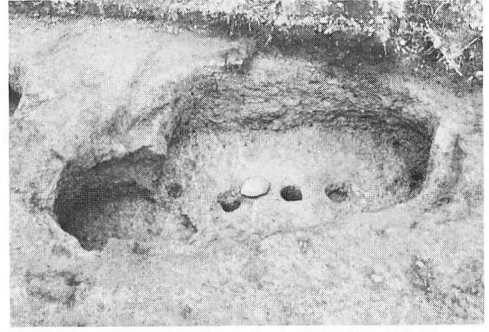
今回の調査の結果、調査区域北側の低位面を中心に縄文時代の遺構が、一段高い南側の中位面を中心に平安時代の住居跡等が検出され、それぞれの時代に集落が営まれていたことが判明した。また、住居跡に大量に廃棄された縄文時代前期の土器や、平安時代の住居跡から検出されたロクロピットなど、当該時期の生活を知る上で貴重な資料が得られた。



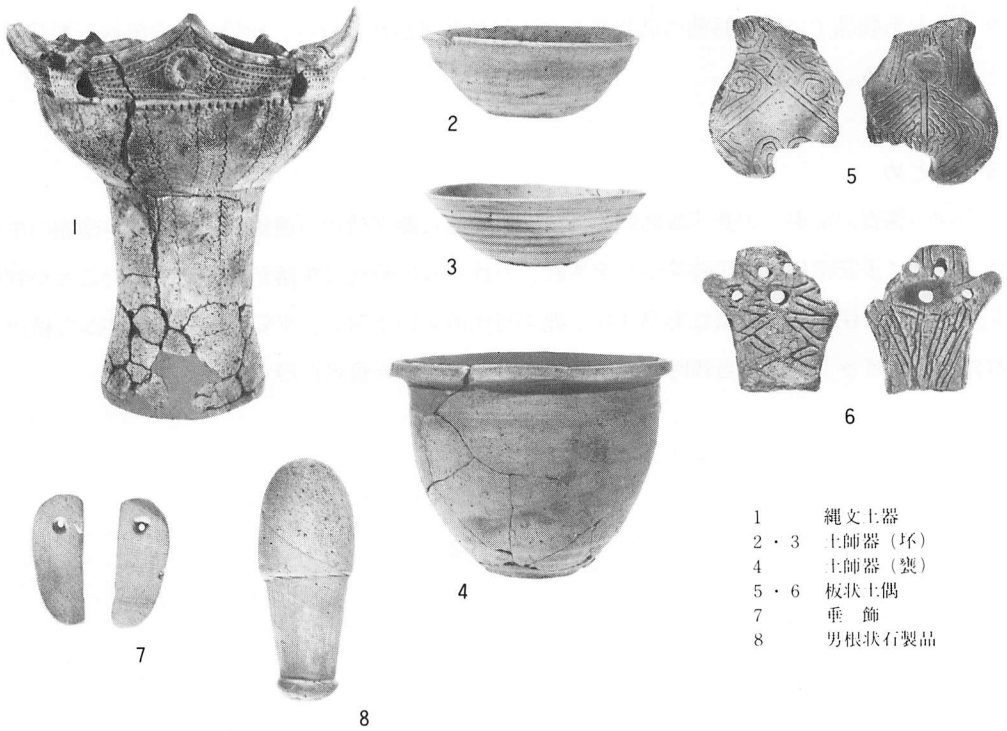
調査区全景（北から）



縄文時代の竪穴住居跡



副穴を持つ縄文時代の大型土坑



- 1 縄文土器
- 2・3 土師器（坏）
- 4 土師器（甕）
- 5・6 板状土偶
- 7 垂飾
- 8 男根状石製品

煤孫遺跡 検出遺構・出土遺物

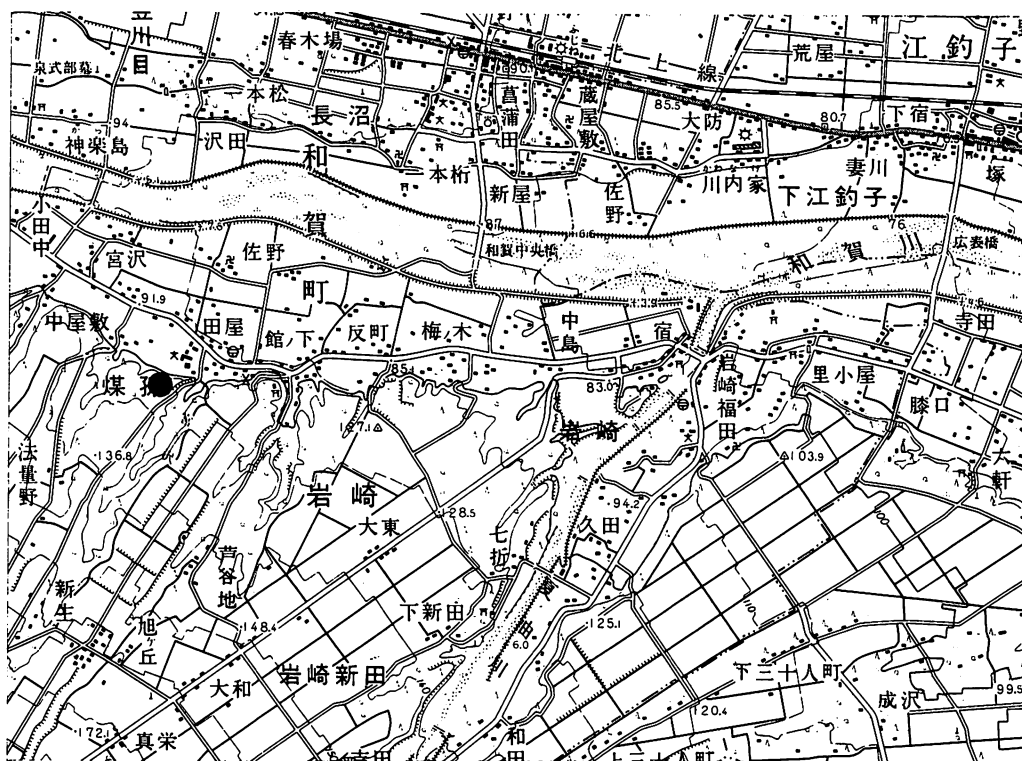


- 縄文時代の住居跡
- 平安時代の住居跡
- 土坑
- 陥し穴状遺構
- 溝

煤孫遺跡遺構配置図

ほうりょうの
(11) 法量野 I 遺跡

所在地 和賀町煤孫 4 地割66-37ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局北上工事事務所
発掘調査期間 平成2年4月16日～6月30日
発掘対象面積 9,990㎡
発掘対象面積 9,990㎡
遺跡番号・略号 ME63-2313・HR I-90
調査担当者 中川重紀・菊池明芳
協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

法量野 I 遺跡は、東日本旅客鉄道北上線豎川目駅の南南東3.1km付近に位置し、和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地する。遺跡の標高は127m 前後である。和賀川南岸の沖積面との比高差は37m 強であり、東側は町道田屋・法量野線と宮沢に区切られ、西側は小沢に区切られ、中屋敷遺跡に続いている。調査区の現状は山林である。

2. 調査の概要

今年度の調査は遺構検出までであり、本調査は次年度に実施する予定である。

〈検出された遺構〉

検出された遺構は検出時の形態等から住居跡状遺構 3 棟、土坑16基、陥し穴状遺構12基、炭窯 1 基、その他土坑と思われるもの等58基である。

陥し穴状遺構には平面形が方形状、溝状、円形の形態がありそうである。

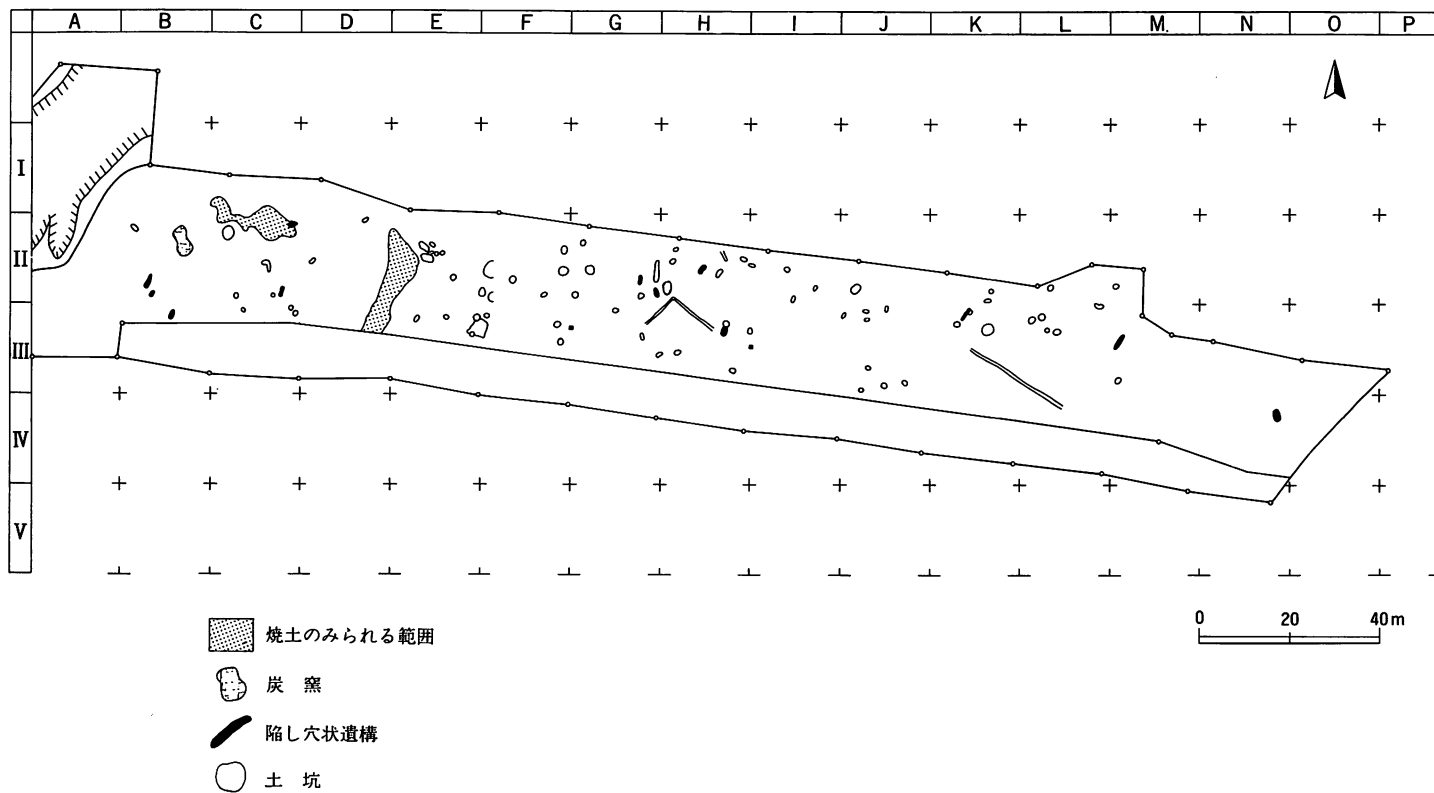
土坑は16基のうち 1 基はフラスコ状の土坑であり、縄文時代晩期の土器片が出土している。

〈検出された遺物〉

基本土層 I 層～IV層にかけて調査区のほぼ全域から少量出土している。縄文時代の前期末・後期・晩期中葉と弥生時代、平安時代の土器片である。石器は、石匙、石錘、磨石等が少量と、剝片である。

3. まとめ

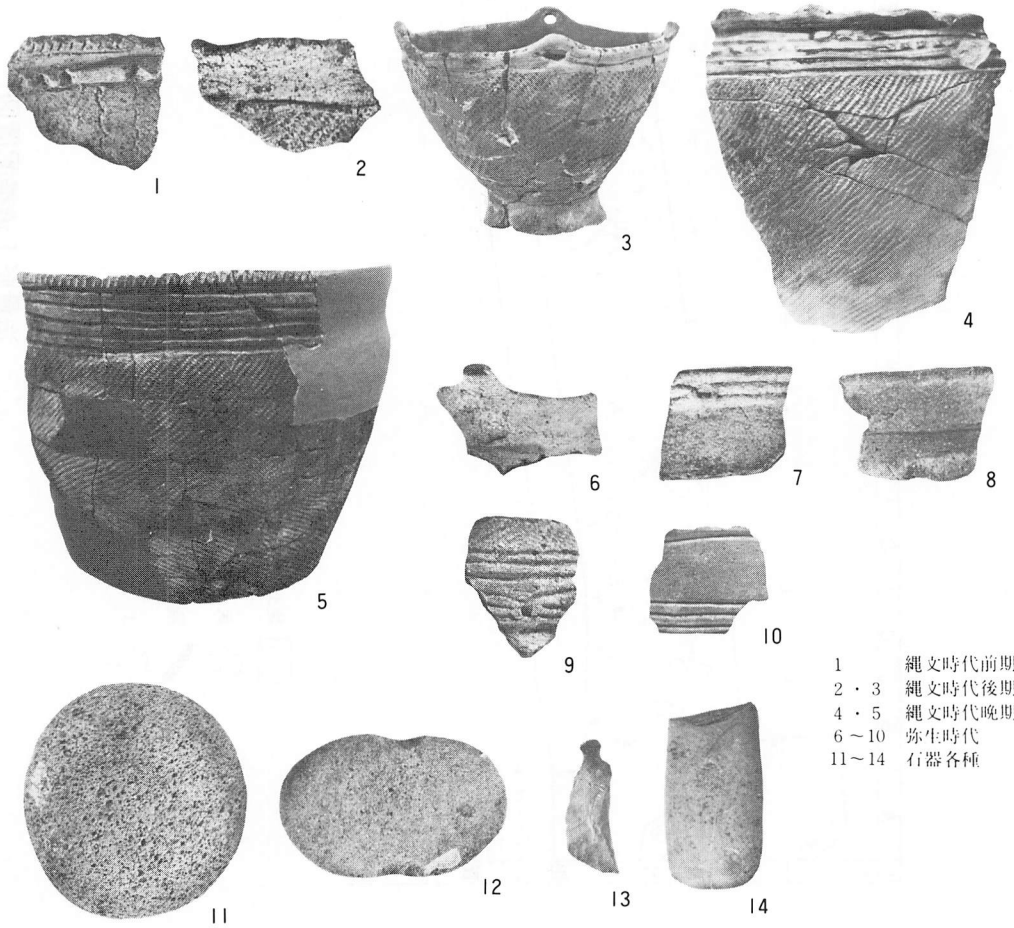
遺跡の詳細については不明の部分が多いが、今回の調査によって縄文時代前期末から弥生時代、そして平安時代にかけての人々がこの地でも様々な活動をしていたことが判明した。



法量野 I 遺構配置図



遺跡全景

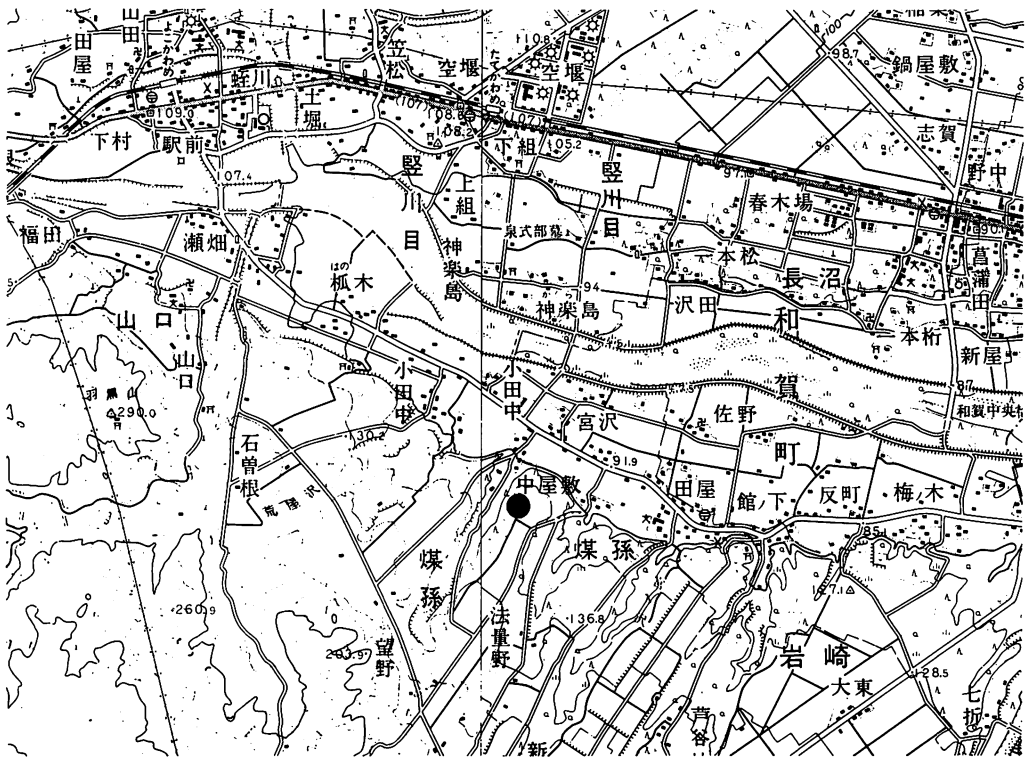


- 1 縄文時代前期
- 2・3 縄文時代後期
- 4・5 縄文時代晩期
- 6～10 弥生時代
- 11～14 石器各種

法量野 I 遺跡 遺跡全景・出土遺物

(12) はやし ぎき だて
林 崎 館 跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫第3地割328ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月17日～10月31日
調査対象面積 14,150㎡
発掘対象面積 14,150㎡
遺跡番号・略号 ME63-1267・HZ-90
調査担当者 小田野哲憲・阿部勝則
協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

林崎館遺跡は、東日本旅客鉄道北上線立川目駅の南2.5kmに位置する。遺跡は奥羽山脈から東流する和賀川右岸の河岸段丘上にあり、東側と西側は北流する沢に開析されている。調査区域はこの台地の先端部近くにあたり、標高は124～131m、和賀川との比高は約35mである。現況は水田である。調査区外の北側、台地の先端部には堀をめぐらす林崎館が位置している。

2. 調査の概要

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡18棟、フラスコ形ピット8基、土壇8基、陥し穴状遺構42基である。遺構の占地は、調査区西端にフラスコ形ピット群と土壇が、中央部の南寄りに竪穴住居跡群が、陥し穴状遺構は中央部北側と東側に、大きくわけられる。東端部は緩斜面となり黒色土の堆積は厚いが、湧水が激しく遺構・遺物は検出できなかった。

出土遺物は縄文時代の土器と石器がほとんどである。調査対象区および周辺の水田は、昭和30年代後半に開田されている。その際、包含層および遺構上面まで削平し、客土を入れて水田としている。そのため上層から出土する土器は破砕された細片が多く、かつ原位置を留めていない。また、竪穴住居跡の壁および炉を削平されている例も多く、縄文時代中期の遺跡としては極めて遺物量が少ない。

〈竪穴住居跡〉

住居跡18棟はすべて中期に属する。形状は円形およびやや楕円形を呈し、規模は最大のもので7.0m、最小で4.7m、平均は5m前後である。炉は石囲炉、地床炉、埋甕炉の3種類がある。柱穴は基本的には4本で、炉と壁の中間に位置するものが多い。壁柱穴をもつもの、建替え拡張したものが各1棟である。18棟中7棟は壁、炉の上部を削平されており、4本の支柱穴のみの検出であった。西側にある住居跡群は北側が開口するような半弧をえがき、東側の一群は南側が開口するような弧をえがいて配置されている。

〈土壇〉

フラスコ形ピットは調査区の西端で8基が弧状をえがくように配置されている。平均すると開口部径2.0m、深さ1.5mである。北側にある2基は底面が重複しており、截り合い部分は粘土で補充して壁としている。6基はほとんど無遺物であったが、2基の底面からそれぞれ有孔装飾品と完形の小型精製深鉢形土器が出土している。墓壇への転用も考慮される。配列はこれらの東側にある住居跡群の弧と軌を同一にしており、この竪穴住居跡群に伴う貯蔵穴群と推定される。

土壇は8基のうち、やや大型で径1m以上のものは西端部に位置し、径1m未満のものは中央部に散在している。埋土、底面からの遺物の出土はほとんどなく、性格を決定する材料に乏

しい。形態的にもバラつきがあり、共通性に乏しい。

〈陥し穴状遺構〉

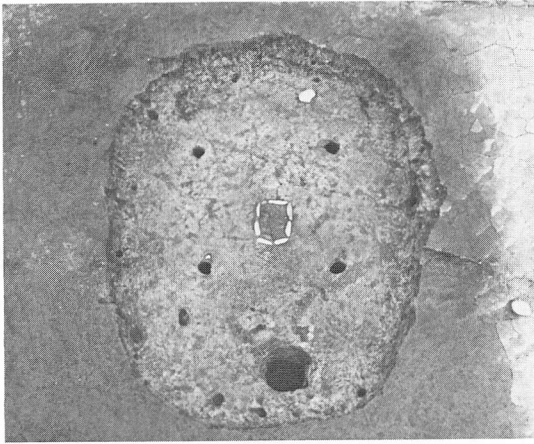
検出された42基は開口部の形状から、溝状3、楕円形4、小判形14、円形8、隅丸方形13基に分類される。溝状を除くタイプはほとんどのものが1～数本の副穴をもつが、小判状で一列に並ぶ東側の群はもたない。深さは1.5～2.0mであり、他の陥し穴状遺構とは異なっている。中央部には円形で副穴をもつタイプのもの6基が一列に連っている。この西側にある一群は隅丸方形タイプが弧状に並ぶ。他は竪穴住居やフラスコ状ピットと重複して散在している。タイプごとにまとまりがありそうであるが、他の遺構との関連、時期等については不明である。

〈出土遺物〉

出土する土器はほとんどが大木8b式土器であるが、遺構面まで削平されている所が多く、遺物の大部分は深い掘り込みのある遺構内からの出土である。土器以外には竪穴住居跡の埋土から土偶の胴部片、フラスコピット底面から垂飾りが出土している。石器の出土量も少なく総計で270点ほどであるが、磨石が半数以上を占める。剥片石器のなかでは石篋が比較的多く、石鏃は少ない。

3. まとめ

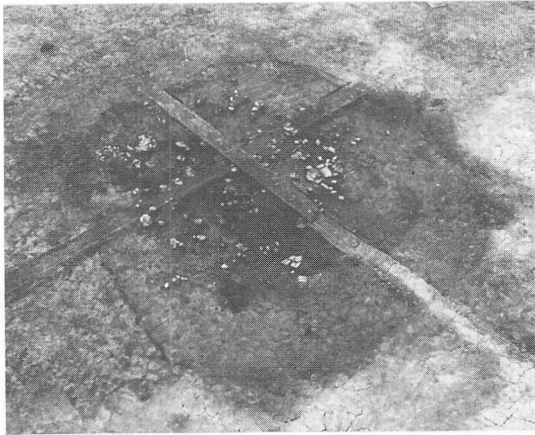
今回の調査で、林崎館遺跡が縄文時代中期、大木8b式期の集落跡であることが判明した。竪穴住居跡は調査区域のさらに南側に広がっているものと推定され、かなり大規模な集落跡であることが判明した。竪穴住居跡群と貯蔵穴群・土壇群、さらには陥し穴状遺構がある一定の意図のもとに配置されている状況を示しているなど、出土物量は少なかったが、集落構成を検討する上で貴重な資料が得られた。



縄文時代の住居跡



縄文時代の陥し穴状遺構



縄文時代の住居跡(埋土土器検出状況)



土偶(胴部)出土状況



1



3



2



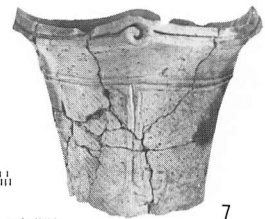
4



5



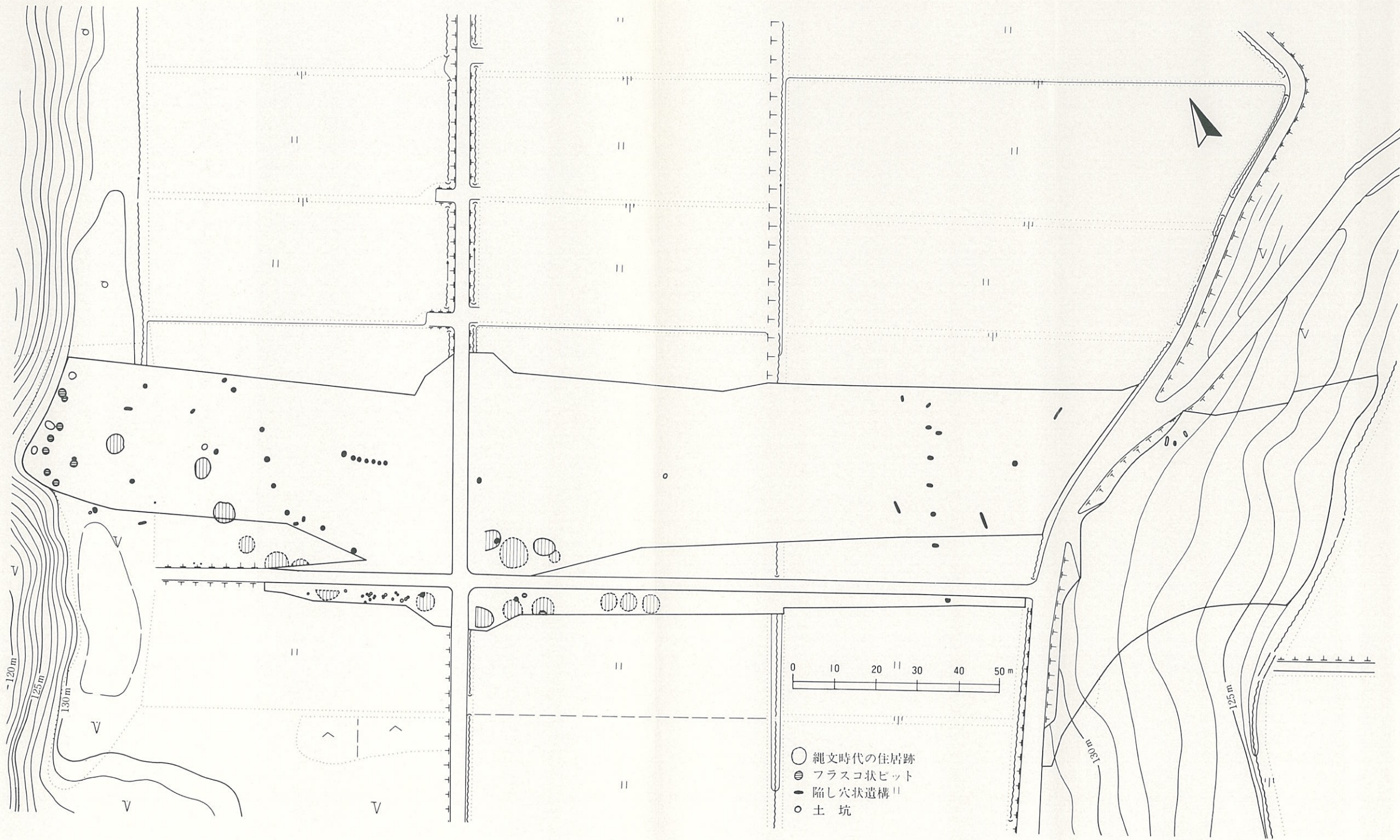
6



7

- 1 棒状土製品
2~4 石器類
5~7 縄文土器(中期)

林崎館跡 検出遺構・出土遺物



林崎館跡遺構配置図

1. 遺跡の立地

本郷遺跡は、東日本旅客鉄道北上線立川目駅の南約2.5kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の東西は北流する沢に開析され、全体は舌状台地地形を呈している。調査区は、標高120～122mの台地の先端部にあたり、地形区分上は洪積世中位段丘に比定される。現状は山林である。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査で、本年度は北西側の部分が主な対象である。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3棟、時期不明の住居跡状遺構1棟、土坑30基、陥し穴状遺構9基、塚2基とこれに伴う集合墓1基などである。

〈竪穴住居跡、住居跡状遺構〉

竪穴住居跡3棟は、出土した土器の特徴から中期中葉の遺構と考えられる。しかし、完掘できたものは1棟のみで、他の2棟は調査区域外にかかる。3棟とも調査区の中では比較的高い、標高122m前後の地点から検出された。平面形はいずれも円形基調である。完掘できたものは、径5.3m前後で、床面のほぼ中央部に地床炉を有する。明確な柱穴は検出されなかった。埋土の下部からは、特殊磨石と呼ばれる礫石器が数個まとまって出土した。

住居跡状遺構は1.5×2.5mの隅丸長方形を呈する。炉・柱穴とも検出されなかったが、壁に沿って幅8～20cm、深さ7cm前後の小溝が巡る。出土遺物はなく時期は不明であるが、形態は水沢市常盤遺跡から検出されている弥生時代の遺構に類似する。

〈土 坑〉

土坑の形態にはフラスコ形・ピーカー形・浅皿形・舟底形などがある。このうち、調査区東端に集中して15基が検出された小土坑群には、2基を除いて内部に1～27個の自然礫を伴う。規模は径60cm前後で、形態にはフラスコ形と浅皿形のものがある。礫の大きさは最小で5cm前後、最大のもの40cmを越え、埋土の大部分を礫が占めるものもある。遺物を伴うものは1基のみで、浅皿形土坑の底面から縄文時代中期中葉の深鉢が出土している。昨年度の調査でも、同様の小土坑が8基検出されたが、性格は不明である。

この他に、墓塚の可能性のあるものとして、弥生土器を伴う舟底形土坑や上部に集石を有するピーカー形土坑がある。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、底部の形から隅丸方形3基、隅丸長方形6基に分けられる。いずれも底面に1～3個の杭穴を有する。出土遺物はなく時期は不明であるが、前述の小土坑に切られるものが1基である。また、埋土中央部に灰黄色の粉状火山灰が堆積するものが3基である。

〈塚・集合墓〉

調査区北端の段丘縁辺に位置する。この地区は、段丘が2本の小沢によって開析を受け三角形に突出した部分で、2基の塚はいずれもこの自然地形を利用して構築されている。

西側の塚は6.5×8 m、高さ0.8mの方形台状を呈する。後世の攪乱を多く受けているが、南側と北側に幅0.9～1.2m、深さ30cm前後の周溝を伴う。付随する施設は周溝だけで、出土遺物はない。

東側の塚は3.5×6.5m、高さ0.9mの三角台状を呈し、全体の約3分の1の部分に大小の川原礫による集石がみられる。後世に少なくとも1回の改築が行われ、改築後には集合墓として再利用されている。

古期のものは2.0×2.7m、高さ0.8m前後の方形台状を呈していたものと推定され、周囲には幅1.1～1.6m、深さ0.4m前後の周溝が巡る。盛土は約40cmで僅かに黄褐色土を含む黒褐色土が主体である。新期のものは、古期の塚の北側に黄褐色土と黒褐色土の混合土を盛り上げて構築している。周溝は南側と東側では一部古期の周溝を再利用する形で、幅0.8～1.5m、深さ0.4m前後のものが、北東部を除いて周囲を囲む。遺骨の検出状況からみて新期の塚は、集合墓を造るにあたって構築された可能性が高く、集石もこれに伴う遺構と考えられる。

遺骨は全て火葬骨で、9カ所から検出された。掘り込みが浅いことや木根等の影響で、明確な地点や墓壇の規模等は不明であるが、径40～50cm、深さ25～55cmの小土坑内に埋納されたものが3基認められた。また、寛永通寶（いずれも古寛永）を伴うものが6基である。

この他に塚に伴う遺物としては、皇宋通寶と白磁四耳壺の破片がある。年代はいずれも12世紀代で、古期の塚が該期の遺構である可能性がある。

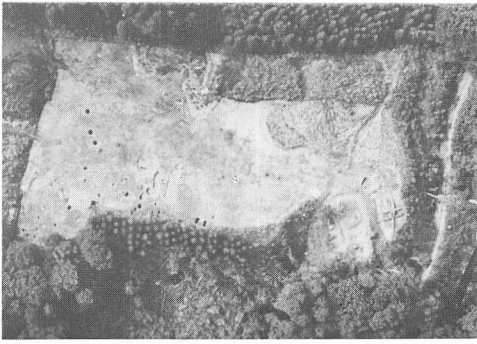
〈出土遺物〉

出土遺物には旧石器、縄文土器・弥生土器・石器及び石製品がある。旧石器は層位的な出土ではないが、ナイフ型石器が出土している。長さは4.7cmで、縦長剝片の打面部分から基部と片側縁に調整加工が施される。土器では縄文土器が多く、中期中葉のものが大半を占め、晩期の土器が若干出土している。

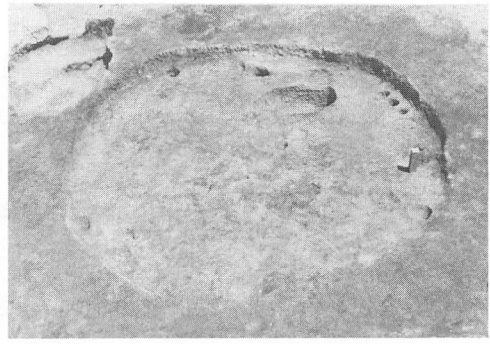
石器には石鏃、石匙などの剝片石器の他に、磨石や石錘などの礫石器も多い。石製品には、凝灰岩製の垂飾りと縄文時代晩期の有刻石盤がある。

3. まとめ

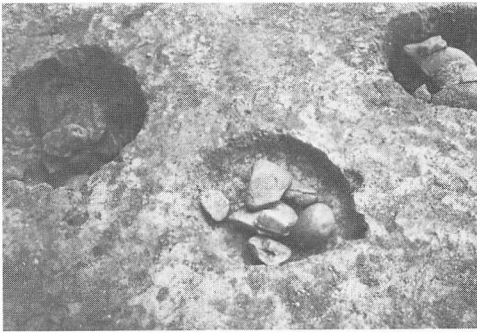
2年に渡る調査で、本郷遺跡は旧石器時代から中・近世までの複合遺跡であることが判明した。今回の調査では、遺跡の中心となる縄文時代中期の集落において、住居跡と土坑群の分布にちがいがあることなど、場の使い分けが窺われる資料を得ることができた。また、旧石器や白磁壺の発見は、県内の該期の研究に新しい資料を加えることができた。



調査区全景（北から）



縄文時代の竪穴住居跡



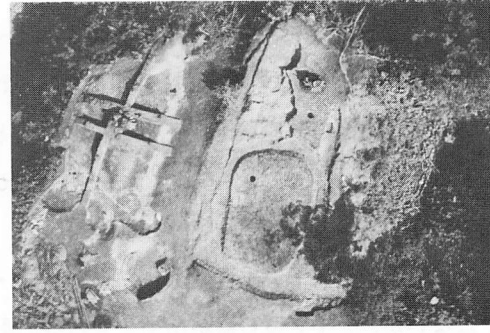
礫を伴う小土坑群



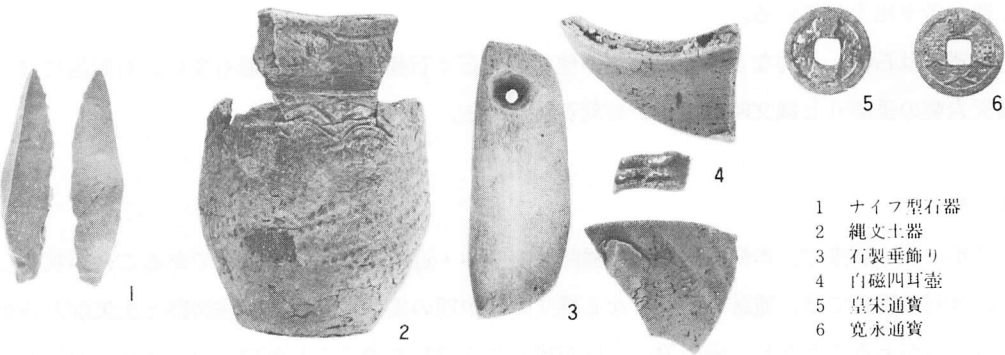
陥し穴状遺構



東側塚配石検出状況

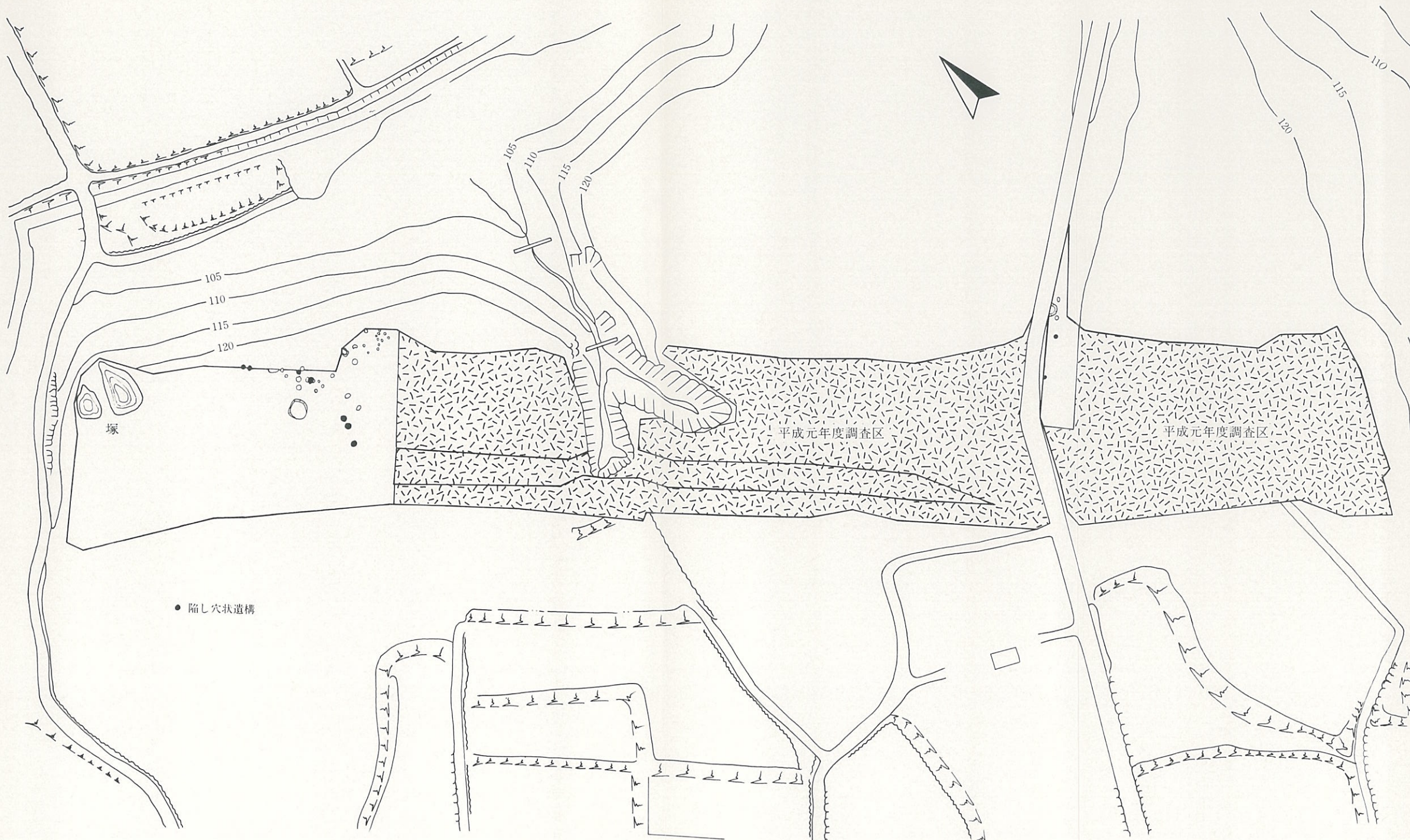


塚周溝検出状況



- 1 ナイフ型石器
- 2 縄文土器
- 3 石製垂飾り
- 4 白磁四耳壺
- 5 皇宋通寶
- 6 寛永通寶

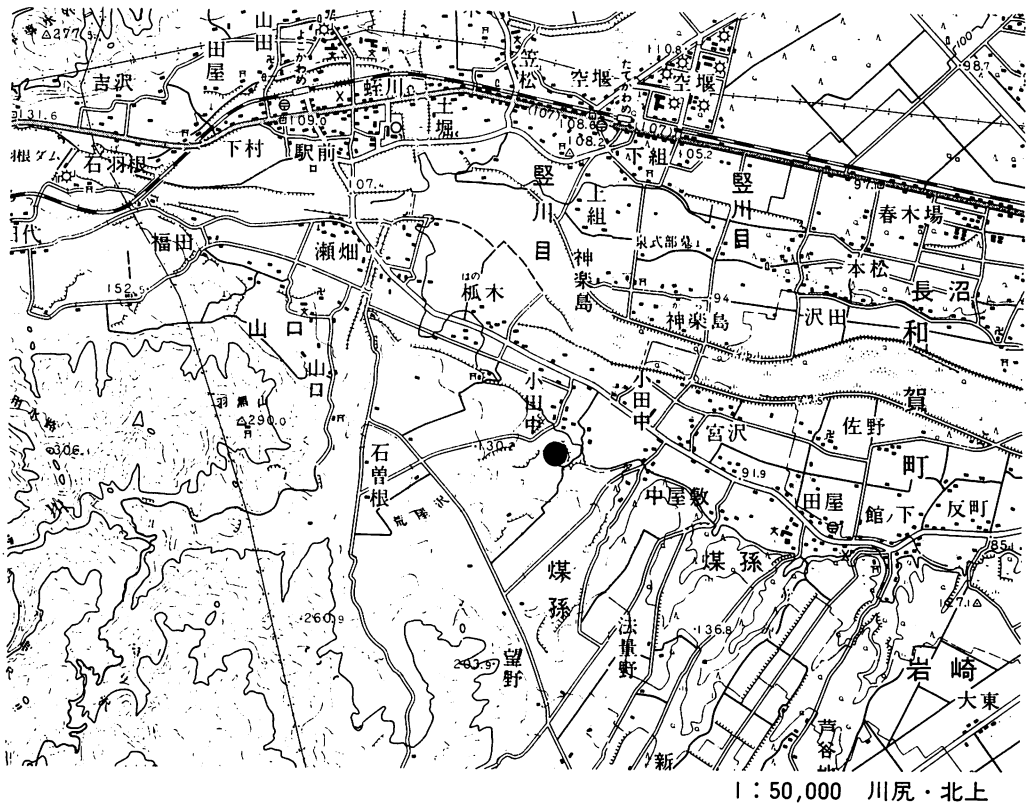
本郷遺跡 検出遺構・出土遺物



本郷遺跡遺構配置図

(14) 石曾根遺跡

所在地 和賀郡和賀町煤孫第2地割56-6ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月16日～5月22日
調査対象面積 700m²
発掘調査面積 700m²
遺跡番号・略号 ME63-1174・IS-90
調査担当者 酒井宗孝・千葉 悟
協力機関 和賀町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

石曾根遺跡は、東日本旅客鉄道北上線立川目駅の南東約2.3kmに位置し、和賀川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区は、緩斜面を挟んで標高126～127mの高位面と標高124mの低位面にまたがり、それぞれ洪積世中位段丘の村崎野段丘と低位段丘の金ヶ崎段丘に比定される。現状は山林である。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査で、本年度は南西側の部分が対象である。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡3棟、土坑9基、陥し穴状遺構10基、埋設土器1基、焼土1カ所などである。これらの遺構は、高位面と低位面に移行する斜面部分に集中して分布し、低位面からは検出されなかった。

〈竪穴住居跡〉

3棟の竪穴住居跡は、出土した土器の特徴から全て中期中葉の遺構と考えられる。しかし、これら3棟はそれぞれ重複し、同時期に存在したものではないと思われる。平面形は楕円形、円形、長方形を基調とした歪つな扇形である。扇形を呈する住居跡は楕円形の住居跡を切る重複関係が認められた。また、円形の住居跡と扇形の住居跡も重複するが、新旧関係は不明である。規模は楕円形のもので4.5×5 m、円形のもは径5.5m前後、扇形のもは1.7×4.5mである。炉は楕円形の住居跡からのみ検出された。床面を僅かに掘り窪めた地床炉で、中央部やや東寄りに位置する。柱穴は、円形のものを除く2棟から検出された。配置は、楕円形のもが3～4本柱、扇形のもは4本柱と考えられる。なお、扇形の住居跡の柱穴は長軸に沿う壁際に位置し、いずれも内傾する。このうち南壁側の2本は、深さ85～115cmである。

〈土 坑〉

土坑の形態には、フラスコ形、ピーカー形、浅皿形、舟底形の4タイプがある。フラスコ形を呈する土坑のうち1基の底面直上から、表裏に縄文が施文された尖底の深鉢が出土しており、縄文時代早期末葉の遺構と考えられる。その他の土坑からは出土遺物は少なく、時期の詳細は不明であるが、住居跡を切るものが2基である。浅皿形を呈するものうち1基の底面には、現地性の焼土が形成されていた。また、舟形を呈するもの2基は、他の遺構が検出されていない「広場」と考えられる部分に位置することや、上部から石棒が出土していることなどから、墓墳の可能性が高い。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、いずれも筒形を呈する。1基を除いて、高位面の縁辺部と斜面部に集中して検出された。底部の形には、円形を呈するものと隅丸方形を呈するものがあり、後者が前者

を切る重複関係が認められた。円形を呈するものの底面には、径20cm前後、深さ30～50cmの杭痕が検出されている。いずれも深さは1.5m以上であり、特に隅丸方形のものは2.0mと深い。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

〈焼 土〉

表土下位の黒褐色土中で検出された。25×35cmの範囲に、最大4.5cmの厚さで現地性焼土が分布する。時期の詳細は不明であるが、周辺部から縄文時代中期の土器片が出土している。

〈埋設土器〉

土器は上半部分を欠くが、縄文時代中期のものである。開口部の径35cm、深さ8cmの掘り方に、正立させた状態で埋置されていた。検出された地点は、扇形の住居跡と円形の住居跡が重複する部分で、いずれかの遺構に伴う可能性もある。

〈出土遺物〉

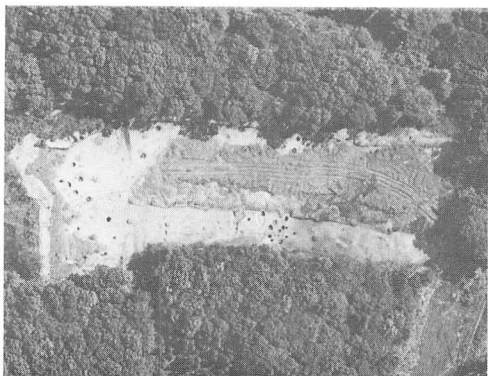
縄文土器、弥生土器、石器、石製品が出土した。縄文土器が大半を占め、中期中葉のものが多く、前期中葉・末葉・晩期後～末葉のものが若干である。いずれも深鉢が主体である。弥生土器は、甕・鉢などの破片が数個体分出土したのみである。

石器には石鏃、石匙、石篋、石斧、磨石、凹石、石皿などがある。石製品には凹石に転用された凝灰岩製の有刻石盤がある。

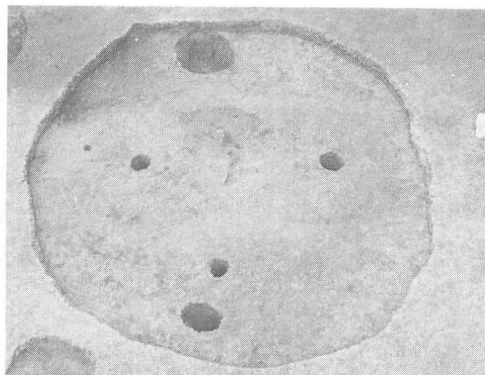
3. まとめ

昨年度からの調査で、検出された遺構の総数は竪穴住居跡17棟、掘立柱建物跡1棟、土坑17基、陥し穴状遺構23基、炉跡・焼土遺構11カ所、埋設土器1基である。

2年に渡る調査によって、石曾根遺跡は縄文時代早期から弥生時代までの複合遺跡であることが判明した。特に遺跡の主体となる縄文時代中期中葉の住居跡は、高位面を取り巻くように分布しており、中央部に25～30m前後の広場を有することが明らかになった。また、広場には墓塚と考えられる土坑が検出されており、該期の集落構造を知る上で好資料を得ることができた。さらに、県内でも検出例の少ない縄文時代早期のフラスコ形土坑や、晩期末葉期の住居跡が検出され、今後の研究に資料を加えることができた。



調査区全景（南から）



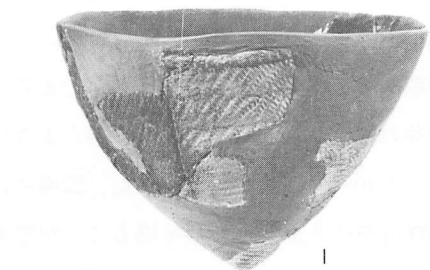
縄文時代豎の豎穴住居跡



縄文時代の豎穴住居跡



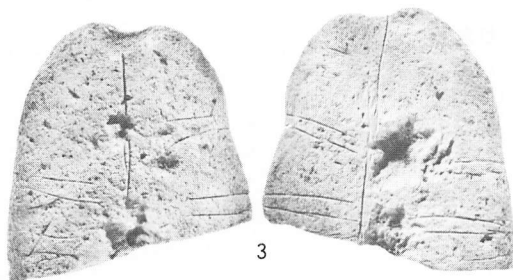
縄文時代早期の土坑と土器出土状況



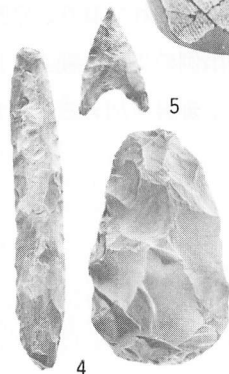
1



2



3



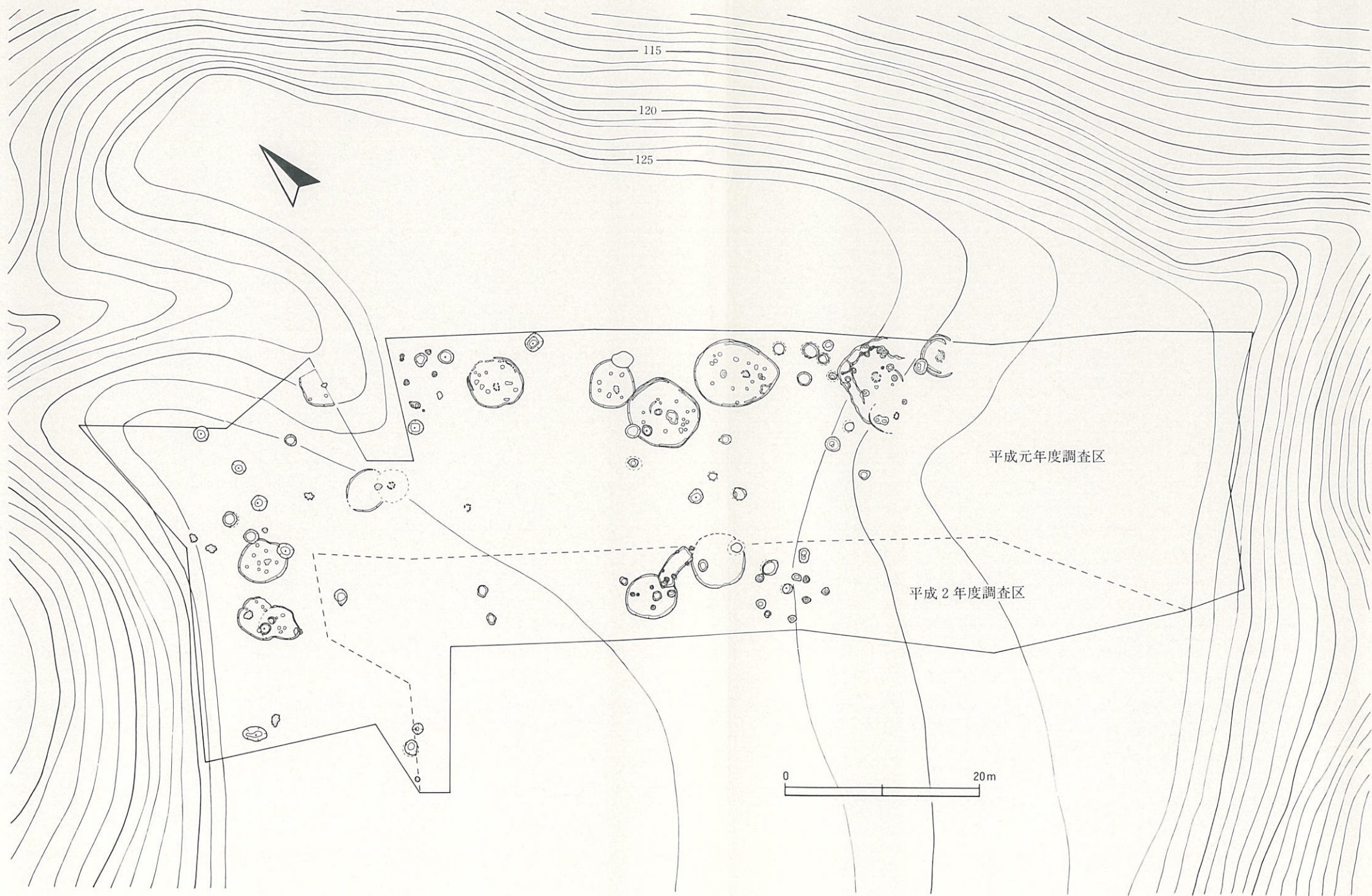
5

4

6

- 1 縄文土器（早期）
- 2 縄文土器（中期）
- 3 線刻石盤
- 4～6 石器類

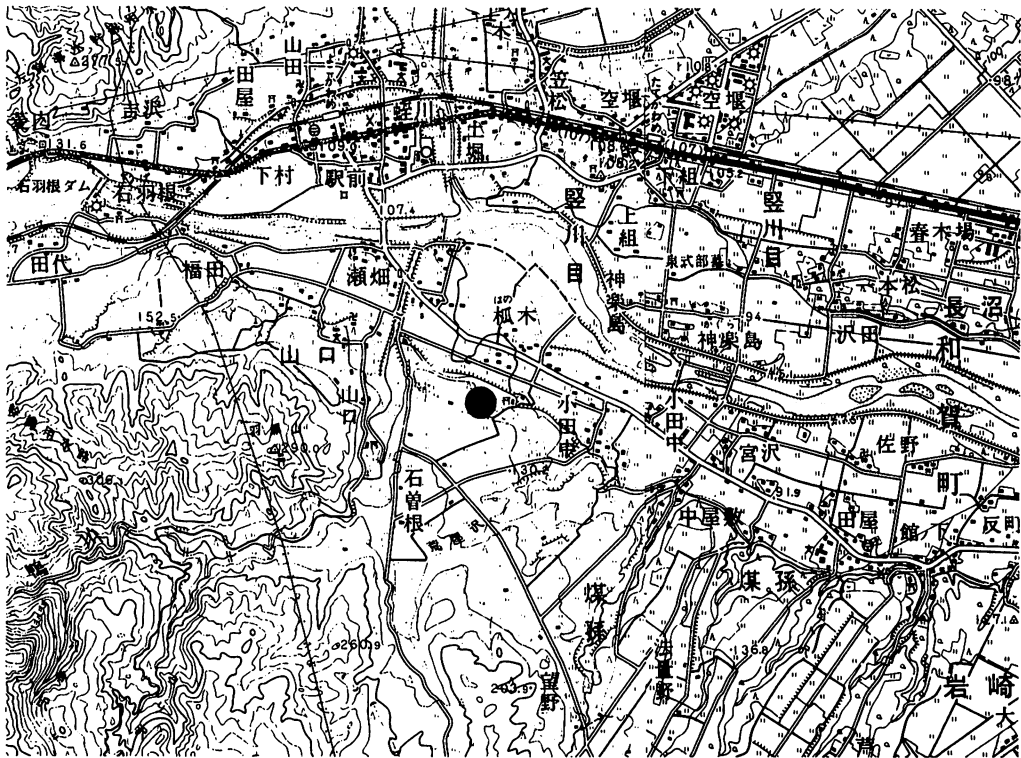
石曾根遺跡 検出遺構・出土遺物



石曾根遺跡遺構配置図

(15) はちまんの
八幡野 II 遺跡

所在地 和賀郡和賀町山口40地割80ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年4月17日～9月25日
調査対象面積 20,970m²
発掘調査面積 20,970m²
遺跡番号・略号 ME63-0181・HMII-90
調査担当者 佐々木嘉直・工藤利幸・及川靖世
協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

八幡野II遺跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東2.2km付近に位置し、奥羽脊梁山脈に源を発し和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地している。遺跡の標高は127～132mであり、和賀川との比高は27～32mである。

遺跡の西側には田中館跡が、東側には八幡館跡や月館跡が隣接している。調査区域の現況は、山林および畑地であるが、山林の一部は昭和40年代前半まで畑地として利用されていた。

2. 調査の概要

調査は、平成元年度からの継続調査である。調査区域は東西300m、南北170mの範囲にあり、一部は元年度の調査範囲に挟まれているが全体的には八幡館跡寄りの東側である。調査区域の土層堆積状態は、かつての土地利用状況や段丘構成層の起伏との関係から地点によって大きく異なるが構成層の上位は大別3層に区分される。これらの堆積物はどれも黒色～暗褐色の腐植土層である。また、倒木跡や住居跡などの凹地部では完新世の降下火山灰も認められる。

発見された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構21基、平安時代の竪穴住居跡3棟、奈良時代末～平安時代の土坑9基、同陥し穴状遺構1基、所属時期不明の焼土3カ所、柱穴様小穴17基、近代の工房跡1棟であるが、土坑のうち6基は住居跡に伴うものである。

〈竪穴住居跡〉

平面形を確認できたものは2棟、カマド・壁・床の一部を確認しただけのもの1棟である。これら3棟の住居跡には、埋土の一部として灰白色～浅黄色の火山灰が堆積している。

平面形・規模の判明したもののうち、1棟は隅丸方形で長軸の長さ3.8m、短軸の長さ3.3mで、東南東壁のやや南寄りにカマドが設けられており、竪穴周囲には部分的ながら幅45～55cmの土堤状の盛土が認められた。他の1棟は、不整な長方形で長軸の長さ3.1m、短軸の長さ2.7mで、南南西の隅近くにカマドが設けられている。平面形・規模が不明なものは、確認した壁の一部と小型の土坑の位置から、平面形は隅丸方形でカマドの位置は東南東壁の中央付近と考えられる。何れの住居跡でも柱穴は確認されず、カマド周辺に貯蔵穴と考えられる小型の土坑をもっているが、煙導部の形態は不明である。出土遺物は、ロクロ使用で内外面黒色処理および非黒色処理の土師器杯、ロクロ使用および不使用の土師器甕、須恵器の壺・甕などが出土している。しかし完形品は少ない。

〈土 坑〉

土坑は9基を確認・調査しているが、住居跡外の土坑は3基で、そのうち2基では埋土の一部として住居跡と同様の火山灰が堆積しているが、他の1基には認められなかった。所属時期を推定、あるいは明確にしうる遺物は出土していない。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、平面形が細長く全体的に溝状を呈するもの12基、小判形～楕円形のもの9基、長方形のもの1基の計22基である。小判形～楕円形のもののうち8基からは、底面に逆茂木痕や逆茂木埋設穴の存在を確認したが、他の形態のものでは確認されていない。また、住居跡等と同様の火山灰を確認したのものとして長方形の陥し穴状遺構があげられる。規模は、溝状のものが長さ3.1～3.8m、上端の幅0.35～0.8m、下端の幅0.04～0.2m、深さ0.7～1.1m、小判形～楕円形のものは長軸の長さ1.2～2.3m、短軸の長さ0.7～1.2m、深さ1.2m前後である。長方形のものの上端規模は1.3×2.1m、下端規模0.55×1.4m、深さ1.3mで底面の規模が小さくなっている。

何れの陥し穴状遺構も所属時期を断定、あるいは推定できる遺物は出土していないが、確認層位、埋土の種類、遺構形態から、長方形のものが奈良時代末～平安時代で、他は全て縄文時代と考えられる。

〈焼土〉

3カ所の焼土は、径40～50cm、厚さ2～5cmの不整円形で何れも現地性のものである。2カ所は基本土層の黒色土が焼変したものであるが、他の1カ所は略円形に貼りつけられた粘土質土が焼変したものである。所属時期は何れも不明である。

〈工房跡〉

工房跡と考えられるものは、本体部の平面が2.2×2.4m、前庭部平面1.6×2.4mの竪穴式で、本体部の壁に6本の柱穴をもっている。出土遺物は、前庭部床から和錠（南京錠）と洋丸釘が出土していることから近代に属するものと考えられる。

〈出土遺物〉

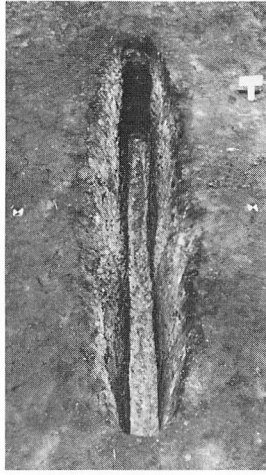
遺構内、遺構外からの出土遺物総量は、コンテナで4箱ほどある。種類としては、縄文時代中・後期の土器や石器、平安時代の土師器・須恵器・砥石、そして近代の陶器破片・鉄製品である。土師器・須恵器の大部分は住居跡からの出土で、縄文時代の遺物のほとんどは遺構外の出土である。

3. まとめ

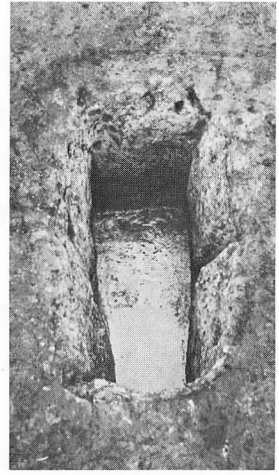
2カ年の調査により、縄文時代の狩場として、また平安時代の小規模な集落として利用されていたことが判明した。しかし、時代の異なる狩場と集落とが調査対象範囲の東側に偏在している。



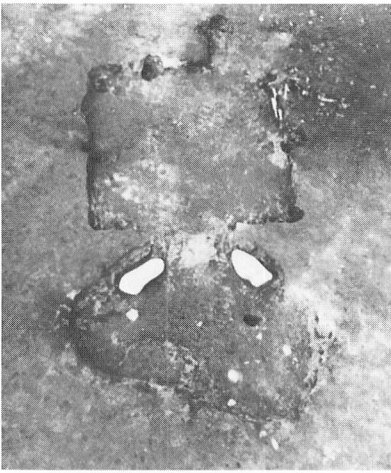
平安時代の竪穴式住居跡



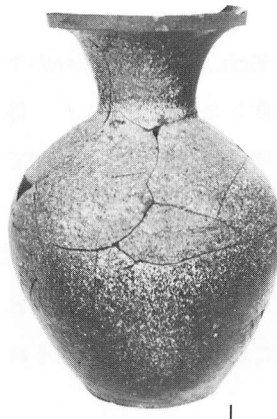
縄文時代の陥し穴状遺構



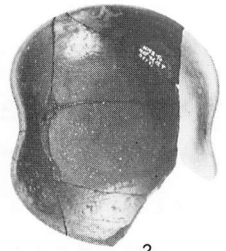
平安時代の陥し穴状遺構



近代の工房址



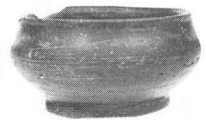
1



2



3



4



5



6



7



8



9

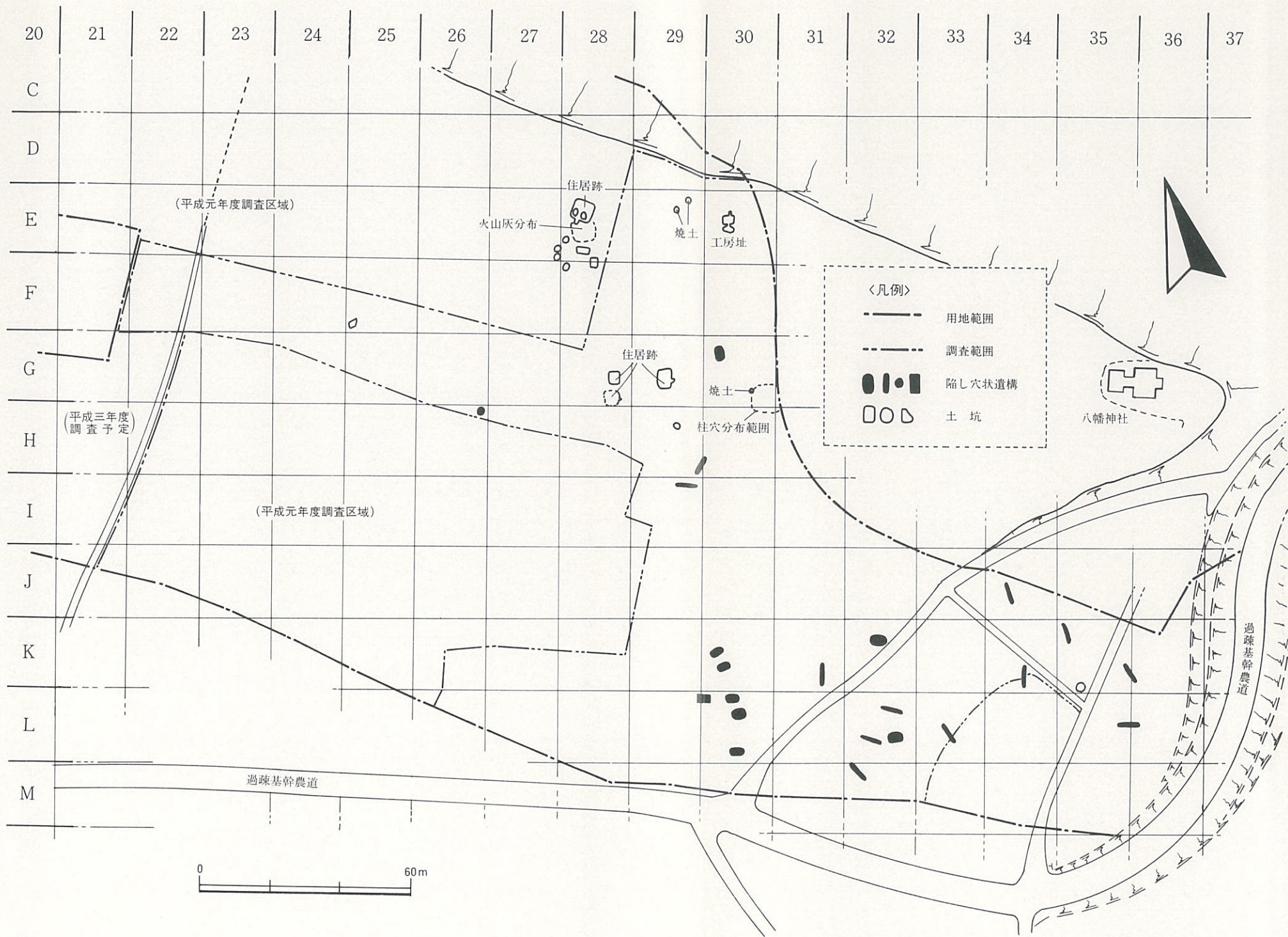


10

※ 6・7は、平安時代の砥石

※ 1は須恵器の壺、2～5は土師器の耳皿、
※ 8～10は縄文時代の尖頭器と打製石斧

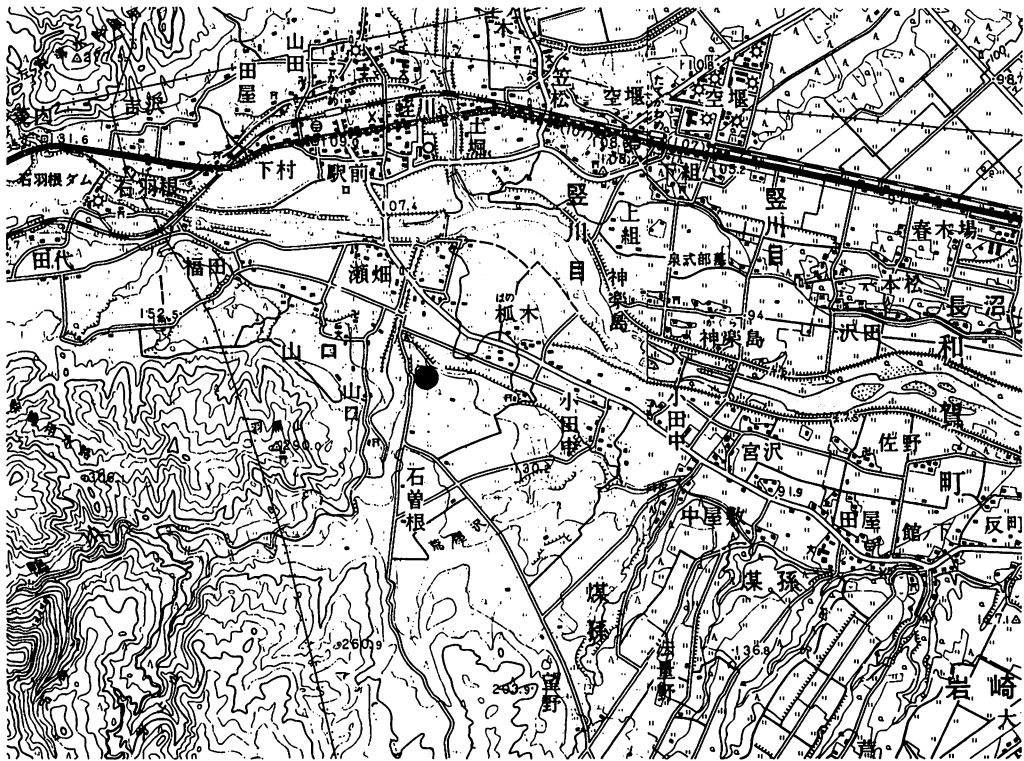
八幡野II遺跡 検出遺構・出土遺物



八幡野II遺跡遺構配置図

(16) 田中館跡

所在地 和賀郡和賀町山口40地割14ほか
委託者 日本道路公団仙台建設局
発掘調査期間 平成2年9月3日～10月12日
調査対象面積 3,410㎡
発掘調査面積 3,410㎡
遺跡番号・略号 ME63-0068・TN-90
調査担当者 佐々木嘉直・工藤利幸・及川靖世・阿部勝則
協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 川尻・北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

田中館跡は、東日本旅客鉄道北上線横川目駅の南南東約2kmに、和賀町役場の南1.5km付近に位置し、和賀町内をほぼ東流する和賀川の右岸に発達した更新世低位段丘上に立地している。一般県道と和賀金ヶ崎胆沢線をはさんで西側には和賀川の支流である鈴鴨川が北流し、北側150mの所には田中館跡の南限を示す空堀跡が存在する。

遺跡の標高は131～133mで、鈴鴨川との比高は約35mで、現況は山林である。遺跡をのせる段丘は鈴鴨川による崖錐性堆積物に被われているため、起伏にとみ地点によって土層の堆積状態が異なっている。

2. 調査の概要

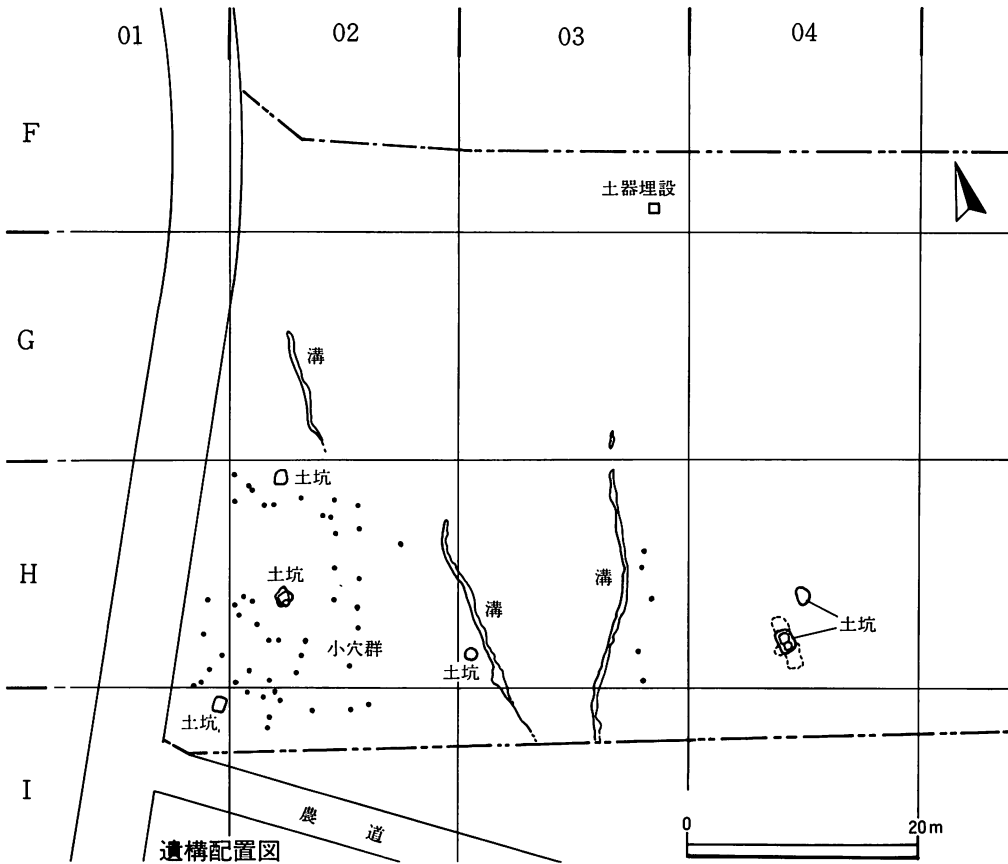
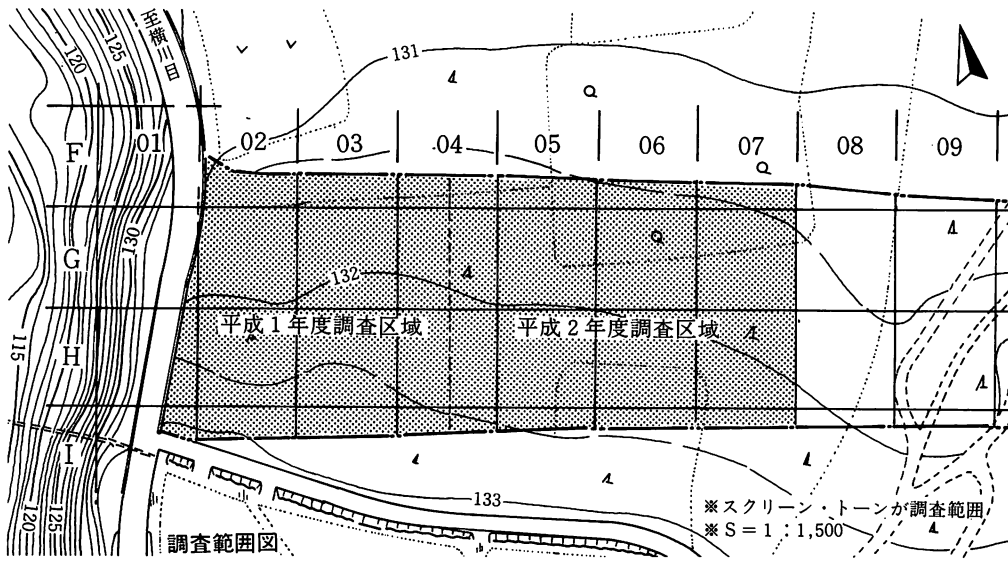
調査は、平成元年度からの継続調査である。調査区域は、東西約70m、南北約50mの範囲でほぼ長方形を呈し、元年度調査区域の東側に接している。本年度の調査では、遺構は確認されなかった。近代以降に形成されたものとして地籍界および地目界に設けられた溝、同様の石塁状の集石、墳丘状の集石があげられる。

遺物は、旧耕作土直下から平安時代のものと考えられる土師器の甕・坏の破片が少量出土している。また、より下位の黒色土層からは縄文時代前期・後期に属する深鉢形土器の破片や石鏃などの剥片石器が出土している。これらはどれも少量である。

3. まとめ

2年間にわたる調査の成果としては、縄文時代晩期の土器埋設遺構1基、奈良時代と考えられる土坑7基、近代以降の溝3条、柱穴様小穴53基の遺構を確認した。遺物としては、縄文時代前・後・晩期の土器と石器、奈良・平安時代の土師器（坏・甕）、須恵器（坏・甕）の破片、そして奈良時代～それ以前と考えられる黒燿石製の不定形石器などが出土している。

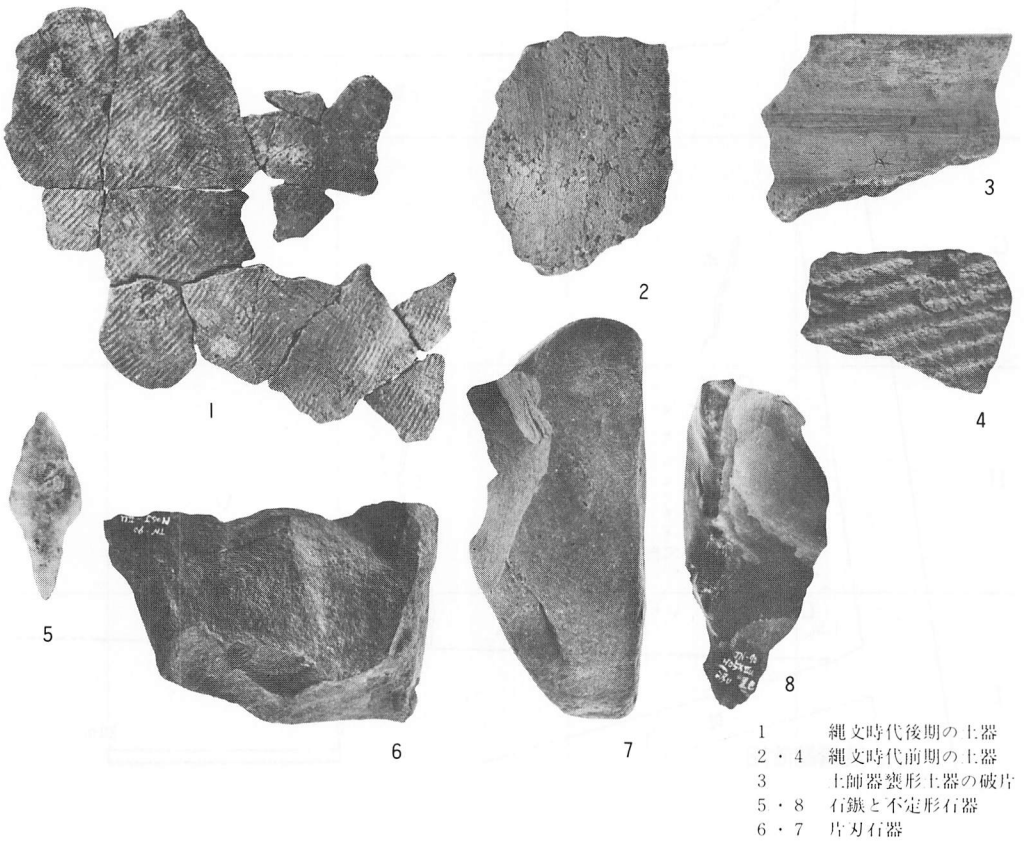
不連続ながら縄文時代前期以降、今日に至るまで何らかの活動の場として利用されていたことが明らかになった。



田中館跡調査範囲(上)と遺構配置図(下)



調査状況（東南東から撮影）

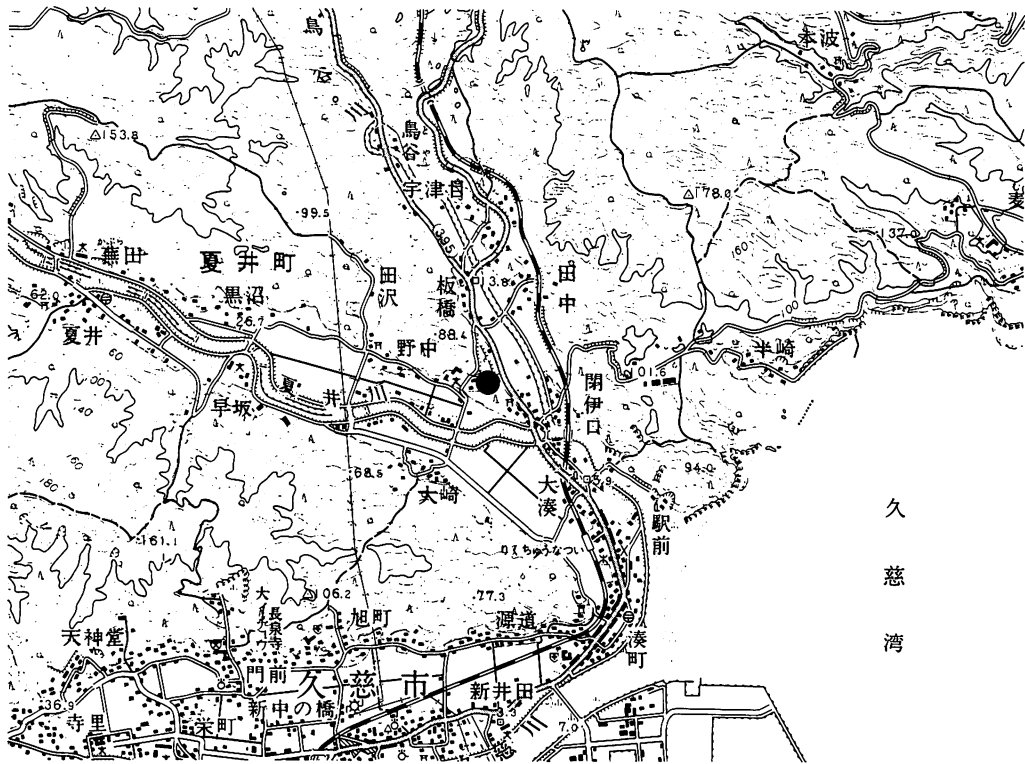


田中館跡 出土遺物

II. 建設省関係

(1) 鼻 だて 館 跡

所在地 久慈市夏井町字鳥谷第8地割51-8ほか
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年6月8日～11月28日
調査対象面積 4,500㎡
発掘調査面積 4,500㎡
遺跡番号・略号 JG10-2182・HD-90
調査担当者 佐瀬 隆・濱田 宏
協力機関 久慈市教育委員会



1 : 50,000 久慈

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

鼻館跡は、東日本旅客鉄道八戸線陸中夏井駅の北北西約2.2km付近に位置する。遺跡は、鳥谷川と夏井川との間の洪積世低位段丘上に立地している。調査区域の標高は29～31m、河岸低地との比高差は約20mである。現況は山林と道路である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構85基、土坑4基、奈良時代の竪穴住居跡8棟、住居跡状遺構1棟、平安時代の竪穴住居跡14棟、土坑5基、古代以降の溝跡1条、時期不明の土坑5基である。

〈竪穴住居跡〉

奈良時代の竪穴住居跡の平面形は、隅丸方形を基調とするが、隅丸長方形や台形状のものもある。規模は、一辺が3.7～4.2mを主体とし、最大規模で7.2×7.3mである。

カマドはいずれも北西壁側～北東壁側の中央部に設置されている。カマドの本体部は板状の凝灰岩を袖の芯材や天井部に用いているものが多い。煙道部は総て掘り込み式であるが、長く延びるものと壁際からすぐ立ち上がるものの2種類が認められる。

また、全ての住居跡の埋土中に、白頭山一苦小牧火山灰と十和田a降下火山灰がブロック状に含まれている。

平安時代の住居跡では、平面形は四隅がやや角張る方形のものが最も多く、その他に台形状を呈するものがある。規模は一辺が4.0～5.0mを中心にして最大は6.0mである。

カマドは北壁側、東壁側、南壁側の中央部からわずかにいずれかの壁に寄っている。つくりかえのため、複数のカマドを持つ例も少なくない。カマド本体部の袖には円礫を用いているものが多く、煙道は割り貫き式と掘り込み式がある。また、煙道や煙出口を礫で組み上げている住居跡は数棟である。

その他、特徴のある住居跡としては、ロクロを設置していたと思われるピットを持つ土器工房跡やフイゴや鉄滓を出土する鍛冶工房跡と考えられるものがある。

〈住居跡状遺構〉

平面形は隅丸長方形を呈し、3.0×3.8mの規模を持つ。カマドは構築されず、遺物の出土もないが、形状や埋土の状況から奈良時代のものと考えられる。

〈土 坑〉

縄文時代の土坑4基は径1.0mほどの円形2基、径3.0m程度の円形1基と方形1基である。いずれも出土遺物がなく、機能等は不明である。

平安時代の土坑はそれぞれの埋土中に、遺物を含むもの4基、焼土を伴うもの1基、火山灰

の混入が認められるもの1基があり、形状も方形・円形・楕円形と多様である。長径2.3m、短径1.9mの楕円形土坑からはフイゴの羽口、多量の鉄滓が出土し、近接地域に鍛冶場が存在したことが推測される。

時期不明の土坑4基では、住居跡の壁を切っているものが2基あり、古代以降の土坑と考えられる。この2基の埋土中には焼土と灰が混入しており、何かが焼かれた場所と考えられる。

〈陥し穴状遺構〉

検出された85基はいずれも溝状を呈するもので、調査区全域に渡って分布し、中には陥し穴相互に切り合うものがある。最大規模で長さ5.0m、深さ1.7mを測る。全体では長さ3.5～4.0m、深さ1.4～1.6mのものが主体である。

形態から、開口部と底部の幅の差が大きい小型のもの、その差が小さく大型のもの、その中間のものとの3種類ほどに大別することができる。切り合いのある陥し穴状遺構の新旧関係は、幅の差が小さい大型のものが古い傾向にある。配置や方向についての規則性は、ごく一部に認められる程度である。

〈溝 跡〉

奈良時代の住居跡を切って検出された直線状の溝跡である。長さ7.7m、幅20～70cm、深さ20～30cmである。出土遺物はなく、時代の特定はできない。

〈出土遺物〉

遺物の大半は、奈良・平安時代の住居跡に伴うものである。奈良時代ではロクロ不使用の土師器の坏・甕、刀子などの鉄製品、琥珀等があり、平安時代のものはロクロ使用の土師器の坏・甕、不使用の甕、少量の須恵器片、鉄製の紡錘車、刀子、琥珀、砥石、フイゴ等がある。

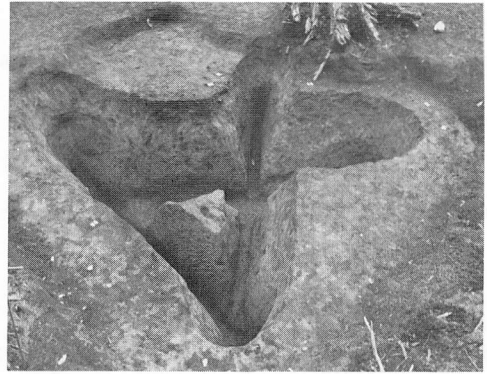
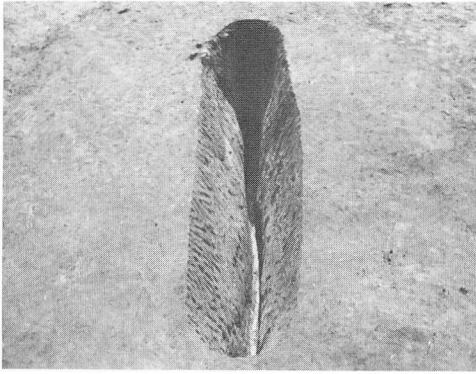
また、平安時代の住居跡からは、炭化した雑穀の種子やアワビ・カキ等の貝殻が出土している。

その他、縄文時代の土器、石器、中世の古銭、調査区北西500mほどに位置する江戸時代末期から明治時代初期にかけての窯跡で焼成された陶磁器・窯道具などが出土している。

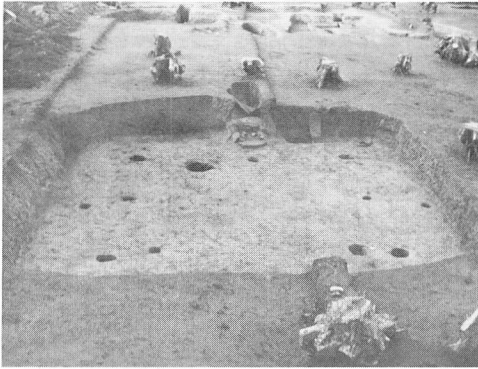
3. まとめ

今回の調査の結果、縄文時代の狩場跡と奈良・平安時代の集落跡であることが明らかになったが、当初予想された中世の館跡に関連する遺構は発見されなかった。

この古代の集落は、地形環境・遺構の分布状況から、調査区西側に続いているものと推測される。またこれらの集落跡は奈良時代のものを含めて少なくとも4期に渡って形成されていたことが考えられるが、住居跡相互の切り合いが見られないことは今後検討していかなければならない問題である。



陥し穴状遺構



奈良時代の住居跡

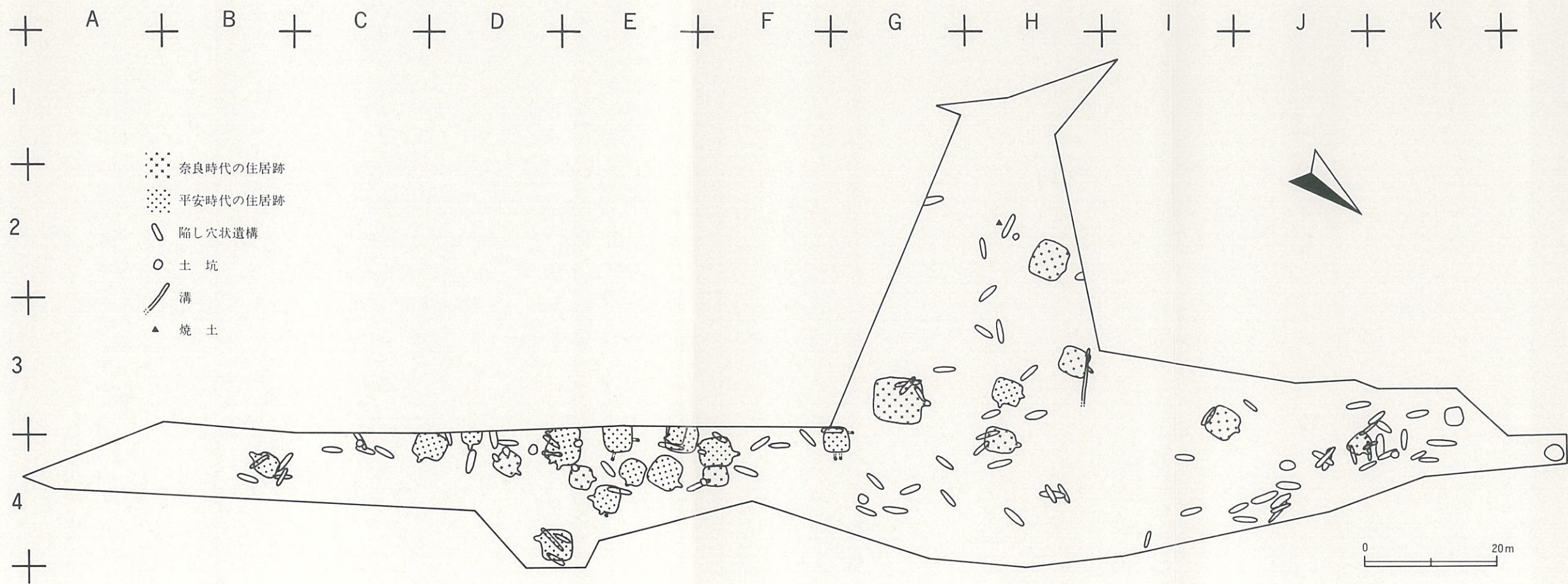


平安時代の住居跡



- 1 土師器甕
- 2 土製支脚
- 3 ファイゴの羽口
- 4 土師器坏 (奈良)
- 5 土師器坏 (平安)

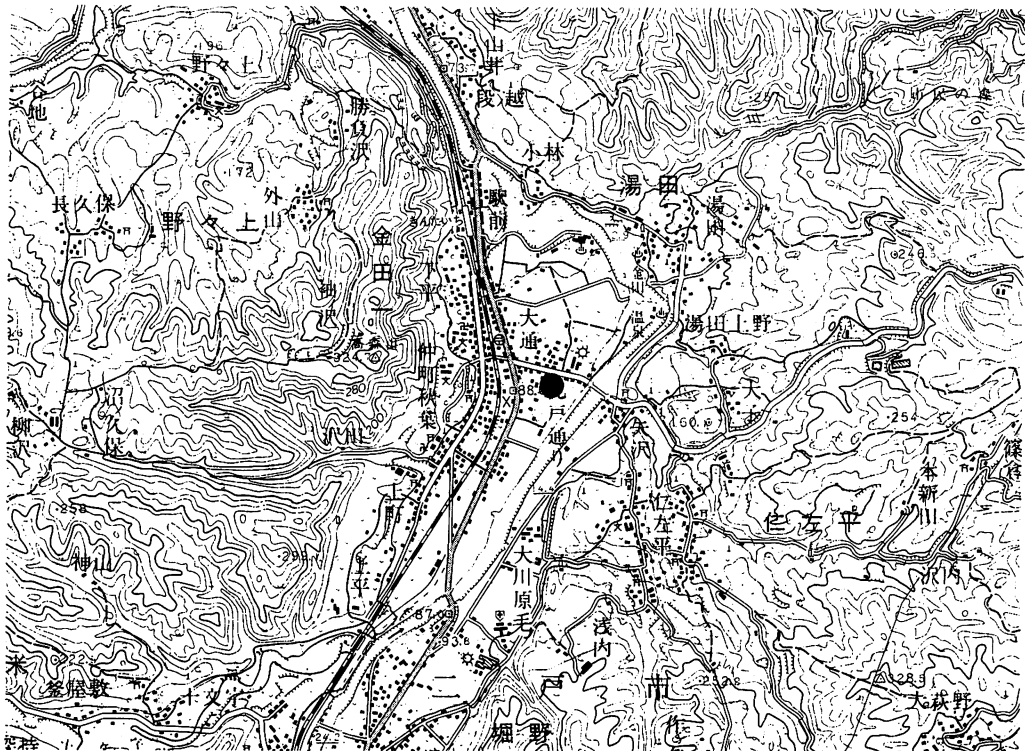
鼻館跡 検出遺構・出土遺物



鼻館跡遺構配置図

(2) やおさ 八ッ長 II 遺跡

所在地 二戸市金田一字八ッ長53-2ほか
委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
発掘調査期間 平成2年8月10日～10月31日
調査対象面積 5,250㎡
発掘調査面積 5,250㎡
遺跡番号・略号 I F80-1048、Y O II-90
調査担当者 高橋義介・神 敏明
協力機関 二戸市教育委員会



1 : 50,000 一戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

八ツ長II遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線金田一温泉駅の南南東約1.2km付近に位置し、二戸市内をほぼ北流する馬淵川の左岸に形成された完新世段丘の段丘縁に沿って立地している。遺跡の標高は85～87mで、河床面との比高は約10mである。遺跡の現況は宅地と畑地である。本遺跡の北側には、国道395号を挟んで沖I遺跡が隣接する。

2. 調査の概要

検出された遺構は、中世の竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡1棟、土坑8基、柱穴列1条、溝3条、柱穴状土坑330基である。そのうち、土坑7基、溝、掘立柱建物跡、柱穴状土坑の大部分は遺物を伴わず、時期を特定することができない。出土遺物は、縄文土器、陶磁器、石器、鉄製品、鉄滓等である。

〈竪穴住居跡〉

竪穴住居跡は、すべて調査区中央部に位置している。いずれも中掬浮石層上面において黒色土の方形の広がりによって確認されたものである。平面形は長方形を呈し、7棟のうち4棟は東側に、1棟は北側に張り出す出入口施設をもつ。規模は、最大のが4.0×4.6m、最小のが2.9×3.3mほどで、出入口部の大きさは、長さ1.6m、幅1.5m前後である。柱穴は11～26個確認されたが、柱痕は不明のものが多い。1棟の床面から灰が検出されたほかは、カマドや炉は検出されなかった。

遺物として15世紀から16世紀にかけての陶磁器が出土したことから遺構の形態から中世後半の住居跡と推定される。

〈掘立柱建物跡〉

掘立柱建物跡は調査区中央やや南寄りに位置している。規模は、桁行3間(4.7m)×梁行2間(4m)の東西棟である。柱穴の掘り方はほぼ円形で、直径22～48cm、深さは37～72cmである。柱痕は確認できなかった。遺物を伴わず、時期は不明である。

〈柱穴列〉

柱穴列は、掘立柱建物跡に沿って1.8m前後の間隔で5個の柱穴が直線上に並ぶ。柱穴の平面形は円形で、直径は30cm前後、深さは36～67cmである。柱穴から鉄滓と陶磁器片が出土していることから中世の住居跡に伴う遺構と考えられる。

〈土坑〉

土坑は、平面形が楕円形のもの4基、円形のもの3基、方形のもの1基が検出された。埋土中に焼土が混じるもの、鉄滓が出土したもの、礫を敷くもの、無遺物のものなどがあり、大きさや深さも一定しておらず、様々な機能が考えられる。

〈溝 跡〉

南北に延びる西側の2条は、一方が長さ約44m、幅50～80cm、深さ15～20cmで調査区外に続いており、他方は長さ約8 m、幅30～50cm、深さ5～8 cmである。東側の東西に延びる溝は、長さ約5.5m、幅70～80cm、深さ16～22cmで、一部攪乱をうけているものの調査区外へ続いている。出土遺物はなく、時期は不明である。

〈柱穴状土坑〉

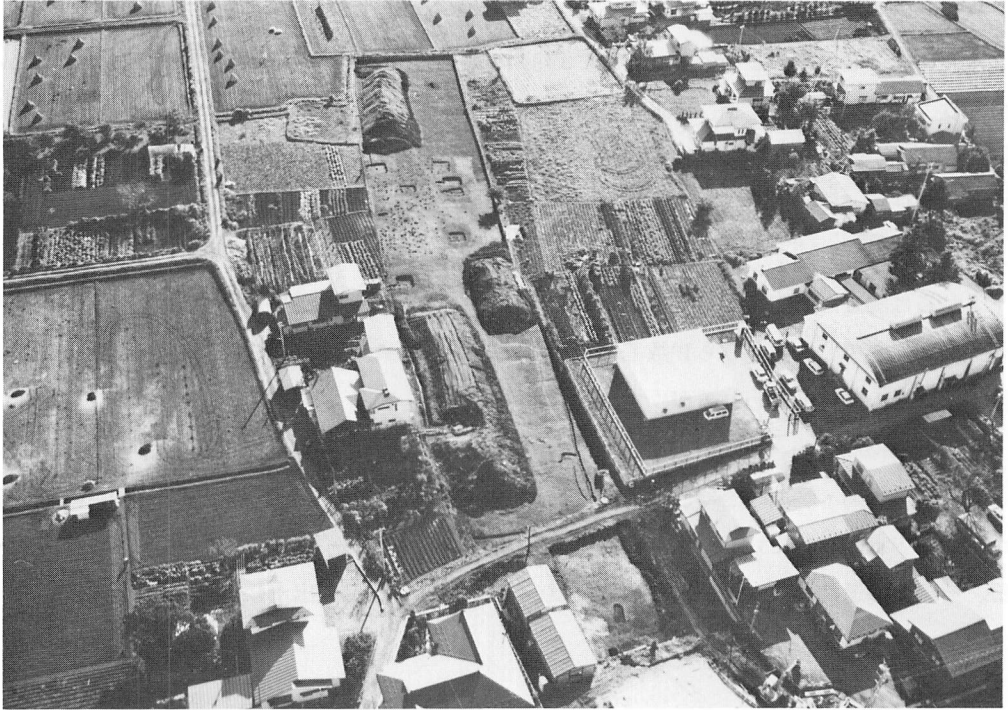
これらは調査区の中央部に集中する。規模は、直径15～70cm、深さ7～76cmとバラツキが大きく規則性を欠く。このうち10数基からは陶磁器片、鉄滓、小札、鉄製品が出土しており、これらは中世の遺構と思われるが、大部分は時期不明である。

〈出土遺物〉

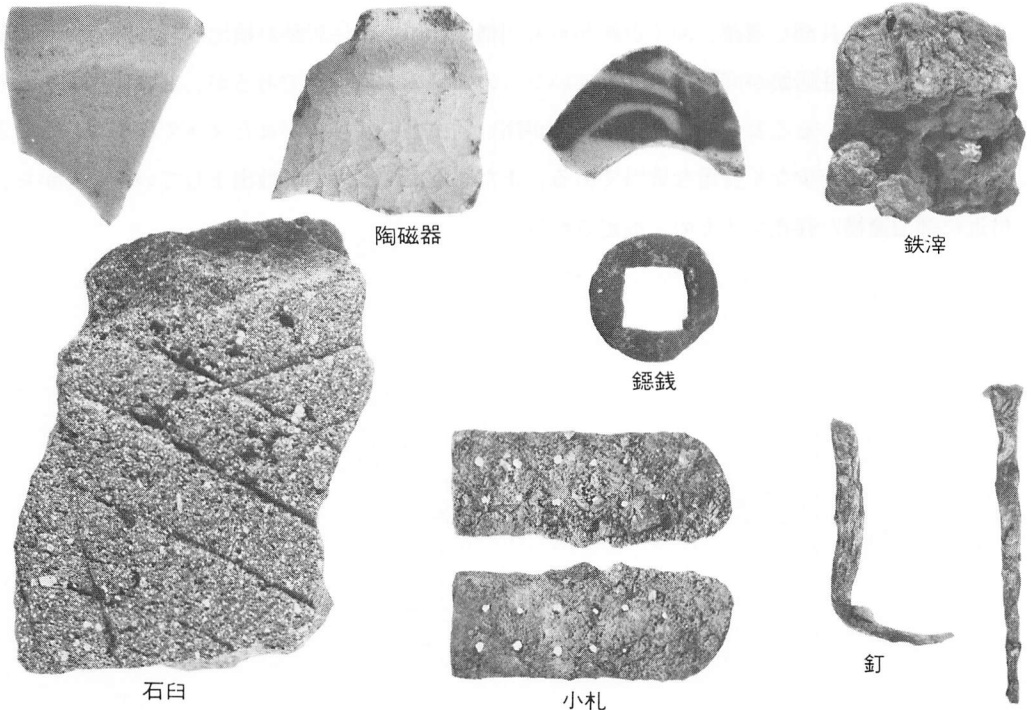
縄文時代後期・晩期の土器、15～16世紀の美濃の灰釉陶器、中国産の白磁・青磁、鉄釉陶器が細片で少量出土している。石器では石鏃・磨石・石臼・砥石・敲石、鉄製品では小札・刀子・釘、その他の遺物としては鉄滓が100点余りと韃の羽口、鏹銭が出土した。

3. まとめ

今回の調査の結果、住居跡の形態や遺物から八ツ長II遺跡は中世後半の集落跡であることが明らかとなった。検出された住居跡には出入口施設をもつものともたないものの2つの形態があり、二戸市の長瀬C遺跡、沖I遺跡からも同様の2形態の住居跡が検出されている。今回検出された7棟の住居跡が同時に存在していたものかどうかは不明であるが、どの住居跡からも鉄滓が出土していることから、その可能性が高い。中世の住居跡がまとまって検出されたことは県内でも類例が少なく貴重な資料である。また、羽口や鉄滓が多数出土していることから、付近に鍛冶遺構が存在するものと推定される。



遺跡全景（北から）



陶磁器

鉄滓

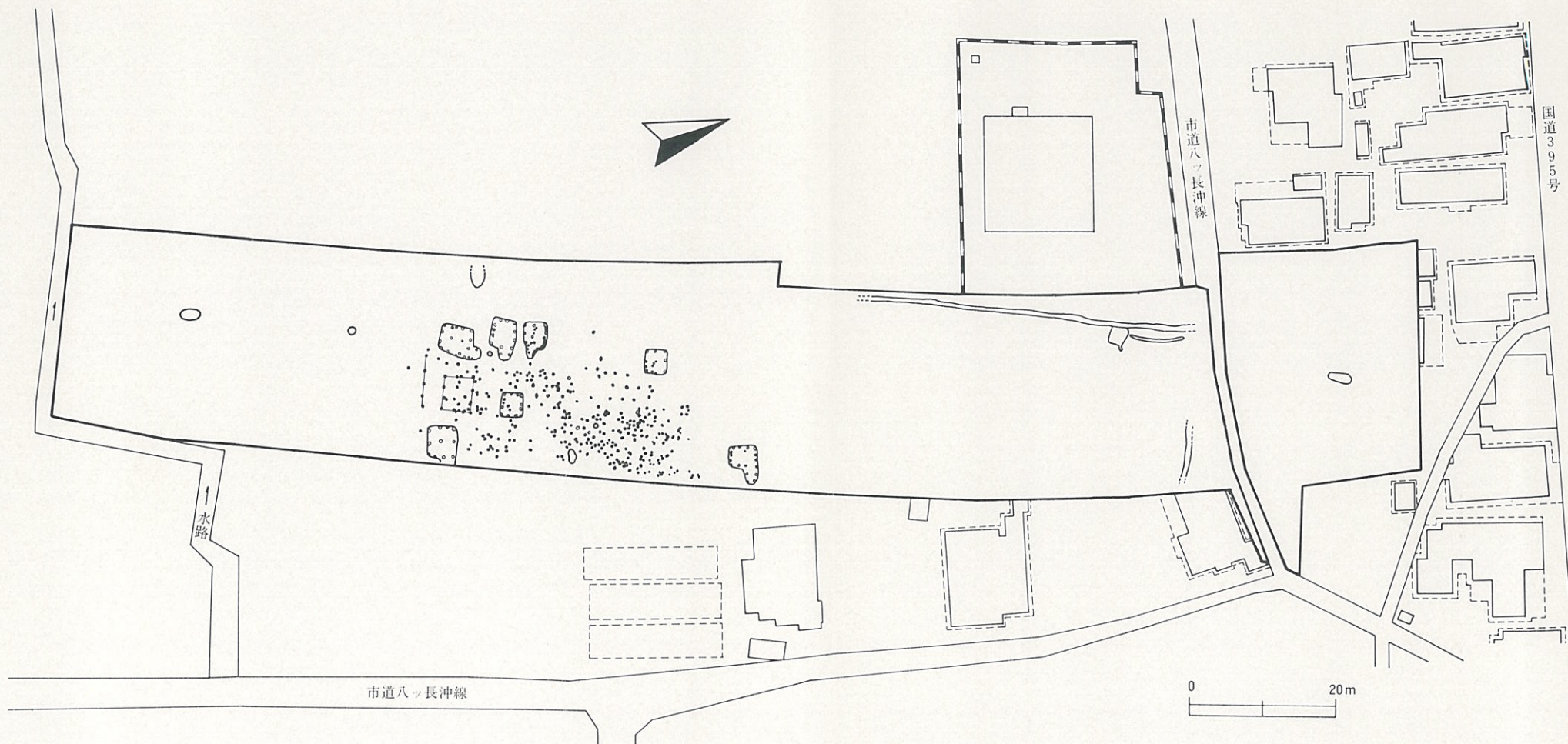
鋌銭

石臼

小札

釘

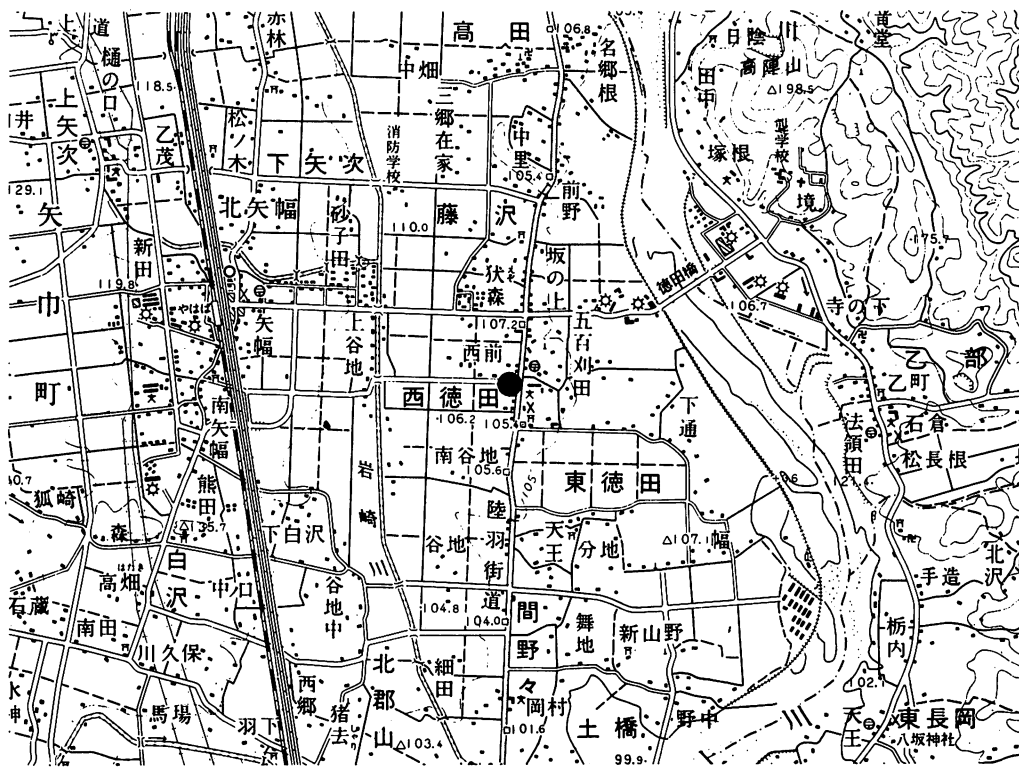
八ツ長II遺跡 遺跡全景・出土遺物



八ッ長II遺跡遺構配置図

(3) 徳丹城跡

所在地 紫波郡矢巾町大字西徳田53-2 ほか
委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
発掘調査期間 平成2年5月24日～8月10日
調査対象面積 970㎡
発掘調査面積 970㎡
遺跡番号・略号 LE47-1174・TT-90
調査担当者 高橋義介・神 敏明
協力機関 矢巾町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

徳丹城跡は、東日本旅客鉄道矢巾駅の南東2.1kmに位置している。遺跡は北上川が東側に大きく蛇行する砂礫段丘の張り出す基部に立地し、標高は106m前後である。現状は宅地および道路である。

2. 調査の概要

調査区域は政庁正殿跡の西側と北側外郭寄りの隣接地である。検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、江戸時代以降の掘立柱建物跡2棟、馬屋跡1棟、竪穴状遺構1棟、柱穴列10条、溝跡2条、土坑1基である。

〈竪穴住居跡〉

平面形は隅丸長方形を基調としており、規模は長辺が3.7～4.2m前後である。2棟の住居跡のカマドは南壁東側隅寄りと東壁南側隅寄りに設置されている。削平・攪乱が著しく、煙道部の構造等は不明である。柱穴や周溝は検出されていない。

〈掘立柱建物跡〉

徳丹城跡に関連するものは1棟であり、政庁正殿跡の西側に位置している。検出規模は桁行5間(14.96m)で、西側は調査区域外に続くことから規模の詳細は不明である。南北棟と推測され、棟方向は北に対し約30分東偏している。桁行の柱間寸法は北側から3m-3m-3m-3m-2.96mを測る。柱穴の掘り方は径92～152cm、深さ64～82cmで、平面形は長方形と方形を基調としている。柱痕の径は30cm前後のものが多く、下位に柱根と礎板の遺存するものがある。

他に江戸時代以降の建物跡が2棟検出している。規模は桁行2間(5.7m)×梁行1間(3.6m)と桁行5間(11.4m)×梁行3間(5.9m)である。後者には一部礎石が使用されており、寛永通寶が出土している。

〈馬屋跡〉

北側調査区の国道西側に位置しており、一部が国道下位に続くことから規模の詳細は不明である。検出した規模は4.5mの方形で、北側に1.2×3.9mの長方形の張り出し部がある。

〈竪穴状遺構〉

北側外郭寄り隣接地区の中央付近に位置している。平面形は長方形で、規模は2.8×3.6mである。

〈柱穴列〉

北側外郭寄り隣接地区に東西、南北方向に散在している。2間(2.6～4.8m)、3間(4.8～7.1m)、11間(12.4m)の規模で、旧宅地跡や江戸時代以降の建物跡に伴うものである。

〈溝 跡〉

北側外郭寄り隣接地区に位置し、北北東—南南西方向に並行してのびている。上幅は50～86cm、深さ10cmほどである。両側は調査区域外に続いている。

〈土 坑〉

西側が調査区域外に続くことから詳細は不明である。検出した規模は開口部が3.5mで、平面形は不整な楕円形状と推測される。旧宅地に関連する新しいものである。

〈出土遺物〉

竪穴住居跡からは土師器の坏・甕・壺・蓋、須恵器の坏・甕・長頸壺・蓋、角釘、砥石等が出土している。土師器の坏はロクロ使用と不使用があり、前者が大部分を占めている。底部の切り離しは回転糸切り、回転ヘラ切りで内面を黒色処理を施したものもある。須恵器の坏は台付や把手付の器形もみられる。土師器の甕もロクロ使用と不使用が混在している。

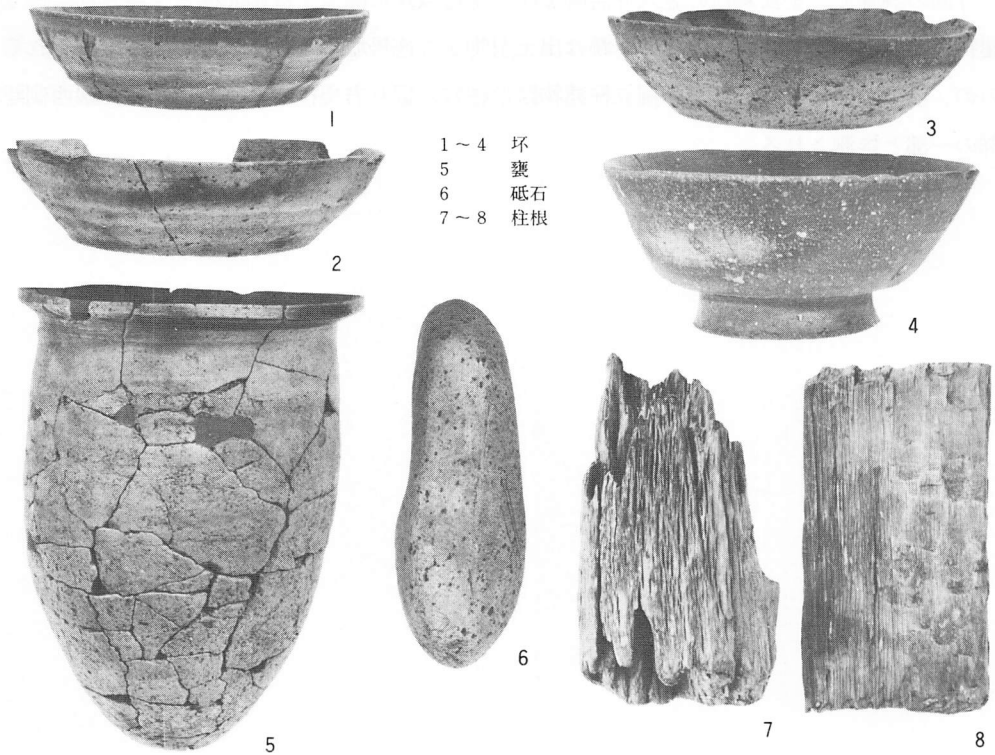
他の遺構と遺構外から陶磁器類、硯、木製品、鉄製品、寛永通寶、鉄銭、もも・うめ・くるみの種子が若干出土した。

3. まとめ

今回の調査で、平安時代の竪穴住居跡2棟と徳丹城跡に関連する南北棟と推測される掘立柱建物跡が1棟検出された。竪穴住居跡は出土遺物から徳丹城創建時に近い時期と推測されるものの、前後関係は不詳である。掘立柱建物跡は柱穴の掘り方規模や建物規模から正殿西側建物群の一部と推測される。



平安時代の竪穴住居跡



1~4 坏
5 甕
6 砥石
7~8 柱根

徳丹城跡 検出遺構・出土遺物

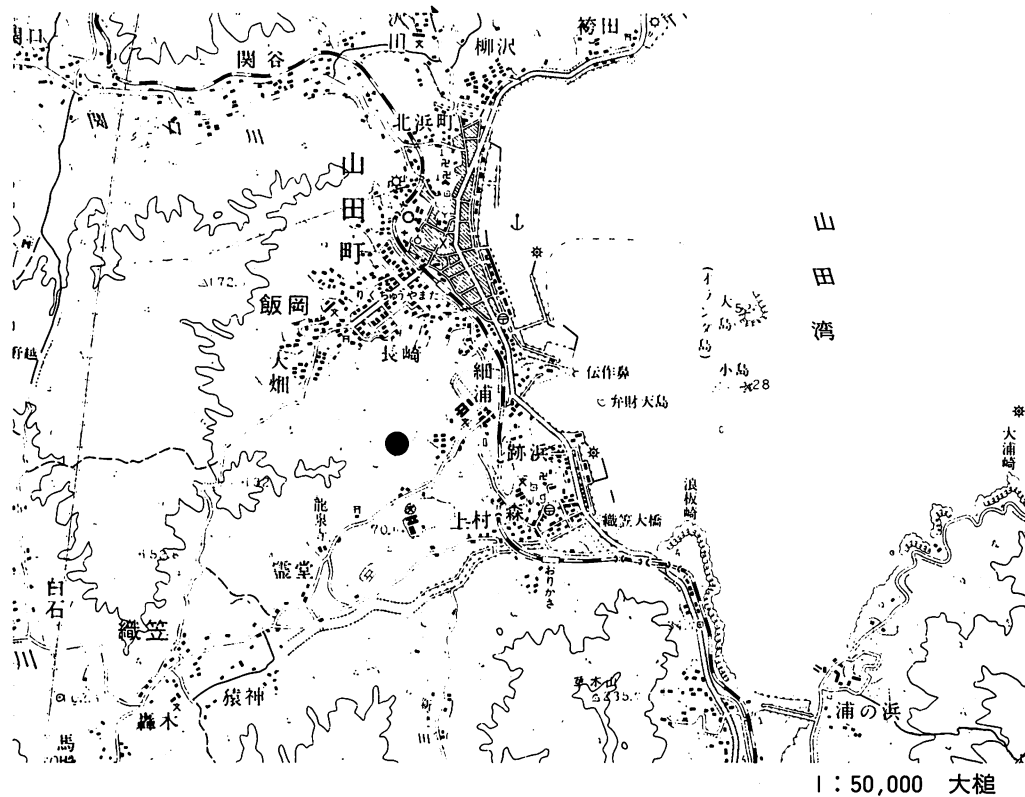


- 柱穴
- ▨ 平安時代の住居跡
- 平成元年度調査分

徳丹城跡遺構配置図

(4) 細浦 I 遺跡

所在地 下閉伊郡山田町織笠第14地割32・22・23・24
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年5月1日～6月28日
発掘対象面積 3,600㎡
調査対象面積 3,600㎡
遺跡番号・略号 MG04-0032・HUI-90
調査担当者 鈴木貞行・藤村 隆
協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

細浦Ⅰ遺跡は東日本旅客鉄道山田線陸中山田駅の南方1.1km付近に位置し、小起伏山地の谷地形面に立地している。調査区域は沢頭付近から南東に続く緩やかな斜面であり、標高は44～54mである。南東側には細浦Ⅱ遺跡が続いているが、中間部は削平されている。

調査区の現況は段状に造成された山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は時期不明の土坑8基である。出土した遺物は弥生土器、土師器、石器である。

〈土 坑〉

8基はいずれも調査区中央部の北側に検出された。形状から長方形の土坑1基、円形状の土坑7基に分けられる。長方形の土坑は長さ1.5m、幅80cm、深さ40cmであり、長軸の方向は東西方向である。円形状の土坑は直径0.8～1.1m、深さ30～50cmである。これらのうち3基は重複している。

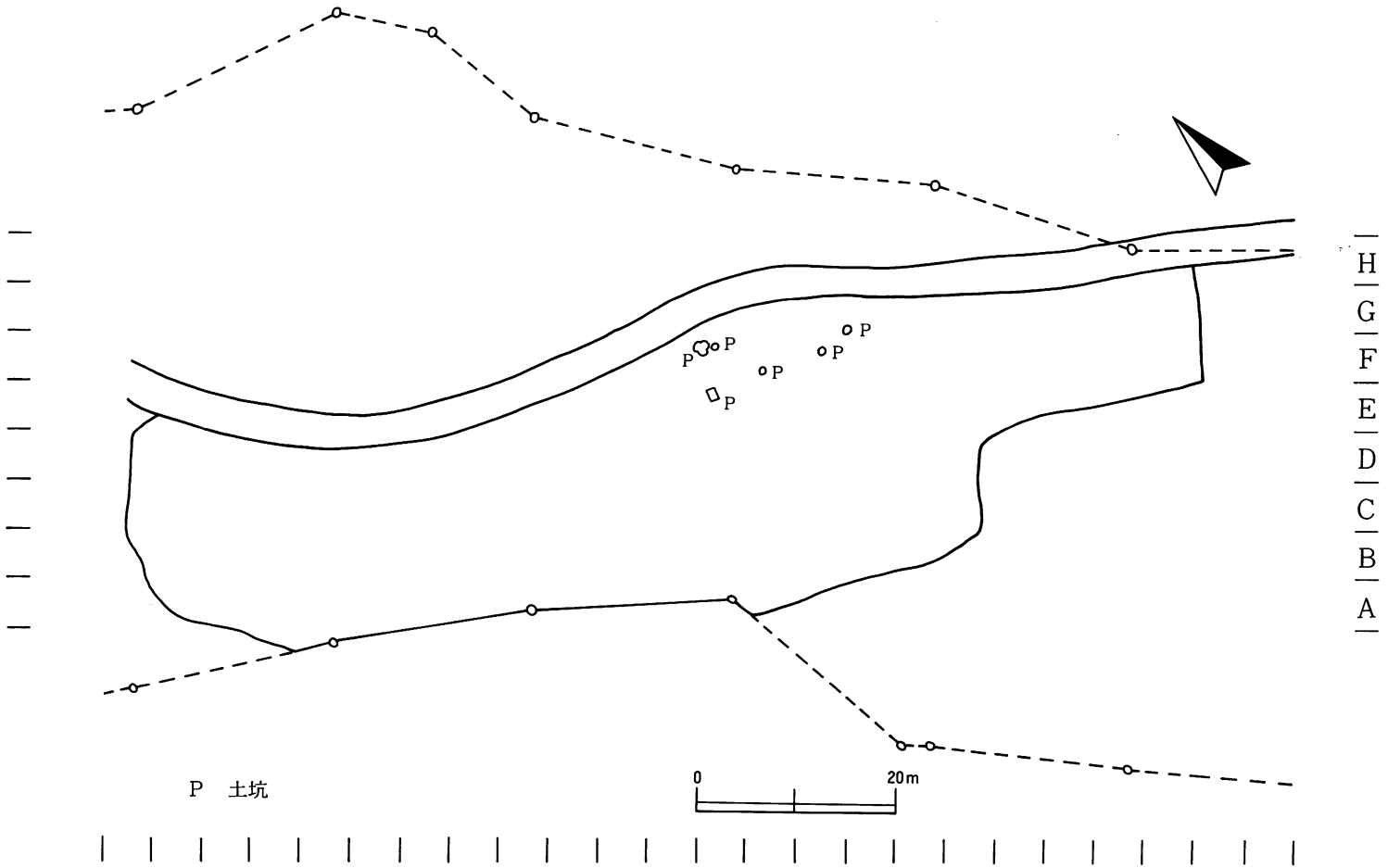
〈出土遺物〉

出土した土器は極めて少なく、いずれも小片である。大半は平安時代のもと思われる土師器（甕等の破片）であり、他は弥生土器数点である。石器は石鏃3点、石匙1点、石槍1点が出土している。

3. まとめ

今回の調査では時期不明の土坑8基だけで、遺物を伴う遺構は確認されなかった。しかし、少量ではあるが弥生時代、平安時代の遺物が出土していることから、調査範囲外に該期の遺構の存在する可能性がある。

| 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 |



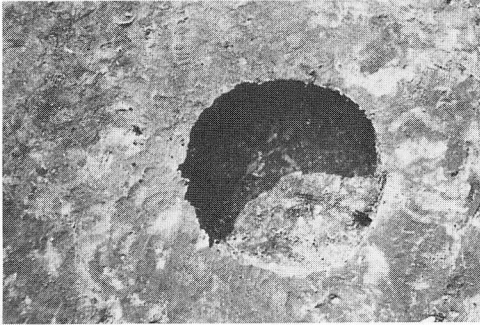
細浦 I 遺跡遺構配置図



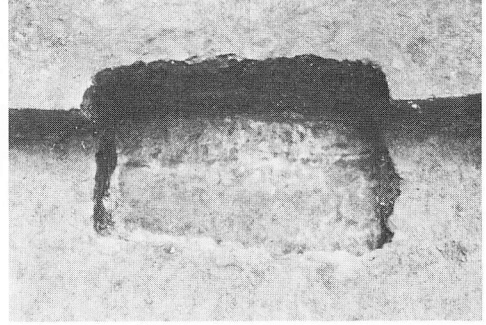
遺跡全景



作業風景



土坑



土坑



1



2



5



6



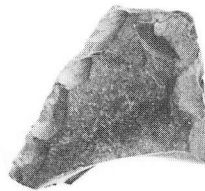
7



3



4



8

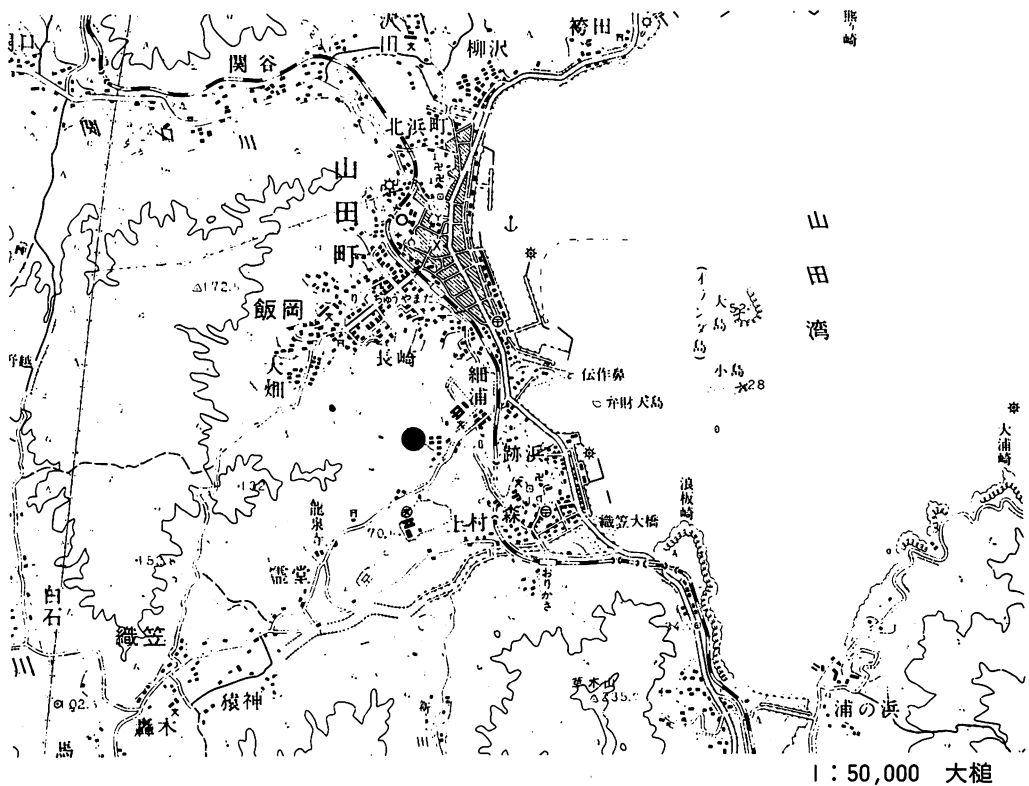


9

- 1 弥生土器
2~4 土師器
5~9 石器

(5) ^{ほそ} ^{うら} 細 浦 II 遺 跡

所 在 地 下閉伊郡山田町織笠第14地割32-22・55
委 託 者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年4月11日～4月28日
発掘対象面積 1,000m²
調査対象面積 1,000m²
遺跡番号・略号 MG04-0042・HU II-90
調査担当者 鈴木貞行・藤村 隆
協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

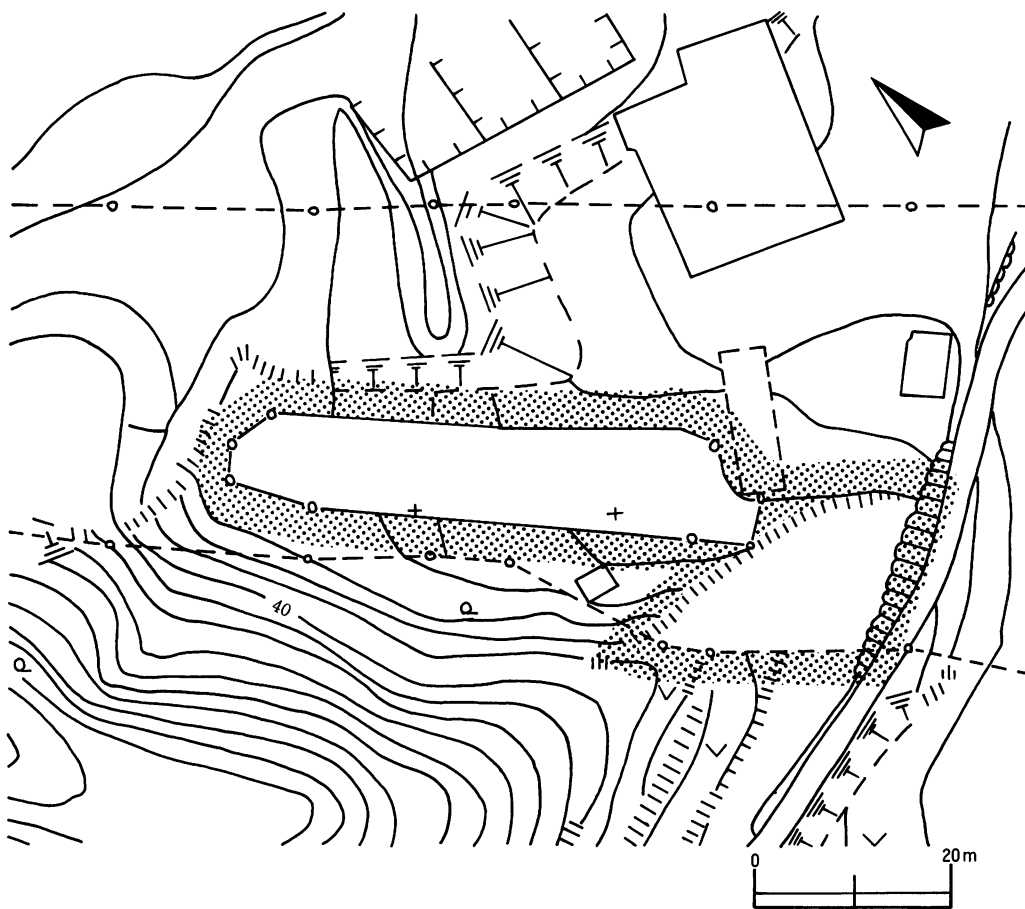
細浦II遺跡は東日本旅客鉄道山田線陸中山田駅の南方1.1km付近に位置し、小起伏山地の谷地形面に立地している。標高は約36mで、緩やかに西方に傾斜している。北西側には細浦I遺跡が続いているが、中間部は削平されている。

調査区の現況は畑地である。北側は昭和35年頃盛土造成されており、盛土下の旧表土層も部分的に攪乱されている。南側の高位斜面は削平された畑地である。

2. 調査の概要

基本層序は上層から黒褐色土、黒色土、褐色土の3層に大別され、さらに黒褐色土は3層に、黒色土は2層に細分できる。

調査の結果、遺構は検出されなかったが、黒褐色土および黒色土上面から縄文土器と弥生土器と石器が出土した。



細浦II遺跡調査区域図

〈出土遺物〉

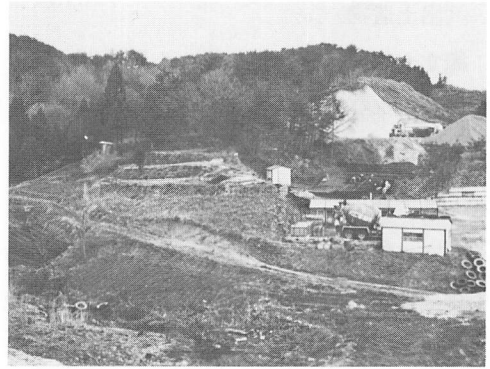
縄文土器は極めて少なく、小片数点の出土である。弥生土器は高坏、壺、甕等の破片で約小コンテナ半分出土している。石器は石鏃、楔形石器、砥石が若干出土した。

3. まとめ

今回の調査では縄文時代と弥生時代の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。しかし、少量ではあるが遺物が出土したことから、調査範囲外に該期の遺構が存在する可能性がある。



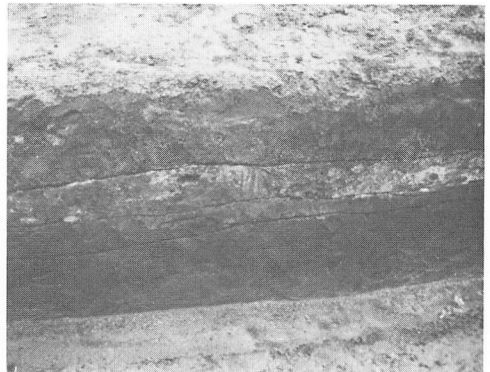
調査区近景



遺跡遠景



作業風景



土層断面



1



2



8



9



10



3



4



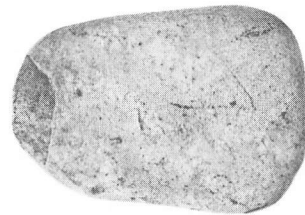
5



6



7



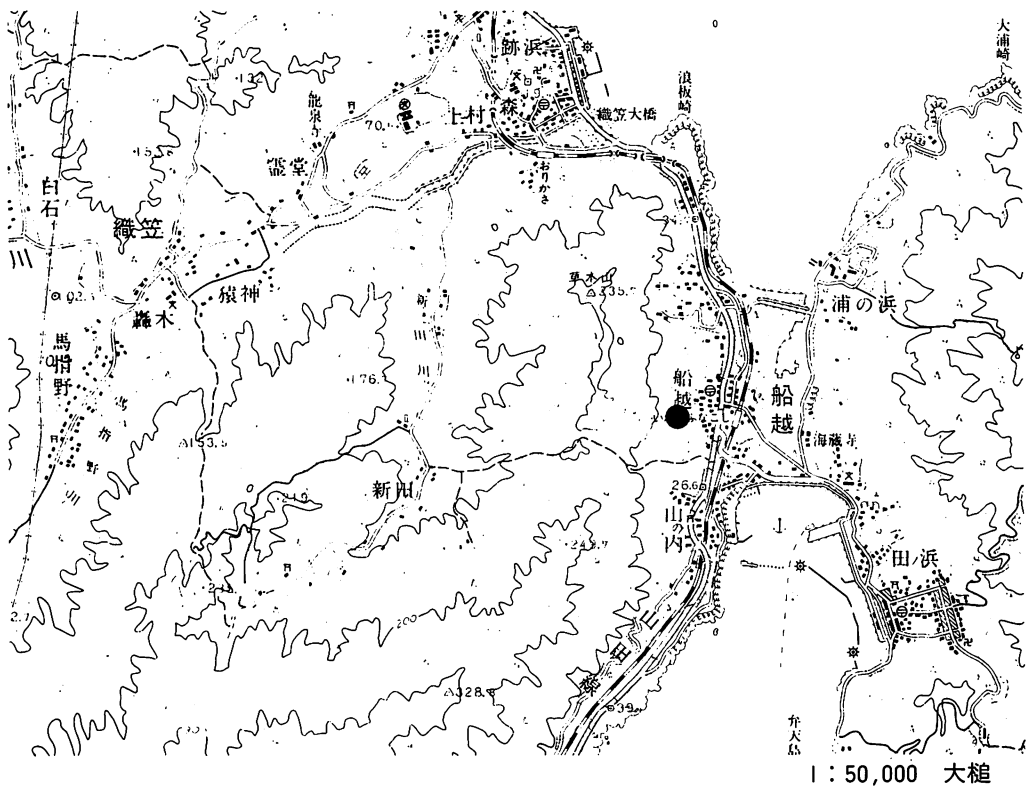
11

1 ~ 5 弥生土器
6 · 7 縄文土器
8 ~ 11 石器

細浦II遺跡 調査状況・出土遺物

(6) 湾台 III 遺跡

所在地 下閉伊郡山田町船越第5地割9-1
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年8月20日～10月8日
発掘対象面積 2,000m²
調査対象面積 2,000m²
遺跡番号・略号 MG04-2281・WD III-90
調査担当者 鈴木貞行・藤村 隆
協力機関 山田町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

湾台Ⅲ遺跡は東日本旅客鉄道山田線岩手船越駅の南方0.3km付近に位置し、鯨山山地の山麓緩斜面上に立地している。東方には船越低地を挟んで霞露ヶ岳をもつ船越半島が続く。標高は約43mである。

遺跡の現況は山林である。

2. 調査の概要

調査の結果、時期不明の土坑1基が検出された。出土遺物は縄文土器、平安時代の土師器、須恵器、石器、鉄滓等である。

〈土 坑〉

検出された土坑1基は不整形を呈し、規模は開口部径1.8×2.5m、深さ0.4mである。地山を掘り込んでいるが伴出遺物はなく時期は不明である。西側は攪乱を受けている。

〈出土遺物〉

調査区南側から縄文時代中期の土器片と石器が若干出土した。また北端からは平安時代の土師器、須恵器が少量と、表土層から羽口の破片と比較的多くの鉄滓が出土している。

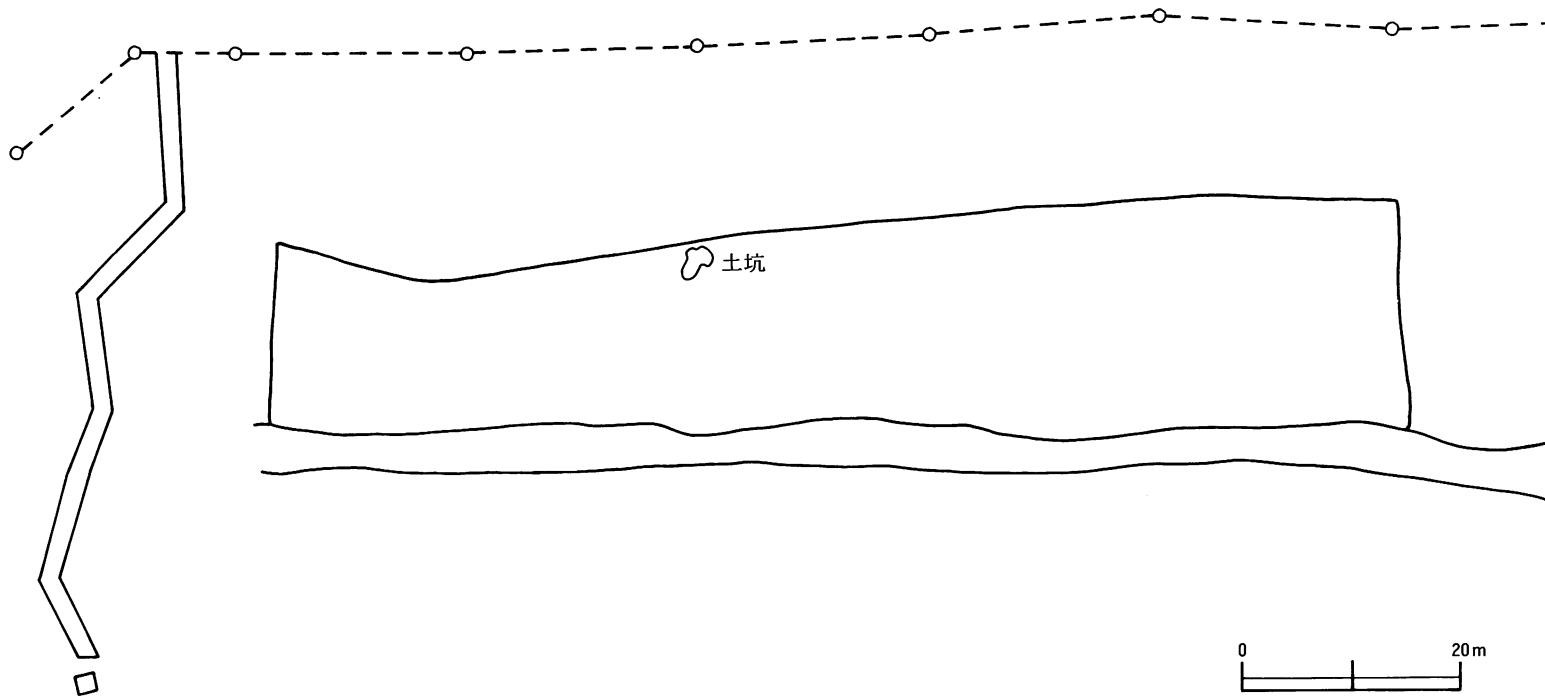
3. まとめ

今回の調査では検出された遺構が時期不明の土坑1基だけであったが、遺物の出土状況から周辺部（西側斜面）に平安時代の住居跡の存在が考えられる。また、羽口と多くの鉄滓が出土していることから、調査区外西側に製鉄に関連する遺構の存在が推定される。

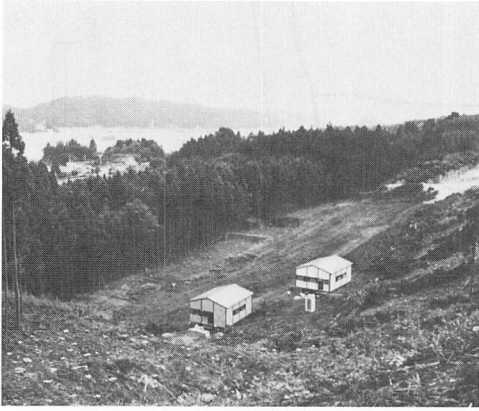
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 |



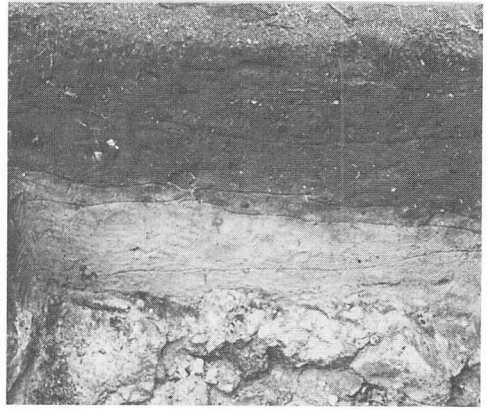
A
|
B
|
C
|
D
|
E
|
F
|
G
|
H
|
I



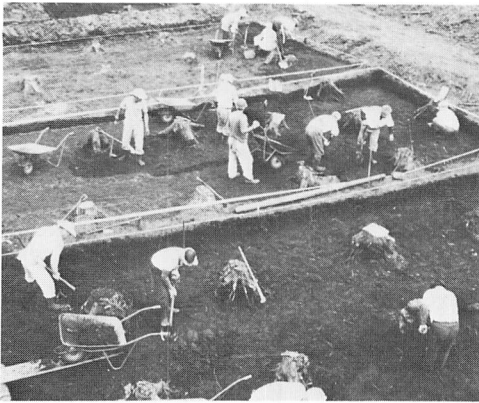
湾台Ⅲ遺跡遺構配置図



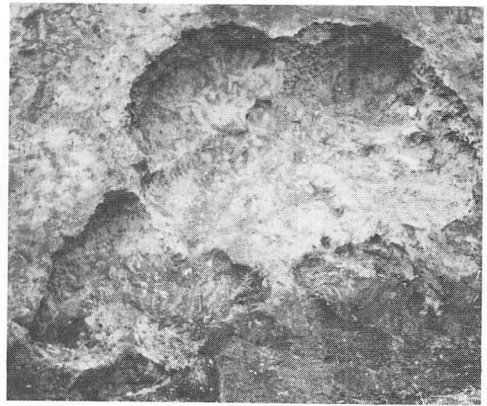
遺跡遠景



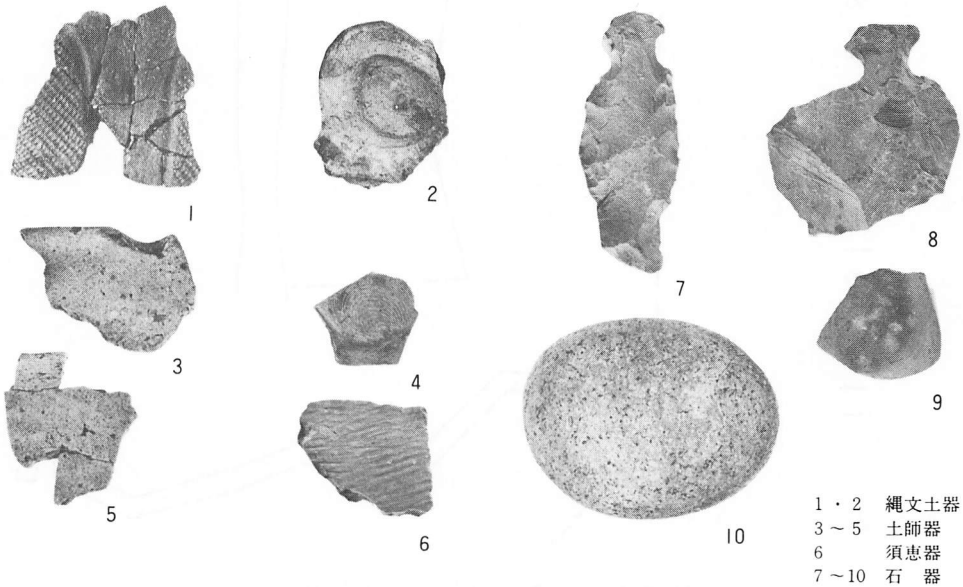
土層断面



作業風景



土坑

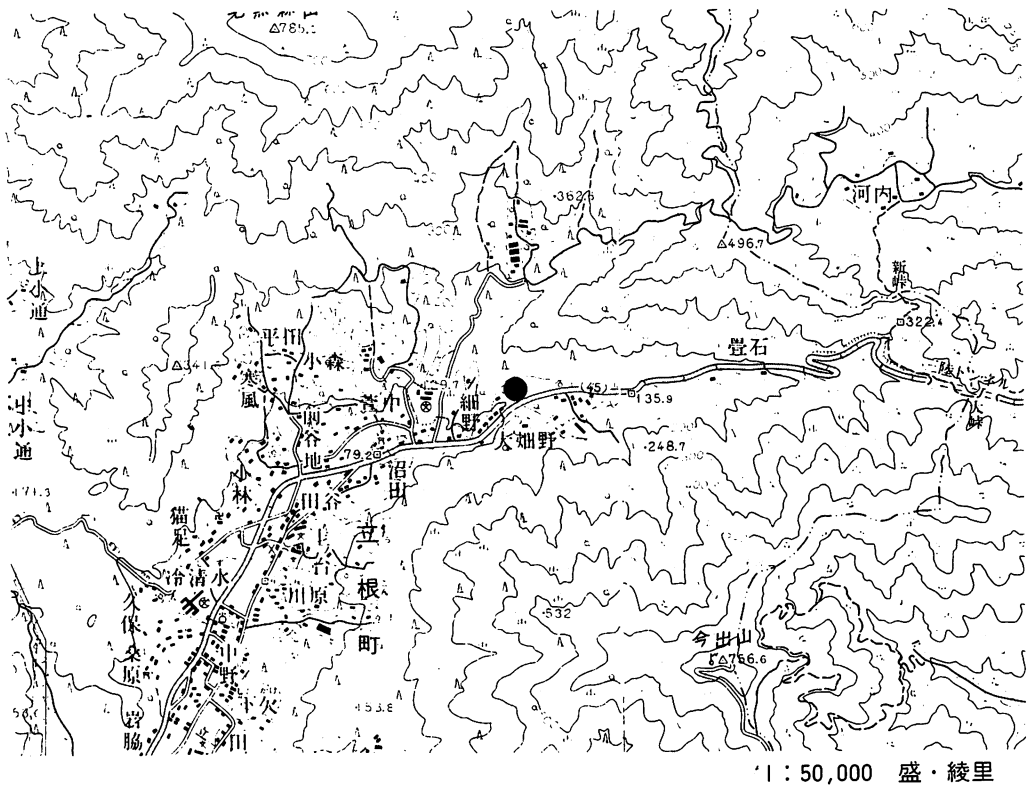


1・2 縄文土器
3～5 土師器
6 須恵器
7～10 石器

湾台Ⅲ遺跡 検出遺構・出土遺物

(7) ほそ野 II 遺跡

所在地 大船渡市立根町細野7-405ほか
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年4月12日～6月8日
調査対象面積 5,000m²
発掘調査面積 5,000m²
遺跡番号・略号 NF29-1216・HNII-90
調査担当者 佐瀬 隆・濱田 宏
協力機関 大船渡市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

細野II遺跡は、東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北北東4.5km付近に位置し、立根川右岸の谷底平野に立地している。遺跡の標高は103～111m、河床面との比高は1～2 mほどである。調査区の現況は畑地および原野である。

2. 調査の概要

調査区の表層地質は、中～大の亜角礫からなる河床堆積物を基底にして、その上に累積するテフラ層（安家火山灰・中礫^{ちゆせり}浮石）、中～大の亜角礫に富む黒色腐植層から構成される。中礫浮石が約5,400年前に十和田火山から噴出した縄文時代の前期と中期を画するテフラ層であることから、遺跡の立地する谷底平野は縄文時代前期末葉に離水したと推定される。

検出された遺構は、時期不明の焼土遺構5基、近世の墓墳1基である。

〈焼土遺構〉

いずれも径約50cm、厚さ約10cmの範囲に赤褐色の焼成土塊が不規則に分布するものである。石組などの構造は認められず、遺物を伴わない。

〈墓 墳〉

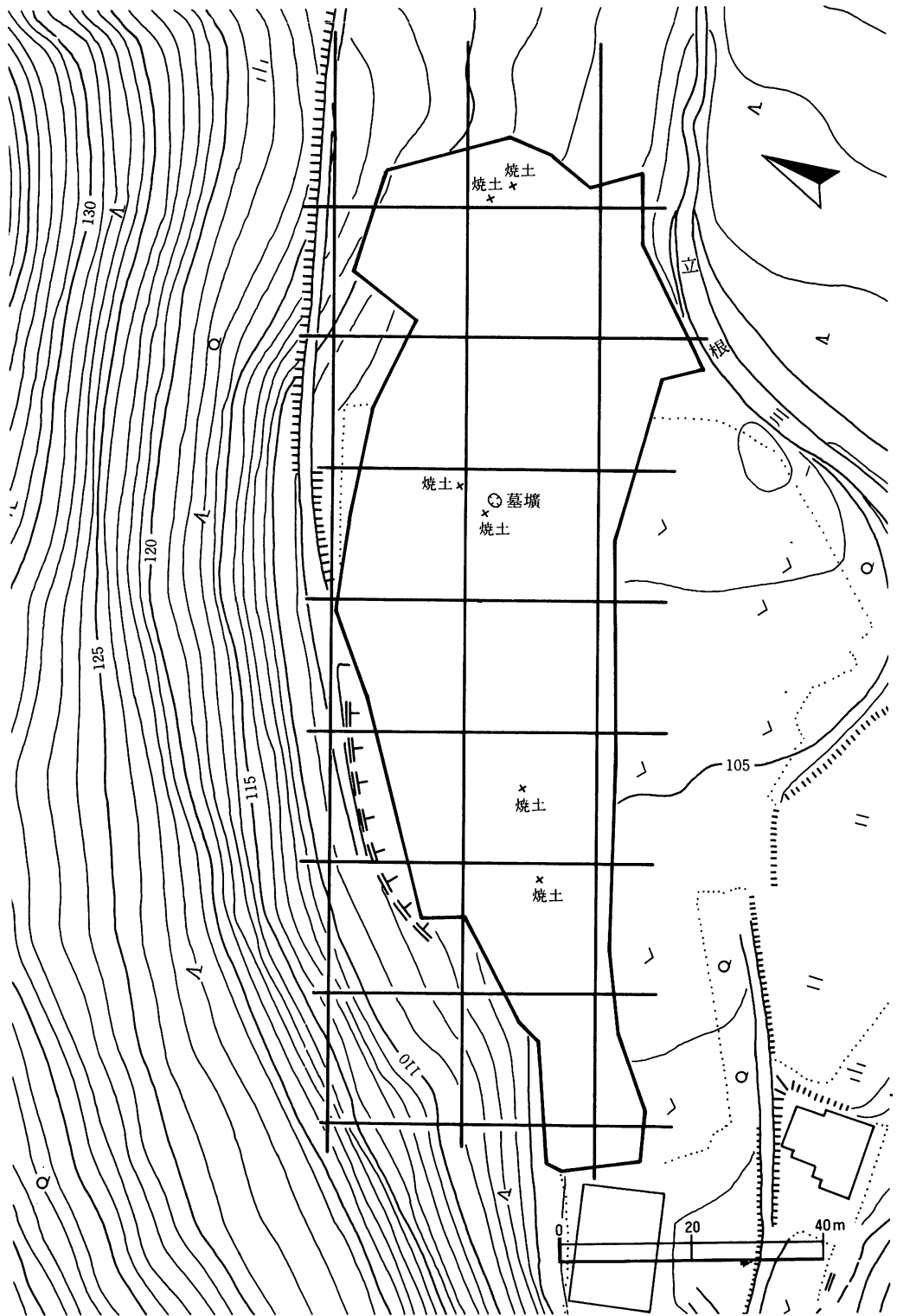
直径約80cmのほぼ円形の平面形を呈し、約1 mの深さを有する規模のものと推定され、一体分の人骨が出土した。副葬品として寛永通宝と思われる銭貨6枚が伴うことから、江戸時代の墓墳と推定される。

〈出土遺物〉

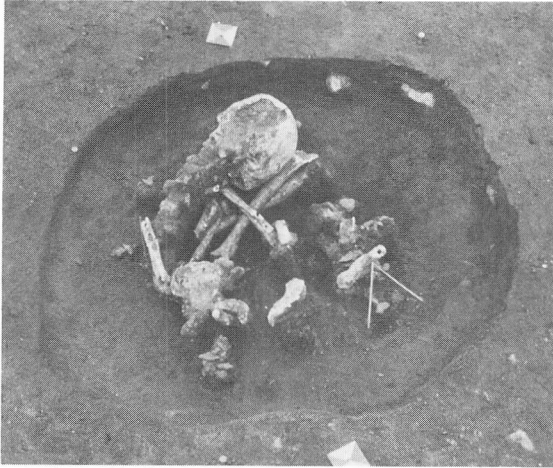
縄文時代の早期～晩期、弥生時代の土器がコンテナ1箱分出土した。土器の大部分は縄文土器であり、その大半は縄文時代の前期・中期に帰属する。石器は出土していない。

3. まとめ

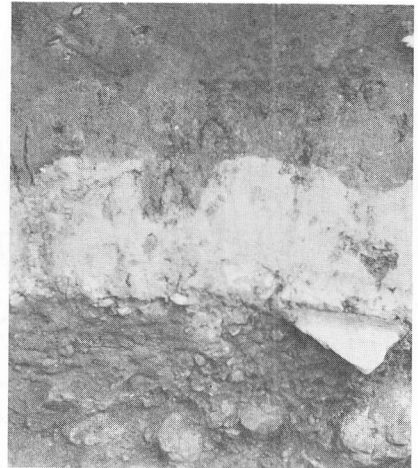
今回の調査で、縄文時代の早期から弥生時代にわたり何らかの活動の場として、また江戸時代には埋葬地として利用されてきたことが判明した。なお、異なる時代の土器が同一層から出土したり、縄文時代の早期、前期初頭の土器が中礫浮石より上位から出土する状況が認められるので、出土土器が2次的に移動している可能性も考えられる。



細野II遺跡遺構配置図



近世の墓壙・出土人骨



テフラ層（中掘浮石）



1



2



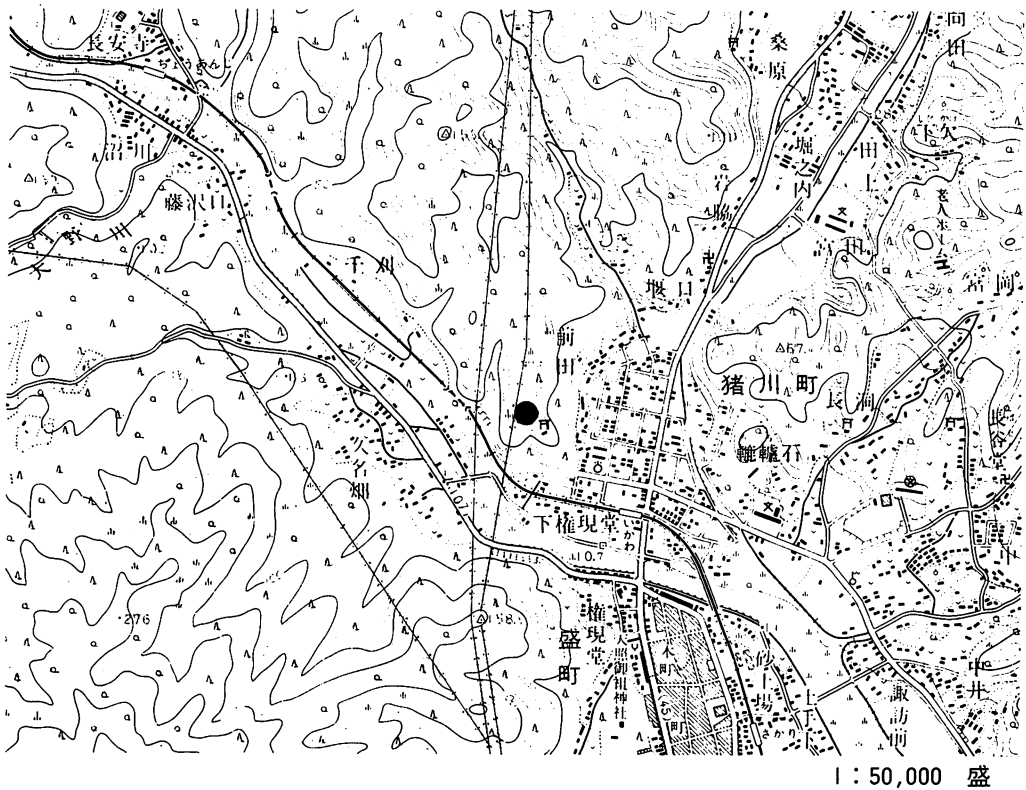
3

- 1 縄文時代前期の土器
- 2 縄文時代中期の土器
- 3 弥生時代の土器

細野II遺跡 検出遺構・出土遺跡

(8) い かわ だて 猪 川 館 跡

所在地 大船渡市猪川町字下権現堂70-4ほか
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年4月11日～11月14日
調査対象面積 7,500㎡
発掘調査面積 7,500㎡
遺跡番号・略号 NF38-1324・IK-90
調査担当者 斎藤博司・鈴木貞行・鈴木知己・藤村 隆
協力機関 大船渡市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

猪川館跡は東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の北西1.4km、国道45号線の西側に位置する。東流する盛川左岸の丘陵南端部に立地している。遺跡の標高は約67mで、河岸低地との比高は約60mである。調査区の現況は山林である。

2. 調査の概要

調査区は主郭と想定される神社の西側を南北に縦断する。今年度は南側の約半分を調査した。検出された遺構は、館跡と採掘跡に関連するものに大別され、館跡に関連する遺構は堀跡1条、土塁跡2条、柵列跡4条、段築2段、平場造成跡3カ所、柱穴列5条、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居状遺構5棟、土坑18基、溝2条、焼土遺構3基、柱穴30個であり、採掘跡に関連する遺構は石組2基、溝状遺構8条、土坑2基、焼土1基である。

〈堀跡〉 最頂部の平場の西側から斜面に沿って南東方向に走行する。西端は調査区域外に続き、確認された長さは37m、上幅3～4m、土塁の盛土面からの深さ1.4mである。法面は緩やかに傾斜して底部に続き、底面の凹凸はほとんどない。底部両端の比高は7.8mである。

〈土塁と柵列跡〉 土塁は堀跡の南側と最頂部の平場の北側に位置し、現状で確認された。西側は調査区外へ、南東側は斜面の途中で失われ、長さ17m、基底幅3.9m、高さ0.7mである。また、北側は長さ10m、基底幅4.7m、高さ0.6mである。いずれも旧表土に盛土されている。柵列跡は掘、土塁の南側に平行して検出されたほか、これに接して南側に平行する2条、上段の段築に平行する1条である。土塁南側の柵列跡は長さ26m、幅30cm、深さ30cmである。いずれも布掘りされた底部に径10cm、深さ17cmの円形の杭跡が並行して認められる。

〈段築と平場造成跡〉 段築は館の南側から西側を回って北西の断崖で一度切れ、斜面を削って構築している。上段と下段の比高は4.5m、盛土の厚さが最大1.3mである。平場造成跡は下段の段築の東側に位置し、重複関係から3時期に渡っており、いずれも館に関連する遺構の中で最も新しい。

〈柱穴列〉 南斜面に位置する柱穴列は10個の柱穴で、平面形は径30cmの円形で、深さが10～16cmでほぼ等間である。下段の段築に位置する柱穴列は7個の柱穴で、平面形は径20cmの円形で、深さが30～45cmで一字に並ぶ。最頂部の平場に位置する柱穴列はそれぞれ3個の柱穴で、平面形が23cmの円形で、深さが20～40cmである。

〈掘立柱建物跡〉 南斜面中腹に位置する。1号掘立柱建物跡は桁行3×2間(7.1×4.6m)である。出土遺物は陶磁器、土器、金属製品、鉄滓、石製品、種子である。

〈竪穴住居状遺構〉 南斜面中腹に位置し重複が著しい。遺物は陶磁器、鉄滓、種子があり、時期は掘立柱建物跡とほぼ同時期と推定される。

〈土 坑〉 南斜面、下段の段築、最頂部の平場、尾根の北側に位置し、径 2 m 以上の大型のものが多く。館跡に検出される土坑の時期は掘跡、土塁、柵列跡より古く中世以降である。

〈溝 跡〉 上段の段築の法面下に位置し、幅 1 m、深さ 1.3m、確認された長さは東西に 34m である。時期は平場造成跡に切られ、上段の段築と同時期のものと推測される。

〈採掘跡〉 基本層序第 V～VII 層まで掘り込まれ、南北 125m、東西 80m 以上の範囲である。90%以上が露天掘りで、坑道式が 1 基である。

〈石組と溝状遺構〉 石組は溝跡を意識したように組まれ、反対側に多量のズリや頁岩及び花崗岩が投げ捨てられている。組まれた石は 25×40cm の花崗岩を主体とし、確認された長さは 6.5m、高さが 2 m ほどでほぼ垂直である。溝状遺構は基本層序第 VII 層を掘った 8 条である。1 条は採掘跡の南西端に位置し、両側を石で組み、底部が平坦な岩盤である。幅 1 m、深さ 0.9m、長さ 20m で、採掘跡への通路と推定される。5 条は石組の内側に位置し、幅 1～5 m、深さ 30～60cm、確認された長さは 3～6 m である。2 条は採掘跡の南側に位置し、幅 2～2.6m、深さ 0.3～1 m、長さ 10m である。

3. 出土遺物

遺物は総量小コンテナ 2 箱である。大部分は中世末期から近世初頭の染付、白磁、青磁、赤絵、国産陶磁器、金属製品、石製品、銭貨などである。その他弥生時代の土器が若干である。

4. まとめ

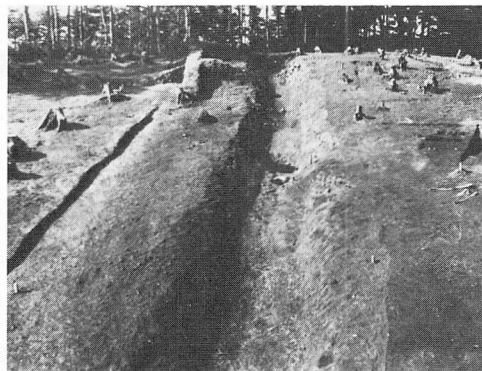
猪川館跡は中世の城館跡であることが判明した。葛西氏家臣の新沼長門、同左近の居城跡と推定される。館に伴う遺構は、堀、土塁、柵列構築の時期と段築構築の時期の 2 期に大別される。構築の時期が文献にみる一族による夜襲（1578年）と関連するか不明であるが、時期は出土遺物から中世後半から近世初頭である。

館跡に関連する遺構では、堀、土塁、柵列跡が等高線に直交すること、総遺物量の約 6 割が染付、白磁の食膳用具で占められることが特徴的である。

採掘跡は 1 町歩以上が露天掘で、坑道を伴う採掘跡が認められる。最頂部の平場と北側の尾根を結ぶ面が旧地形と推定され、廃棄された土石を何度も移動しており、長期に渡る採掘跡と推定される。石組内の溝状遺構は雨水や伏流水を利用して大流しや椀がけをしたヤナ場跡と考えられ、金生産の第一次行程が現地でなされたものと推測される。採掘跡はほぼ岩盤まで掘り込まれ、旧扇状地形に堆積した V 層及び VI 層の土砂利から土金を採取したと思われる。



中世の掘立柱建物跡



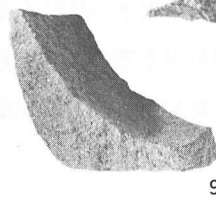
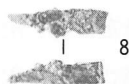
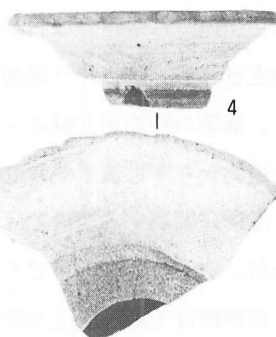
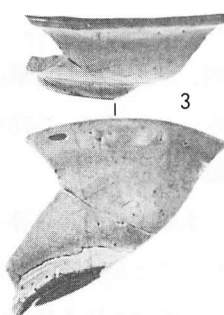
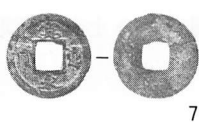
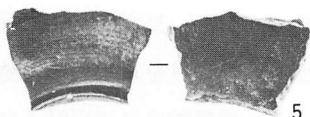
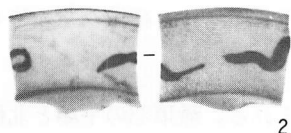
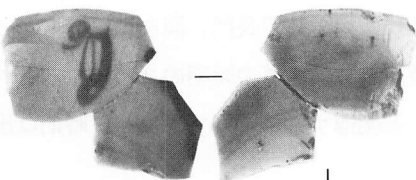
平行する柵列・土塁・堀跡



平行する段築

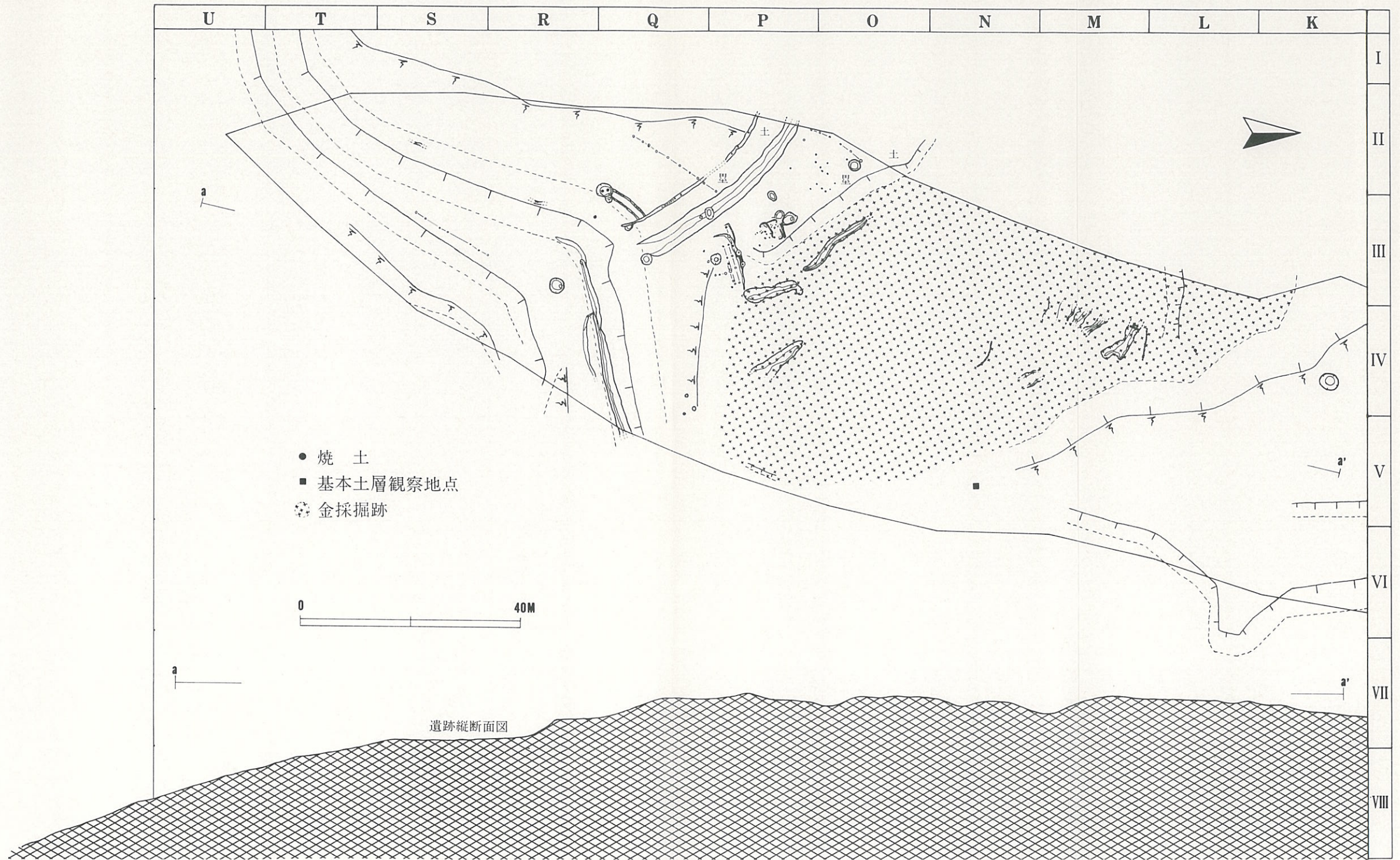


採掘跡と溝状遺構



- 1・2 染付(碗と皿)
- 3 白磁(皿)
- 4 青磁(皿)
- 5 美濃焼(天目茶碗)
- 6 永楽通寶
- 7 寛永通寶
- 8 刀子
- 9 手水鉢

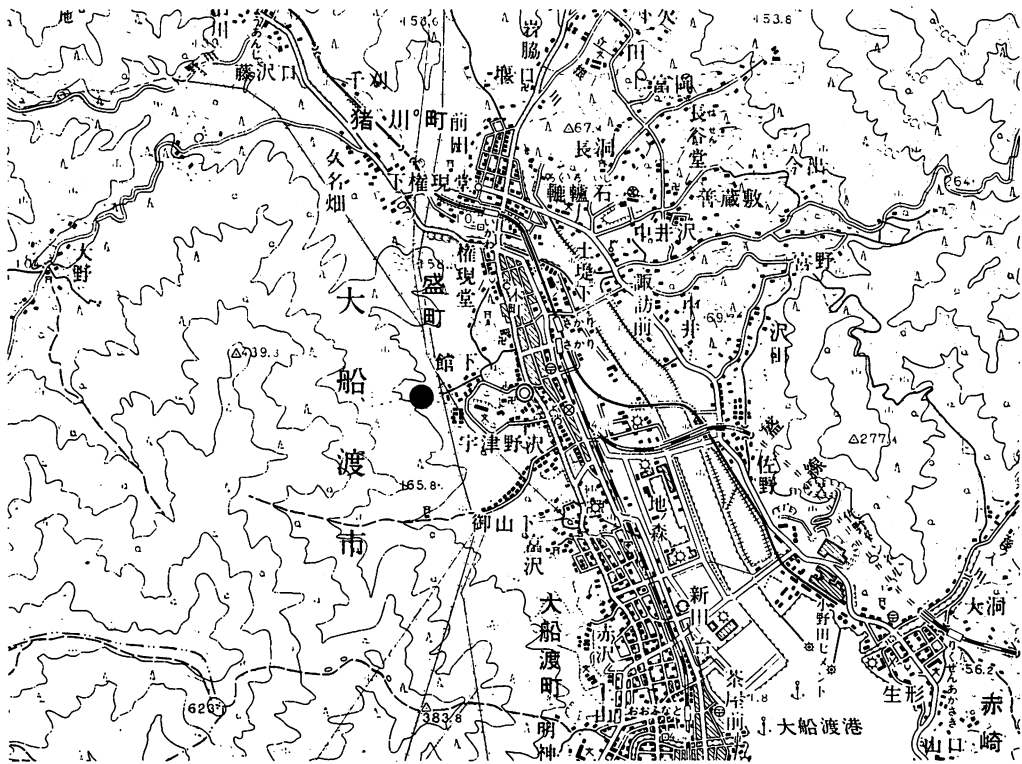
猪川館跡 検出遺構・出土遺物



猪川館跡遺構配置図

(9) 沢川遺跡

所在地 大船渡市盛町字沢川12-2 ほか
委託者 建設省東北地方建設局 三陸国道工事事務所
発掘調査期間 平成2年7月3日～8月3日
発掘対象面積 1,000㎡
調査対象面積 1,000㎡
遺跡番号・略号 NF38-2348・SK-90
調査担当者 鈴木貞行
協力機関 大船渡市教育委員会



1 : 50,000 盛

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

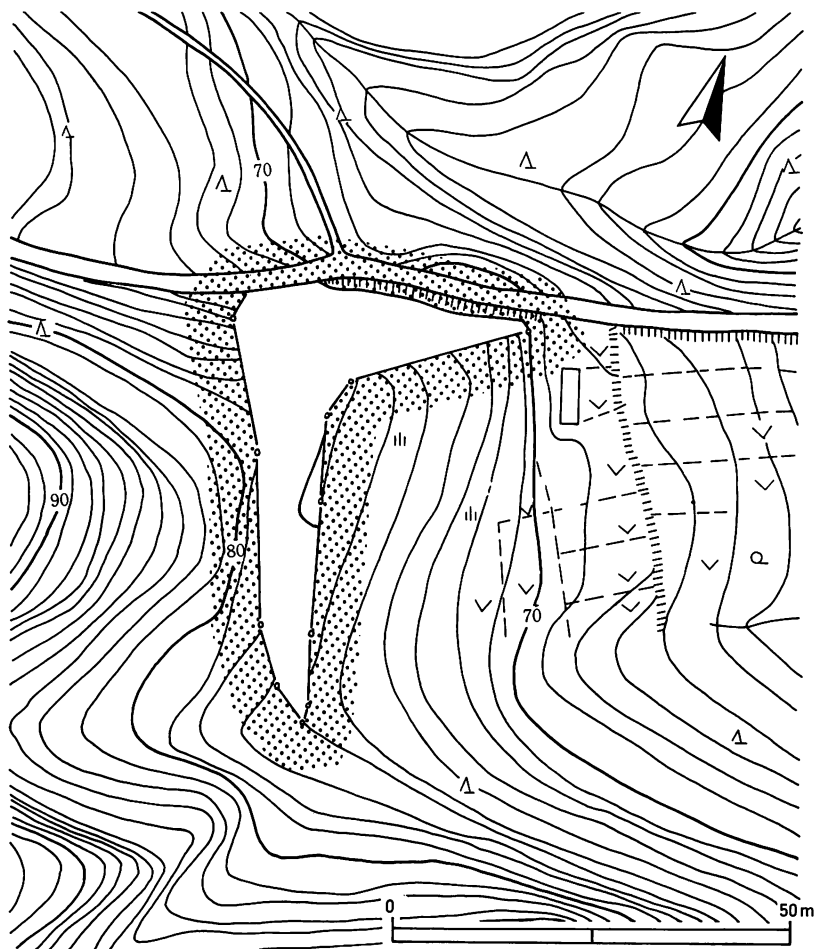
沢川遺跡は東日本旅客鉄道大船渡線盛駅の南南西約0.8km付近に位置し、盛川右岸の丘陵上に立地している。調査区域は斜面上であるが、下位面が削平されているため2面に大別される。標高は76～81mである。

遺跡の現況は高位面が山林、削平された緩斜面が原野である。

2. 調査の概要

調査区域は東西約70m、南北約12mの範囲である。調査は東西方向に幅2mのトレンチを設定して掘り進めた。

基本層序は削平されていない高位斜面では5層に細分される。I層は黒褐色の表土層で層厚10cm、II層は暗褐色土で層厚10～30cm、III層は黒色土で層厚20～40cm、炭化物や陶磁器が包含する。IV層は褐色土でV層への漸移層、V層は明褐色土で礫が均一に混じる。

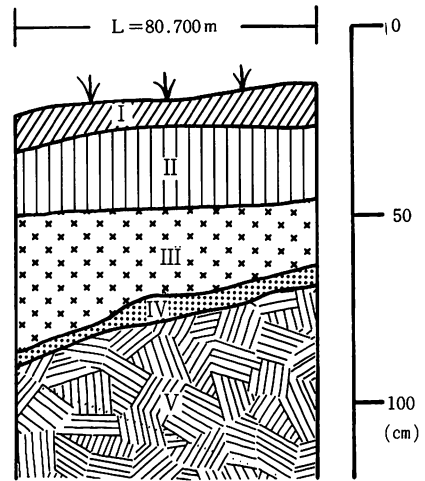


沢川遺跡調査区域図

調査の結果、削平された畑地造成跡が1カ所検出されただけで、遺構は確認されなかった。畑地造成跡は調査区中央部東端で長さ約7m、最大幅1.6mの規模で検出された。大部分は調査区域外にかかるため全体の範囲は不明である。V層を最大20cm掘り込んでおり、削平面はほぼ平坦である。

〈出土遺物〉

遺物は寛永通寶1点のほか、近代以降の陶磁器、鉄鍋片等である。寛永通寶は直径2.1cm、厚さ0.1cm、重さ1.3gの新寛永で、調査区北側の高位面II層から出土した。



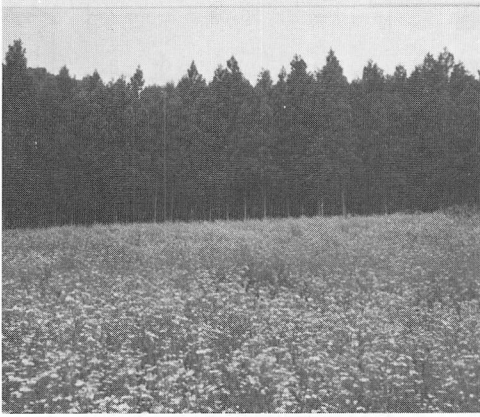
土層柱状図

3. まとめ

今回の調査区域は遺跡の西端部であり、しかも削平されているため、予想された縄文時代の遺構や遺物は検出されなかった。このことから本遺跡の主体部は、調査区域外の東側斜面に限られるものと考えられる。

近代以降には畑地として造成された痕跡があり、さらに拡張されて現状地形に改変されたものとみられる。また、陶磁器片等の遺物は比較的大きい破片が含まれていることから、不燃物を廃棄したものと思われる。

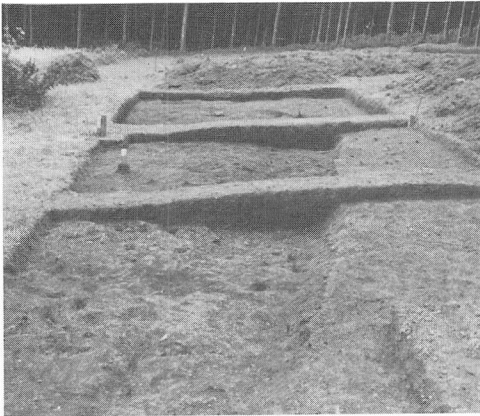
なお、沢川遺跡に関わる報告はこれをもって全ての報告とする。



調査区現況



調査区近景



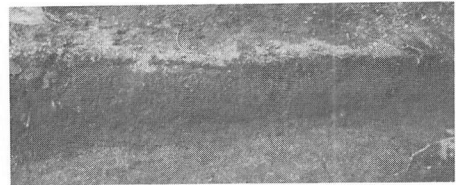
畑地造成跡



調査区近景（山林伐採後）



畑地造成跡



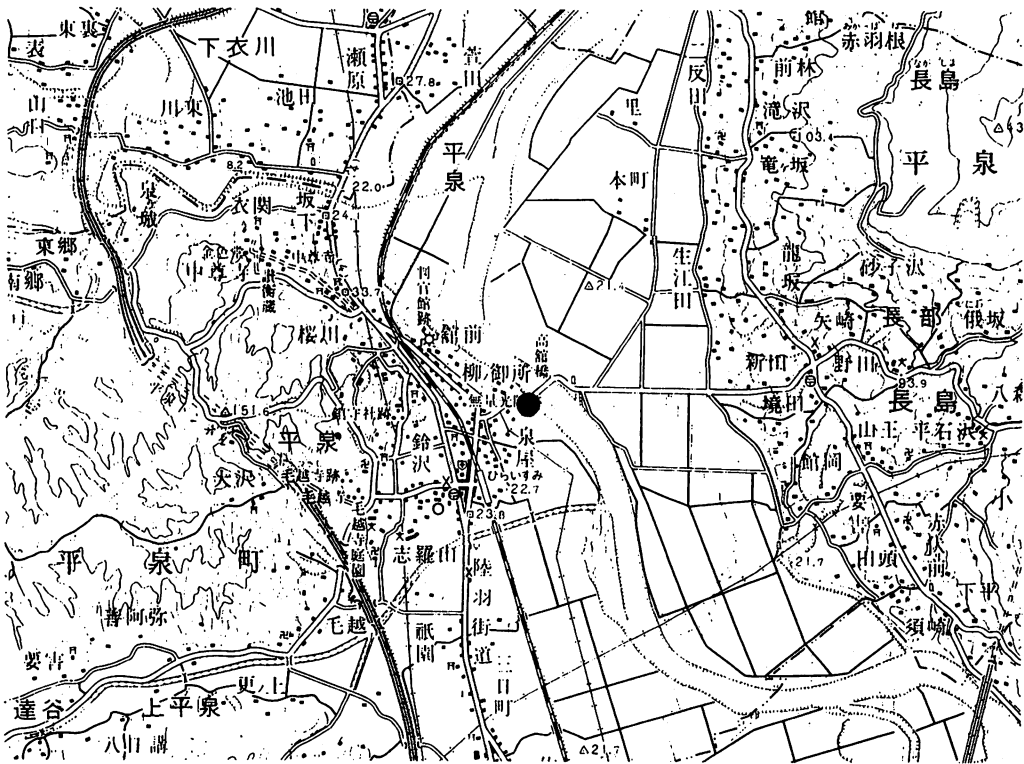
土層断面



寛永通宝

(10) やなぎの ぐしよ 柳之御所跡

所在地 西磐井郡平泉町字柳之御所130-5ほか
 委託者 建設省東北地方建設局 岩手工事事務所
 発掘調査期間 平成2年4月10日～11月30日
 発掘対象面積 6,000㎡
 調査対象面積 6,000㎡
 遺跡番号・略号 NE76-0088・YG90-28
 調査担当者 三浦謙一・田鎖寿夫・松本建速・斎藤邦雄
 協力機関 平泉町教育委員会



1:50,000 一関・水沢

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

遺跡は平泉町の市街地に近く、東日本旅客鉄道東北本線平泉駅の北約600mにその南端がある。北上川の西岸に接した低位河岸段丘に立地し、北は高館と呼ばれる丘陵、西は伽羅之御所跡や無量光院跡との境になる低地である猫間ガ淵、南と東は北上川とその沖積低地に囲まれている。北西から南東に細長く、最大長・最大幅はそれぞれ725m・212m、残存する面積は約10万㎡である。ただし、堀跡で区画された内外ということでの区分が可能である。調査区の標高は22～27m、北上川の現河床との比高差は10～15m、沖積低地との比高差は2～7mである。現状の土地利用は宅地と水田・畑地で、今年度の調査区は宅地であったところが大部分である。

2. 調査の概要

掘立柱建物跡や礎石建物跡・井戸跡・地鎮具埋納跡・塀跡・溝跡・園池跡・土壇など、12世紀に属する遺構が検出され、それらに共伴する土師質土器や木製品など、多くの遺物が出土している。

〈建物跡〉

建物跡7棟は園池跡の北東部に集中して検出され、礎石建物跡になる1棟を除いては掘立柱建物跡である。

28S B 1と28S B 2は桁行5間・梁間4間の四面庇付き建物跡である。2棟は若干位置がずれて重複しているが、新旧関係を直接しめす柱穴同士の切り合いはない。28S B 4は礎石を欠くが、根石を残す礎石建物跡である。東側が調査区域外に出るために不明の部分があるが、桁行5間・梁間3間を確認している。根石の下に、掘り方と柱痕跡を残す柱穴を伴う例がいくつかにみられ、28S B 4に先行する掘立柱建物跡が存在することが明らかである。28S B 3は、調査できた範囲では桁行・梁間とも4間で、庇を持つことが推定できる。28S B 5は、導水溝の西側にある桁行3間・梁間2間の建物跡で、他の建物跡とは位置や規模をやや異にしている。28S B 1と重複し、それに先行する28S B 6は桁行3間・梁間2間を確認しているが、調査区外になる北側へ桁行がさらに伸びている可能性もある。この建物跡は西へ伸びる掘立柱塀跡を伴う。塀跡は11間で、重複する導水溝よりも時間的に先行する。

〈井戸跡〉

建物跡周辺あるいはそれらと重なるように14基、園池跡の付近に4基、合わせて18基の井戸跡が検出されている。すべて素掘りの状態でみづかり、井桁や井筒は遺物としても残っていない。規模や深度はバラツキがあるが、開口部あるいはその下位から底面までの平面形が隅丸正方形や隅丸長方形のものが多くことが特徴の一つである。埋土上部の層相は自然堆積と人為堆積とに分類できる。園池跡周辺にある4基は、1基を除いては、園池跡と密接な関係にあるこ

とが埋土や出土遺物から推定できる。出土遺物は遺構ごとにバラツキがあるものの、かわらけの完形品や各種の木製品が数多く出土している。なお、今後の検討によっては井戸跡に分類できる可能性のある大型の土壌が数基ある。

〈地鎮具埋納跡〉

28S B 1の西側に検出された。地鎮具が埋納された土壌は、平面形が長方形、規模が60×95cm、深さが33cm、長軸方向が北西―南東である。地鎮具は土壌の南東側半分の南西辺寄りに埋納されている。輪室は底面の北西端に置かれ、轂と推定される位置に、直立した檣が先端部を土中に突き刺している。その南東には、直径9cm前後の手づくねの小型のかわらけ8個⁽⁴⁾が並べて置かれている。この遺構は重複する塀跡28S A 1の北辺を切っている。

〈園池跡〉

第23次調査の際、削剥されて低くなった水田部分の北西隅に平面形の一部を検出し、トレンチ調査の結果、園池跡と推定していた遺構23S G 1である。

検出段階の平面形が馬蹄形状で、最大長が南北46m、最大幅が東西36m、面積が約700m²である。新旧3期の重複があり、新期・中期は古期を大幅に改修し、意匠としては曲水を現すものになっているが、これまでに例の見られないものである。新期・中期とも、来年度に調査を継続する。

園池跡の北側には導水溝跡がある。北端が未調査であるが、北西から南東へ短く伸びたあとには大きく屈曲し、北々東から西へ緩やかで小さな蛇行を繰り返しながら園池跡の北池汀線に重なる。現状では、全長46m、最大幅・最大深度がそれぞれ0.7m・0.4m、北端と南端の比高差が1.15mである。礫がまったく使われていない素掘りの溝で、両端を除いては、底面に堆積した層厚3cmの砂層の上を地山起源の粘土が覆い、かわらけの破片を含む灰黄褐色系のシルトがその上位に堆積している。粘土層が人為堆積物であることから、2時期にわたって機能していることが推定できる。なお、この溝跡は塀跡28S A 1と重複し、それよりも時期が新しいものである。

〈塀跡〉

北辺のほぼ中央部に導水溝跡を挟む形で、塀跡28S A 1が検出された。塀跡は北辺と東辺・西辺の3辺が見つまっているが、南辺は確認できない。未調査の部分があるため、北辺についてのみ記載する。北辺は全長29.2mである。幅40～60cmの布掘りの掘り方と板あるいは材の痕跡を伴い、深さは40cmである。底面に存在する巨礫は間隔が不規則であるが、礎盤になることが考えられる。この遺構は導水溝跡や地鎮具埋納跡に切られている。また、上述の建物跡群のうち、塀跡の内部に収まるのは28S B 5だけであるが、両者が同時存在かどうかは不明である。

〈出土遺物〉

先の2次の調査同様、多種多様な遺物が数多く出土している。今年度出土した遺物を中心に、これまでの分も一部合わせて記載する。

土師質土器・かわらけ

数量で他の遺物を圧倒し、これまでに、概算で9トンを超える量が出土している。その60%近くは堀跡からの出土である。

土師質土器のうち、皿形あるいは坏形のいわゆる「かわらけ」が99.9%以上を占めている。かわらけは、成形技法からロクロ使用とロクロ不使用とに分類でき、前者をI類、後者をII類としている。それぞれは法量に大きくは大小の2型がある。I類・II類とも、小型は8～10cm、大型は12.5～14.5cmの口径のものが主体を占めるが、その前後に分布する例がI類に比べてII類の大型に多い。I類では小型としたものよりも一回り小さな一群、II類ではより口径の大きな一群があり、細分が可能である。器高は、I類とII類の違いが大型の例に現れ、I類はほとんどが3cm以上になるのに対し、II類はそれ以下のものも多い。両者は混在して出土する例が多く、一方が単独で出土する例は少ない。例えば、28S K31からは埋土上半から完形品を主に37点が出土しているが、I類小型4点・II類小型15点・II類大型18点になる。第21次で調査した井戸跡21S E 3は総重量435kgにのぼる大量のかわらけが廃棄されていたが、I類とII類の比率は48：52になる。特殊で、数が少ないものには小型の内折れ型、底部に穿孔したII類土器・墨書土器がある。

かわらけ以外の土師質土器には、鍋・内耳鍋の破片があるが、少量である。

国産陶器

今年度の出土量は先の2次の調査に比べて少ない。渥美と常滑が主体を占めるほか、在地産の須恵器系陶器がある。須恵器系陶器は複数の産地が推定できるものの、窯跡は不明である。

中国陶磁器

今年度は、白磁・青白磁108点、青磁2点、合わせて110点の小破片が井戸跡や園池跡を中心に出土している。先の2次の分を合わせると、白磁・青白磁の322点に対して青磁は14点と少なく、その比は23：1である。器種は、四耳壺・碗・皿・水注・梅瓶・合子である。また黄釉褐彩四耳壺の復元可能品が第23次で調査した堀跡から出土している。

瓦

先の2次の調査同様、量的には多いとはいえないが、10点前後がまとまって複数の井戸跡から出土していることや園池跡に小破片が分布することが特徴である。軒平瓦は折り曲げ技法によるものである。

木製品

井戸跡を中心に、多くの木製品や加工材が出土している。器種別では折敷が多いことが第1に指摘できる。折敷を転用あるいは再利用して書かれた文字史料や墨画、刀子形や鳥形の形代・宝塔・将棋の駒・裁縫尺・長方形曲物の略完形品など、先の2次の調査ではみられない器種があり、リストをさらに豊富にしている⁽²⁾。

将棋の駒は園池跡から発見され、表が「歩兵」、裏が「と」の墨書がある。宝塔は井戸跡28SE3から出土した。相輪部の先端が欠き、全体に火熱を受けている。円錐形の小孔が台部底面に開いており、納骨器として使用されていたことが考えられる。物差は完形品で、全長が37.5cm、幅が1.9cm、厚さが0.8cmである。片側5寸ずつ計1尺の目盛りが刻まれ、中心に刻印を伴う。1寸は3.68～3.83cmとバラツキがあり、平均は約3.735cmとなっている。この数値は鯨尺に近いもので、後述する共伴遺物や第23次調査で出土した1寸平均が2.939cmの物差の存在からは裁縫尺と考えることができる。

墨画・文字史料・墨書土器

墨画は28SE2から出土した。板材は40×22cmの長方形で、厚さが0.4～1.2cmである。長辺の一辺に寄った中央に、寝殿造系の住宅が横16cm・縦11cmの大ききで描かれている。住宅は、桁行が不明、梁間が2間で、1×1間の張り出しが付属する。瓦が大棟と妻飾に描かれるほか、御簾を看守することができる。板に書かれた文字史料は、折敷の底板を転用あるいは再利用したものが4点7面と呪符2点が出土している。1点は井戸跡28SE2、他は井戸跡28SE16からの出土である。そのなかの1点は「人々給絹日記」の題目があり、一面に、石川三郎殿や石川太郎殿・小次郎殿・四郎太郎殿・瀬川次郎など11人の人名と衣服名であるカリギヌやハカマ・水干・袍、染物をあらわす赤根(茜)染、反対の面には中上・中・下や四尺八寸一六疋のように布のランクや寸法・数量を記している。共伴遺物には糸巻の横木や杵木・裁縫尺がある。

人面墨書土器は井戸跡28SE4、底部外面に文章を書いた史料は28SK18から出土している。土器は前者がII類大型、後者がII類小型である。

金属製品

今年度出土した主なものには、輪宝と楯・金槌・鑿・轡・八稜鏡がある。また、製品以外では、金と自然銅が1点ずつ出土している。

輪宝と楯は地鎮具である。輪宝は厚さ約1mmの銅板を打ち抜いたもので、轡と輻の一部が残り、三鈷輪宝と推定される。轡部径は約20cm、残存する輻部幅は2cmである。轡部は沈線によって内外両面に分けられ、文様がたがねで打ち出されている。楯は、鉄製のため錆化が著しく、形状や文様の詳細は不明である。現存長は27cmであるが、土中に突き刺さっていた一端をわずかに失っており、本来は30cm近い長さのものである。断面形は方形である。金槌と鑿は土壌28

S K14の底面から一緒に出土した。土壌は、平面形が隅丸正方形、開口部の規模が1.2×1.2m、深さが1.6mである。金槌が南西隅近く、鑿が北東隅近くにあり、土壌の位置や埋土からは、意図的に埋められた可能性を指摘できる。金槌は、柄を欠いているものの木質部が柄孔に残り、鉄の楔2本が打ち込まれている。鑿は袋鑿で、刃先をわずかに欠くものの柄が残り、柄頭には冠が付いている。轡は井戸跡28S E 11、八稜鏡の破片は同28S E 9から出土している。

溶解した金が付着した礫は井戸跡28S E 15の埋土最上部から出土した。大きさは3.4×2.1cm、厚さは0.6cm、重量は16.2gである。金は肉眼でもかなりの量を見ることができる。蛍光X線分析からは微量の銀を含んでいることがわかっている。

3. まとめ

(1)平泉藤原氏の初代清衡は11世紀末から12世紀初めにかけての時期に平泉に進出し、本拠とした。それ以降、4代泰衡が源頼朝によって滅ばされる文治5年(1189)年までの90年から100年を前後する時間が藤原氏の平泉における時代である。柳之御所跡は初代清衡・2代基衡の居館跡と言い伝えられるとともに、『吾妻鏡』に現れる平泉館(ひらいずみのたち)に相当し、政庁として機能していたことが推定される遺跡である。

(2)北上川に近い低位段丘の縁辺部に館を構えること、居住域になる主要面よりも3～5m低い東と南にみられる面には幅約10mの堀を区画のために巡らせていること、居住域には掘立柱建物跡を中心に、井戸跡や各種の土壌・溝跡・塀跡・園池跡などさまざまな施設を構築していることが構造上の特徴である。堀に架かる橋跡が南と東に検出され、実際の出入口を想定できる。ただし、堀跡との関連で問題になる土塁は痕跡としても残っていない。現段階では11世紀末から12世紀末に限定された居館跡として位置づけできると同時に、城館史の上では古代の城柵遺跡と中世城館をつなぐ遺跡として重要である。

(3)今年度は、第23次調査で検出された塀跡23S A 1の内部になることが推定される範囲を調査した。

23S A 1の南辺の西側は今年度の調査区域に伸びていることが予想されたが、宅地化による削削を受けているため、現在は追跡できていない。

園池跡の北東部に集中している建物跡は3期の重複がある。もっとも時間的に先行する建物跡としては28S B 6があり、それよりも新しい28S B 1は28S B 2と重複している。後者の2棟は規模・構造・主軸方向を同じくし、強い関連性があることが考えられる。28S B 2は礎石建物跡である28S B 4またはそれに先行する掘立柱建物跡と同時存在の可能性が強いが、両者を繋ぐ建物跡は検出されていない。また、地鎮具埋納跡は建物跡との具体的な関係が不明であるが、この区域が重要な一面として認識されていたことを示すものであろう。建物跡が南北棟であるのに対し、地鎮具埋納跡が長軸方向の45度ずれた北西—南東方向になることが特徴である。

全体の見通しとしては、一部に空白地帯があるものの、昨年度検出された桁行5間・梁間2間の東西棟の建物跡が今年度検出された建物跡と密接な関係をもつことが推定されること、現在のところ、導水溝跡の西側には28S B 5だけしか検出されていないことから、調査区域外になる東側から北側に建物跡が広がる可能性が指摘できる。また、開田によって大きな削剝を受けている地域に、どのような遺構が存在したのかということが問題として残る。

(4)園池跡は3期にわたって機能している。調査は来年度に継続されるため、その結果をまとめて詳細を報告する。導水溝跡と排水溝跡についても同様である。

(5)井戸跡が18基と多い。もちろん全部が同時存在ではなく、建物跡同様、数時期の変遷が予想され、一部は園池跡と関連をもつ。ちなみに、先の2次の調査区には、県道の南側の西端に寄った位置に5基が分散して検出されているにすぎず、検出数の多いこともこの区域の特徴といえる。

(6)遺物は質・量とも豊富であり、柳之御所跡がさまざまな方面から研究されることを可能にしている。

先の2次の調査同様、今年度も遺物の出土量は多い。ただし、土器・陶磁器をみると、かわらけが圧倒的に多いことは変わらないが、国産陶器の量が少なく、中国陶磁器が点数は多いものの小破片であることなどの特徴がある。また、木製品では完形品を含めた折敷が多いことがあげられる。それらの遺物は、先の2次とは異なる「場」の使い分けを反映しているであろうし、遺跡の中枢部であると推定されることと深く関連するであろう。寝殿造系の住宅の一部を描いた墨画もそのような遺物のひとつである。どのような意図のもとに描かれたものなのかは不明であるが、対を南面のつもりで描いたもので、1間四方の張り出しは廊あるいは渡殿の可能性が考えられる⁽³⁾。また、折敷の底板を転用または再利用した文字史料なども中枢部での活動を反映しているものといえる。例えば、「人々給絹日記」のタイトルがある文字史料が糸巻の梓木や横木・裁縫尺と推定できる物差を共伴していることや、出土数量の問題が残るものの、金や自然銅・鉄滓・フイゴの羽口などが建物跡や園池跡の周辺部から出土することからは、『うつほ物語』⁴⁾に現れる「種松型の工房群⁽⁴⁾」の存在を想定しておくことも、今後必要であろう。さらに、文字史料の一部は、『とはずがたり』に描かれた折敷の底に和歌を書く風習との関連⁽⁵⁾を追求することによって、より位置づけが明確になってくる可能性がある。

(7)昭和63年度に開始され、平成5年度まで予定されている調査も、ちょうどその半分の期間を終わったことになる。

今年度の調査区は、遺跡の中枢部になると予想された範囲であったが、先の2次の調査で明らかにしてきた11世紀末から12世紀末にかけて営まれた平泉藤原氏に関連する居館跡であることを裏づけるとともに新たな事実を付け加えることができた。

これまでの調査結果が、直ちに清衡・基衡の居館説あるいは平泉館説に結びつくものではないにしろ、「都市平泉」のなかに61,000㎡の居館を構えることのできるクラスということで、より限定して居館の主を考えていく必要がある。そのことは、同一路線内を北側から同時に進めている平泉町教育委員会の調査結果⁶⁾（第24次・第25次・第27次・第29次）からも推定できる。

さいごに、個別調査の限界性を認識するとともに、平泉遺跡群のなかでの柳之御所跡の相対的な評価が今後の課題であることを指摘しておきたい。

注

- 1) 1枚を取り上げたため、写真では小皿が7枚になっている。
- 2) 先の2次の調査で出土した木製品については、次の文献で速報している。
三浦謙一（1990）：柳之御所跡出土の木製品—速報—。(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要X, 27—45.
- 3) 川本重雄氏（北海道工業大学）のご教示による。
- 4) 浅香年木（1971）：『日本古代手工業史の研究』。法政大学出版局。
- 5) 千々和到（東京大学史料編纂所）・入間田宣夫（東北大学）両氏のご教示による。
- 6) 平泉町教育委員会（1990）：『柳之御所跡発掘調査報告書—第24次・25次調査概報—』。岩手県平泉町文化財調査報告書第19集。
同（1990）：平泉町柳之御所跡現地説明会資料。



柳之御所跡遺構配置図



遺跡遠景（東から）

（矢印間が本遺跡）



第28次調査区遠景

柳之御所跡 空中写真



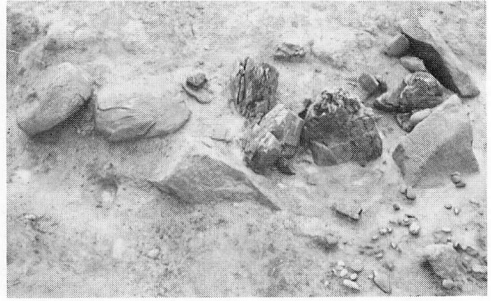
地鎮具埋納跡



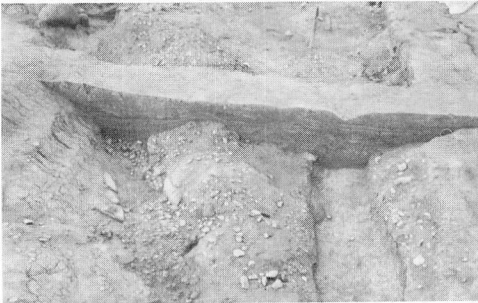
建物跡



建物跡



園池跡景石



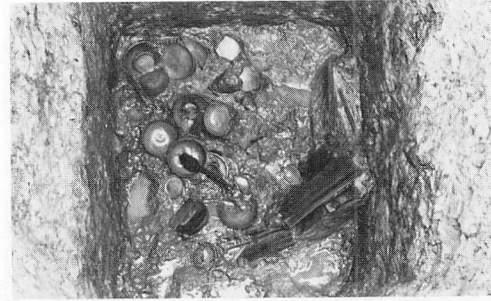
園池跡土層断面



園池跡

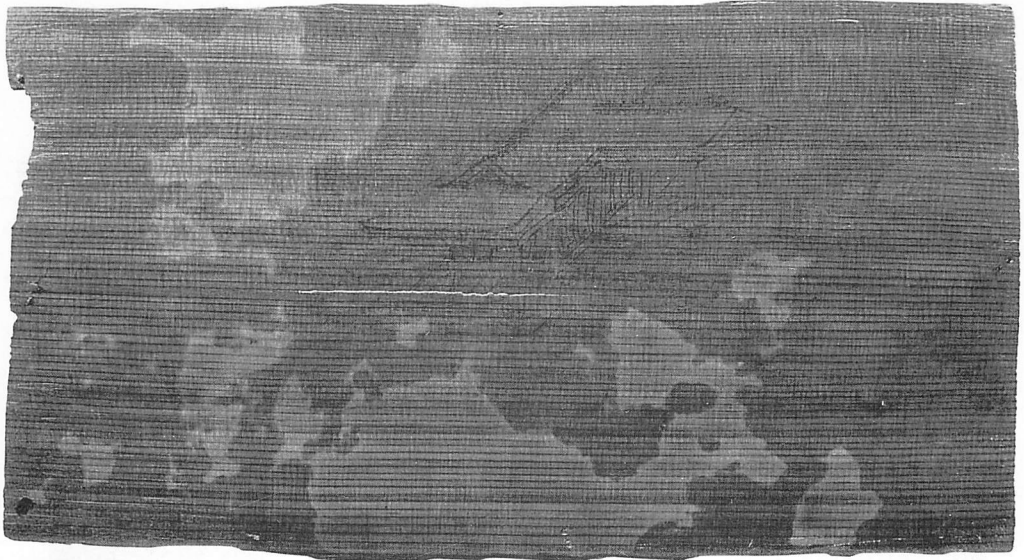


遺物出土状況（園池跡）



遺物出土状況（井戸跡）

柳之御所跡 検出遺構



墨画

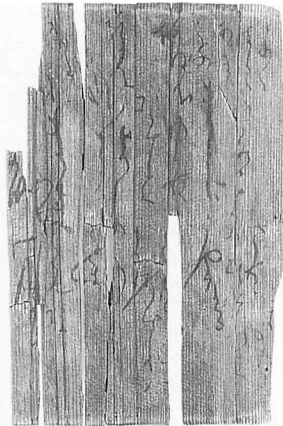


墨書折敷：I a

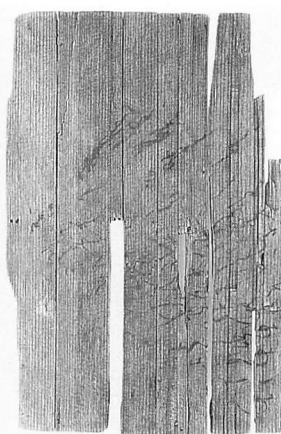
柳之御所跡 出土遺物(1)



墨書折敷：1b



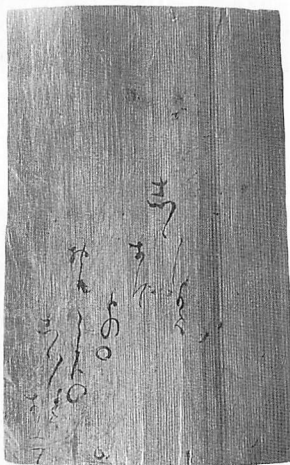
2 a



2 b



3 a



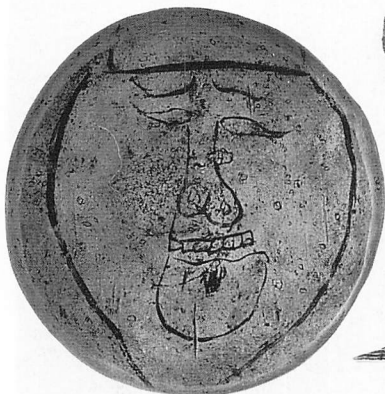
3 b



墨書土器

裁縫尺

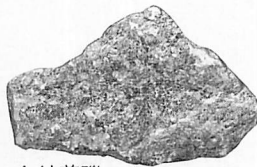
宝塔



人面墨書土器



金槌



金付着礫



鳥形



鑿



将棋の駒

柳之御所跡 出土遺物(2)

III. 岩手県関係

(1) おおひなた
大日向 II 遺跡

所在地 九戸郡軽米町第13地割字叭屋敷26-1

委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所

発掘調査期間 平成2年4月10日～7月6日

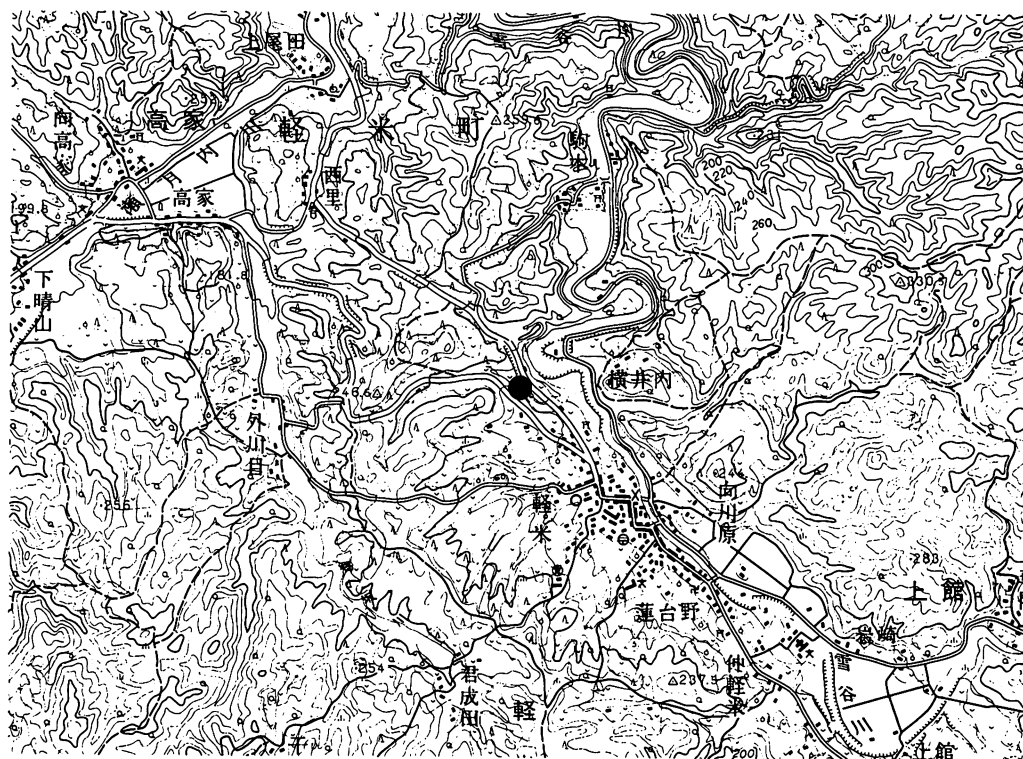
調査対象面積 1,000㎡

発掘調査面積 1,000㎡

遺跡番号・略号 I F73-2112・OHII-90

調査担当者 佐々木弘・伊東 格・斎藤邦雄

協力機関 軽米町教育委員会



1 : 50,000 一戸・三戸

遺跡位置図

1. 遺跡の位置

大日向II遺跡は八戸自動車道軽米インターチェンジの北側にあり、軽米町中心部から北西約1.3kmの所に位置している。遺跡は東側が雪谷川、西側は瀬月内川の支流である郷坂川によって挟まれた丘陵地の標高165～170mの東向きの緩斜面上に立地している。現状は畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡15棟、竪穴状遺構2棟、掘立柱状建物跡1棟、焼土遺構2基、土坑41基、奈良時代の竪穴住居跡1棟である。出土遺物の大部分は縄文時代の遺物であり、奈良時代の土師器が若干出土している。

〈竪穴住居跡・竪穴状遺構〉

縄文時代の竪穴住居跡は、中期に属する1棟を除き後期に属する。中期の住居跡は推定で直径約3.8mの円形である。北東壁にやや寄った場所に複式炉が設けられている。支柱穴は複式炉を囲むように三角形の配置を示している。

後期に属する住居跡は、円形を基調とするものが主体であり、規模が大きくなると楕円形の形状を示すものがみられる。直径は2～3mと規模にばらつきが認められる。重複する住居跡が多く、規模の大きい住居跡には拡張も認められる。これらのうち石囲炉をもつものは2棟、他は地床炉である。出入口の施設に相当すると思われる2本1対の溝は3棟の住居跡から確認され、北東～東壁に直交するように設けられている。他の住居跡でも一般に東壁付近の床面が特に周囲より堅い傾向にある。支柱穴の数は住居跡により異なるが、壁際を巡り内側に傾きを持つ多数の柱穴を持つ住居跡が7棟ある。全般に住居跡内からは、土器をはじめ遺物の出土量が多い。炭化した堅果類の残存する例や、小ピットに石器の剥片を貯蔵した住居跡も数例みられる。

奈良時代の竪穴住居跡は調査区外に延びているが、一辺4mほどの規模で平面形は隅丸方形である。カマドは北壁の中央部に粘板岩を用いて構築されている。埋土の上部には、広範囲に灰白色の降下火山灰が認められた。支柱穴は4本のうち2本が検出され、壁際には連続した周溝が巡る。床面全域には薄い炭化物の層が認められ、火災をうけた住居跡である。

〈土 坑〉

斜面上方を中心に検出されている。大半の土坑は直径1m前後、深さ50～100cmの規模をもつ。平面形は円形が主体で、若干楕円形のものも見られる。断面形は円筒形をしたものが多く、フラスコ形のは数基である。底面の副穴などは検出されていない。すべて縄文時代に属する土坑である。2基の土坑の底面付近からは完形品に近い縄文時代晩期の注口土器と台付深鉢形土器がそれぞれ出土している。台付深鉢形土器の底部内面には、赤色の顔料が残されていた。

〈掘立柱状建物跡〉

6本柱で構成され、平面形が亀甲状の建物跡である。床面からは炉に相当する焼土など、建物跡に付属する施設は認められなかった。亀甲状の長軸方向で6.7m、短軸方向で3.2mの規模である。隣接する柱穴の間隔は平均2.6mである。柱穴は、平面形が円形で直径50cm、深さ50～90cmの規模をもち、浅い柱穴は斜面の下方に位置するものである。埋土は類似しており、柱痕跡などは確認されなかった。縄文時代の竪穴住居跡と切り合い関係にあり、竪穴住居跡と同じく縄文時代の遺構である。

〈土器捨て場〉

沢に向かい急激に下降する調査区の東側から、縄文時代後期後半を中心とした土器の捨て場が検出された。最も深い部分で層厚2m程度である。

〈出土遺物〉

縄文時代の遺物は竪穴住居跡と土器捨て場を中心に出土している。遺構内から出土している土器は縄文時代後期後半が主体であり、縄文時代中期の土器が少量出土している。

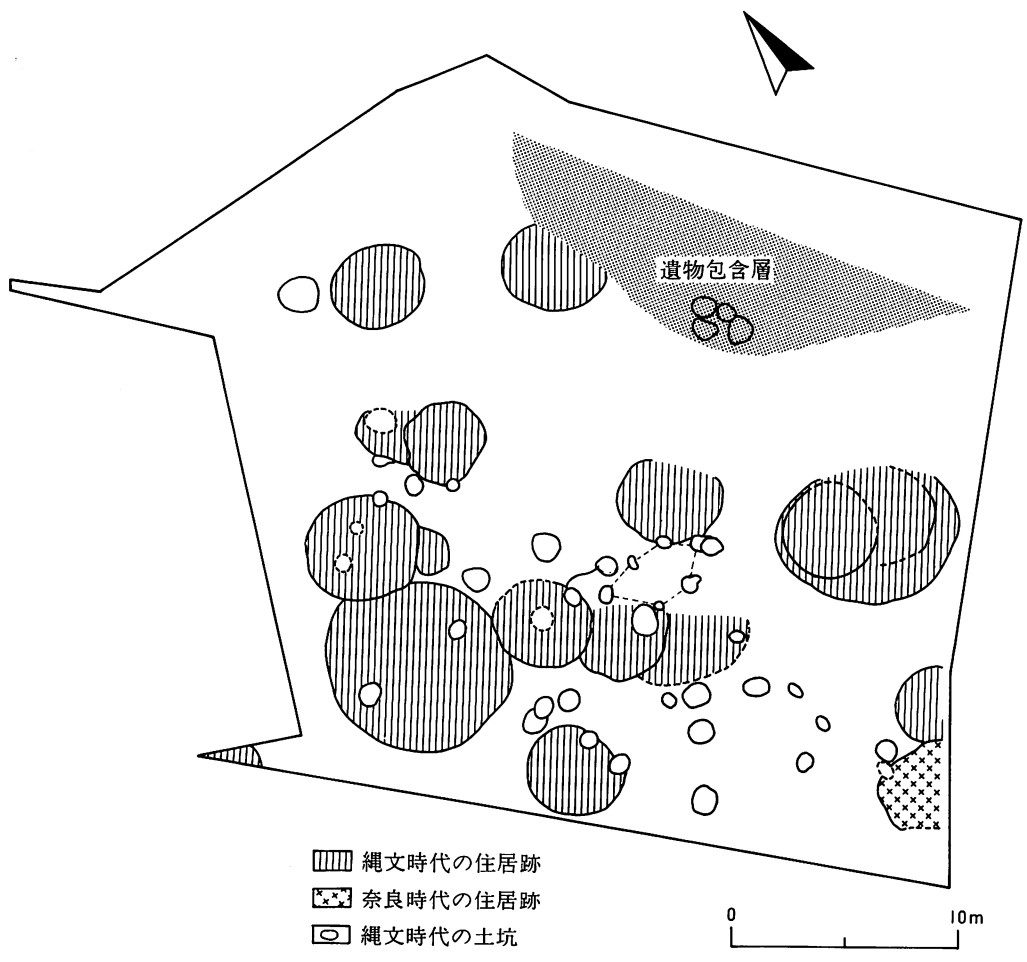
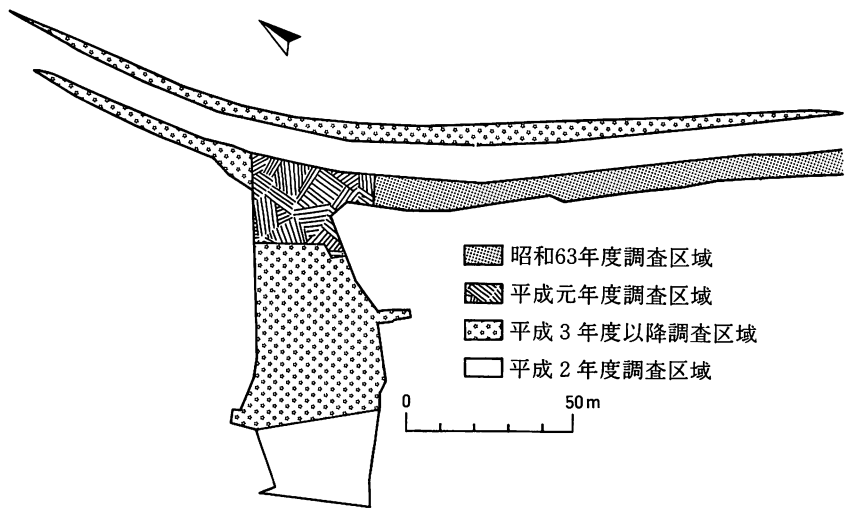
土器捨て場を含めた遺構外からは、縄文時代後期後半の土器を主体に、少量の前期・中期の土器が出土している。石器は、石鏃・石錐・石匙・石斧・石皿・磨石・台石等が出土している。特に、土器とともに土器捨て場から多くの石斧が出土している。軽石製の有孔石製品が3点出土している。2棟の竪穴住居跡の床面の小ピットから、数10片の剝片が出土している。土製品としては、土偶をはじめ耳飾り・スタンプ状土製品・垂飾品が出土している。

縄文時代以外の遺物としては、奈良時代の竪穴住居跡から土師器が出土している。ロクロ未使用で、ミガキ調整の丁寧な小型の甕形土器である。

3. まとめ

今回の調査区域は、昭和59年に当センターが調査した地域と隣接した場所である。前回の調査結果と合わせると、縄文時代後期を中心とした大規模な集落が形成されていたことがわかった。

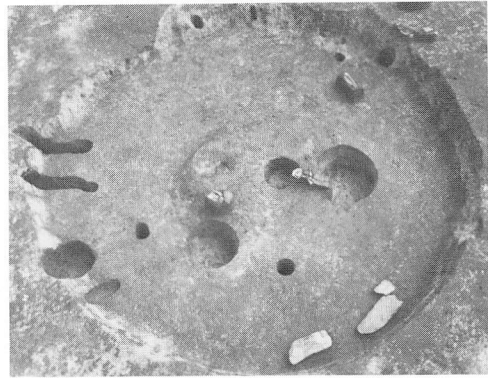
竪穴住居跡が密集する地域や土坑類が密集する地域がやや異なっており、集落のなかでも場の使い分けがあったことが考えられる。竪穴住居跡の重複や土器型式の変遷から、この集落は一時期のものではなく、断続的に営まれたと考えられる。また、前年度までの調査で今回の調査区域の沢向かいにもほぼ同時期と考えられる集落跡があり、沢を挟み対峙して存在していたことが考えられる。



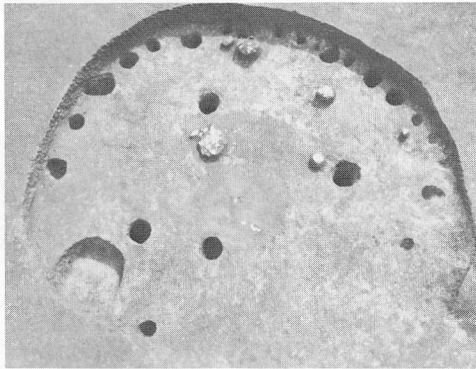
大日向II遺跡遺構配置図



遺跡全景



縄文時代の住居跡 (後期)



縄文時代の住居跡 (後期)



縄文時代の住居跡 (後期)

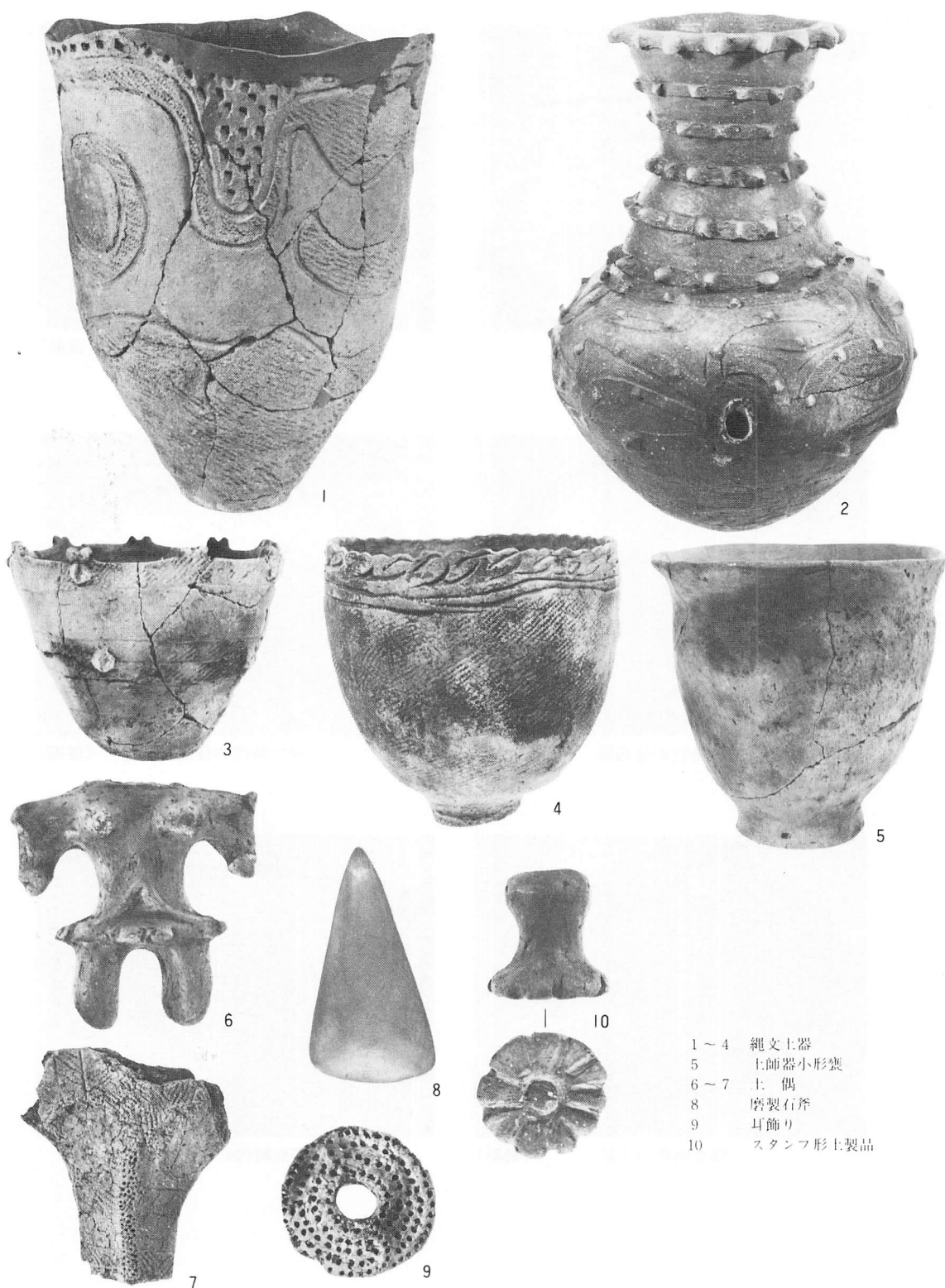


縄文時代の土坑 (晩期)



奈良時代の住居跡

大日向II遺跡 検出遺構

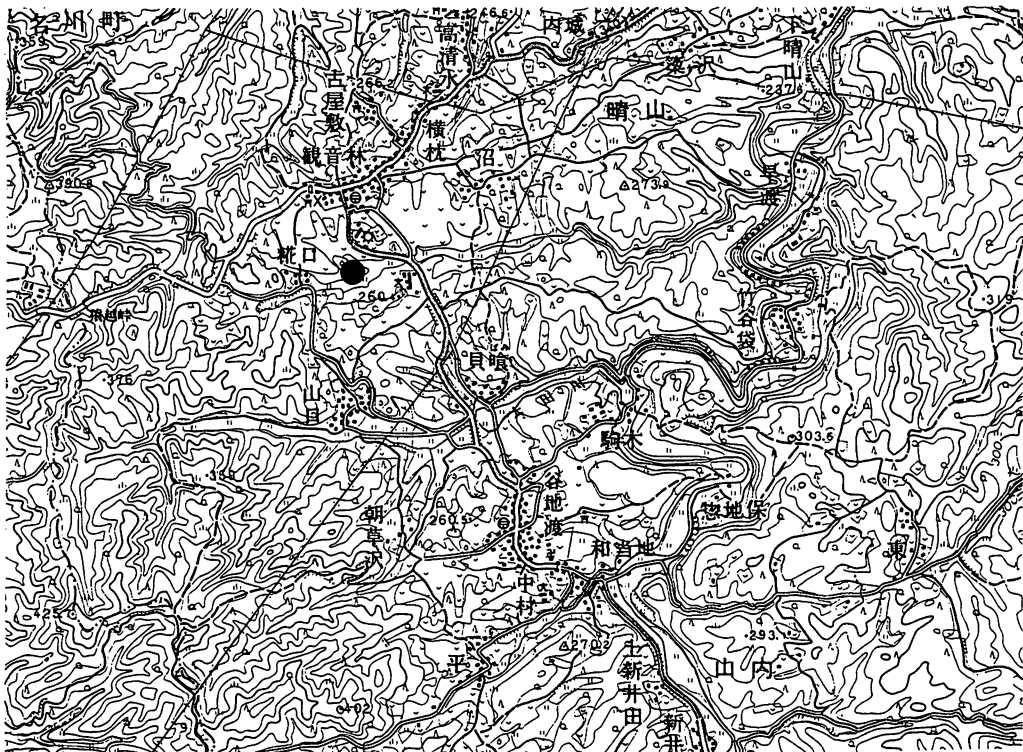


- 1~4 縄文土器
 5 土師器小形壺
 6~7 土 偶
 8 磨製石斧
 9 耳飾り
 10 スタンプ形土製品

大日向II遺跡 出土遺物

(2) 糺口 I 遺跡

所在地 九戸郡軽米町大字晴山第24地割字泉沢19ほか
委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所
発掘調査期間 平成2年6月1日～8月24日
調査対象面積 4,563m²
発掘調査面積 4,563m²
遺跡番号・略号 IF-0252・KG I-90
調査担当者 斎藤 實・千葉孝雄
協力機関 軽米町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

糞口Ⅰ遺跡は、軽米町役場の西約7.2km、国道340号の西側に位置する。遺跡は、観音林丘陵の中で、数本の沢が形成した浅い谷底低地に続く漸移部に立地し、斜面と平坦地によって構成される。標高は248～256m、現況は斜面は山林と荒地、平坦地は畑地である。

2. 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、陥し穴状遺構2基、土坑9基、奈良時代の竪穴住居跡1棟、土坑1基、時期不明の土坑1基、焼土5カ所である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は南部浮石層上面で検出され、平面形は約3.0×4.2mの不整な楕円形で、壁高は約20cmである。柱穴は7個検出されたが全て壁際に位置している。炉跡は検出されなかった。床面からは尖底土器、表裏縄文の土器片、石鏃、石匙等が出土している。

奈良時代の住居跡は、耕作土を除去した段階で環状に分布する十和田a降下火山灰によって確認された。北側が調査区域外にのびているため全容は明らかでないが、平面形は一辺4.7m程度の隅丸方形、壁高は0.5mである。床面直上には炭化材が広く分布しており、焼失住居と認定される。床面からは、ロクロ未使用の甕および土師器の破片数片、粘土塊が出土している。

〈土 坑〉

縄文時代の土坑の平面形は、そのほとんどが円形または不整円形である。9基のうち5基は、直径1.0m前後、深さが0.4m程度で、これらは主に調査区西側に分布する。うち1基の埋土から磨製石斧が出土した。調査区の中央部で検出した4基は、直径1.3～1.6m、深さ0.9～1.6mであり、幾分大きめである。

奈良時代の土坑は、平面形は不整の隅丸方形で、規模は直径2.9m、深さ0.6m、底面は凹凸が大きい。埋土上位には十和田a降下火山灰が堆積し、下位には炭化材、焼土が含まれる。ロクロ未使用の土師器片が2点出土している。

他の1基は、南側が調査区域外にのびているので詳細は不明である。検出した部分では、直径2.4m、深さ約1mで、奈良時代の土坑と同様、底面の凹凸が大きい。埋土の上位に十和田a降下火山灰がブロック状に含まれる。

〈陥し穴状遺構〉

2基とも溝状である。1基は、南部浮石層上面で検出したもので、長さ3.7m、幅0.5m、深さ0.6mであるが、埋土の中に大量の崩落土が堆積しており、構築時の形状はとどめていない。他の1基は、中振浮石層上面で検出した。長さ3.1m、幅約0.7m、深さ1.3m、断面形はY字状で埋土下位に黒色土が12cm程度堆積している。

〈焼 土〉

いずれも黒褐色土が焼成を受けたもので、焼土の範囲はおよそ0.6×1 m～0.4×0.6m、厚さは2～4 cmである。

〈出土遺物〉

I層からIII層上面にかけて縄文土器、石器、土師器等が少量出土した。

縄文土器はその殆どが細片で、縄文時代の竪穴住居跡を検出した調査区域の西端（II区）に集中する。出土層位から、これらは今回検出された遺構に伴うものではなく、調査区の北側からの流れ込みによるものと考えられる。前期・後期・晩期のものはごく少量で、貝殻腹縁圧痕文、表裏縄文など早期のものが最も多い。

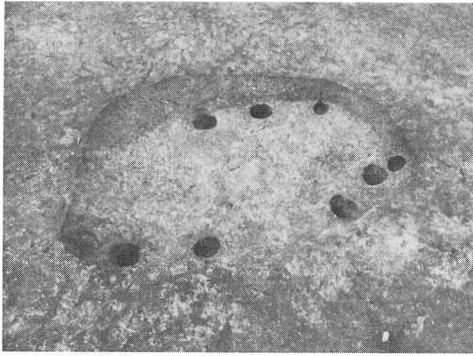
石器は、石鏃3点、石匙1点、磨製石斧1点、磨石6点、凹石3点等である。このうちの半数は、縄文時代の竪穴住居跡から出土したものである。

土師器は、ロクロ未使用で内黒処理された坏、内外面にハケ目調整された甕または壺等のいずれも小片である。その殆どが西側から出土したことは縄文土器片と同様であるが、他に奈良時代の住居跡が検出された調査区東側（V～VI区）からも出土している。

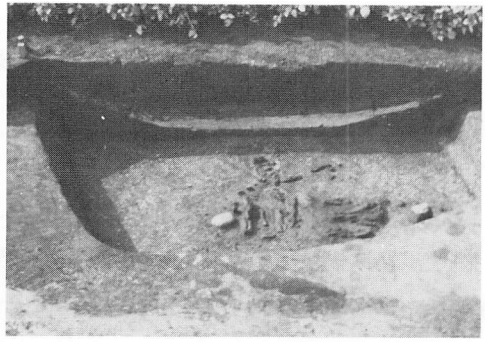
その他、後北式土器が1点、近世以降の陶磁器片が16点が出土している。

3. まとめ

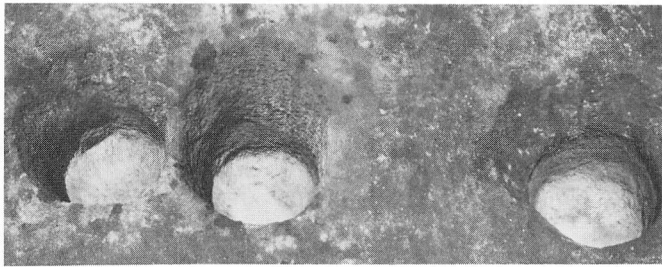
今回の調査では、調査区の西側は縄文時代の居住域、東側は縄文時代の狩場および奈良時代の集落としての痕跡を窺い知ることができた。しかし、調査区域は丘陵の縁辺部であり、土器・石器の出土の分布状況からは調査区域外の北側の丘陵部分が遺跡の中心と思われる。



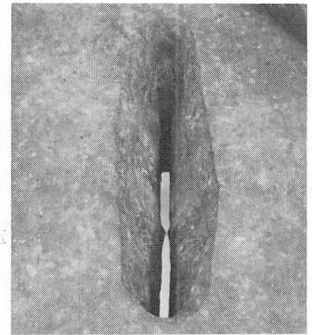
縄文時代の住居跡



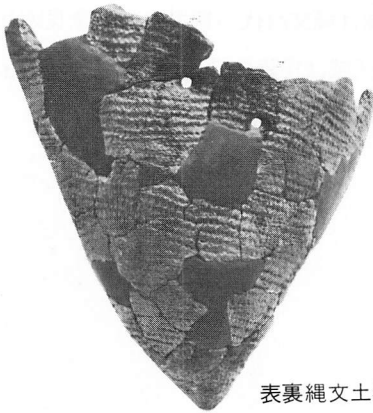
奈良時代の住居跡



土坑



陥し穴状遺構



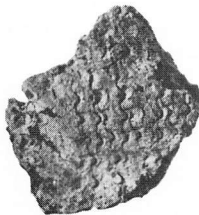
表裏縄文土器



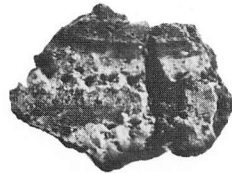
磨製石斧



石鏃



貝殻文土器

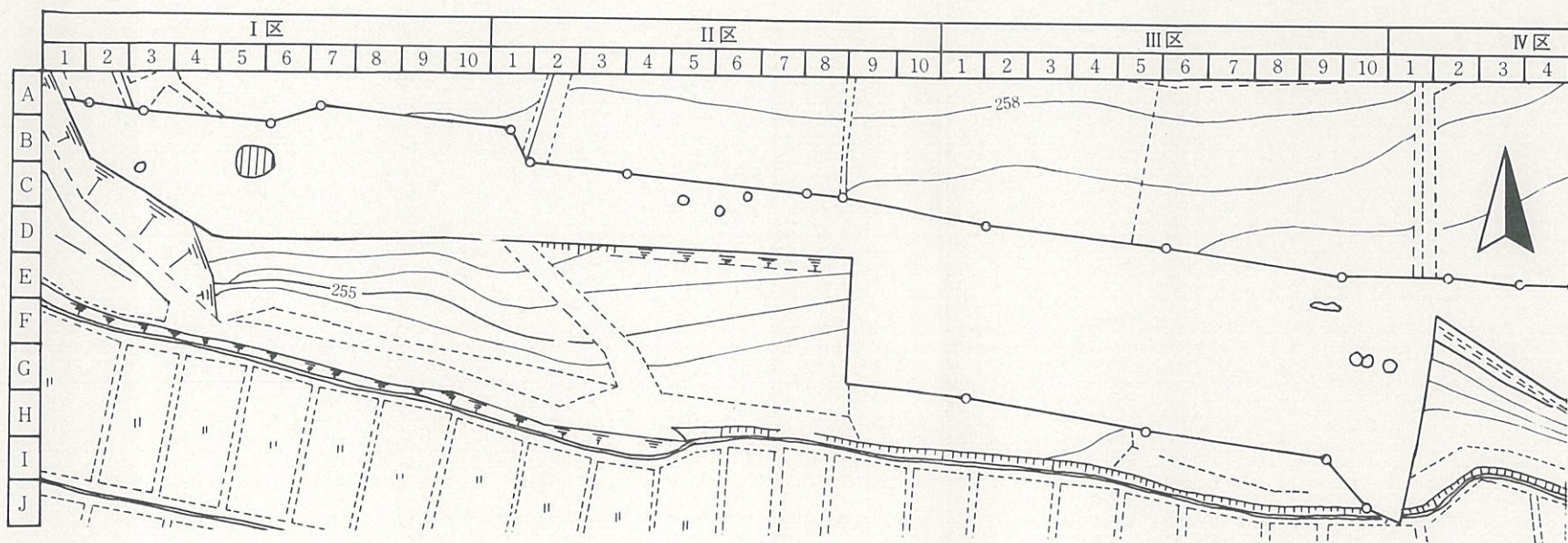


後北式土器

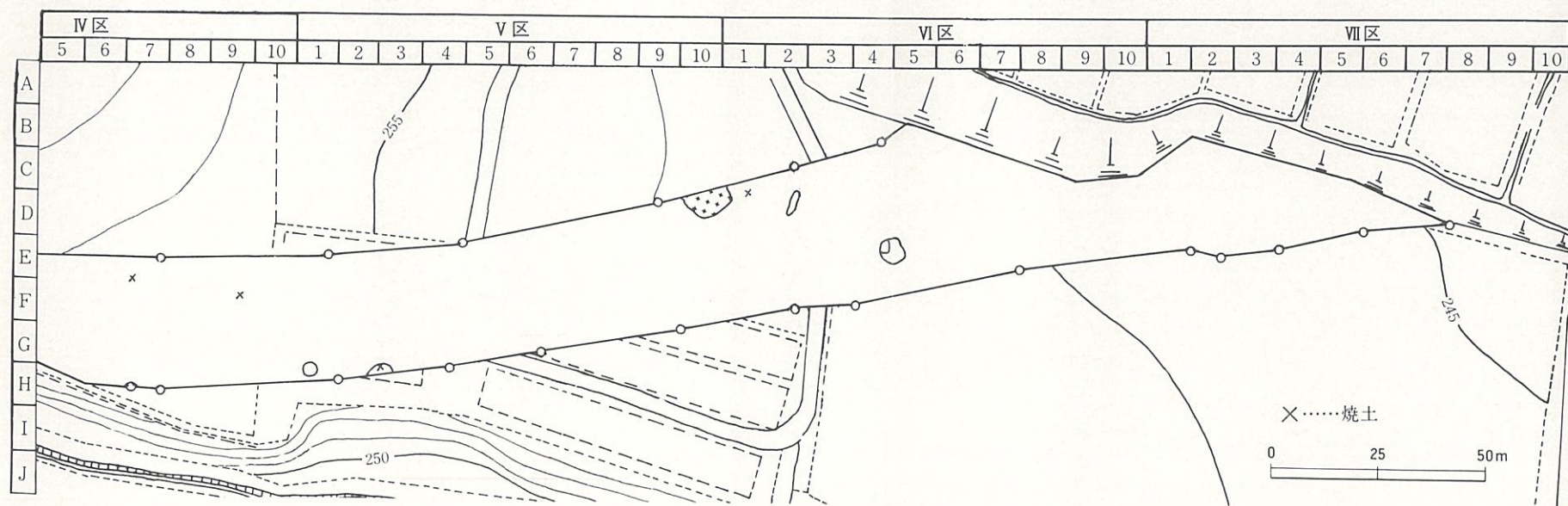


土師器

糝口 I 遺跡 検出遺構・出土遺物



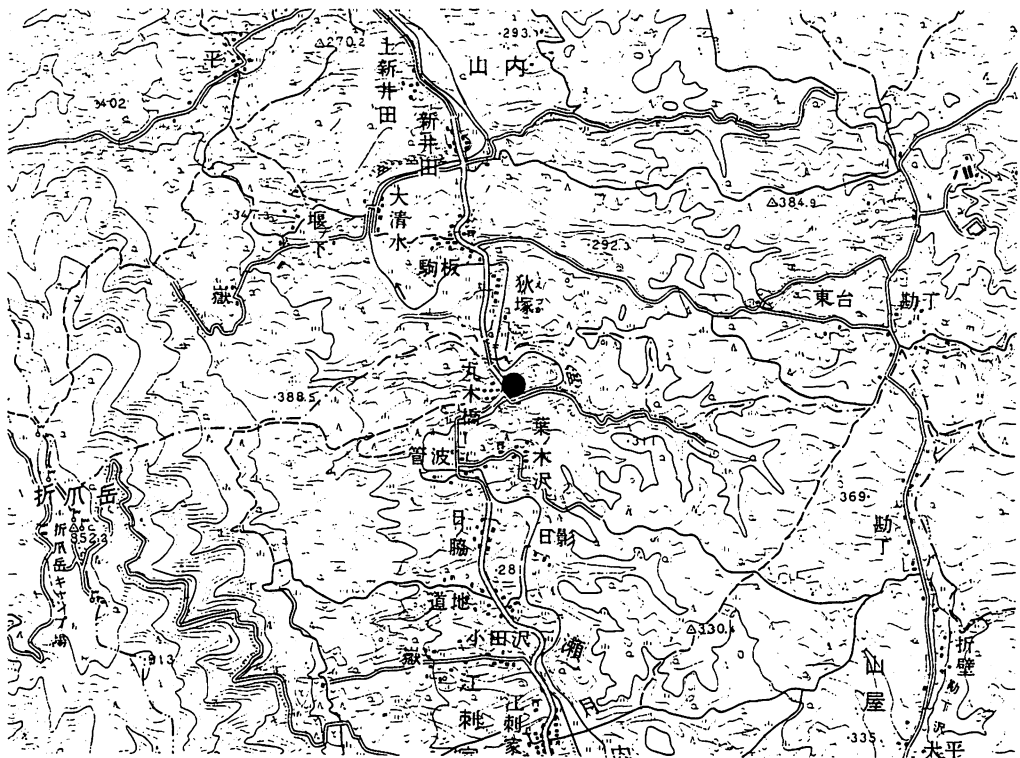
(下段左に続く)



糎口 I 遺跡遺構配置図

(3) 丸木橋遺跡

所在地 九戸郡九戸村第17地割字丸木橋33
委託者 岩手県土木部 二戸土木事務所
発掘調査期間 平成2年6月1日～8月31日
調査対象面積 1,122㎡
発掘調査面積 550㎡
遺跡番号・略号 I F92-2121・MK-90
調査担当者 藤村敏男・金子昭彦
協力機関 九戸村教育委員会



1 : 50,000 一戸

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

丸木橋遺跡は、国道340号の九戸村役場の北約7kmに位置し、瀬月内川の左岸に立地している。遺跡の標高は約221m前後である。調査区内はほぼ平坦であるが、南部の川岸部は1m位低く河床堆積層がある。現状は、宅地及び畑地である。南約600mに葉ノ木沢遺跡、南方約800mに管波I遺跡、また南方約4kmには田代遺跡がある。

2. 調査の概要

検出された遺構は調査区の北半部に奈良時代の住居跡1棟、土坑2基、陥し穴状遺構1基である。

〈竪穴住居跡〉

住居跡は、南側の3分の2が住宅建設によって失われている。推定規模は5.4×6.3mであり、カマドが北壁に設置されている。カマドの袖は、下半部が造りだして上半部は土器や礫を芯にして構築されている。特に焚口部は床面を掘り込んで石を両側に据え、天井部に石を渡している。煙道部は掘り込み式である。またこの住居跡は焼失家屋であり、床面に多量の炭化材と焼土が見られた。ほぼ完形の土師器の甕が2個体、5個体分の甕の破片、内黒有段の坏の破片1個体が出土している。埋土には十和田a火山灰がレンズ状に堆積している。

〈土 坑〉

平面形は円形である。1基の土坑は開口部径1.1m、深さ0.2mの皿状である。他の1基は開口部径1.8m、底径0.82m、深さ1.2mで断面は漏斗形にちかい。

〈陥し穴状遺構〉

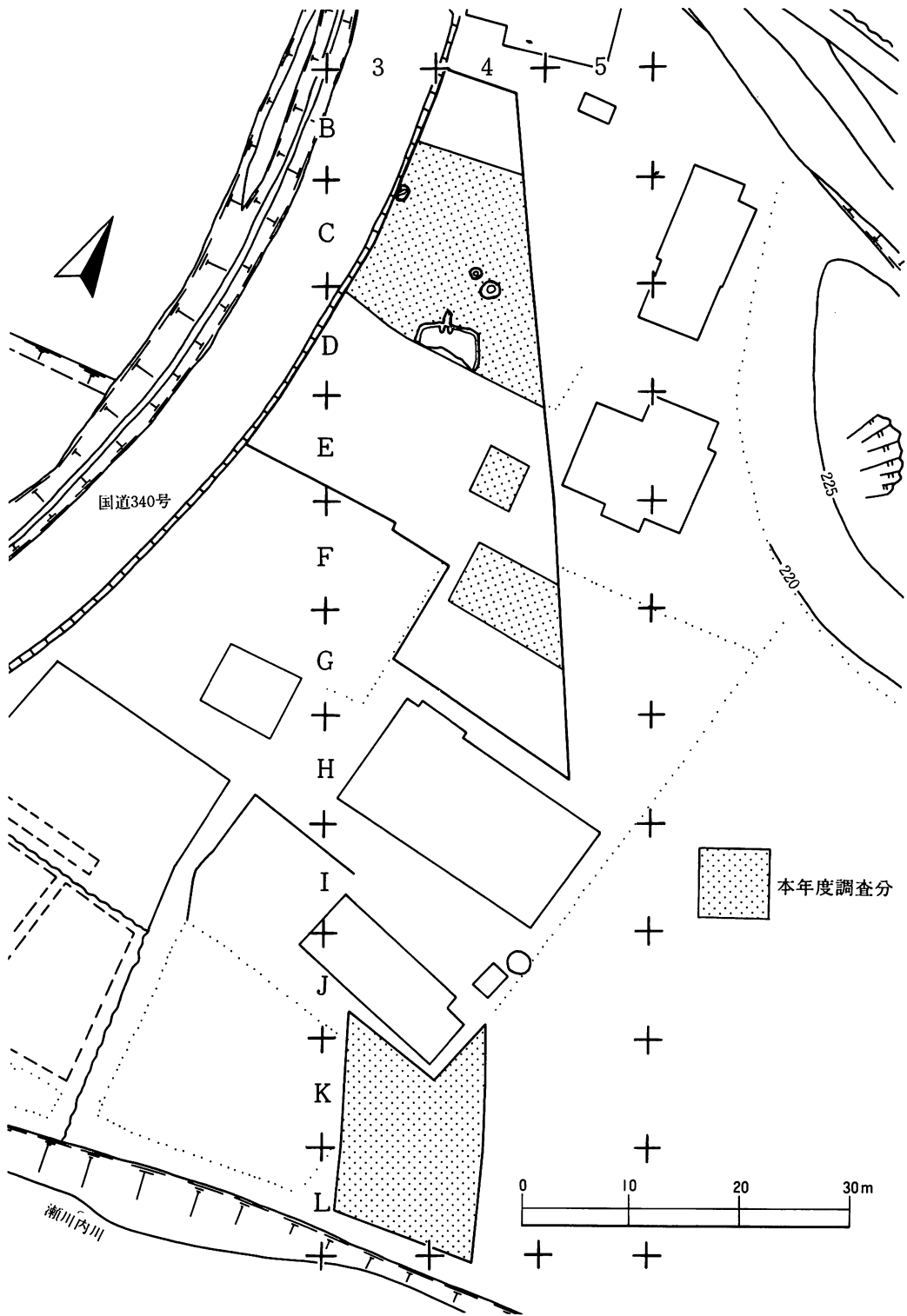
半分は調査区外に伸び、推定の長軸方向の長さは2.2m、幅は1.4m、深さは1.3mである。

〈出土遺物〉

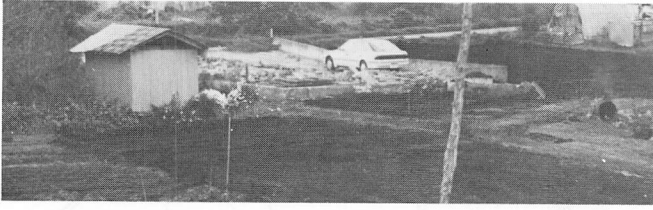
遺構外の出土土器は、縄文時代早期と後期、奈良時代のものである。縄文時代早期のものは貝殻腹縁文と刺突列文が施されたものと、貝殻条痕が施文されたものである。後者の胎土には植物繊維が少ない。縄文時代後期のものは区画沈線文を施した体部片である。奈良時代のもものは大半が甕の体部片である。

3. まとめ

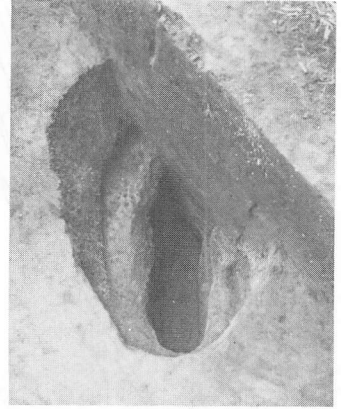
今回の調査では、奈良時代の住居跡が確認され、本遺跡は瀬月内川左岸に広がる集落の一部と考えられる。また、縄文時代の遺物や遺構は管波I遺跡や葉ノ木沢遺跡との関連をうかがわせ、人々の生活の場であったことが明らかになった。



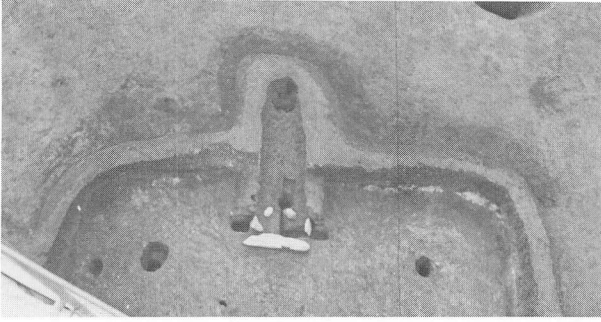
丸木橋遺跡遺構配置図



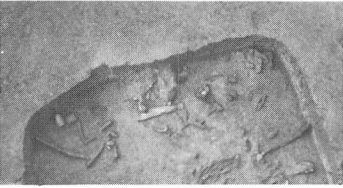
調査地全景



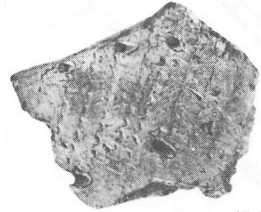
陥し穴状遺構



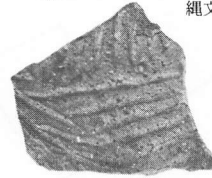
奈良時代の住居跡



同上炭化材（焼失家屋）



縄文草期土器片



2



1



3



4

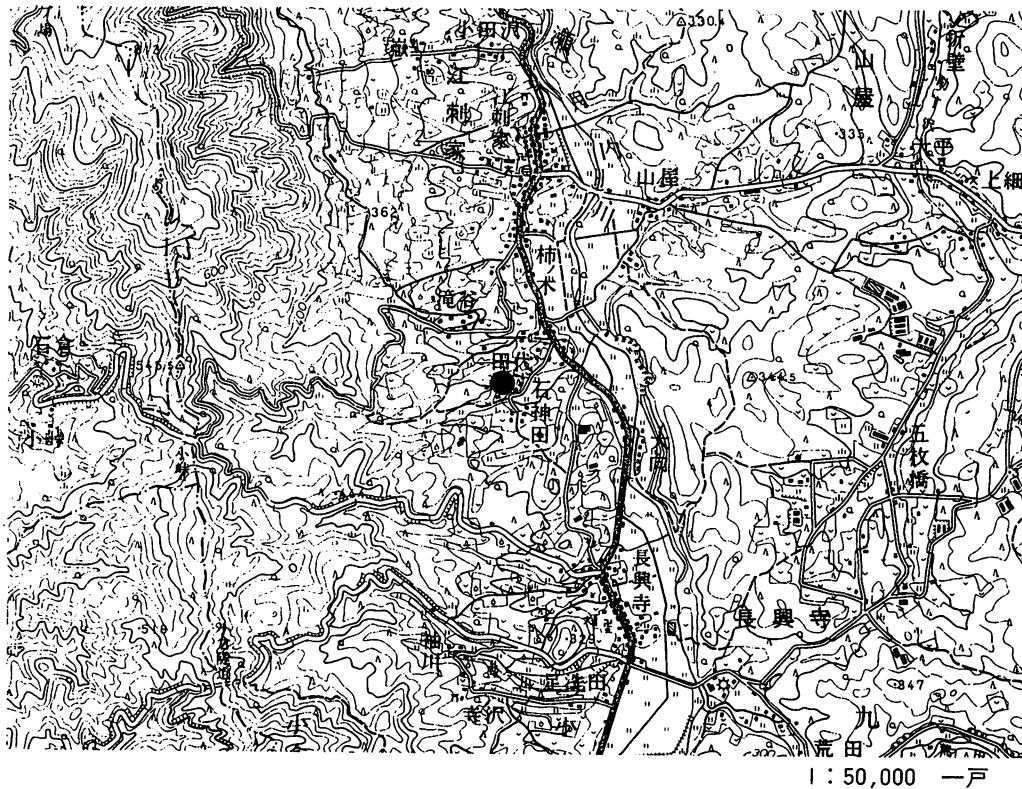
1~4
土師器

S = 1/4

丸木橋遺跡 検出遺構・出土遺物

(4) 田代 IV 遺跡

所在地 九戸郡九戸村大字江刺家第3地割字久保頭35ほか
委託者 岩手県二戸地方振興局 二戸土地改良事業所
発掘調査期間 平成2年4月10日～6月20日
調査対象面積 2,440㎡
発掘調査面積 2,440㎡
遺跡番号・略号 J F12-0141・T SIV-90
調査担当者 斎藤 實・千葉孝雄
協力機関 九戸村教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

田代IV遺跡は、八戸自動車道九戸インターチェンジの東南約500m、国道340号の西側に位置し、瀬月内川により形成された低位段丘上に立地する。標高は、調査区I区が265～276m、II区が282～293mである。現況は畑地と山林である。I区の北側には西から東に走る大きな沢があり、II区では南半部の畑地の大半が地山面まで土取りされている。周辺の遺跡では、I区の東方約150mに田代遺跡がある。

2. 調査の概要

検出された遺構は、I区から配石遺構9基、土壇3基、埋設土器遺構1基、竪穴状遺構1基、陥し穴状遺構1基、II区から竪穴住居跡状遺構1基、焼土遺構1基である。

〈配石遺構〉

調査区I区の東端で検出されている。いずれも土壇を伴い、配石を伴うもの4基、立石をもつもの5基である。そのうち円礫を積み重ねて石室状を呈するものが2基あり、重複関係にある。土壇の平面形は不整な楕円形、断面形はU字形またはややすり鉢形を呈する。規模は、長さ0.9～2.0m、幅0.7～1.6m、深さ30～50cmである。時期は、検出面及び周辺の出土遺物から縄文時代中期後葉以降と思われる。

〈土壇〉

配石遺構群が検出された区域で検出された。平面形は不整な楕円形、断面形はU字形を呈する。規模は、長さ0.7～1.8m、幅60～80cm、深さ30～50cmである。時期は、検出面及び周辺の出土遺物から、縄文時代中期後葉以降と思われる。

〈埋設土器遺構〉

深鉢形土器の口縁部が倒立し、胴部から底部が口縁部から折れて横倒しになった状態で検出された。土壇の規模は、長さ140cm、幅90cm、深さ20～25cmである。土器は大木9式併行であり、口径37cm、胴部最大径46cm、底部径16cm、器高75cmである。時期は出土した土器から縄文時代中期後葉と思われる。

〈竪穴住居跡状遺構・竪穴状遺構〉

竪穴住居跡状遺構は、大半が土取りのため削平されているため、その全容は不明であるが、残存状況から平面形が不整な隅丸方形を呈し、規模は1.4×3.6mである。炉跡は検出されなかった。

竪穴状遺構は、斜面上に構築されているため、遺構の北側が流失しており、南壁と床面の一部を残すのみである。残存状況から、平面形が不整な隅丸方形、規模は2.7×3.1mである。炉跡及び柱穴は検出されなかった。

時期については、いずれも不明である。

〈陥し穴状遺構・焼土遺構〉

陥し穴状遺構は、畑地開削により開口部が削平されているため、その全容は不明であるが、残存状況から、平面形が溝状、断面形がY字状を呈するものと思われる。規模は、長さ約3.2m、幅約25～40cm、深さ約60～70cm、長軸方向は北西―南東である。時期は出土遺物はないが、形状及び検出面から縄文時代と思われる。

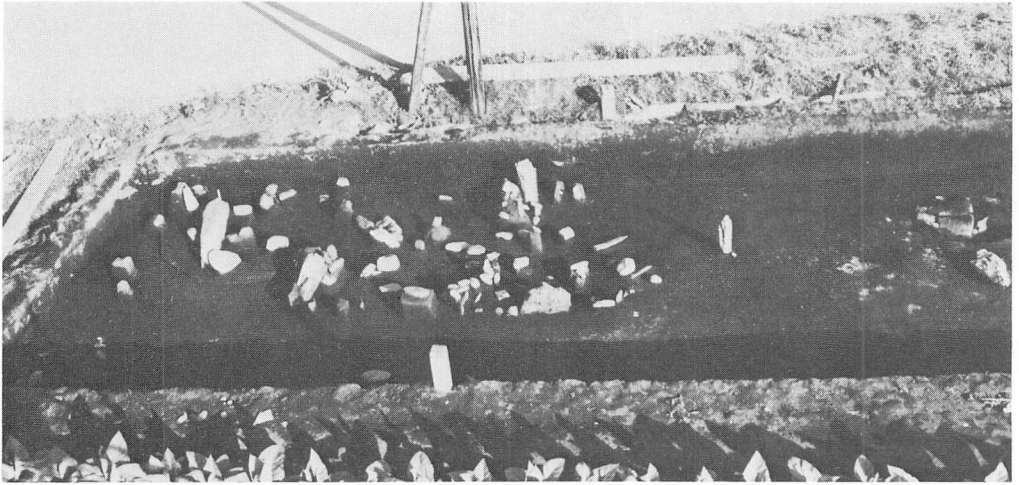
焼土遺構は、平面形が不整な楕円形を呈し、約70×130cmの範囲に広がる。焼土そのものは比較的締まっており、少量の炭化材が出土している。時期は不明である。

〈出土遺物〉

遺物の出土量は少ないが、I区では配石遺構群の周辺から縄文時代中期中葉から後葉の土器、II区では南端の平坦部から縄文時代早期の土器を主体に出土している。遺構内からの出土遺物では、立石をもつ配石の埋土中から滑車形の土製耳飾り1点、埋設土器遺構の胴部上位の埋土中面と下面から硬玉製垂飾りが各1点出土している。また、竪穴住居跡状遺構の埋土上面から縄文時代早期の土器片1点、竪穴状遺構の埋土上面から縄文土器片と石鏃が1点ずつ出土している。

3. まとめ

調査の結果、I区は縄文時代中期後葉以降の配石遺構と埋設土器遺構などが検出されたことから、祭祀に関連する場であったことが確認された。II区は縄文時代早期の遺物散布地であることが明らかになった。住居跡など集落としての資料を得るまでには至らなかったが、これらの遺構と関連をもつ集落が近郊に存在していると思われる。



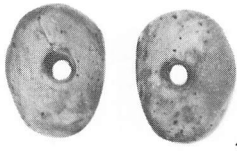
配石遺構群



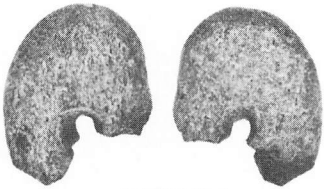
硬玉製垂飾り出土状況



2
硬玉製垂飾り

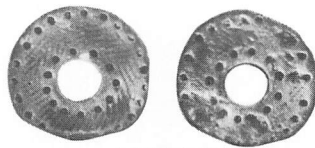


3



石製垂飾り

4



土製耳飾り

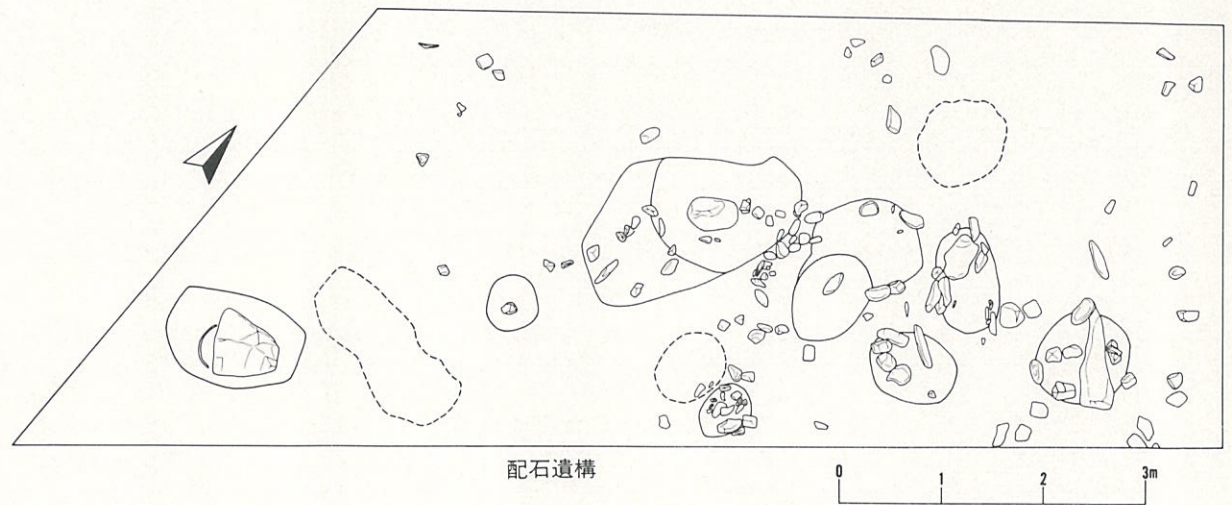
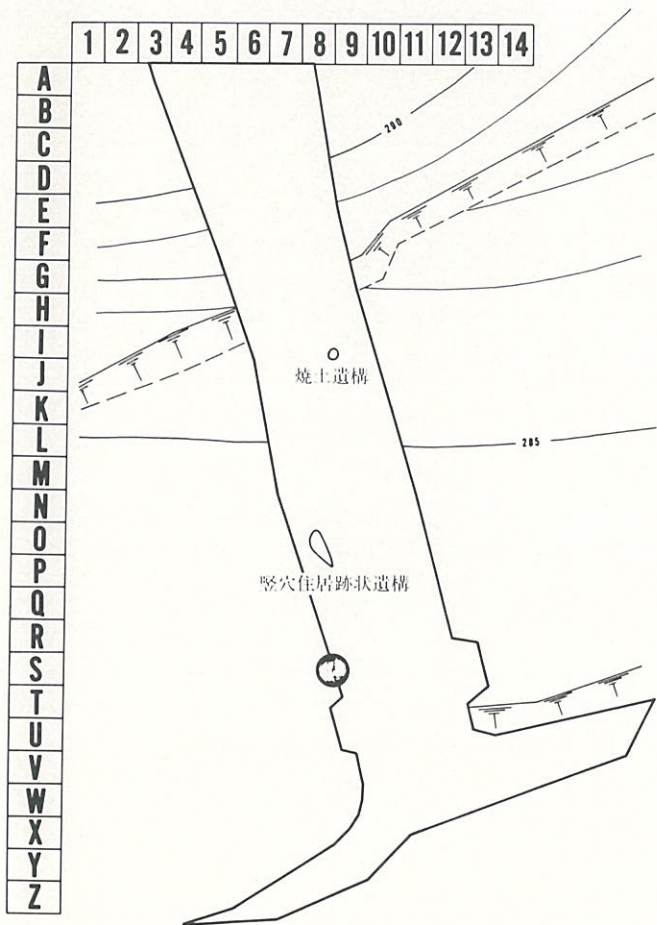
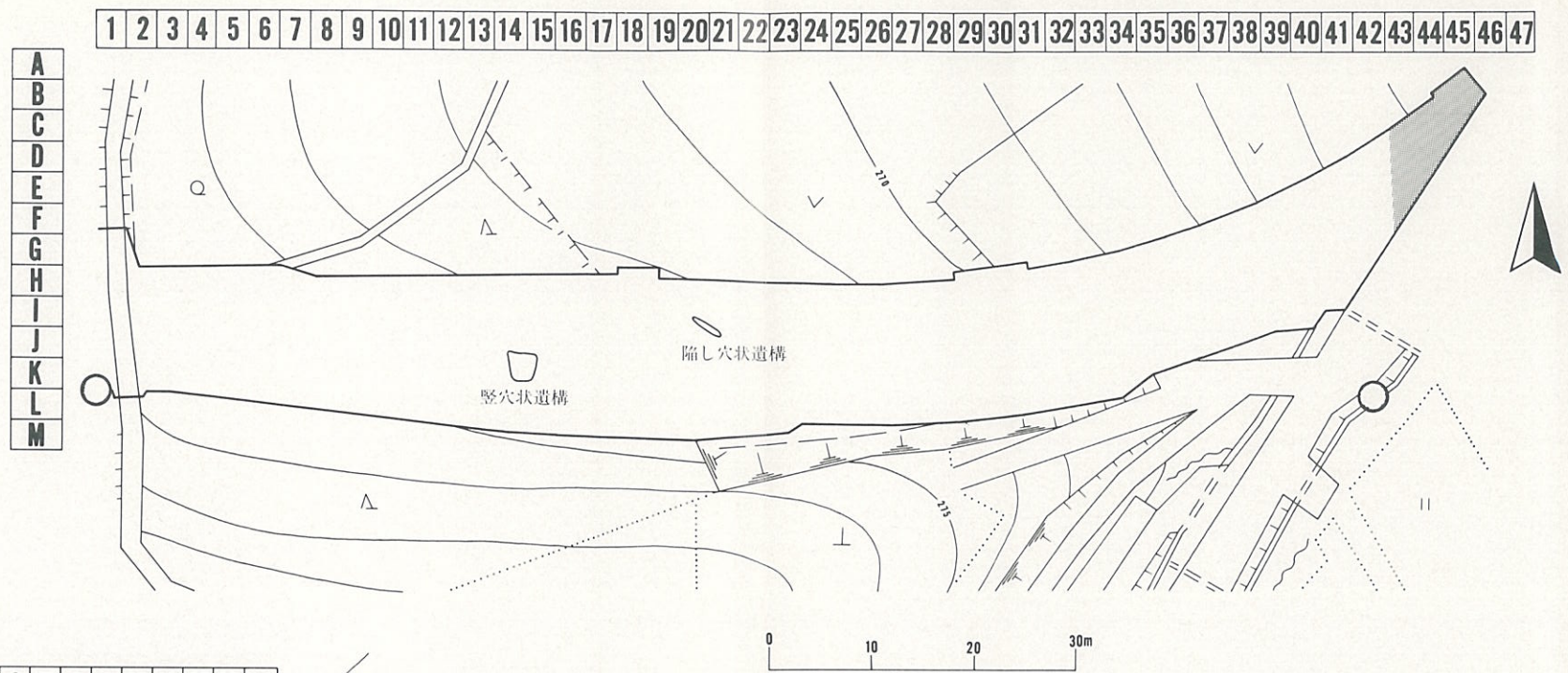
5



1
埋設土器

1 S = 1/6
2 ~ 5 S = 2/3

田代Ⅳ遺跡 検出遺構・出土遺物



田代IV遺跡遺構配置図

(5) ^{かみやぎた}上八木田Ⅲ遺跡

所在地 盛岡市新庄字上八木田48ほか

委託者 岩手県競馬組合

発掘調査期間 平成2年4月12日～5月31日

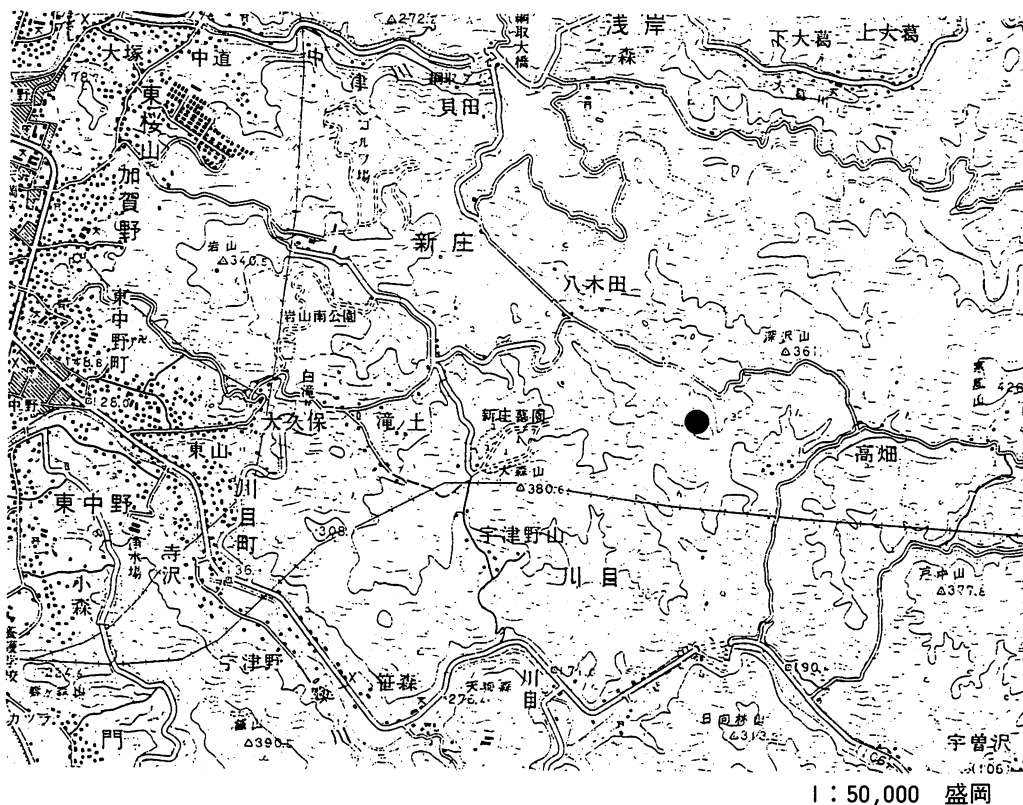
調査対象面積 3,320㎡

発掘調査面積 3,320㎡

遺跡番号・略号 LE18-1164・KYⅢ-90

調査担当者 平井 進・相原伸裕

協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上八木田Ⅲ遺跡は、盛岡市役所の東約5km、網取ダム堰堤の南約2.5kmに位置し、北上山地の西縁部に立地している。遺跡の標高は280～290mである。上八木田遺跡群は中津川に注ぐ通称八木田沢が開析した幅の狭い谷底平野とそれに接する山地縁辺に立地するため、地形的には八木田沢に注ぐ小さな沢筋ごとに独立した遺跡となっている。本遺跡も小沢の水源付近に発達したもので、山間の緩斜面に立地する。現状は山林である。

2. 調査の概要

発見された遺構は平安時代の竪穴住居跡1棟、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑8基、土器埋設遺構1基、陥し穴状遺構1基、焼土遺構1カ所等である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の住居跡は3分の1が遺存している。平面形は円形と思われる。推定直径5mである。焼失しているが、柱材や板材として識別し復元できるほどには遺存していない。時期は縄文時代後期である。

平安時代の竪穴住居跡はほぼ方形で、規模は4×3.5mである。カマドは南壁のやや東寄りに設置されている。柱穴は中央に1基検出された。十和田a降下火山灰と見られる火山灰が床面直上に見られる。

〈土 坑〉

土坑8基のうち、フラスコ状土坑が1基で、他はビーカー状土坑である。後者は直径が1mを越える中規模のもの2基、1m未満の比較的小さなもの5基とに分けられる。中規模の土坑には焼土や土器が投げ込まれており、縄文時代後期のものであるが、小規模のものは検出面からみれば中期以前の可能性もある。

〈陥し穴状遺構〉

平面形は溝状であり、規模は長さが1.8m、幅は0.6m、深さ40cmである。底部は斜面上方に向かって急激にせり上がる。

〈焼土遺構〉

焼土遺構は5カ所であるが、他に廃棄された焼土3カ所が検出された。5カ所の焼土遺構のうち1カ所は縄文時代、3カ所は平安時代のものである。厚さはいずれも1～2cmである。

〈土器埋設遺構〉

本遺構の上部には廃棄された焼土が大量にのることや、沢に落ち込む際であることから、土器埋設炉をもった住居跡であった可能性もある。しかし、掘り込みや柱穴は発見できなかった。埋設されていた土器は粗製の深鉢で、口縁部、底部とも打ち欠かされている。開口部の径25cm、

底部の径12.5cm、深さ19cmである。縄文時代後期～晩期の遺物と思われる。

〈出土遺物〉

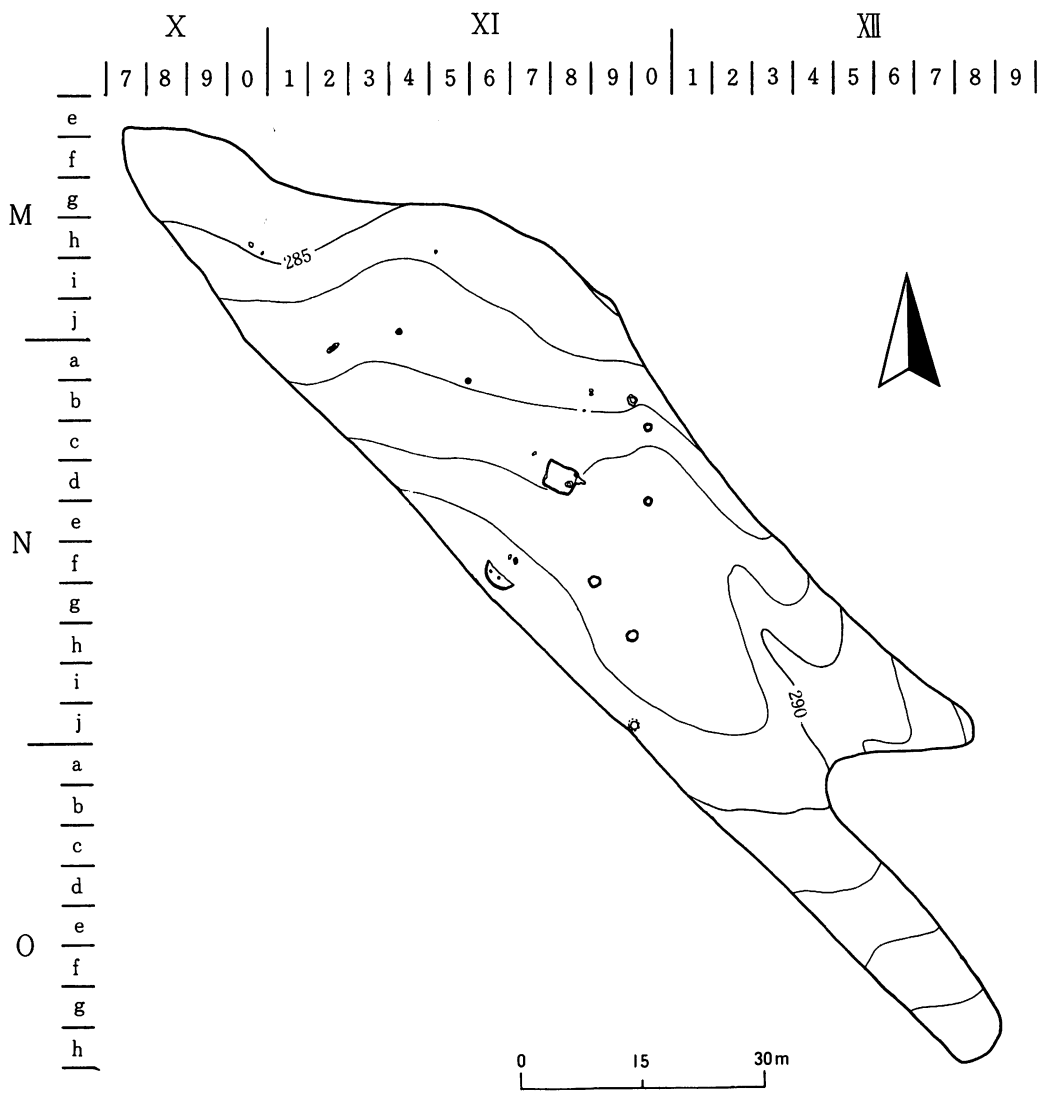
出土した遺物は、中型の遺物収納コンテナ10箱である。数量的には縄文時代後期の遺物が大半を占める。完形のものはないが、篋状または棒状工具を使用した沈線文土器と磨消縄文が主で、瘤付き土器は見られない。他には、縄文時代晩期の土器と弥生土器が少量出土している。

土師器はロクロ使用の甕と坏が出土した。遺構外から出土したものも若干あるが、ほとんどは住居跡から出土した。須恵器は壺である。鉄製品は1点で、刀子と思われる。カマドから羽口が1点出土したが、支脚に転用されていたものである。

石器・石製品は非常に少ない。器種は石鏃、石篋、磨石磨製石斧、石棒等である。

3. まとめ

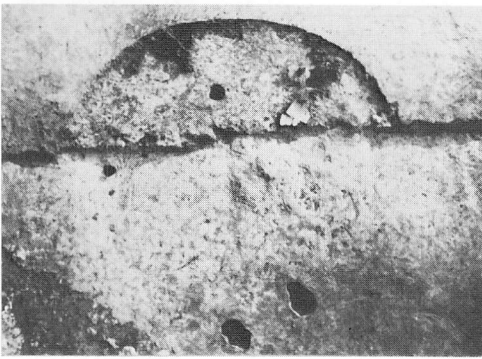
今回の調査で、上八木田II遺跡は、縄文時代と平安時代の複合遺跡であることが判明した。遺跡の保存状態がきわめて悪かったにもかかわらず、比較的多量の遺物が集中的に出土したことや、廃棄された焼土も含めて焼土遺構が多く検出されたことは、確認された遺構から想定されるより大規模な遺跡であったことを示唆するものと思われる。平安時代の住居跡は十和田a降下火山灰と思われる灰白色火山灰に覆われることから、時期を限定できる良好な資料となるものである。



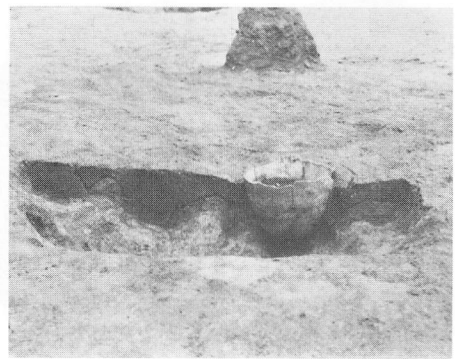
上八木田Ⅲ遺跡遺構配置図



平安時代の竪穴住居跡

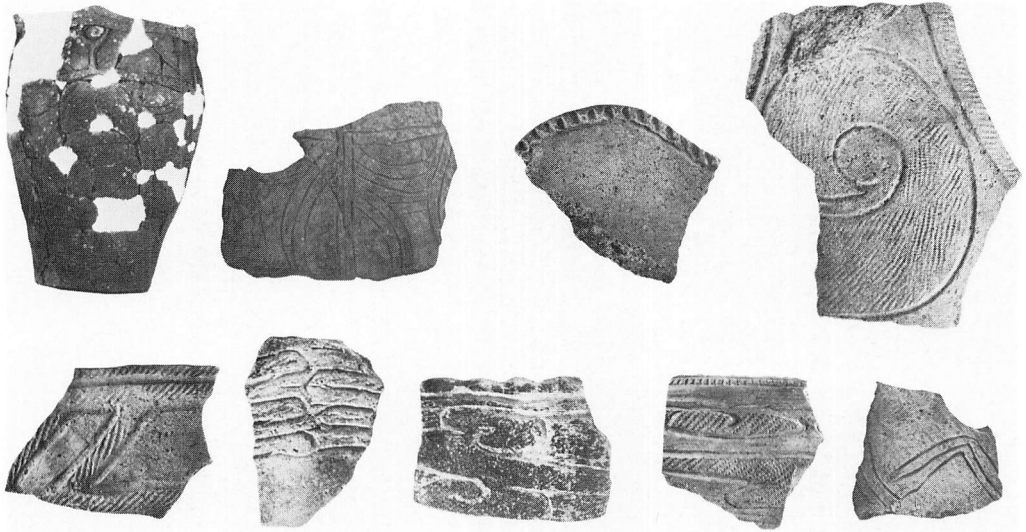


縄文時代の竪穴住居跡



土器埋設遺構

上八木田Ⅲ遺跡 検出遺構



縄文・弥生土器

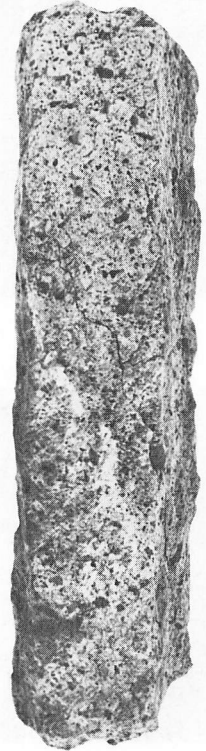


土師器



(刀子) 鉄器

石器類

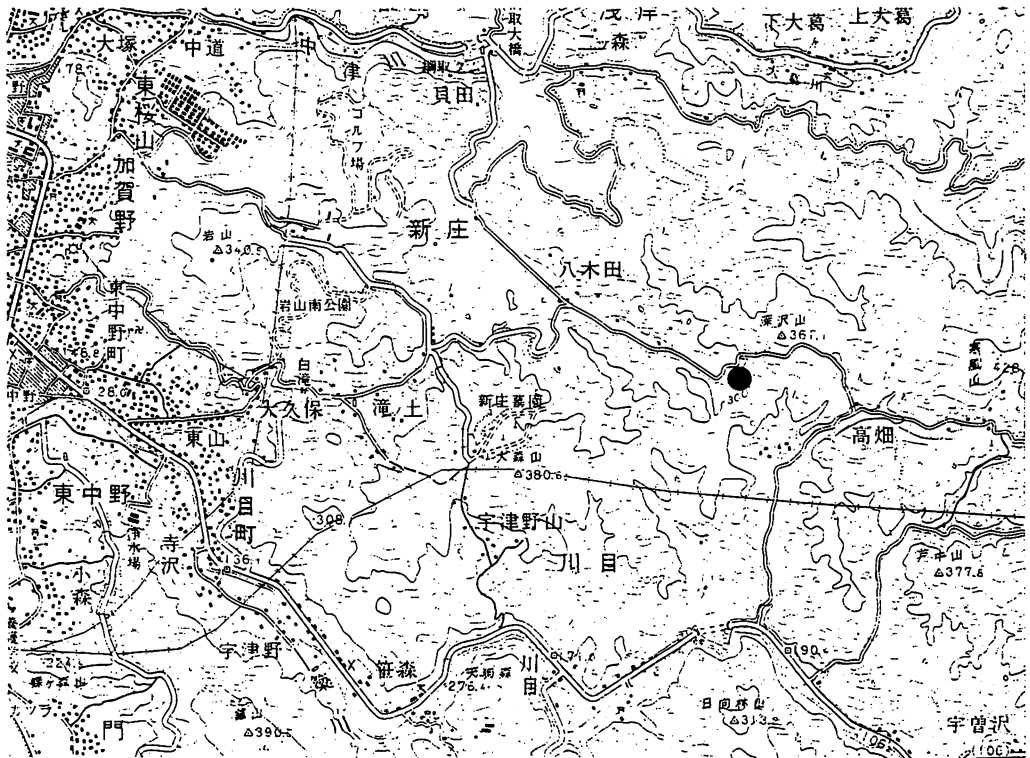


※縮尺不定

上八木田Ⅲ遺跡 出土遺物

かみやぎた
(6) 上八木田IV遺跡

所在地 盛岡市新庄字上八木田49-1ほか
委託者 岩手県競馬組合
発掘調査期間 平成2年6月1日～7月31日
調査対象面積 3,180㎡
発掘調査面積 3,180㎡
遺跡番号・略号 LE18-1157・KYIV-90
調査担当者 平井 進・相原伸裕
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上八木田IV遺跡は、盛岡市役所の東約5km、綱取ダム堰堤の南約2.5kmに位置し、北上山地の西縁部に所在する。遺跡の標高は280～290mである。

上八木田遺跡群はいずれも中津川に注ぐ通称八木田沢が開析した幅の狭い谷底平野とそれに接する山地縁辺に立地し、山間の緩斜面の谷頭付近に立地している。

2. 調査の概要

発見された遺構は平安時代の竪穴住居跡4棟、縄文時代の土坑4基、墓壇1基、陥し穴状遺構3基、焼土遺構1カ所である。

〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡4棟のうち、平面形が確認されたものは2棟、大きく削平され、わずかにカマドの燃焼部に形成された焼土と若干の遺物により住居跡と確認できたものが2棟である。

平面形が確認できた竪穴住居跡のうち、1棟は5m四方のやや大きいもの、他の1棟は3m四方の小規模のものである。大きい住居跡は中央の大部分を試掘によって破壊され、消滅しているため詳細は不明であるが、カマドは南隅に南西向きに設置されている。柱穴は北東壁側と南西壁側に各3基検出された。いずれも割材を使用している。十和田a降下火山灰と見られる火山灰が小ブロック状となって貼床内に見られる。焼失しているが、炭化材は原形をとどめているものはほとんどなく、炭化材の小破片と焼土粒がみられる。本住居跡から出土した遺物は土師器、あかやき土器、須恵器、鉄製品等である。中でも鉄製品は太刀、斧、紡錘車、穂摘み具(?)各1点と豊富である。穂摘み具を除けば、いずれも遺存状態は良好である。ただし、太刀は身部が破損し、切っ先側は不明である。

小規模の住居跡は南壁中央にカマドを設置しているが、ほとんどが流失している。埋土内に十和田a降下火山灰と思われる火山灰が見られる。柱穴はない。周溝が回る。焼失している。

カマド跡のみ検出された2住居跡は、それぞれカマドの構築土や貼床の一部が確認できただけである。

〈土坑・墓壇〉

縄文時代の土坑4基のうち、フラスコ状土坑1基、袋状土坑1基、ピーカー状土坑2基である。いずれも小規模のものである。フラスコ状土坑は風倒木痕の跡につくられていたもので、底部中央に間仕切りがみられる。ピーカー状土坑2基のうち比較的大きい方は底部径0.9m、深さ1mである。墓壇1基は開口部で1.4×0.8mの楕円形、埋土は黒色土と褐色土の混土で、粘土質の極めて硬いものである。遺物はない。

〈陥し穴状遺構〉

3基とも平面形はいずれも溝状である。うち2基は長軸が3mを越え、深さ90cm程であるが、1基は幅が狭く深さも僅か20cm程である。構築途中で放棄されたものと思われる。逆茂木痕等は見られない。相伴遺物はないが、形状等から縄文時代のものである。

〈焼土遺構〉

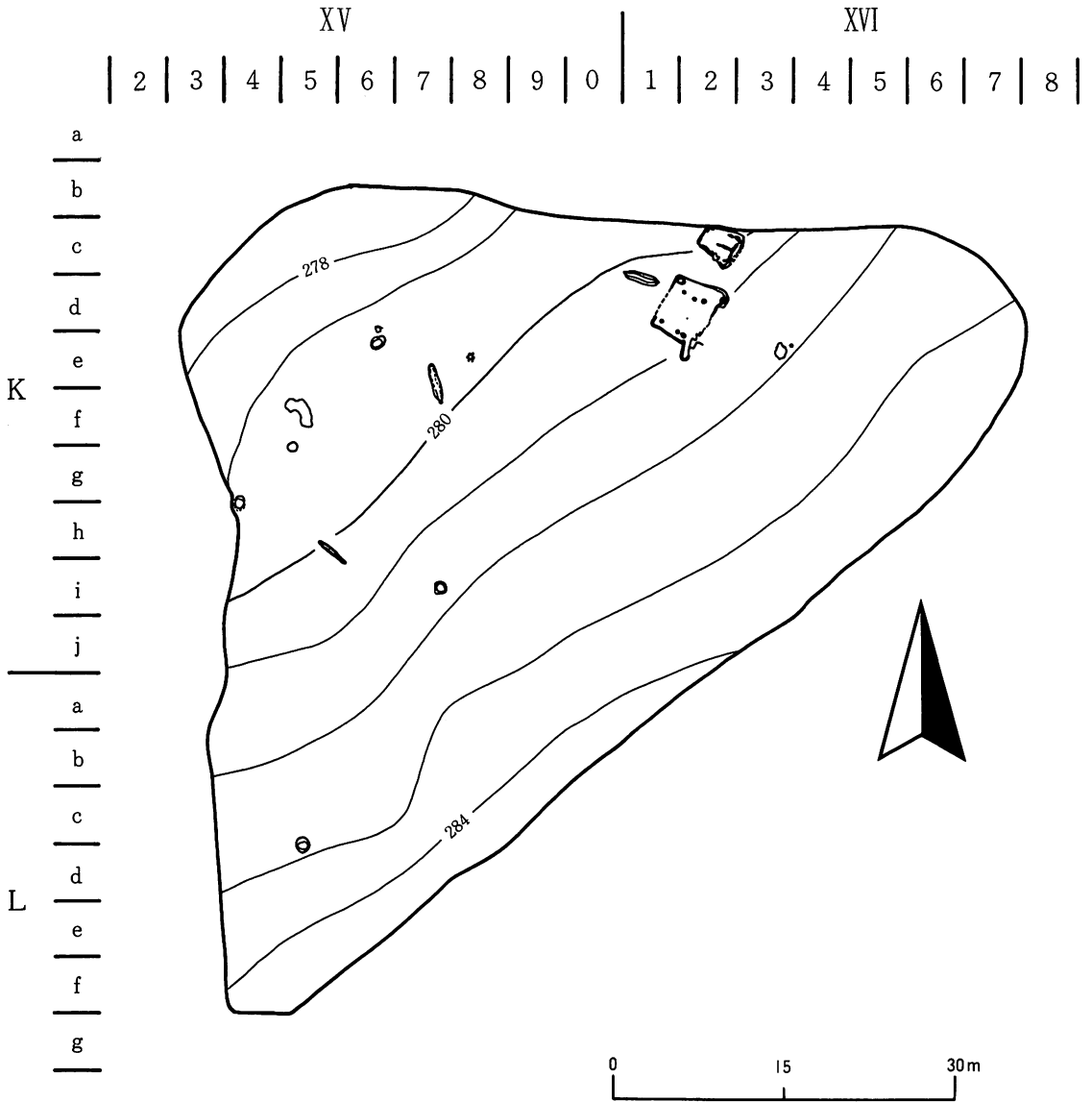
焼土遺構は検出した層位から見て、縄文時代のものである。直径40cm、厚さ5cmである。

〈出土遺物〉

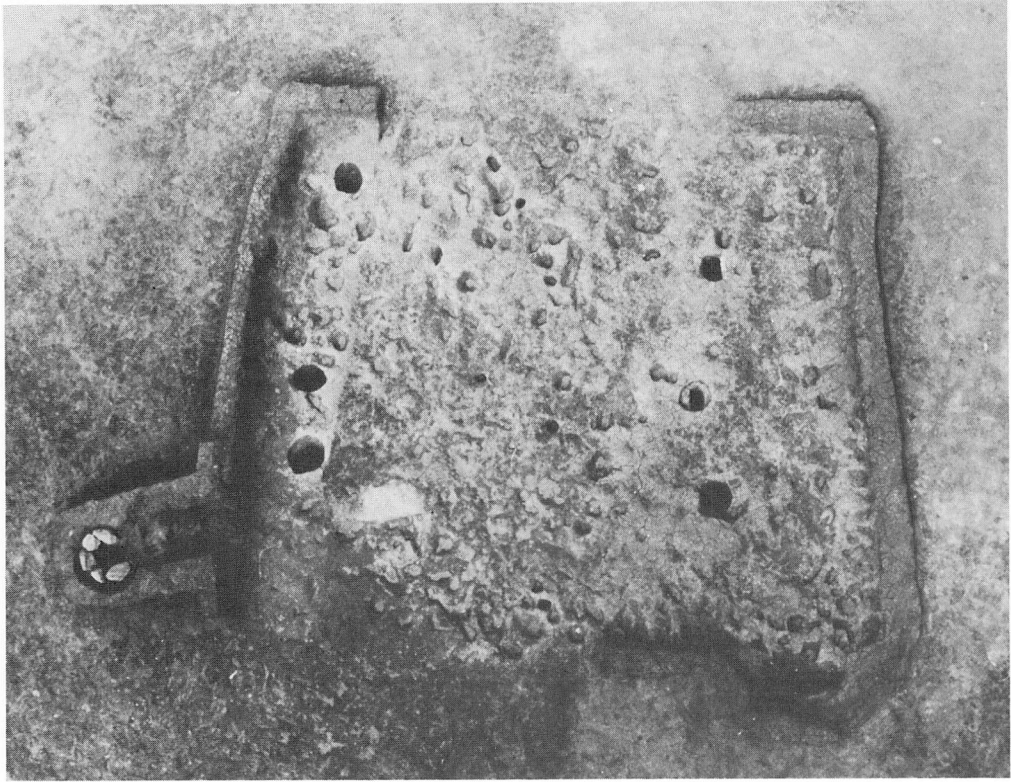
出土遺物の総量は中型の遺物収納コンテナ6箱である。縄文土器は、後期、晩期のものである。石器は磨製石斧、石匙、石皿、砥石等が出土している。土師器、あかやき土器、須恵器等は住居跡ないし住居があったと思われる所からのみ出土している。器種は坏、甕、壺である。いずれもロクロ使用のもので、坏の底部は回転糸切り、無調整である。鉄製品は一つの住居跡から一括して出土したが、鉄滓や坩堝等は出土していない。

3. まとめ

今回の調査で上八木田IV遺跡は縄文時代には狩場や食料貯蔵の場として使用され、平安時代には集落として利用されていたことが判明した。縄文時代は出土遺物から後期が中心で上八木田III遺跡と時期差はほとんどない。平安時代の住居跡は灰白色火山灰の堆積状況から、少なくとも2時期に分けられる。また、住居跡から太刀を出土した例は少なく、遺存状態も良好であることから、相伴遺物との関連を検討することによりきわめて貴重な資料を得ることができると思われる。しかも、遺構外からは奈良時代のものと思われる小鉢が出土していることもあり、出土遺物に詳細な検討を加えることによって、当該時期の分類に良好な資料となるであろう。



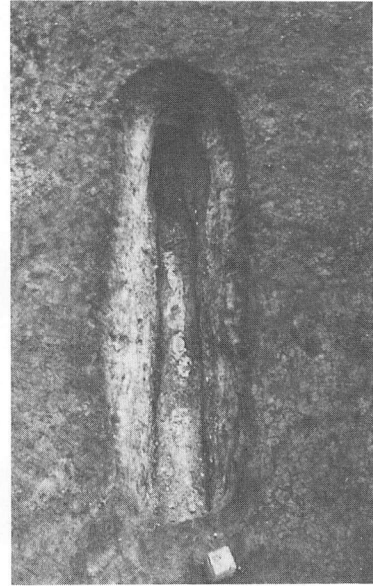
上八木田IV遺跡遺構配置図



平安時代の竪穴住居跡

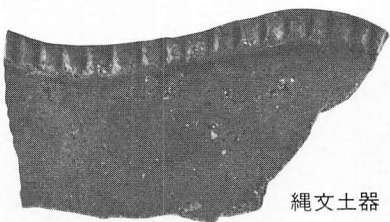


平安時代の竪穴住居跡



縄文時代の陥し穴状遺構

上八木田Ⅳ遺跡 検出遺構



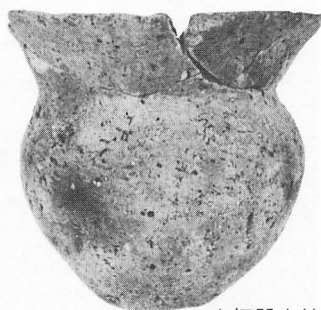
縄文土器



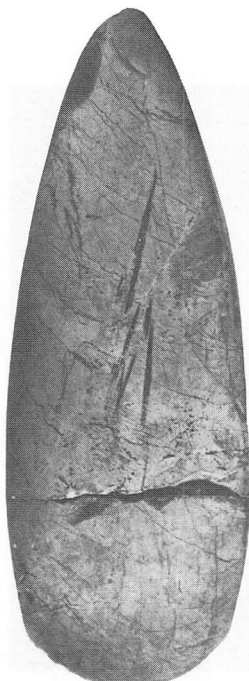
土師器坏



土師器壺



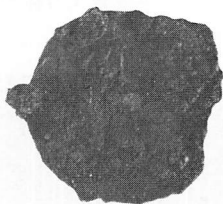
土師器小鉢



石斧



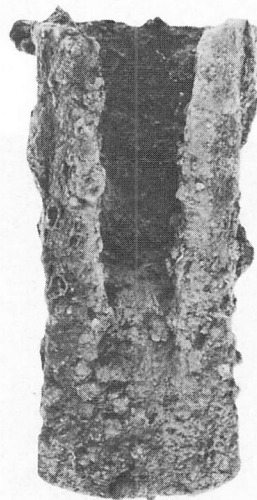
石礫



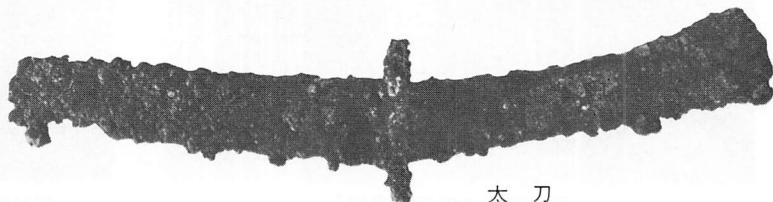
紡錘車



穂積具



鉄斧



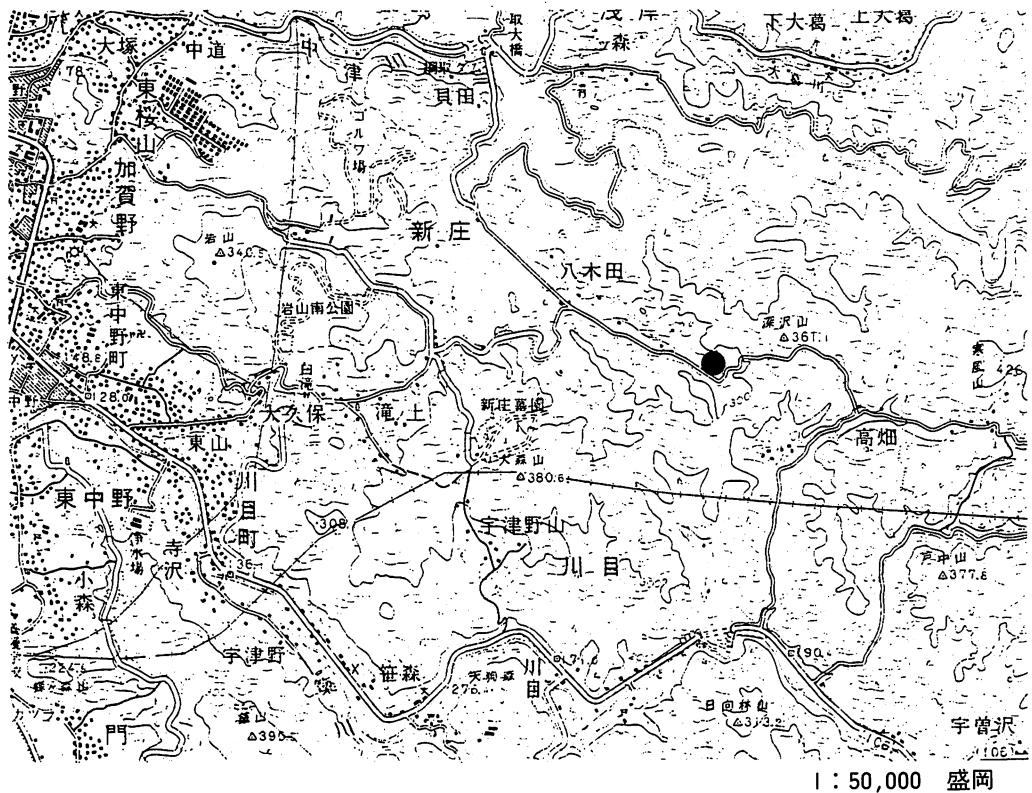
太刀

※縮尺不定

上八木田V遺跡 出土遺物

(7) ^{かみやぎた}上八木田 V 遺跡

所在地 盛岡市新庄字上八木田49-2ほか
委託者 岩手県競馬組合
発掘調査期間 平成2年7月16日～11月7日
調査対象面積 7,590㎡
発掘調査面積 7,590㎡
遺跡番号・略号 LE18-1126・KYV-90
調査担当者 平井 進・斉藤 實・千葉孝雄・相原伸裕
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

上八木田V遺跡は、盛岡市役所の東約5km、網取ダム堰堤の南約2.5kmに位置し、北上山地の西縁部に所在する。遺跡の標高は275～290mである。

上八木田遺跡群はいずれも中津川に注ぐ通称八木田沢が開析した幅の狭い谷底平野とそれに接する山地縁辺に立地している。上八木田V遺跡は北西斜面とその裾野に立地し、北・東・南から流れ出す3本の沢が走る。

2. 調査の概要

発見された縄文時代の遺構は竪穴住居跡5棟、土坑11基、炉跡及び焼土遺構45カ所である。遺物は弥生土器も含めて、土器・土製品が中型のコンテナ45箱、石器・石製品は約680点出土した。平安時代の遺構は竪穴住居跡1棟である。遺物は土師器、須恵器、あかやき土器等が少量出土した。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡5棟のうち全体が残っていたものは3棟、斜面の下方が流失していたもの2棟である。形状は小判形のもが1棟で、他は円形である。規模は大型のものではなく、直径が3～4m程度のものである。土器埋設炉、石囲炉、地床炉、炉を持たないもの各1棟、不明なもの1棟である。共伴遺物から時期を決定できるものは土器埋設炉を有する1棟で、縄文時代晩期である。石囲炉を有する住居跡には周溝が回る。

平安時代の竪穴住居跡は1棟である。カマドを含む半分以上が試掘によって失われたため、詳細は不明な点が多い。1辺が約4.4mの方形で、検出面からの掘り込みは最大40cmである。柱穴はなく、カマド脇と中央に土坑がある。カマド脇の土坑は開口部の径1×1.2m、深さ30cmの楕円形であるが、壁側はオーバーハングする。中央の土坑は開口部の径1.1m、深さ30cmのピーカー状のものである。カマドは南東隅に設置され煙道はくり抜き式で作られている。

〈土 坑〉

土坑は11基検出された。開口部の径が1m内外の中・小規模のものである。平面形はおおむね円形、断面形はピーカー状ないし皿状のものが多い。

〈陥し穴状遺構〉

溝状のもが3基で斜面に沿って連続する。最大のもは長軸が4.5m、深さ60cmである。逆茂木跡はない。

〈炉跡・焼土遺構〉

炉跡及び焼土遺構は45カ所検出された。炉跡は石囲炉5基である。他は所謂焼土遺構としたが、遺物の出土状況からみると地床炉だったものが多いと思われる。遺物からみると少なくと

も6期に大別されるが、層位的にとらえることは不可能である。焼成は比較的良好で焼土の厚さが2～3cmのものが多い。

〈出土遺物〉

縄文土器は早期から晩期まで出土しているが、なかでも前期後葉、後期前葉、晩期前葉のものが多い。弥生土器は谷起島式と赤穴式、土師器はロクロ使用の坏とロクロ不使用の甕である。須恵器は2～3点の出土である。石器は断面形が三角形となる特殊磨石や石斧のような礫石器が多い。剥片石器では石匙が多く、石鏃が少ない。

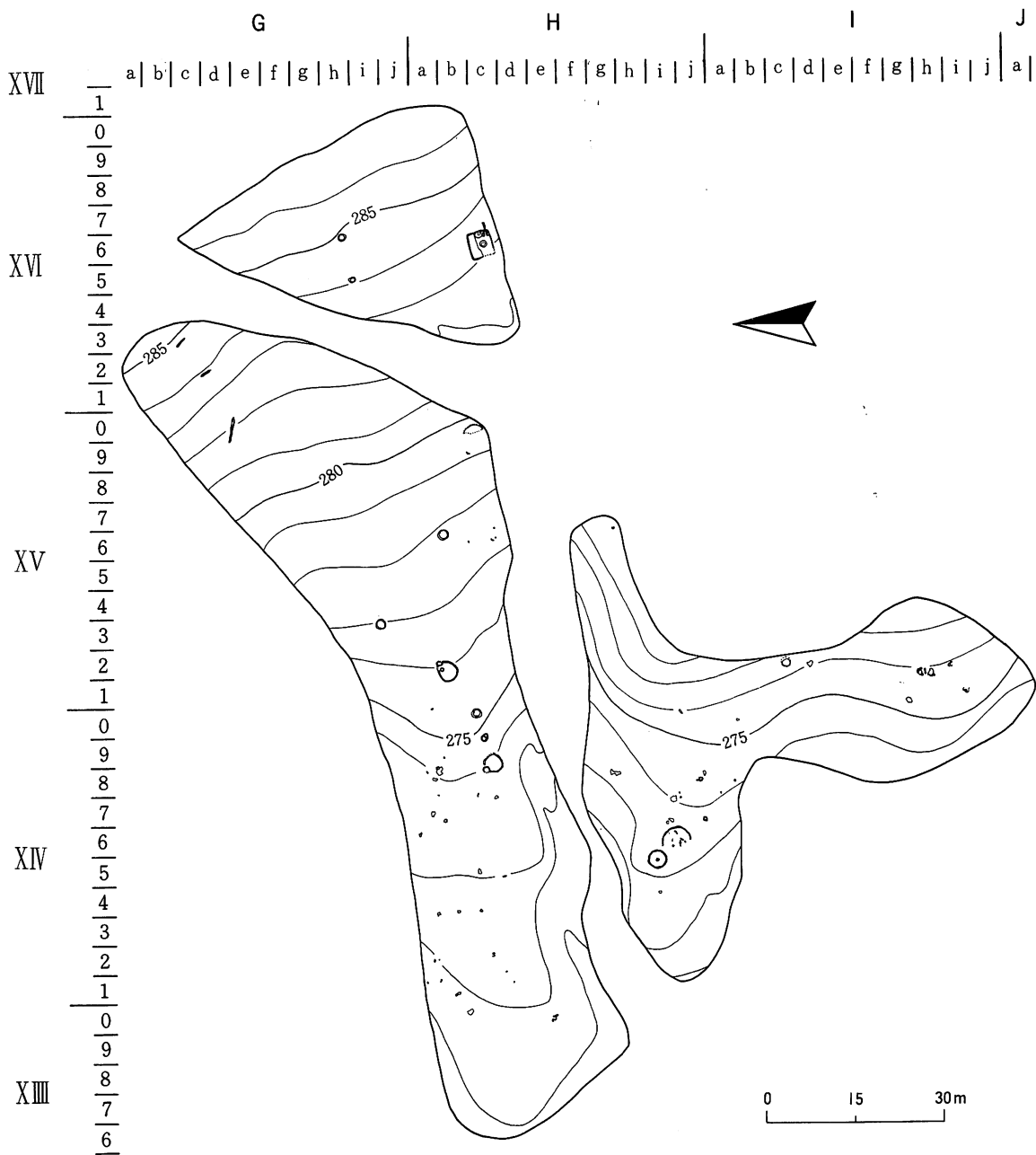
これらの遺物は表土層から30cmまでの黒褐色土中に混然となって包含されており、層位的に分離できない。しかし、縄文土器はある程度まとまって復元可能な状態で出土するものもある。

3. まとめ

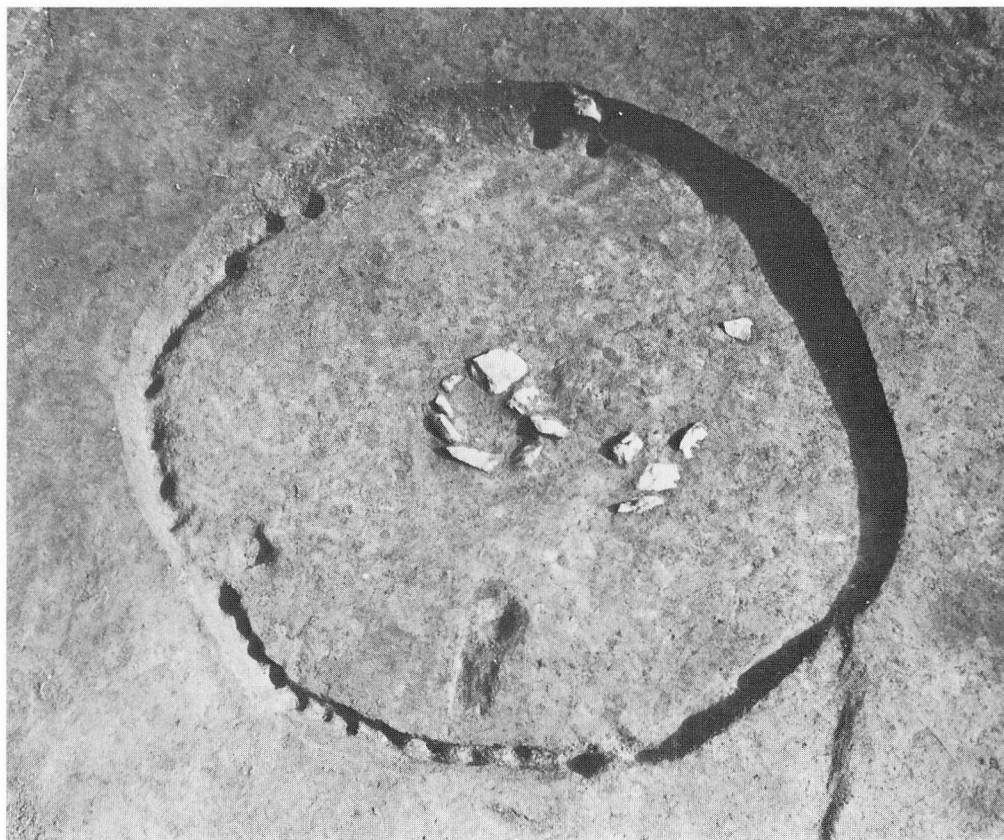
本遺跡は上八木田Ⅲ・Ⅳ遺跡と同様、縄文時代と平安時代の複合遺跡である。

縄文時代についてみると、遺物が多量に出土した地点は、焼土遺構や竪穴住居の分布と一致しており、流入堆積した包含層ではない。キャンプ・サイトの生活の場として利用されていたと考えられる。

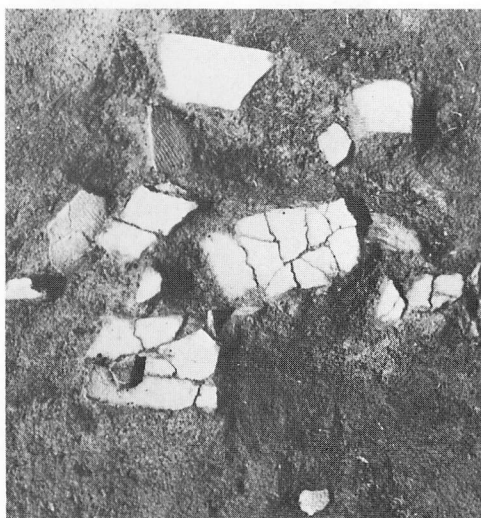
平安時代の遺構は竪穴住居跡1棟である。出土遺物は少なく、カマドから土師器の甕と坏の破片が少量出土したのみである。坏の底部は回転糸切り無調整で、上八木田Ⅲ・Ⅳ遺跡の遺構とそれほど大きな時期差は考えられない。



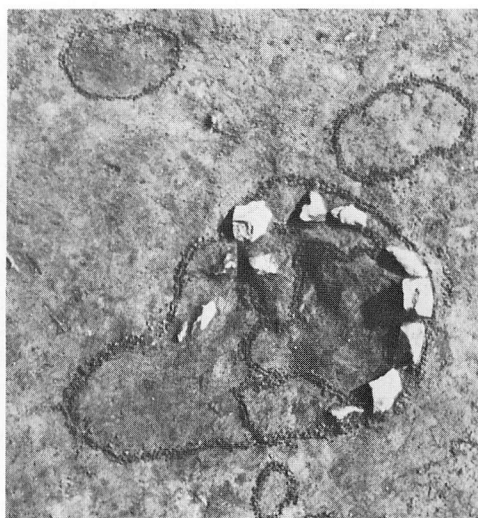
上八木田V遺跡遺構配置図



縄文時代の竪穴住居跡



縄文土器出土状況

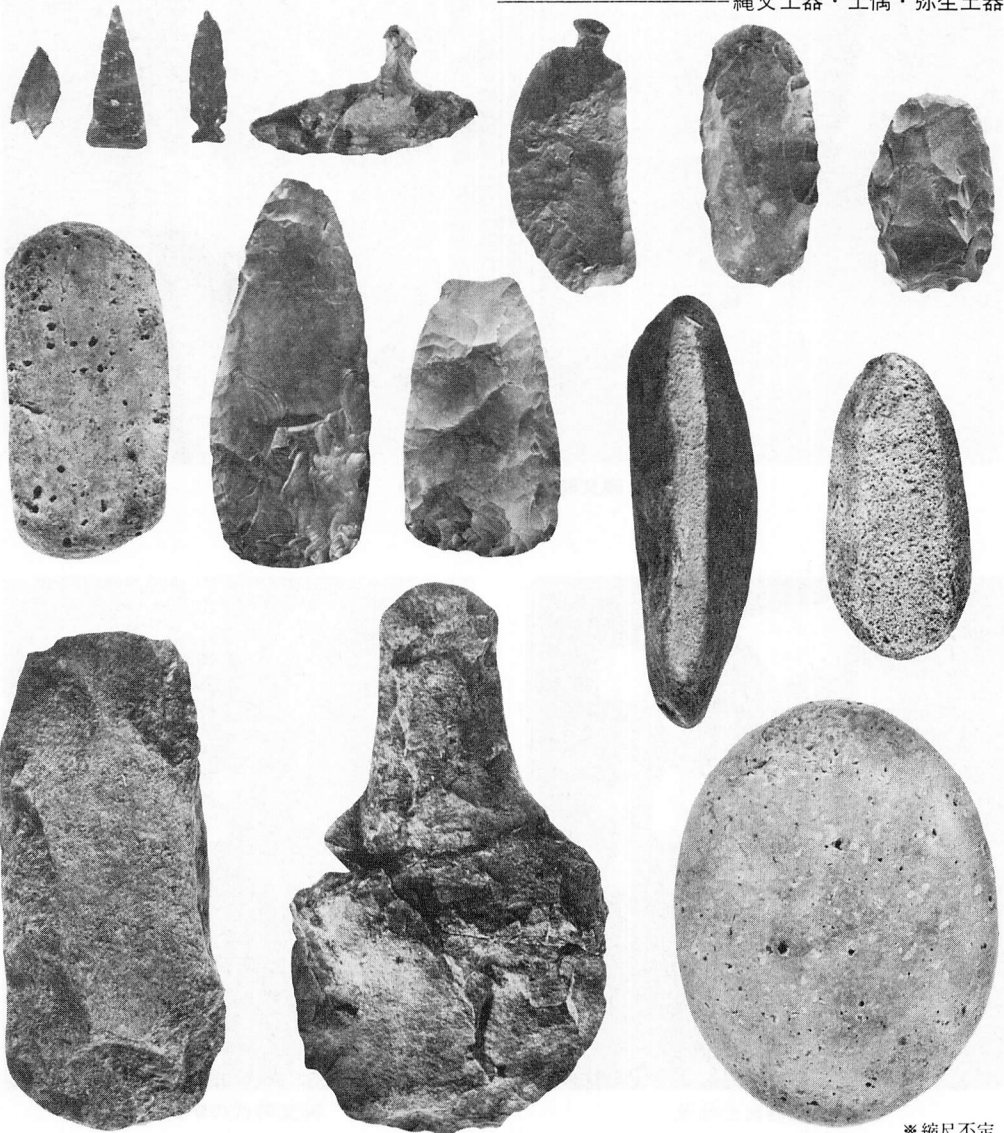


縄文時代の炉跡

上八木田V遺跡 検出遺構



繩文土器・土偶・弥生土器



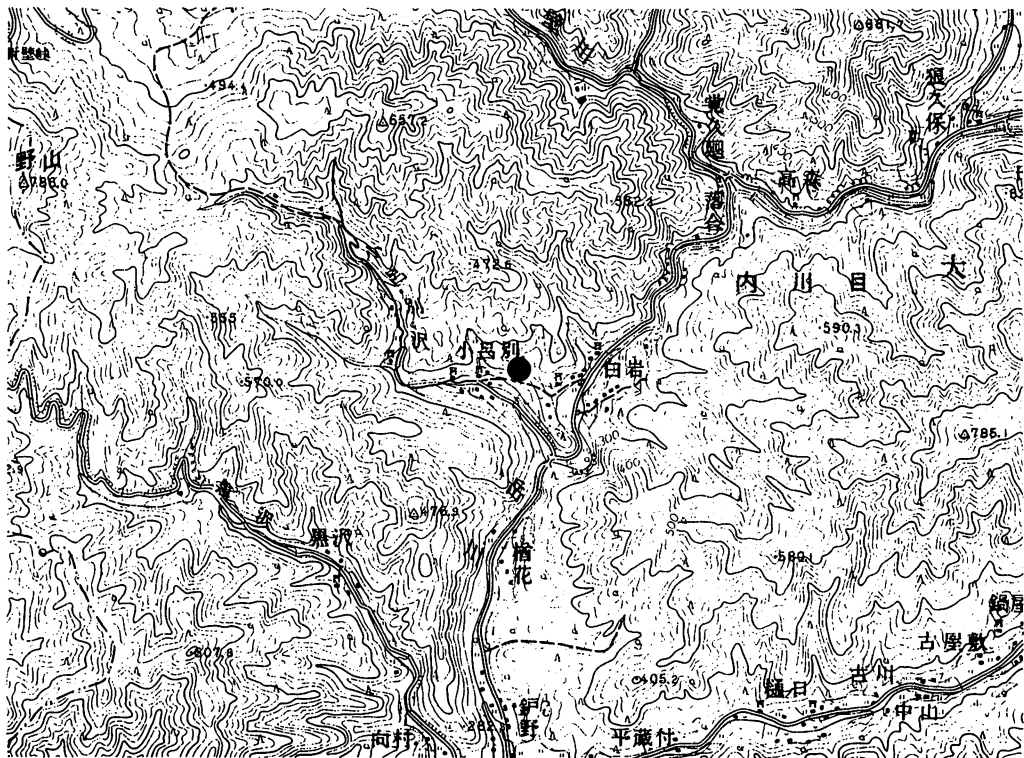
※縮尺不定

石器

上八木田V遺跡 出土遺物

(8) 経塚長根遺跡

所在地 稗貫郡大迫町内川目第14地割24-2ほか
委託者 岩手県土木部 早池峰ダム建設事務所
発掘調査期間 平成2年4月11日～5月31日
調査対象面積 2,960㎡
発掘調査面積 2,960㎡
遺跡番号・略号 LF70-1277・KZN-90
調査担当者 藤村敏男・金子昭彦
協力機関 大迫町教育委員会



1 : 50,000 早池峰山

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

経塚長根遺跡は、大迫町役場の北北東約7kmに位置し、岳川右岸の丘陵上に立地している。遺跡の標高は約289m前後であり、河岸低地との比高は40mである。南東約450mの所に経塚森遺跡がある。また南方約3kmに立石遺跡がある。

現状は、山林と南東斜面の削平された畑地である。

2. 調査の概要

調査区の南半部に縄文時代中期の住居跡3棟、土坑14基、溝跡1条が検出されている。

〈竪穴住居跡〉

住居跡の1棟は、8.5×9.0mで角張った楕円形を呈し、複式炉を有する。他は前庭部を有する埋設土器炉をもち、3.1×3.3mと小規模なもので、別の1棟も石囲炉をもち2.3×2.8mと小規模なものである。いずれの住居跡からも縄文時代中期の土器が出土している。

〈土 坑〉

フラスコ状土坑の4基のうち1基は、開口部径2.2m、底部径2.3m、深さ2.2mであり、他の3基は径1.5m内外、深さ1.8～1mの規模である。その他のうち1基は、楕円形（開口部1.2×2.2m）で、埋土上部には焼土や少量の炭化物も認められる。他のものの平面形は円形をなし、断面形は円筒状である。開口部の径は60cm内外、深さは10～70cmである。

〈遺 跡〉

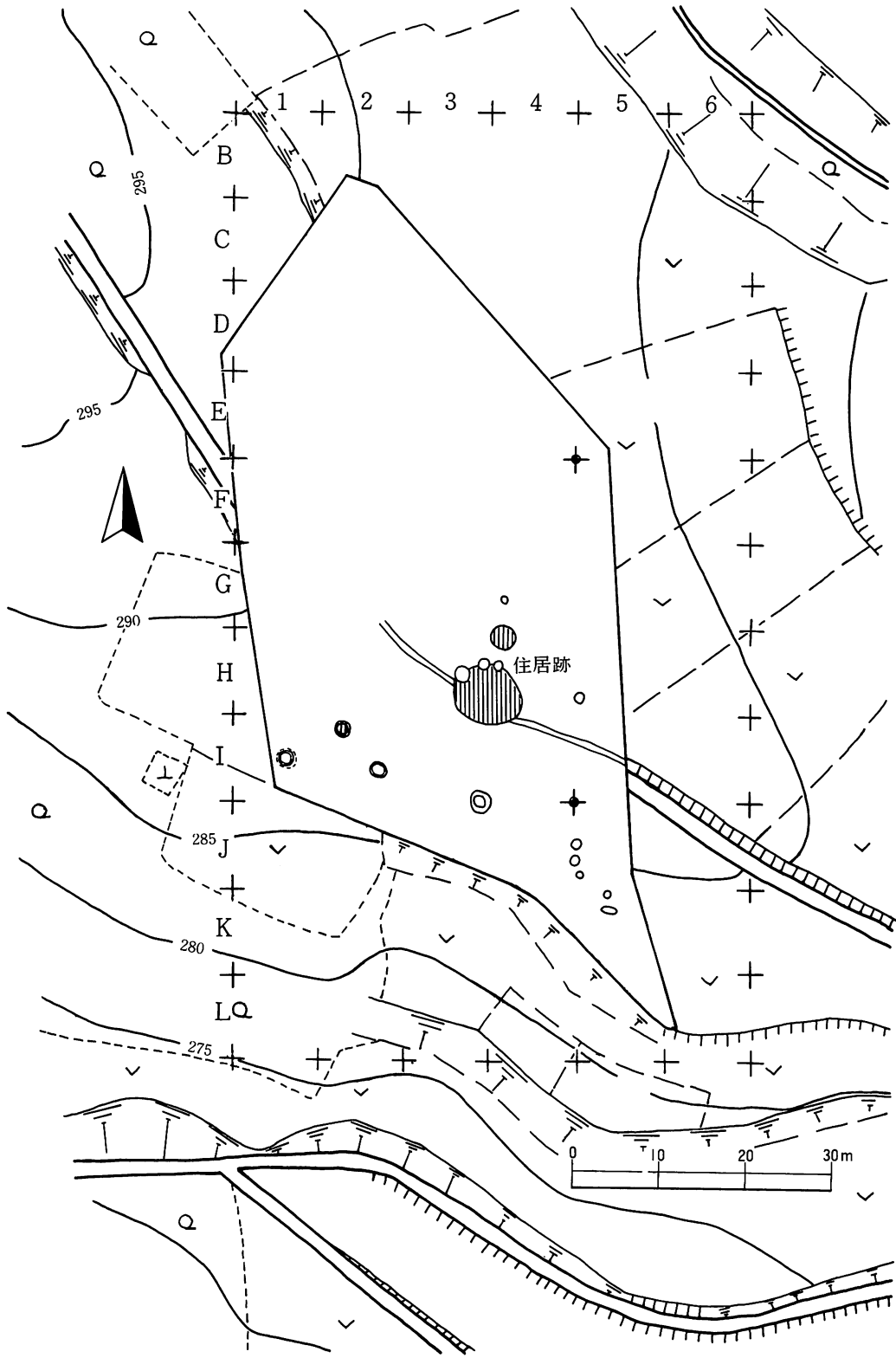
溝跡は長さ37m、幅70cm、深さ20cm内外である。現在の農道に沿っており、規模や埋土の状況から以前の道路跡の可能性が考えられる。

〈出土遺物〉

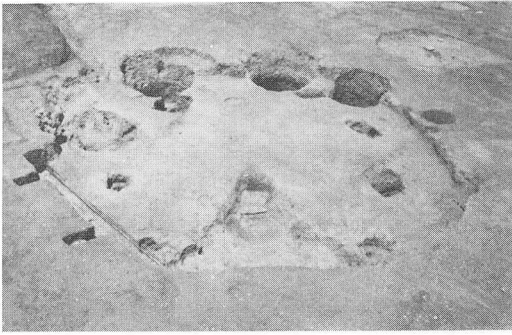
土器及び石器が若干出土している。遺構内外の出土土器は、縄文時代前期～晩期までと弥生時代のものである。石器は、石鏃9点、石匙3点、石斧2点等である。

3. まとめ

今回の調査では、縄文時代中期の住居跡が確認され、弥生時代までの遺物が出土したことから本遺跡は、縄文時代からの生活の場であったことが明らかになった。



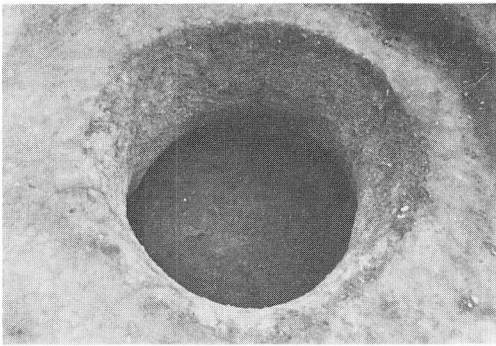
経塚長根遺跡遺構配置図



土坑と切り合う縄文時代の住居跡



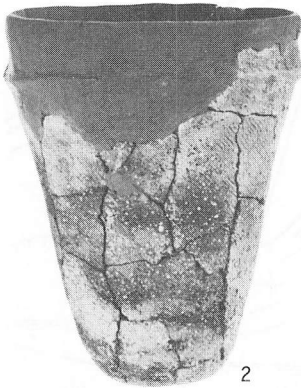
縄文時代の住居跡



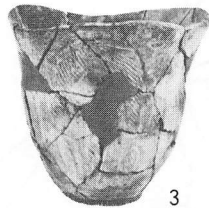
縄文時代のフラスコ状土坑



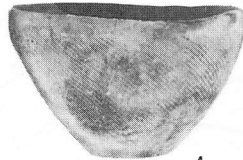
1



2



3



4

- 1 ~ 4 縄文土器 (S = ¼)
- 5 ~ 10 石器 (S = ⅓)
- 11 石斧 (S = ½)



5



6



7



8



9



10

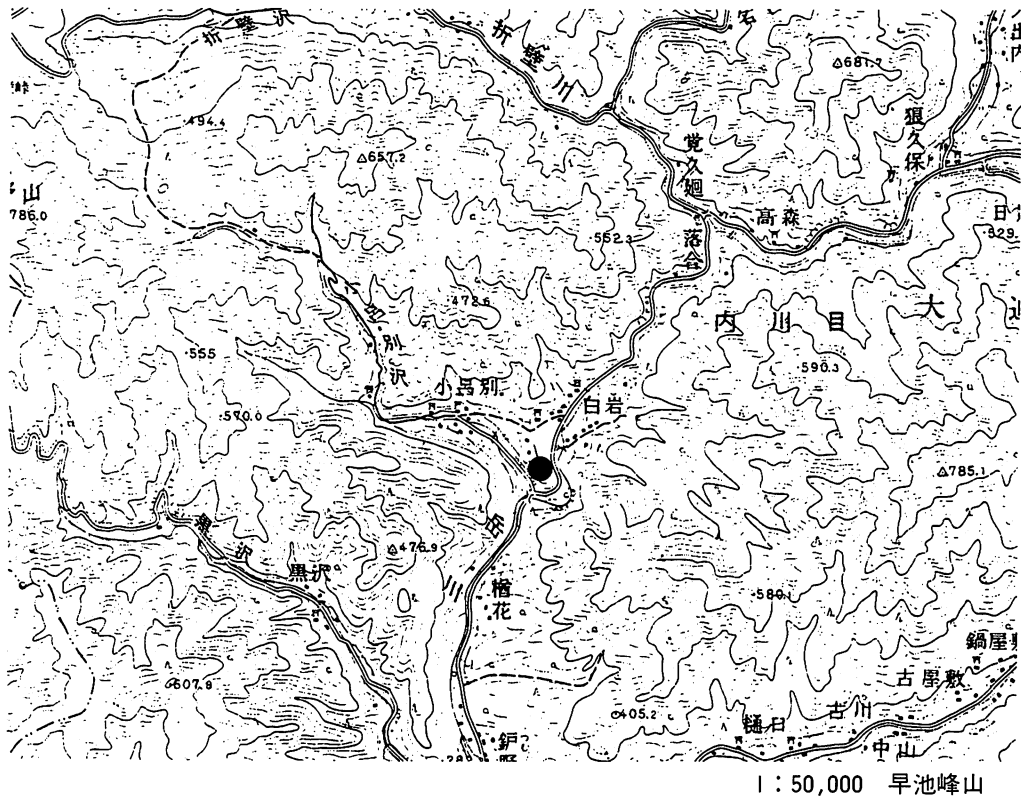


11

経塚長根遺跡 検出遺構・出土遺物

(9) 経塚森遺跡

所在地 稗貫郡大迫町内川目第14地割55-3ほか
委託者 岩手県土木部 早池峰ダム建設事務所
発掘調査期間 平成2年6月1日～8月31日
調査対象面積 4,520㎡
発掘調査面積 4,520㎡
遺跡番号・略号 LF70-2219・KZ-90
調査担当者 金子昭彦・藤村敏男
協力機関 大迫町教育委員会



遺跡位置図

1. 遺跡の立地

経塚森遺跡は、大迫町役場の北北東約7kmに位置し、南流する岳川右岸の南北にのびる丘陵上に立地している。標高は約250～270mで、河岸低地との比高は30mほどである。

現状は南東に傾斜する削平された畑地である。

2. 調査の概要

検出した遺構は、縄文時代の竪穴住居状遺構4棟、炉跡1基、土坑7基、陥し穴状遺構5基、焼土10カ所、近世以降の墓壇13基、時期不明の溝跡2条等である。いずれも斜面の下半分に検出した。出土遺物は、縄文時代の土器、石器、墓壇の副葬品等である。

〈竪穴住居状遺構〉

底面が平坦で規模が2×2mを越え、炉や柱穴などの施設を伴わない土坑であり、「竪穴住居状遺構」と称した。4基検出した。平面形は隅丸方形～楕円形のやや不整形である。4基のうち3基はほぼ同じ大きさで約1.8×3m、他の1基は3×4mの規模を持つ。検出面からの深さはいずれも20cm以下である。

〈炉 跡〉

直径70cmほどの石囲炉である。平面形はほぼ円形を呈し、炉内は深さ約20cm程にわたって焼けている。この炉が属する竪穴住居跡の掘り込みや柱穴は確認できなかった。

〈陥し穴状遺構〉

平面形が長楕円形の土坑であり、5基検出した。規模は、長さ2m前後、幅0.5～1m、検出面からの深さ0.5～1mである。底面の副穴等は確認されていない。

〈土 坑〉

竪穴住居状遺構でも陥し穴状遺構でも墓壇でもないものを「土坑」として一括して述べる。7基検出した。7基のうち3基は平面形、規模ともかなりの共通性が見られるが、他の4基はまちまちである。

共通性のある3基は、平面形はほぼ円形、規模は直径1.5m前後、検出面からの深さ50cm程度のものである。

他の4基は、平面形は長方形、円形、楕円形、卵形で、規模は60×60cmのものから1.2×1.7m、検出面からの深さは20～70cmである。このうち平面形が長方形のものは、覆土が近世以降の墓壇とよく似ていること、またこの土坑の近くに人骨と思われる粉々の骨片が出土していることなどから、近世以降の墓壇ではないかと推定される。

〈焼 土〉

全て黒土の中に検出されたので平面形、規模も確かでない。平面形はまちまちで円形、楕円

形などが想定されるが不整形である。規模も10cm以下のものから50cmを越えるものまであり、焼土の厚さも検出面から3～20cmにわたる。所属時期については不明である。

〈墓 壙〉

13基のうち11基は調査範囲の北隅に重複して検出された。平面形は円形、不整円形等を呈し、直径2 m、深さ1 mほどのものが多い。約7体の人骨と六道銭、キセル等の副葬品が出土している。

〈溝 跡〉

2条検出した。1条は平面形がL字状で調査区域外に続いており、長さは検出した範囲で14 m、幅1.6m、検出面からの深さ40cmである。他の1条は、平面形が直線状で、長さ8 m、幅60 cm、検出面からの深さ10～50cmである。この溝は、水が流れた跡が窺え、また下場も深い所、浅い所まちまちで形も不整形であることから、自然現象によって出来た可能性も窺われる。

〈出土遺物〉

縄文時代の土器、石器・石製品がほとんどであり、総量はコンテナ8箱ほどである。

土器の大部分は縄文時代前期初頭（早稲田6類等）のものであり、他に縄文時代中期（大木8 b式）、晩期（大洞B₂式）の土器と弥生土器が若干出土している。破片が多く、復元できるものはほとんどない。

石器は石鏃、石匙、磨製石斧、凹石等であり、石製品はヒスイ?の垂飾り1点のみである。

3. まとめ

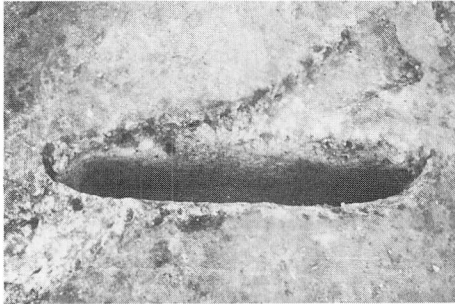
縄文時代前期の比較的限られた時期に、狩場、作業場、土器捨て場等に利用されていたことが考えられ、集落は調査区域外に続いているものと思われる。また、近世においては墓域であったことが明らかになった。



石圍炉



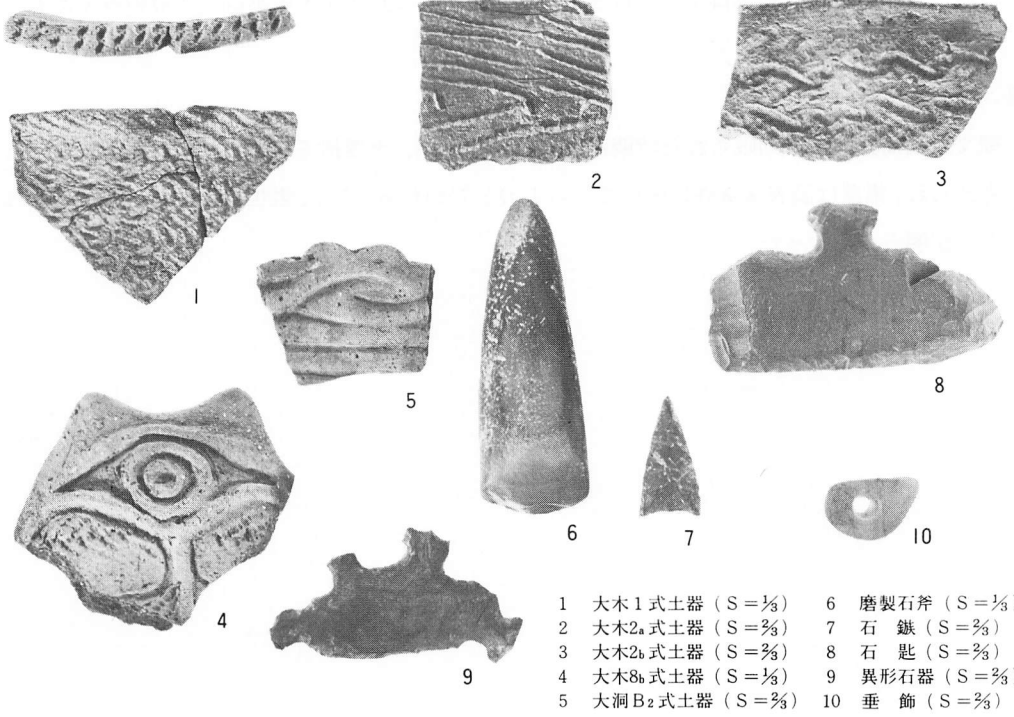
豎穴住居状遺構



陥し穴状遺構

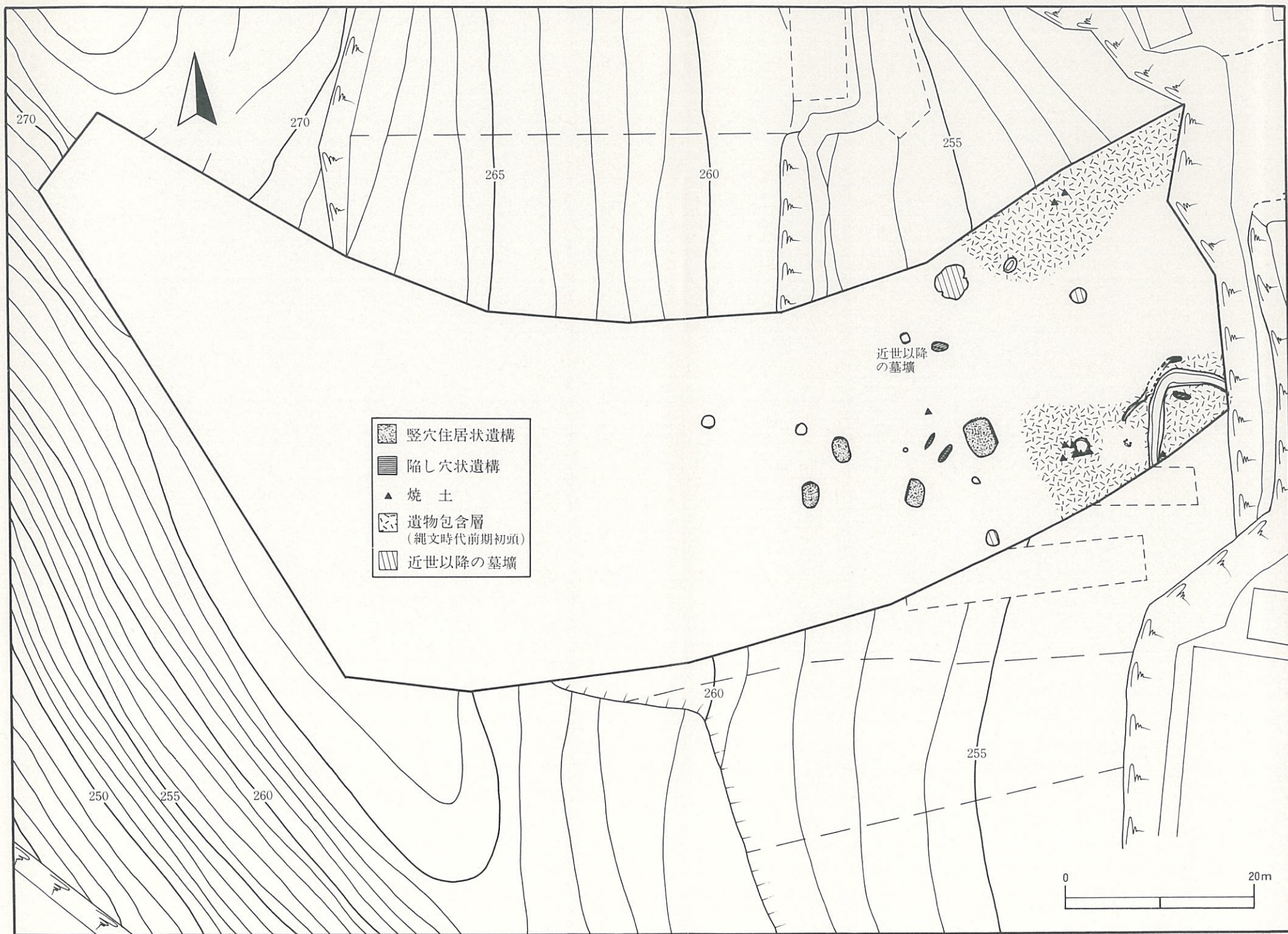


土坑



- 1 大木1式土器 (S=1/3)
- 2 大木2a式土器 (S=2/3)
- 3 大木2b式土器 (S=2/3)
- 4 大木8a式土器 (S=1/3)
- 5 大洞B2式土器 (S=2/3)
- 6 磨製石斧 (S=1/3)
- 7 石鏃 (S=2/3)
- 8 石匙 (S=2/3)
- 9 異形石器 (S=2/3)
- 10 垂飾 (S=2/3)

經塚森遺跡 検出遺構・出土遺物



経塚長根遺跡遺構配置図

(10) ^{たて}館 IV 遺跡

所在地 北上市黒沢尻町字立花第2地割24-2ほか

委託者 岩手県土木部 北上土木事務所

発掘調査機関 平成2年7月2日～9月14日

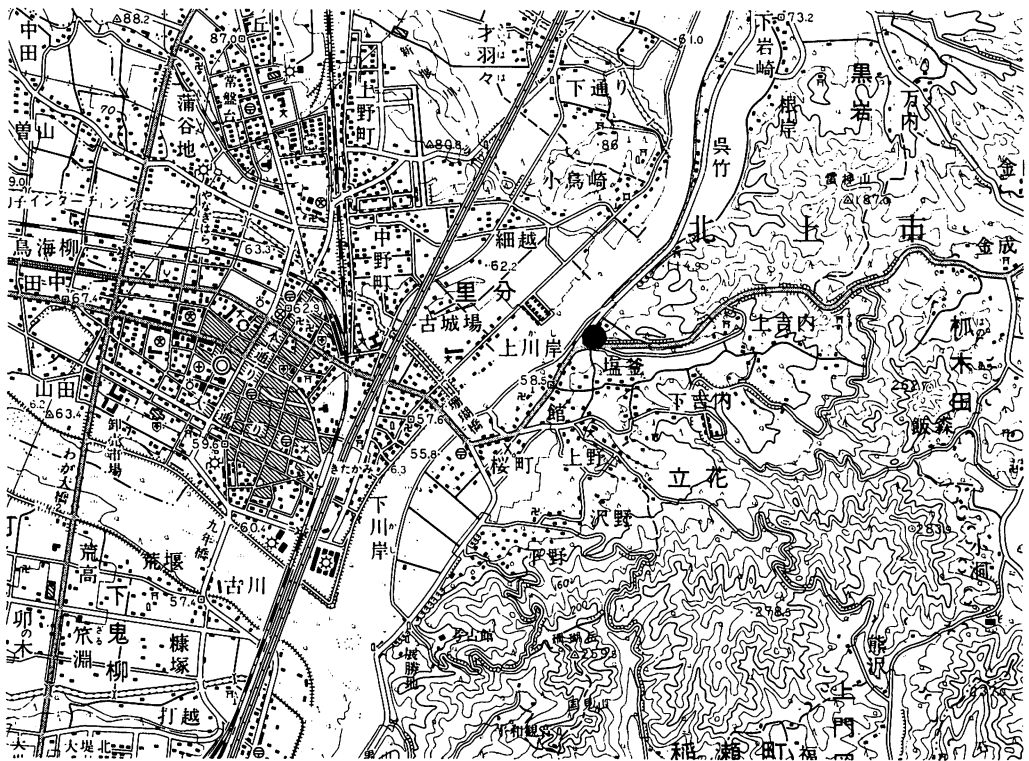
調査対象面積 2,200㎡

発掘調査面積 2,200㎡

遺跡番号・略号 ME66-1267・TTIV-90

調査担当者 田鎖寿夫・佐々木弘・斎藤邦雄

協力機関 北上市教育委員会



1:50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

館IV遺跡は、東日本旅客鉄道東北本線北上駅の東北東約2kmに位置し、標高57～61mの河岸低地に立地している。遺跡の北西約40mには北上川が北東から南西方向に流れており、北上川との比高は3～7mである。発掘調査前の現況は畑地と宅地である。周辺の遺跡には、八天遺跡、牡丹畑遺跡、上川岸II遺跡などがある。

2. 調査の概要

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡2棟、中世～近世のカマド状遺構1基、時期不明の焼土遺構15基、溝状遺構1条、土坑2基、柱穴状ピット7個である。

出土遺物は、縄文時代の土器、土製品、石器、石製品、弥生土器、後北式土器、平安時代の土師器、須恵器、土製品、石製品、江戸時代の古銭である。

〈竪穴住居跡〉

平安時代の竪穴住居跡2棟はいずれも焼失住居で、焼土や炭化物の広がりによって確認された。1棟は北壁側が調査区外に続くため全体の形状は不明であるが、1辺4m程の方形を呈していたと思われる。カマドは東壁のやや南寄りで、煙道はくりぬき式である。他の1棟は、確認された北西壁・北東壁の一部と焼土粒・炭化物の広がりから1辺4.2m前後の方形を呈していたと思われる。カマドは北東壁のほぼ中央に位置し、煙道はくりぬき式である。2棟とも幅20～26cm、深さ12～20cmの溝を伴っており、前者は南東隅から南東方向へ、後者は南西隅から東方向へ、沢に向かって直線的に伸びている。

〈カマド状遺構〉

調査区中央部西側で検出された。焚口部、燃焼部、煙出し部によって構成され、焚口部から煙出し部まで幅30～40cm、長さ約2m、深さ20cmの不整な長楕円状に掘り込んでつくられている。燃焼部、煙出し部は、掘り込み底部側面から粘土をへっつい状に固めてつくられたと思われる。平面形0.4×1m、厚さ約2cmの堅い焼土層が掘り込み最深部まで約20cmにわたって形成されている。中は黒褐色粘土質シルトが入り込んでおり空洞になっていたと思われる。また、焼土層上部には径22×42cm、16×20cmの大小2つの穴が並んでおり、それぞれ燃焼部、煙出し部に対応する。時期は特定できないが中世～近世に位置付けられる。

〈焼土遺構〉

焼土遺構15基は、調査区のほぼ全域で検出された。そのうち1基は0.6×1.3m、深さ20cmの楕円状の掘り込みをもち、底部中央に土師器の甕が倒立に設置されており、平安時代のカマド跡の可能性が大きい。他の14基は径35～60cm、層厚4cm程度であり、時期は不明である。

〈土 坑〉

調査区中央部北西側で2基検出され、径64×98cm、深さ24cmの楕円形を呈するものと、2.5×1.3m、深さ50cmの不整形を呈するものがある。どちらも時期は不明である。

〈溝状遺構〉

調査区東側で1条検出された。北西方向に長軸をもつ。幅60cm、長さ3.2m、深さ約7cmの掘り込みで、底面は摺り鉢状に湾曲しやや凸凹がある。時期は不明である。

〈柱穴状ピット〉

調査区中央部西側から17個検出された。形状は円形で、径20～30cm、深さ20～34cmと小さい。直線上に並ぶものもあるが大半は不規則である。時期は不明である。

〈出土遺物〉

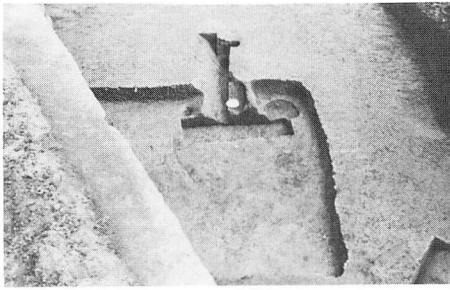
縄文時代の遺物は、縄文土器、円盤状土製品、土偶、石鏃、石錐、石匙、石棒、石錘、磨製石斧、凹石、磨石である。土器は早期～晩期まで出土しており、中期～後期のものが多いが復元可能なものは少ない。少量ではあるが弥生土器も出土している。また、出土例の少ない後北式土器の口縁部破片が2点出土している。

平安時代の遺物は、土師器の坏・甕形土器、須恵器の坏形土器、土錘、砥石であり、土器のほとんどは住居跡から出土している。他に寛永通宝が1点出土している。

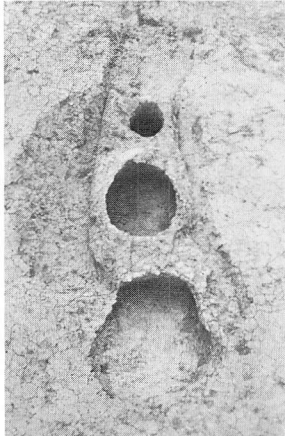
3. まとめ

昨年度は縄文時代中期と平安時代の集落が確認され、本年度は国道107号の北側に平安時代の住居跡が発見された。検出された2棟の住居跡はそれぞれ住居外に続く溝を伴っており、県内では類例が少なく貴重な資料である。

出土遺物の分布状況から、調査区北東側の山地部分に縄文時代から平安時代までの集落の主体部が存在するものと思われる。



平安時代の竪穴住居跡



中世～近世のカマド状遺構

縄文時代



石鏃

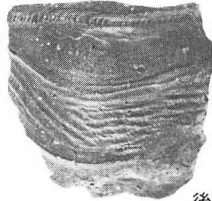


磨製石斧

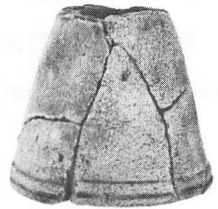
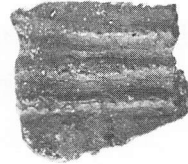


縄文土器

弥生時代・(続縄文時代)



後北式土器

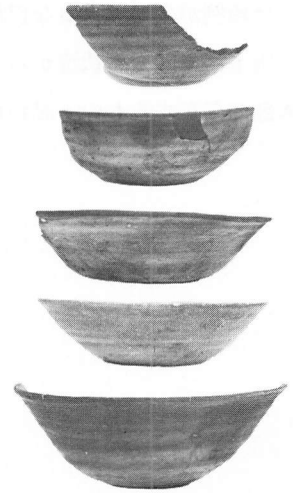
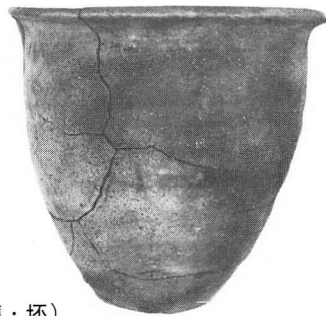
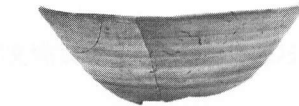


弥生土器 (高坏)

平安時代

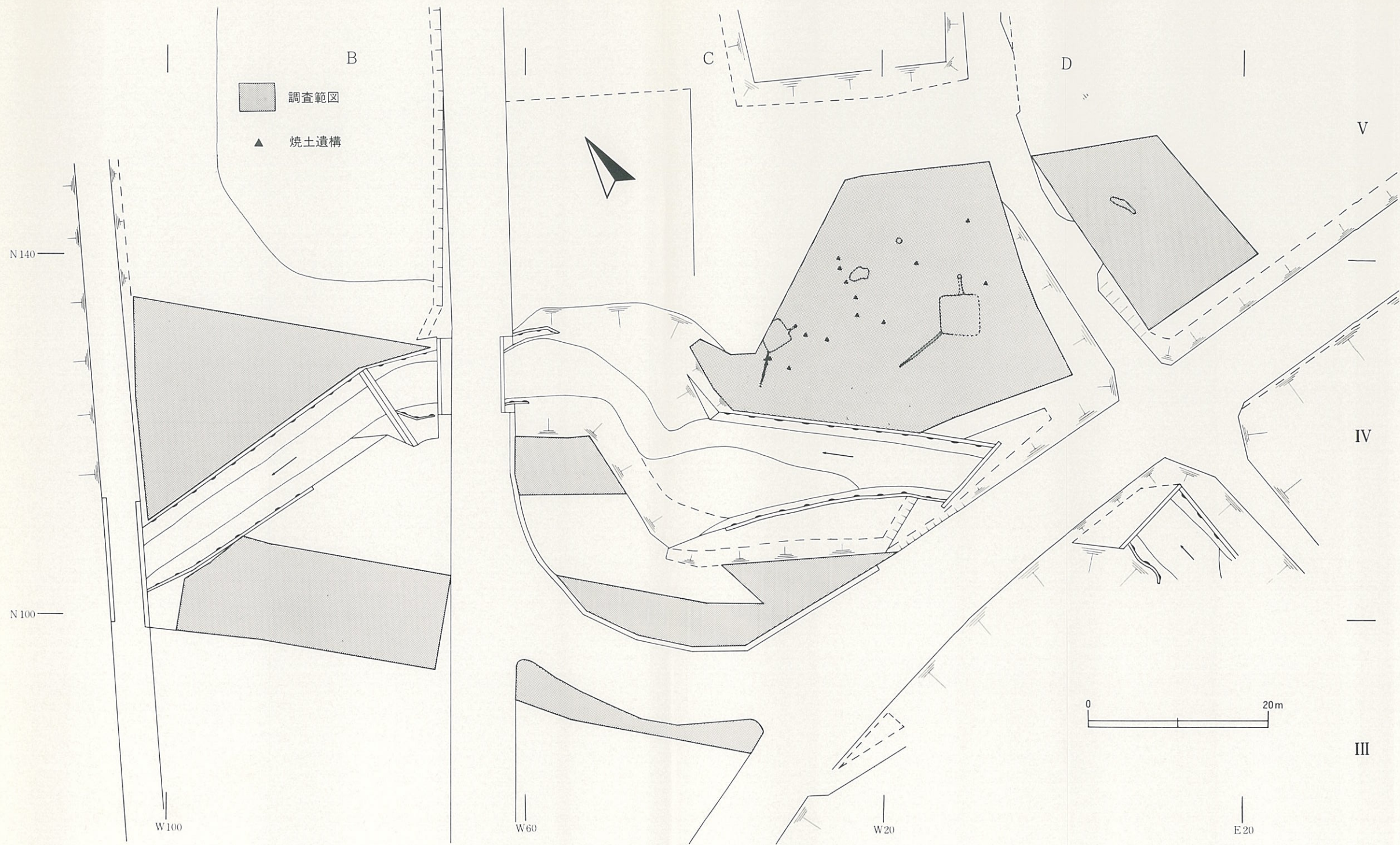


土師器 (甕・坏)



須恵器 (坏)

館Ⅳ遺跡 検出遺構・出土遺物



館IV遺跡遺構配置図

(11) 本 宿 遺 跡

所在地 和賀郡江釣子村上江釣子19地割102-2

委託者 岩手県土木部 北上土木事務所

発掘調査期間 平成2年9月3日～11月2日

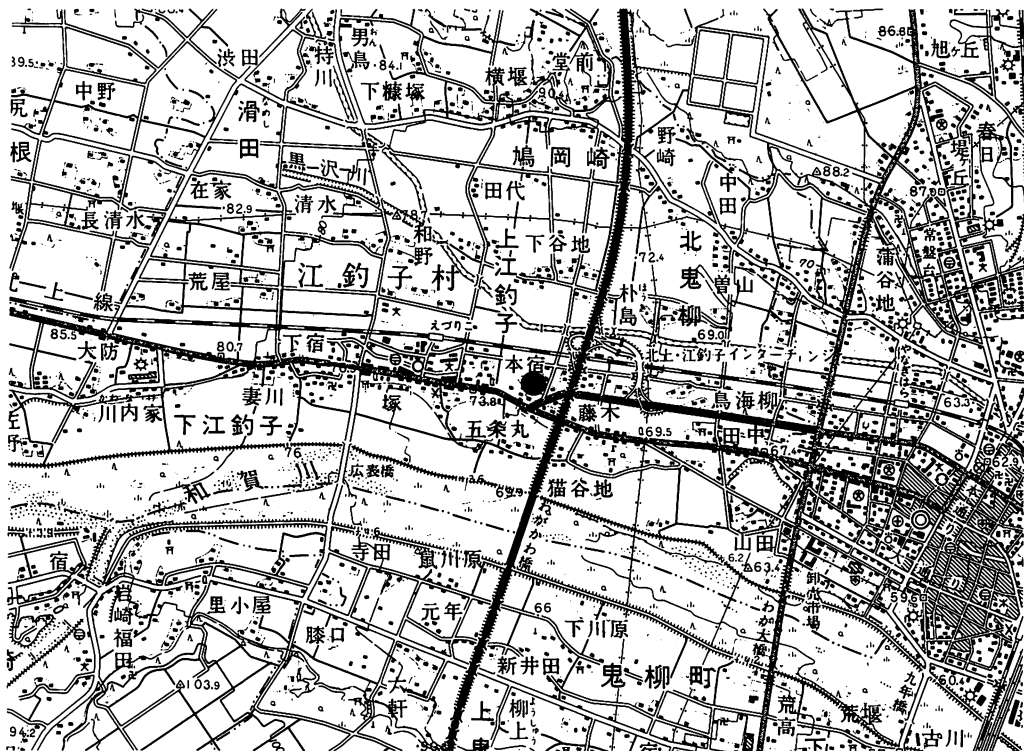
調査対象面積 3,300㎡

発掘調査面積 3,300㎡

遺跡番号・略号 ME65-0169・MJ-90

調査担当者 田鎖寿夫・佐々木弘

協力機関 江釣子村教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

本宿遺跡は東日本旅客鉄道北上線江釣子駅の東南東約0.8kmに位置し、和賀川によって形成された金ヶ崎段丘の低位面上に立地している。遺跡の北側約700mには黒沢川が東流している。遺跡の標高は72m前後で、現状は宅地、畑地、水田である。

本遺跡の周辺には、南側に五条丸、猫谷地古墳をはじめとする江釣子古墳群、南西側に本宿羽場遺跡、北側には下谷地A・B遺跡などがある。

2. 調査の概要

昨年度からの継続調査である。検出した遺構は縄文時代に比定される陥し穴状遺構1基と近世以降の溝跡2条である。

〈陥し穴状遺構〉

調査区西側に検出された。開口部は小判形を、底部は長方形状を呈する。規模は開口部径110×197cm、底部径55×167cm、深さ72cmである。底面中央部は凹凸が激しく、壁際より窪む。

〈溝 跡〉

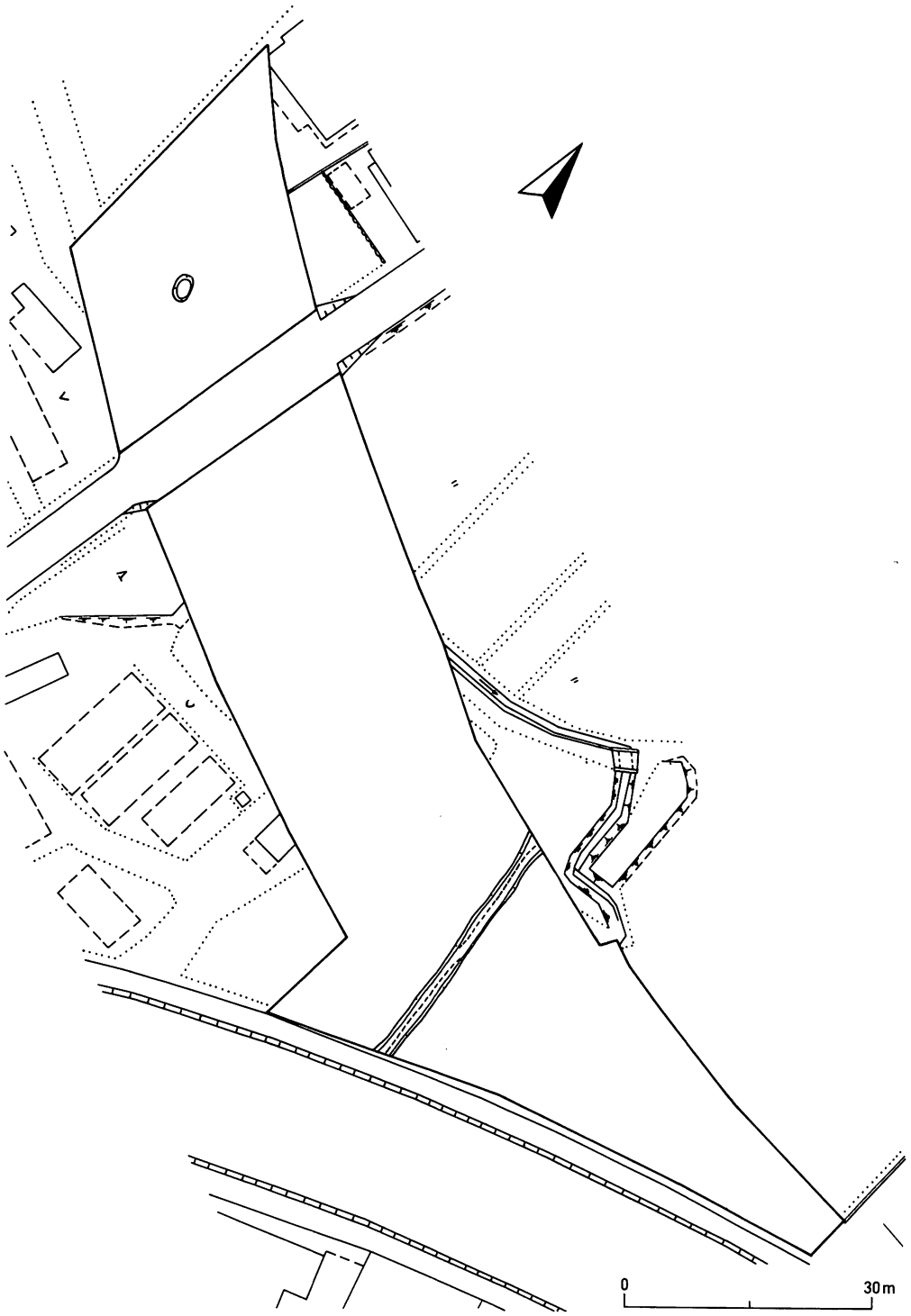
調査区東側に検出された。南北方向に走り、2条が重複する。両端が調査区域外に延びる。確認された長さは約26mであり、1時期の上幅約2m、2時期の上幅80～90cm、深さ19～32cmである。埋土から近世以降の陶磁器が若干出土している。

〈出土遺物〉

遺構から出土した遺物は、縄文時代後期から晩期の土器片10数点、礫石器2点、弥生時代の土器片1点、平安時代の土器片1点である。

3. まとめ

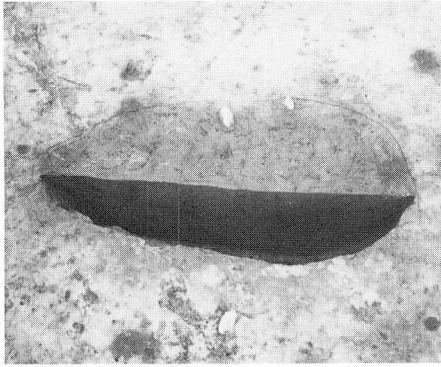
今回の調査で、陥し穴状遺構1基と近世以降の溝跡2条が検出され、遺構外から縄文時代、弥生時代、平安時代の土器が若干出土したが、当遺跡の性格を知る手がかりにはならなかった。



本宿遺跡遺構配置図



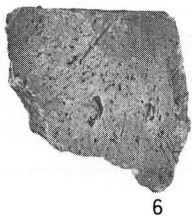
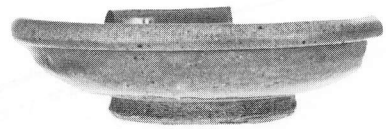
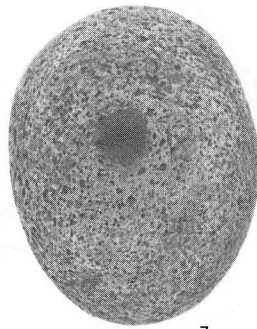
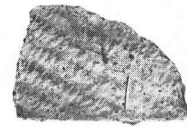
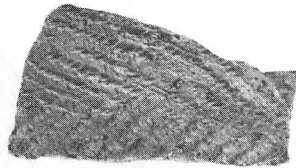
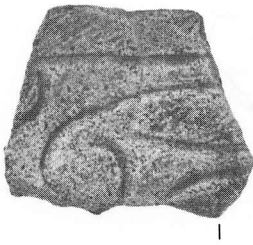
陥り穴状遺構 平面



同上埋土 断面



溝跡 平面



- 1 ~ 4 · 7 縄文土器・石器
- 5 弥生土器
- 6 土師器
- 8 陶磁器

本宿遺跡 検出遺構・出土遺物

いわさきだい ち
(12) 岩崎台地遺跡群

所在地 和賀郡和賀町岩崎12地割57-2ほか

委託者 岩手県花巻地方振興局 花巻土地改良事業所

発掘調査期間 平成2年4月13日～8月10日

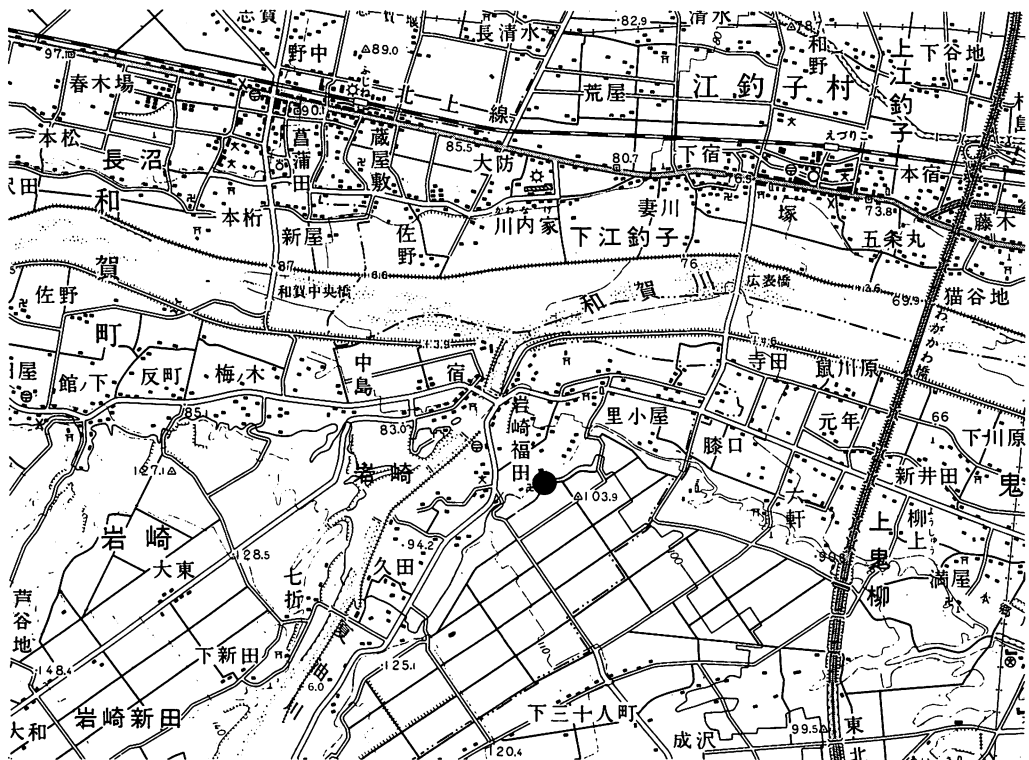
調査対象面積 5,024㎡

発掘調査面積 5,024㎡

遺跡番号・略号 ME64-2360・I S D-90

調査担当者 遠藤 修・菅 常久

協力機関 和賀町教育委員会



1 : 50,000 北上

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

岩崎台地遺跡群は、東日本旅客鉄道北上線藤根駅の南南東約3km付近に位置し、夏油川右岸の金ヶ崎段丘に相当する低位段丘の縁辺部に立地している。標高は84～104m、夏油川との比高は最大25mである。遺跡の現況は山林、畑、水田等である。

2. 調査の概要

調査区域は南北幅約12～26m、東西幅約290mの範囲であり、63年度からの継続調査である。

検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡1棟、土坑3基、陥し穴状遺構1基、平安時代の竪穴住居跡11棟、土坑3基、焼土遺構2基、方形周溝跡1基、そのほか、時期は不明であるが土坑7基、溝跡2条、掘立柱建物跡2棟である。

〈竪穴住居跡〉

縄文時代の竪穴住居跡は縄文中期のもので、住居跡から検出された炉は土器埋設炉である。平面形は楕円形で、規模は4.1×(3.4)mである。平安時代の住居跡と重複している。

平安時代の竪穴住居跡は、ほぼ方形を呈しているもの10棟、不明1棟である。規模は4m未満のもの8棟、約7mのもの3棟である。大型住居跡3棟のうち1棟の煙道部分は、長さ50～70cmの角垂礫15個で作られている。カマドの位置は北壁中央部3棟、南壁3棟、南西壁1棟、東壁3棟、地床炉だけを確認したもの1棟である。このうちカマドの位置が移動しているもの3棟、住居跡の重複4棟、溝に切られているもの1棟、柱穴が確認できたもの3棟である。

〈掘立柱建物跡〉

大型住居跡の北側と南側から検出され、規模は桁行2間、梁行2間、柱間1.5～1.6mの方形である。棟方向は、東西方向のもの1棟、北西—南東方向のもの1棟である。柱間は1.5～1.6mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

〈方形周溝跡〉

遺構の北側3分の1以上が調査区外にあり、正確な規模、平面形は不明である。検出された部分から一辺約4.5mの方形を呈するものと推定される。上部は削平されているが溝幅0.25～0.5m、深さ0.1m前後である。須恵器片が出土しており、平安時代に位置づけられる。

〈土坑〉

土坑の平面形は円形7基、溝状1基、不整形5基である。土坑の規模は開口部径0.4～3.1m、深さ0.2～0.9mであり、断面形は浅皿状や鍋底状を呈している。

〈焼土遺構〉

調査区の西側に2基あり、径0.4～0.7mの不整形で、層厚約0.1mである。土師器の高台付坏と須恵器片が出土しており、平安時代に位置づけられる。

〈陥し穴状遺構〉

陥し穴状遺構は、段丘の縁辺部分から検出された。平面形は円形で副穴を1個もち、開口部の径は1.6×1.4m、深さ1.2mである。遺物は出土していないが、形状から縄文時代に位置づけられる。

〈溝 跡〉

溝跡2条は段丘縁辺部に向かって南北方向にのびている。溝の長さは約19～33m、溝幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2m、断面形は逆台形を呈している。平安時代の住居跡を横切るもの1条、削平によりとぎれるもの1条があり、溝埋土から土師器細片が数点出土している。

〈出土遺物〉

遺物の主体は平安時代の土師器、須恵器であり、坏・甕・壺等が遺構の内外から出土している。その他、遺構外から縄文土器、弥生土器、石器・石製品が若干出土している。

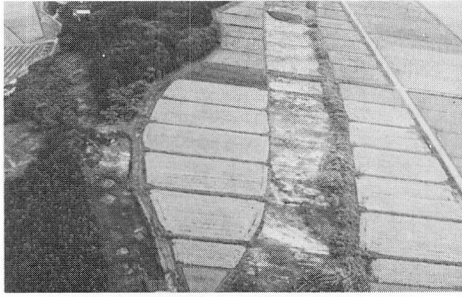
土師器の坏はロクロ成形で、回転糸切り後にヘラケズリによる再調整のものと無調整のものがある。須恵器の坏には、切り離しがヘラによるものが若干みられる。土師器の甕には少量であるがロクロ不使用のものがある。

鉄製品は2つの住居跡から出土している。

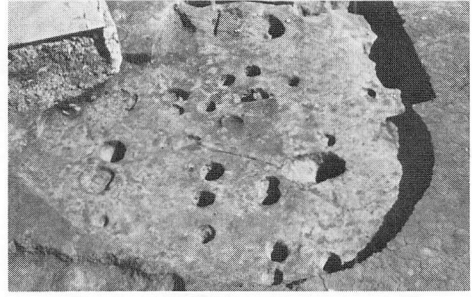
3. まとめ

昭和63年からの調査により岩崎台地遺跡群は、縄文時代から平安時代にかけて複合する集落跡であることが明らかになった。一辺が約7mの大型住居跡より東側に住居跡が発見されなかったことから、平安時代の集落の主体が本年度調査区域の西側であることが考えられる。

また、縄文時代の住居跡が検出されたことや弥生土器が出土したことから周辺にも縄文時代や弥生時代の遺構が存在することが推測される。



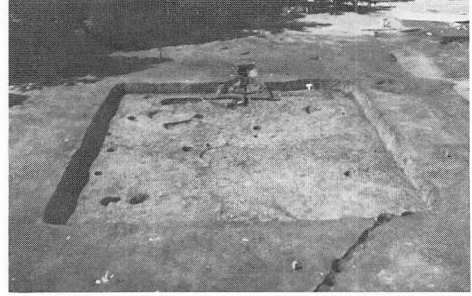
遺跡全景（南西から）



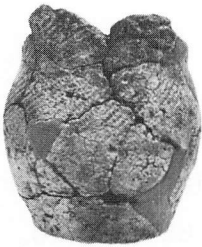
縄文時代の住居跡



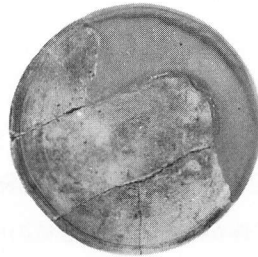
陥し穴状遺構



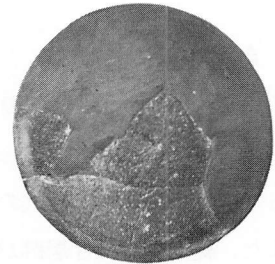
平安時代の住居跡



縄文土器



高台付皿



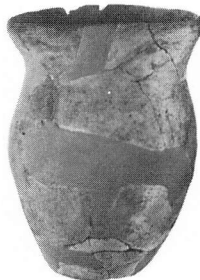
蓋



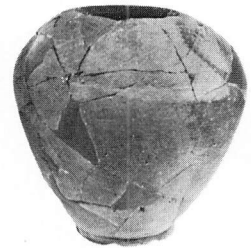
墨書土器



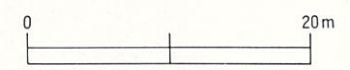
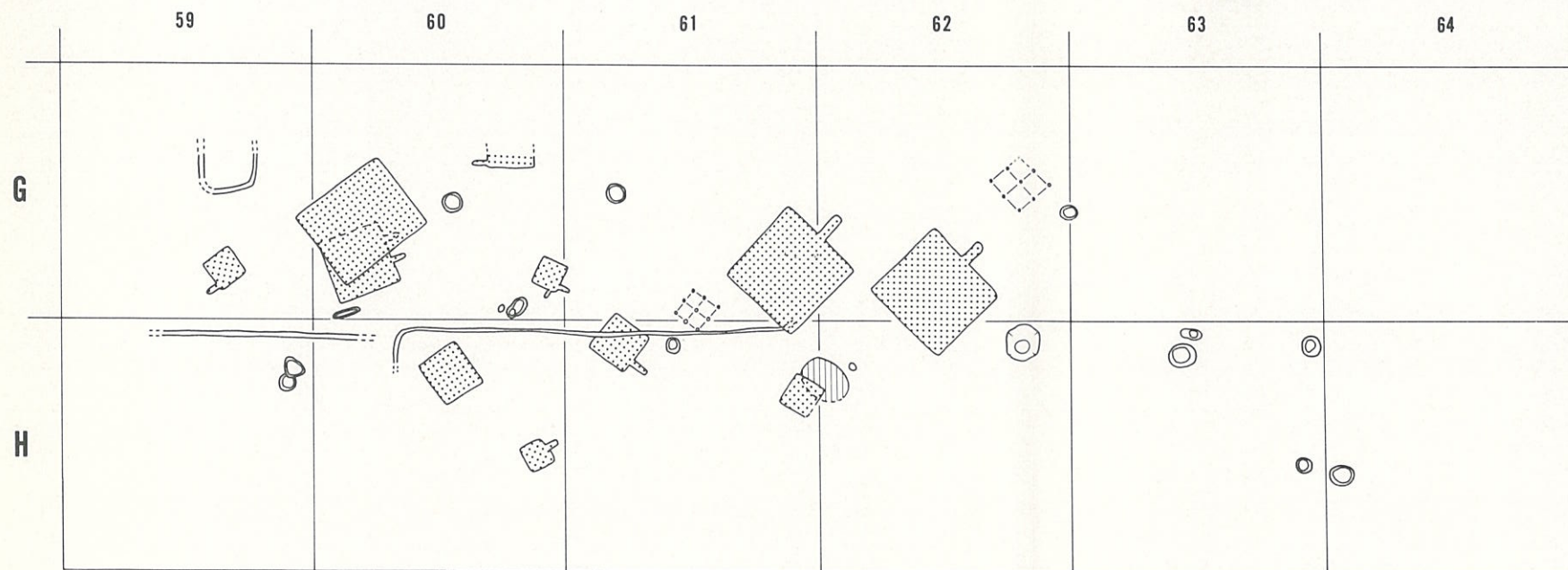
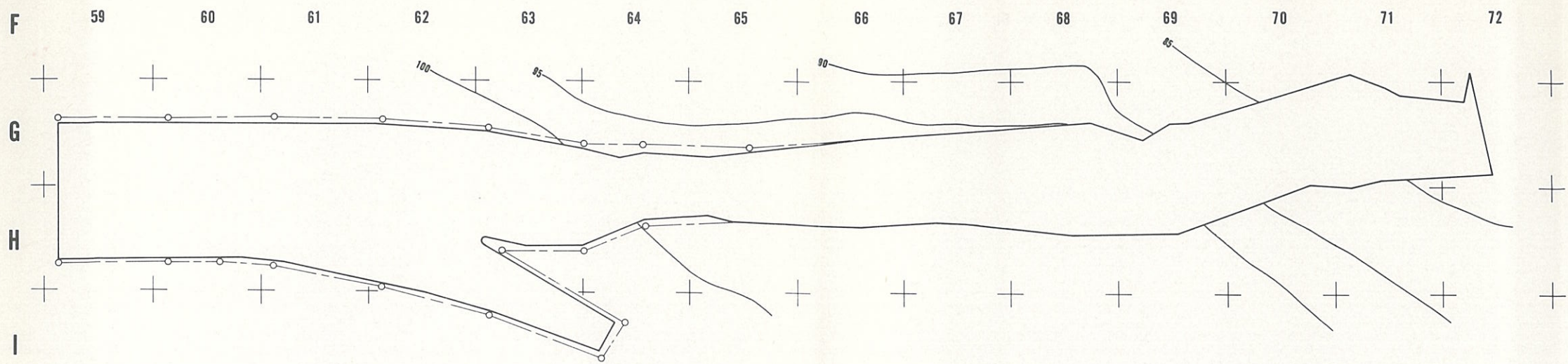
土師器・甕



須恵器・壺



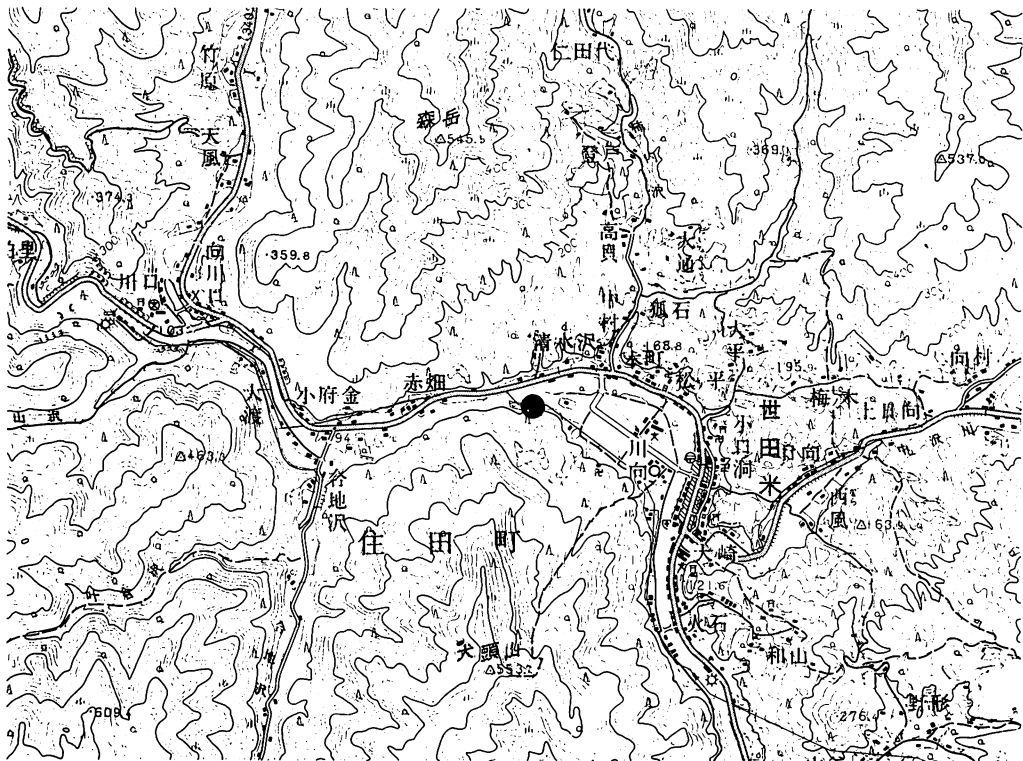
岩崎台地遺跡群 検出遺構・出土遺物



岩崎台地遺跡群遺構配置図

(13) かわむかい 川 向 遺 跡

所在地 気仙郡住田町世田米字川向6-7ほか
委託者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 平成2年4月12日～5月24日
調査対象面積 1,200㎡
発掘調査面積 1,200㎡
遺跡番号・略号 NF15-1389・KM-90
調査担当者 高橋義介・神 敏明
協力機関 住田町教育委員会



1 : 50,000 盛

遺跡位置図

1. 遺跡の立地

川向遺跡は、住田町役場の北西側約800mに位置している。遺跡は気仙川右岸に形成された標高82～83mの沖積氾濫平野に立地する。調査区の現状は、盛土造成された畑地と水田である。

2. 調査の概要

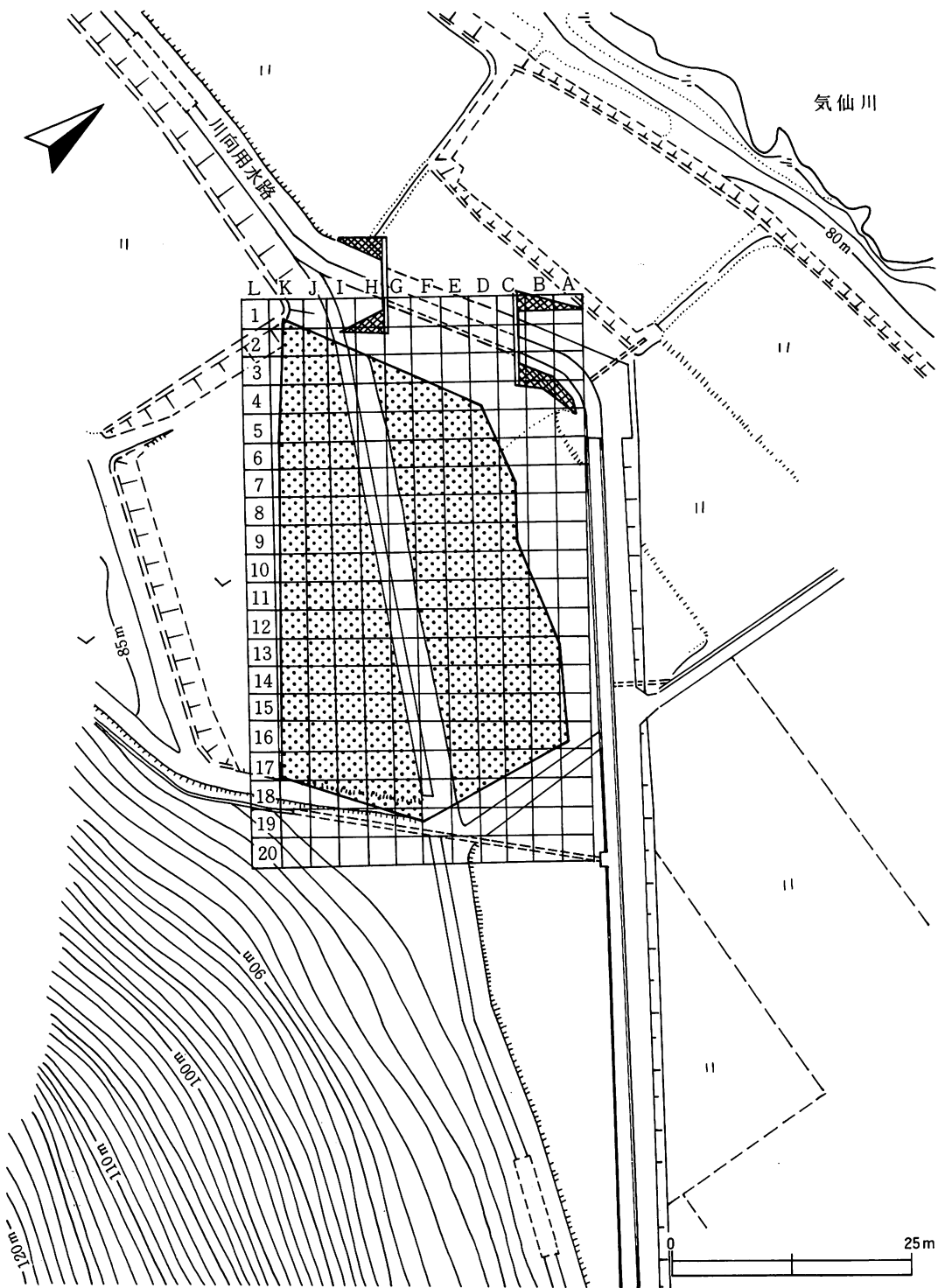
今回の調査で遺構は検出されなかった。

〈出土遺物〉

調査区の南側を中心とした遺物包含層から土器、石器、土偶、土製品等が多く出土している。土器は縄文時代後期、晩期に属するもので晩期が主体を占めている。破片が大部分であるが、深鉢形、浅鉢形、台付鉢形、壺形、高坏、注口の器形が見られ、一部にベンガラが付着するものがある。石器は石鏃、石錐、石匙の剥片石器や磨製石斧である。

3. まとめ

調査の結果、遺構は検出されなかったものの縄文時代晩期の遺物が多量に出土し、気仙川流域での良好な資料が得られた。遺物の分布や出土状況から調査区域外の西側に集落が存在するものと思われる。



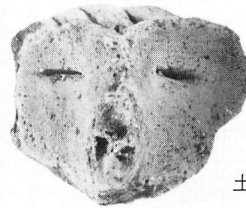
川向遺跡調査区域図



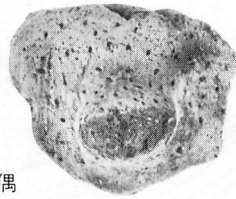
調査区遠景



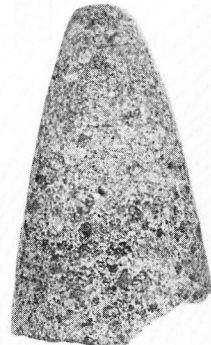
縄文土器



土偶



土版



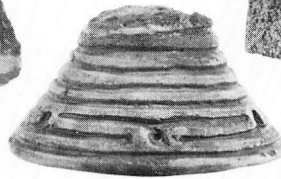
石斧



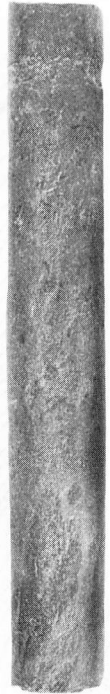
石錐



石 鏃



高坏の台片



石棒

川向遺跡 出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 長	小笠原 喜 一			
副 所 長	米 澤 康 雄			
[管 理 課]				
管理課長(兼)	米 澤 康 雄	嘱 託	吉 田 一 男	
課 長 補 佐	森 岡 陽 一	〃	山 館 一 昇	
主 事	阿 部 隆 広	運 兼 技 能 士 員	佐 藤 春 男	
[調 査 課]				
調 査 課 長	昆 野 靖			
課 長 補 佐	佐々木 嘉 直			
主 任 文 化 財 員	小 田 野 哲 憲	文 化 財 員	佐々木 信 一	
〃	三 浦 謙 一	〃	〃	
〃	工 藤 利 幸	〃	〃	
〃	高 橋 與 右 衛 門	〃	〃	
〃	平 井 進	〃	〃	
〃	中 村 良 一	〃	〃	
〃	中 川 重 紀 男	〃	〃	
〃	藤 村 敏 義 介	期 限 職 員	〃	
文 化 財 員	高 橋 義 介	〃	〃	
專 門 調 査	高 齋 藤 實 隆	〃	〃	
〃	佐 瀬 隆 雄	〃	〃	
〃	千 葉 孝 雄	〃	〃	
〃	齋 藤 博 司	〃	〃	
〃	東 海 林 隆 幹	〃	〃	
〃	佐々木 弘 均	〃	〃	
〃	川 村 均 行	〃	〃	
〃	鈴 木 貞 格	〃	〃	
〃	伊 東 藤 修	〃	〃	
〃	遠 藤 邦 雄	〃	〃	
〃	齋 藤 敏 明	〃	〃	
[資 料 課]				
資 料 課 長	高 橋 薫 夫			
主 任 文 化 財 員	田 鎖 寿			
專 門 調 査				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第159集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
(平成2年度分)

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月25日 発行

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11字高屋敷185
電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 杜陵印刷
〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22番50号
電話 (0196) 41-8000(代)

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1991